DREAM、SRC、アストラの格闘三角関係!!

kamipro
紙のプロレス

MMA & PRO-WRESTLING

enterbrain MOOK

2010
144
特別定価 940yen

大会速報、選手ブログは携帯で!
kamipro Move

古い、渋い、カッコイイ!!
オヤジたちの小言的インタビュー

吉田秀彦
内藤大助×所 英男
桜庭和志×髙阪 剛
田村潔司
村田兆治
百田光雄
保永昇男
マーク・コールマン
風間ルミ

いまこそ格闘技黄金時代を振り返れ!!
ゼロゼロ年代とはなんだったのか?
玉ちゃんの変態座談会
語録で振り返る2000年代
最大の事件『猪木祭り』裁判を追う
K-1ゼロゼロ年代の功罪
菊地成孔はどう見るか

泥にまみれて今日も輝く!
オッサン世代の汗を嗅げ!!

特集
オヤジよ!

2010 No.144 CONTENTS

kamipro

表紙写真／タイコウクニヨシ

特集 オヤジ
平均年齢45歳超でお届けしま〜す！

OYAJI

004 吉田秀彦
012 所 英男×内藤大助
018 桜庭和志×髙阪 剛
024 田村潔司
030 マーク・コールマン
033 生き方はオヤジが教えてくれる！
村田兆治／廣田瑞人のバイト先のオヤジ／青木真也の親父／中華屋のオヤジ
049 百田光雄が明かすノア脱退劇
056 保永昇男が語るプロレス哲学
061 風間ルミ 〜掟ポルシェの『萌え萌え女々苑』SP〜

The 2000's

066 2000年代変態座談会＋ベストバウト50選
074 武蔵
078 アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ
081 語録で振り返る2000年代
090 菊地成孔「マット界、ネクスト10年の可能性」
094 2000年代プロレス重大事件
097 検証『猪木祭り』裁判
104 ターザン山本！「無の10年」

MMA

113 青木真也
118 笹原圭一 DREAMイベントプロデューサー
136 SACHI
141 朱里

kakutsu

123 特集・ありがとう！『格闘技通信』
谷川貞治×熊久保英幸／堀辺正史／座談会

Columns

088 椎名基樹の『サムライ三昧』
107 花くまゆうさくの『豆リングの汁』／金原弘光の『どこまでやるの!?』

83年

初
数
本
"金
当

特集

オヤジ

我々はオッサンたちの汗を嗅ぐ必要がある!

今号の特集テーマは「オヤジ」なんです!! 本誌全体の出演者平均年齢は45歳。何しろ今回の最年少はシンヤ・エイオキさん（26歳）ですよ。う〜ん、この業界に未来はあるのか……。

人生経験が豊富なだけあって、オヤジたちって凄くたくましいですよね。「もうダメだ……」とボヤきながら粘る粘る。「そこまでやるのか⁉」と白眼視されてもまったく躊躇しない。ズバリ言って狂ってる!!

今回の特集に登場してくださったオヤジさんのなかに、元プロ野球選手の村田兆治さん（60歳）がいますが、その村田のオヤジは「奇人、変人、達人までいかなきゃ！」とおっしゃる。奇人、変人の先に達人の域があるという発想もお見事ですが（この言葉を聞いて、田村潔司さんの顔が思い浮かびました）、要するにオッサンたちは、若者たちが「そこまでやる必要は……」と退き気味になる壁を平気でぶっ壊してくれるんです。

真樹日佐夫先生をご覧なさい。存在自体がぶっ飛んでてカッコイイじゃないですか。40歳にしてリングにしがみつく桜庭和志だって、見方によっては狂気以外の何者でもないでしょう。

というわけで、特集のトップバッターは、もし政治家になったら徴兵制を導入したいと語る、吉田"先輩風"秀彦（40歳）さんです！ ちなみに第2特集は「ゼロゼロ年代とはなんだったのか？」——皆さん、歴史から学びましょう！

age
69

特集イメージキャラクター
真樹日佐夫先生

なぜだ!?
格闘技界の怒りオヤジが引退を前に日本に喝!

4.25『ASTRA』日本武道館大会で引退が決定した吉田秀彦。当初は大晦日の石井慧戦で引退するはずが、
ご存知のとおり『SRC』は『Dynamite!!』と合流。それに伴い引退試合もスライドするかたちとなっていたが、
結局は自身の所属するジェイロック主催興行で現役生活に幕を下ろすことに。
そんな吉田を引退発表会見翌日に直撃すると、なぜか怒りオヤジモードで日本への不満を爆発!

聞き手／阿修羅チョロ　撮影／タイコウ クニヨシ　試合写真／乾晋也、©DREAM

秀彦

4.25 ASTRA
日本武道館大会で
引退試合決定!

「いまの日本人は根性が足りない」

吉田道場

age 40

吉田

吉田秀彦

吉田　これって『格通』の取材ですよね?
――いや、『格通』ではなく『kami pro』の取材です。
吉田　あ、『kami pro』か。『kami pro』はまだ大丈夫なんですか?
――一応、大丈夫です。『格通』さんは2月で休刊するらしいですけど、『kami pro』はまだ続きますので。
吉田　そうなんですか。俺と一緒にみんなでやめちゃいましょうよ（笑）。
――いや、それは遠慮させていただきます（笑）。『格通』の休刊について吉田さんはどう思われました?
吉田　いや～、残念ッスねぇ。
――確かに残念ですよね。
吉田　でも、格闘技関係は全部下降気味ですよね。
――それに拍車をかけるように吉田さんも引退してしまいますし、明るい未来が見えないというか。
吉田　まあでも、流れってあるから。この流れの中で若いヤツに頑張ってもらって、また盛り上げていってもらえれば。
――で、今回は〝オヤジ〟特集ということで、マット界のいろんなオヤジに登場してもらってるんですが、総合格闘技界で一番頑張ってるオヤジといえば、やはり吉田さんかなと思いまして。
吉田　まあ僕もね、いままでオヤジなりに頑張ってきましたけど、ここで目一杯だと思いますよ（苦笑）。
――さすがにこれ以上は頑張れないという判断で引退を決意したと?
吉田　いいパフォーマンスがこれ以上できそうもないなって思ったんで。
――國保（尊弘）さんも言ってましたけど、それこそマーク・ハント戦ぐらいから、常に満身創痍だったみたいで。
吉田　そうですね。あの試合で肩がブチ壊れて。あれからちょっとおかしくなってきましたね。
――「あれから」と言っても、ハント戦は04年の試合だったので、もう5年以上前の話ですからね。
吉田　それぐらいから騙し騙しやってきましたから。そう考えると頑張ったよなぁ、俺って（苦笑）。
――かなり頑張ったと思います（笑）。
吉田　肩だけじゃなくて、内臓も壊したりもしたし。そういった意味では厄年だし。今年は本厄だから、いい区切りかなって。
――満身創痍ながら5年以上も頑張ってきたっていうのは、自分のためというより、格闘技界やファンのためっていう部分が大きかったと言ってましたよね?
吉田　5年前っていうと、まだPRIDEがいい時期だったんで。それから、いろいろとあって『戦極』を立ち上げて、ここで頑張らなきゃいけないなって思ってやってきたんですけど、またいろいろあってね（苦笑）。
――昨年末には、またいろいろありましたからね。
吉田　『戦極』を立ち上げたときが40の年で、その頃から辞めることを考えながらやってましたからね。
――『戦極』旗揚げの頃から辞めるときのことを考えていたんですか?
吉田　もう長くはできないなって思ってましたから。
――立ち上げの頃は「地上波をつけなきゃダメだ」とか「『戦極』をメジャーな舞台にしていきたい」とか、自分のことよりもイベントや業界のことを考えた発言が目立ってましたよね。
吉田　そう思ってやってたんですけど、結局こういうかたちになったんでね。ちょっと残念ですよね。せっかくうまくいきかけてたんですけど。
――内容的にもイベント的にも、旗揚げから徐々にいい流れができてきた感じでしたからね。
吉田　僕らは、國保さんと一緒に格闘技の世界に入ったときからやってきましたから。それに対して、僕らは選手として頑張るだけだったんで。それ以外の部分に対しては僕らはあまり口を出すことじゃないし。そういう意味では、これからも國保さんと一緒にやっていきますよ。あとは残った（中村）カズとか小見川（道大）とかがいかに盛り上げていくかだと思うんで。まあ僕もね、先が見えないですけど、オヤジなりにできることは応援していきたいな、と。
――先は見えないってことはないんじゃないですか?
吉田　先は見えないでしょ。
――吉田さんぐらいになると、いろんな先が見えてるのかなと思うんですが。
吉田　僕はこの世界に入ったときから、終わったら柔道に戻ろうと思ってましたんで。まあ、そういった意味でも道場もありますし、引退後はもう少し自分の道場に力を入れたいなとは思ってますね。いまは男子柔道がダメになってきてるんで。底辺の拡大をして日本の柔道界が盛り上がるようなことをやっていきたいなって。
――では、引退後は指導者としての活動がメインになっていくんですか?
吉田　それはそうでしょうね。
――そこの部分はしっかりと先が見えてるわけですよね?
吉田　そうですね。いまは小学校で柔道を始めたとして、中学校、高校、大学ってやり続けても、なかなか柔道でメシを食っていくって難しいですから。
――吉田さん一人だったら、それこそ食っていくのは問題ないんでしょうけど、吉田道場の指導者だったり関係者といった周りの人間全員が食っていけるような環境を作っていきたい、と。
吉田　みんなが食っていけるような状態を作っていきたいですね。だから、柔道が仕事になるようにしていかなきゃいけないと思うし。それにはもっとメジャーにしなきゃいけないし。人気が出るようなことをもっといろいろ考えていかなきゃいけないと思うんですよ。……要はね、柔道バカなんですよ（笑）。

――空手バカならね、柔道バカだと（笑）。
さんが見てて、納得する試合をしたいなと
んないですけど、まあ、おもしろい試合を
吉田　まあ、それがスマートでしたよね。

に満身創痍だったみたいで。

てきたんですけど、またいろいろあってね

がいかに盛り上げていくかだと思うんで。

柔道バカなんですよ（笑）。

『kamipro』も俺と『格通』と一緒にやめちゃいましょうよ（笑）

――空手バカならぬ、柔道バカだと（笑）。

吉田　そうそう。結局ね、柔道バカになっちゃいけないって、よく言われますけど、まあ実際そのとおりだと思うんですけど、みんな得意なもので食っていかなきゃいけないと思うんですよ。

――好きなものを仕事にしたらうまくいかないとかよく言いますけど、それで食えたら一番いいですよね。

吉田　それが一番いいですよね。引退後はそういう道を切り開いていきたいなって思ってますね。

――柔道家として総合格闘技界で約8年間頑張ってきたわけですが、やはり帰る場所は柔道界ということなんですね。

吉田　そうですね。自分は総合格闘技は仕事としてやってましたから。プロとして闘うのが仕事で、それでファイトマネーをもらって生活してきましたからね。

――そういう意味では、プロとしてファイトマネーというのも闘ううえで大きなモチベーションになったりはしました？

吉田　それはありますね。仕事としてやってる以上、お金が入ってこなければ闘う意味はないし、生活できなくなっちゃいますからね。もちろん、試合は相手あってのことなんで、それだけがモチベーションではないですけどね。

――吉田さんは対戦相手に関しては、どんなオファーでも基本的に断ったりしない選手だと耳にするんですが。

吉田　まあ、僕の場合は自分が納得する相手とかじゃなくて、やっぱり周りとかお客さんが見てて、納得する試合をしたいなと思ってたんで。「あの試合が観たい」とか、そういうのをかなえていくのがプロだと思うんですよ。だから、嫌な試合なんていっぱいあると思いますけど、それもやってかなきゃいけないと僕は思ってましたし。

――よく言われますけど、選手が嫌がる試合こそファンが望む試合だと。

吉田　そうそう。だから、いままでね、もうやりたくない試合なんて腐るほどありましたよ（苦笑）。

――腐るほどありましたか（笑）。パッと思いついたのが小川直也戦なんですけど、あの試合なんかもやりたくなかったんじゃないですか？

吉田　やりたくなかったですね（苦笑）。まあでも、ファンがあって僕たちがあるんで。ファンが望むものをやらなきゃいけないですから。だから、仕方なくというか、割り切ってやるしかなかったですね。

――そういう意味でも、今度の引退試合の相手っていうのはファンにとっても、もちろん吉田さんにとっても凄い重要な選択になるでしょうね？

吉田　まあ、そうですよね。

――会見ではやりたい相手としてヴァンダレイ（・シウバ）の名前も出してましたけど。

吉田　まあ、現実的に無理ですからね。

――ヴァンダレイにかぎらず、契約とかで現実的に無理な相手がいまの総合格闘技界はモノ凄く多いですからね。

吉田　そういう中で、誰とやるかまだわかんないですけど、まあ、おもしろい試合をしたいな、と。そうなると誰なのかなぁ？

――格闘家って、総合にかぎらず、負けた相手には誰しもがリベンジをしたいという気持ちになると言いますが、引退試合の相手としては、そこは重要視はしてない？

吉田　そこは重要視はしてないですね。それよりは次につながるような相手。僕がつながるんじゃなくて、もし『ASTRA』っていうのが今後もやっていくとしたら、その大会自体が次につながるようなことを僕はやっていきたいなと思いますし。僕は次の大会で終わりますけど、やっぱり、次にやったときに、みんなに足を運んでもらえるような、全体を通してそういう試合ができたらいいかなって。

――それこそ、後輩のカズ選手だったり小見川選手にも、そういう意識で試合をしてもらいたいと？

吉田　そうですね。

――終わっちゃった話ですが、石井慧選手との試合が最後というのは一番よかったんでしょうけど。

吉田　まあ、それがスマートでしたよね。僕は石井戦っていうのは『戦極』にとって起爆剤になるなと思ってましたから。それがああいうかたちになってしまったんで。まあ、終わったことを言ってもしょうがないですけどね。

――同い年の桜庭和志さんも引退試合の相手として名前が挙がってましたけど。

吉田　できることならやりたくないけどね（苦笑）。まあでも、日本人でいったら、サクちゃんなのかなっていう。ガイジンでいったら、やっぱりヒョードルとか？

――ヒョードルも契約問題があるんでしょうけど。

吉田　そんなのばっかりだから（苦笑）。でもヒョードルはデビューが同じぐらいなんですよ。

――ヒョードルもPRIDEに出るようになったのが吉田さんがデビューした2002年でしたからね。

吉田　僕と一緒に試合に出てた頃は、まだ有名じゃなかったですから。

――引退前に一度は拳を交えたかった相

4.25『吉田秀彦引退興行～ASTRA～』日本武道館大会開催決定!

3月8日、都内ホテルで吉田秀彦の引退興行『ASTRA』が4月25日（日）、柔道時代から縁の深い日本武道館で開催されることが発表された。この日の会見には吉田秀彦、中村和裕、小見川道大、長倉立尚の吉田道場勢と株式会社ジェイロックの國保尊弘代表が出席。引退興行には、この日の会見は所用により欠席した瀧本誠を含め、会見に出席した3選手の出場も決定。注目の引退試合の相手に関して吉田は「シウバとかやりたい選手はいますけど、契約とかで難しいんで、誰でもいいです」と語れば、すぐさま後輩のカズが引退試合の相手に立候補し、吉田は思わず苦笑い。気になる対戦相手や追加カードなど大会情報は國保代表がスタートさせたブログ『可能性はゼロではない』（※アドレスは11ページ参照）でゲッツ！

手ですか？　まあ、積極的にやりたい相手ではないかとは思いますが（笑）。
吉田　まあ、やってみて、みんなが観たい相手かなとは思ってましたね。
――ちなみにヒクソン・グレイシーは闘ってみたかったですか？
吉田　もうちょっと若かったら（苦笑）。
――それは向こうがですか？
吉田　まあ、向こうもそうですし、僕もオヤジですから（笑）。でもホント、最後は誰がいいんですかね？　逆にこっちが聞きたいッスよ。
――誰がベストなんでしょうねぇ。
吉田　（思い出したように）あっ、超人ハルク！
――えっ、超人ハルクですか？
吉田　ミノワマン！　優勝したじゃん！　スーパーハルクトーナメントで。
――まあ、ミノワマンは現実的に可能性はあるかもしれないですね。契約的にも問題はなさそうですし。
吉田　まあ、それもそうだし。あとはカズぐらいかな。スムーズに進みそうなのは（苦笑）。
――所属も一緒ですしね（笑）。
吉田　でも、これっていう相手はなかなかいないッスよね。
――まあ、アメリカでは先日のUFCでランディ・クートゥアーvsマーク・コールマンという超オヤジ対決とかも実現しましたけど、日本では年齢や知名度的にも、なかなか吉田さんとつり合う相手はいないですよね。
吉田　そうなんだよなぁ。オヤジ対決はクートゥアーが勝ったの？
――46歳のクートゥアーが勝ちましたね。
吉田　凄いよねぇ、クートゥアー。
――クートゥアーのような自分よりも年上で頑張ってる選手は気になります？
吉田　まあ、あそこまでできたらいいかなぁって思ってたけどね。ただ、それは自分の身体と気持ちの問題があってのことなんで。まあ、僕もここまで無理しすぎたかなっていうのはあるんで（苦笑）。まあ、40歳というのは人生の折り返し地点だと思うんで、そろそろ潮時かな、と。
――人生80年と考えたら、まだ半分ですからね。
吉田　そう考えると次はね……、もちろん自分のことも考えながら、家族のことと か、周りの人のことを考えてやっていかなきゃいけないなと思いますよね。
――柔道中心にというのは、もちろんあるんでしょうけど、これまでと同様にタレント活動も話があれば継続していくつもりですか？
吉田　僕はタレント向きじゃないんでね。テレビとかも苦手だし。
――そうなんですか。引退後は役者をやってみたいっていう格闘家も多いですけど、そういうのもあまりないですか？
吉田　無理ッス。照れ性なんで。
――照れ性でしたか（笑）。プロレスラーでも「リングは麻薬だ」とよく言いますけど、照れ性の吉田さんとしては、そういうところはないですか？
吉田　やっぱりね、ああいう緊張感とか、人に注目されたりっていうのは現役じゃないと味わえないことですから。その気持ちはよくわかるんですよ。だからみんな辞められないんだなぁって思いますけど。まあでもね、それはプロレスだからできるんですよ（苦笑）。
――まあ、プロレスは40歳なら、まだ若いほうかもしれないですし（笑）。
吉田　そうでしょう。でもさすがにね、40歳で真剣勝負をずっとやっていくっていうのはキツイっすよね（苦笑）。
――まあ、そうでしょうね。
吉田　わかりますよ、ホントに。リングは麻薬だっていうのはね。格闘技の世界でもスポットライトを浴びるっていうのは気持ちいいし、誰しも上がりたいと思いますよ。ただ、どっかで一線を引かなきゃいけないですから。だから、次は柔道で自分の道場から出たヤツが育っていくのを楽しみに頑張っていきたいなっていう。それ以外って何ができるんだろう？
――吉田さんといえば、格闘界以外にもいろんな人脈もありますし、前田日明さんのように政治家という選択肢はないですか？　ちょくちょく出馬要請があったなんて記事も見かけますけど。
吉田　毎回来るけど、政治家っていうのは僕はないッスね（苦笑）。
――毎回、出馬要請はあるんですか？
吉田　政治家の秘書の先輩とか、政治家も知り合いにいるんでね。「今回の参議院選はどうだ？」とか言われますけど、とてもじゃないけど、僕がやったら日本が沈没しますよ（苦笑）。
――日本を沈没させる自信があると？（笑）。
吉田　ありますね（苦笑）。
――あまり、そっちの世界は興味はない？
耐とか我慢っていうのがあまりないのか

当初は昨年大晦日『SRC』での石井慧戦で引退を決意していた吉田だが、結局『SRC』は『Dynamite!!』と共催するかたちとなったため吉田の引退試合もスライドすることに。試合はキャリアの違いを見せつけた吉田が3-0で判定勝ち！

吉田秀彦MMA全戦績

2002.8.28『Dynamite!』国立競技場【※道衣着用ルール】
○vsホイス・グレイシー（1R 7分24秒 TKO※レフェリーストップ）
2002.11.24『PRIDE.23』東京ドーム
○vsドン・フライ（1R 5分32秒 腕ひしぎ十字固め）
2002.12.31『INOKI BOM-BA-YE』さいたまスーパーアリーナ
○vs佐竹雅昭（1R 0分50秒 フロントネックロック）
2003.8.10『PRIDE GP開幕戦』さいたまスーパーアリーナ
○vs田村潔司（1R 5分06秒 袖車絞め）
2003.11.9『PRIDE GP決勝戦』東京ドーム
×vsヴァンダレイ・シウバ（2R終了 判定0-3）
2003.12.31『PRIDE男祭り』さいたまスーパーアリーナ
△vsホイス・グレイシー（2R終了 判定なし）
2004.6.20『PRIDE GP準々決勝』さいたまスーパーアリーナ
○vsマーク・ハント（1R 5分25秒 腕ひしぎ十字固め）
2004.12.31『PRIDE男祭り』さいたまスーパーアリーナ
×vsルーロン・ガードナー（3R終了 判定0-3）
2005.4.23『PRIDE GP開幕戦』大阪ドーム
×vsヴァンダレイ・シウバ（3R終了 判定1-2）
2005.8.28『PRIDE GP決勝戦』さいたまスーパーアリーナ
○vsタンク・アボット（1R 7分12秒 片羽絞め）
205.12.31『PRIDE男祭り』さいたまスーパーアリーナ
○vs小川直也（1R 6分04秒 TKO※腕ひしぎ十字固め）
2006.5.5『PRIDE GP開幕戦』大阪ドーム
○vs西島洋介（1R 2分33秒 三角絞め）
2006.7.1『PRIDE GP準々決勝』さいたまスーパーアリーナ
×vsミルコ・クロコップ（1R 7分38秒 TKO※タオル投入）
2006.12.31『PRIDE男祭り』さいたまスーパーアリーナ
×vsジェームス・トンプソン（1R 7分50秒 TKO※タオル投入）
2008.3.5『戦極～第一陣～』代々木第一体育館
×vsジョシュ・バーネット（3R 3分23秒 ヒールホールド）
2008.6.8『戦極～第三陣～』さいたまスーパーアリーナ
○vsモーリス・スミス（1R 2分43秒 袈裟固め）
2009.1.4『戦極の乱』さいたまスーパーアリーナ
×vs菊田早苗（3R終了 判定1-2）
2009.12.31『Dynamite!!』さいたまスーパーアリーナ
○vs石井慧（3R終了 判定3-0）

これまでで一番印象深い試合として吉田が挙げたのがPRIDEでのヴァンダレイ・シウバ戦。シウバとは2度対戦し、連敗している吉田だが、05年4月の2度目の対戦では真っ向から打ち合いを披露し、場内をおおいに沸かせた。

吉田秀彦

興味ないけど、もし政治家になったら徴兵制とか絶対作っちゃうよ！

――あまり、そっちの世界は興味はない？

吉田　興味ないッスね。もし政治家になったら徴兵制とか作っちゃうもん。

――吉田先生は、そういう考えを持っているわけですか（笑）。

吉田　いまの日本に必要ですよ。みんな根性ないもん。

――日本人は根性が足りない？

吉田　そう思いますね。だから、日本はいつも後手後手に回っちゃうと思うし。○○だって持ちゃあいいんですよ。ねっ？

――「ねっ？」と言われても（笑）。

吉田　○○○を持たないから狙われるでしょ。……そんなこと書けるわけないけど（笑）。

――吉田さんからそんなに過激な発言が飛び出すとは思いませんでした（笑）。

吉田　でもそう思いますよ。だって、○○○○○を持つんだったら、○○○作ったっていいじゃん。

――まあ、矛盾はたくさんありますよね。

吉田　○○○○撃ってきたら撃ち返してやればいいんだよ。

――もし当選したら、それぐらいアグレッシブな政治家になってしまうわけですね（笑）。

吉田　まあ、やらないですけどね（苦笑）。

――でも、日本人は根性がないっていうのは、いろんな場面で感じるわけですか？

吉田　いまの子どもたちを見てればそうですよ。やっぱり、「何くそ！」っていうのがないような気がするんですよね。「キツイ、はいやめた」で終わっちゃうから。忍耐とか我慢っていうのがあまりないのかなって。ウチの道場の子どもたちとか、その親とか見てると、みんな甘いなっていうふうには思いますよね。まあでも、その中でやってかなきゃいけないかなって。

――自分が子どもの頃に教わってきた指導法をいまの子どもたちにやらせても、長くは続かないんでしょうし。

吉田　それは無理。だって、いまの世の中って手をあげたら訴えられたりするわけでしょ。手をあげるって子どもたちが悪いことしてるから手をあげるんであって。それが、世の中でまかり通らなくなってきてるから。だから、ハッキリ言って、この世の中自体がおかしいんですよ。

――世の中がおかしい？

吉田　世の中というか日本がおかしい。日本もね、昔の神風特攻隊ぐらいの気持ちでやったから、これだけ日本の経済も成長したと思うんですよね。そういう根性がないからドンドンドンドン下火になってきてると思うし。

――柔道を教えていくっていう意味では、技術面だけではなく、そういった精神面も重要視しているわけですか？

吉田　そうです。いま道場の先生にも言ってるのが「手をあげるな」と。そこはいまの世の中のルールで守らなきゃいけないんでね。ただ、柔道を通して人間的に社会でキチッとできるような、しつけってできると思うんですよね。社会人になったときに何が必要かって、頭がいいとか、勉強ができるとか、そういうことじゃなく

吉田　僕はタレント向きじゃないんでね。

うのはキツイっすよね（苦笑）。

吉田　ありますね（苦笑）。

佐竹戦のときみたいに試合後に叩かれないよう、もう一回だけ頑張ります！

吉田秀彦

て、いかに人を作っていくかってことだと思うんで。人とのつながりだとか、そういうところに対応できる人間を作っていかないといけないなと思ってるんで。

——試合後に中指を立てるような子どもにはなっちゃいけない、と（笑）。

吉田　あれもね、気持ちはわかるけど、全国放送だからね。青木（真也）は実力はあるし、強さは示したかもしれないけど、品格は落としたよね。あれは青木にとって、損ですよね。

——いいか悪いかっていったら悪いことなんでしょうけど、結果的には大晦日で一番の話題にはなってますからね。そのへんはプロの世界というのは難しいところではありますよね。

吉田　そうそう、難しいよねぇ。いまだに悩むもん、プロの世界は。

——吉田道場の今後っていう意味では、やはり、中村カズさんが中心にやっていく感じになるんですかね？

吉田　そうですね。カズが一番最初に入ってきたんでね。アイツは後輩たちにも慕われてますから。練習にもいろんな道場から来てるし。そういう中で頑張っていってくれるんじゃないですか。それに、カズは今度おでん屋さんもやるんですよ。

——あ、そうなんですか。噂にはチラっと聞いてましたけど。

吉田　『中村屋』っていうおでん屋の総支配人らしいですよ（笑）。

——へぇ〜。それはJ—ROCKの新しい事業展開なんですか？

吉田　いや、カズ個人で。まあ、カズも子どもがいるオヤジなんで安定収入を得たいっていう考えもあるんじゃないかな。はたして、うまくいくかどうかっていうのもあるけど（笑）。

——確かに（笑）。まあ、やるからには頑張ってほしいですね。

吉田　いろんなことをやるのは全然いいと思うんですよね。そうやって横の人脈というのをこういうときに作っていけばいいと思うし。

——あとは昨年ブレイクした小見川さんにかかる期待も大きいでしょうけど。年齢的にはオヤジではありますけど（笑）。

吉田　まあでも、小見川は波に乗ってるときだと思うんで、35とか36ぐらいまではいまの調子でいけると思いますよ。よく練習してるし、気持ちも強いですから。

——そういう意味では吉田道場の総合格闘技部門は引退後も安心して任せられるって感じですか？

吉田　そうですね。僕は我が道を行きますから。総合は総合でみんなで頑張ってもらって、僕ができることがあれば、手伝ってあげたいなとは思ってますけどね。

——引退後もテレビだったり、スポンサーの獲得だったりっていう部分では吉田さんの力はまだまだ必要なんじゃないかなって思うんですけど。

吉田　まあ、単発じゃ困るんでね。継続してやってもらえるスポンサーさんを見つけないと。ホントはね僕の仕事じゃないんですけど。あの人たちの仕事なんですけどね（といってマネージャーを指差す）。

——スタッフの方にも頑張ってもらいましょう（笑）。話は戻りますけど、吉田さんは『Dynamite!!』の大会前は、いろんなことに対して、くそったれモードだったじゃないですか？

吉田　まあまあ、いろんなことがありすぎたんでね（苦笑）。

——自分の試合はもちろん、周りの選手の試合も決まらないことに対してもかなり怒ってたじゃないですか。あの怒りを見て、ファンとかもいつも以上に吉田さんに乗れたところがあったと思うんですよ。

吉田　そうなんですか。僕はゴマすったりとかもしないし、思ったことをそのまま言ってしまうタイプなんで（苦笑）。

——そんな感じですよね（笑）。

吉田　それがそうやって受け止めてもらえたら、ありがたいし。そうやって受け止めてもらってるっていうのも知らなかったし。……だったら、最後も怒りオヤジモードで試合をしようかな（苦笑）。

——それもいいかと思います（笑）。ということで、最後に〝格闘技界の怒りオヤジ〟として何かメッセージをいただければ。

吉田　なんだろうな？　格闘技界に対して言いたいのは、テレビでやるっていうのは凄く大事なことだとは思うんだけど、僕たち選手っていうのはアイテムの一つだから、もう少し大事にしろよ、と。

——大晦日にかぎらず、マッチメイクとかテレビに振り回されるところは実際にありますからね。

吉田　いいパフォーマンスができて初めて、いい試合ができるわけじゃないですか。それをテレビで放映するわけでしょ。ダラダラの試合やったってしょうがないじゃないですか。それには選手はキッチリ練習して、いい試合を見せれるような身体を作んなきゃいけないのに、1週間や2週間で身体が作れるわけがないっつーの。

——そういうのがあたりまえになってきてるのも問題ではあるんでしょうけど。

吉田　そこはどうにかしていってもらいたいと思いますね。怒りオヤジとしては（笑）。もちろん、大会をやるには、お金を出す人もいれば、マッチメイクを調整しなきゃいけない人もいる。それを全部引っくるめて選手がいるから成り立つんだよっていうのは僕は言いたいし、逆に言えば、お金を出してくれるテレビ局があるから、この試合が成り立つっていうのも僕はわかってるんですよ。だったら、もっとフィフティ・フィフティにキチッとやろうよっていうのは本音ですよね。みんなでいいものを作っていかなきゃいけないんじ

吉田と引退試合といえば思い出すのが02年大晦日の『猪木祭り』での佐竹雅昭戦。同年8月のホイス戦でプロデビューした吉田は11月の『PRIDE.23』ではドン・フライと対戦。約1ヵ月後の佐竹戦はフロントネックロックで秒殺するも、素っ気ない勝ちっぷりに大会後はバッシングをゲッツしてしまった。

やないのっていう。いまはみんながバラ
わったあとに「プロ失格」とかいろいろ言

吉田　それがそうやって受け止めてもら

ないよう、もう一回だけ頑張ります！

よしだ・ひでひこ■1969年9月3日、愛知県出身。小学4年生で柔道を始め、92年バルセロナ五輪では金メダルを獲得。3度のオリンピック、4度の世界戦選手権に出場したのち総合格闘技界に進出。02年8月、ホイス・グレイシー相手にデビュー。その後はPRIDEや『戦極』で活躍。昨年大晦日の『Dynamite!!』では石井慧との金メダリスト対決を制し、今年4月25日に引退。180cm、110kg。

ゃないのっていう。いまはみんながバラバラだから、へんなものができてしまうんじゃないのかなって。

——そういった感情の行き違いとかもあって、それこそ青木さんみたいなことが起こったとも言えるでしょうからね。

吉田　そう。だからね、青木も主催者側とかスポンサー側の犠牲者の一人だなって僕は思いますね。

——それは言えるかもしれません。この号の発売は2月23日になるんですけど、それぐらいまでには引退試合の相手も決まっていてほしいところじゃないですか？

吉田　まあでも、今回に関しては試合をやるのは決まってるんで、試合に向けての練習はできると思うんで。あとは僕のやることっていったら、最後の試合でいい試合するだけなんで。その相手が誰だろうと関係ないですよ。

——そういえば、吉田さんといえば、佐竹（雅昭）さんの引退試合の相手を務めて、あっさり勝っちゃったこともありましたね（笑）。

吉田　あ〜、ありましたねぇ……（しみじみと）。あれでけっこう叩かれましたからね。「俺、べつに悪いことしてないのに」って思いましたけど（苦笑）。

——まあ、真剣勝負の場ですからね。

吉田　その当時は勝たなきゃいけないと思ってたから（苦笑）。

——デビュー間もない頃ですし、何をやってでも勝つってことが最優先だったわけですね？

吉田　そうでしたね。でも、あの試合が終わったあとに「プロ失格」とかいろいろ言われて「あ、そうなんだ」って思ったからね。アハハハハハ！

——引退試合でいろいろと勉強させられたわけですね（笑）。

吉田　もうちょっとやればよかったなって試合が終わってから思いました（笑）。

——引退試合の相手に選ばれるっていうのは複雑な感じはしました？

吉田　複雑というか、あのときはドン・フライとやってすぐだったんですよ。

——フライ戦が総合ルールのデビュー戦で、佐竹戦はその1ヵ月後でしたからね。

吉田　8月にはホイス（・グレイシー）戦があって、その年はけっこう試合したんですよね。頑張ってたよなぁ、俺（苦笑）。

——頑張ってたと思います（笑）。

吉田　終わったあとに叩かれないように、もう一回だけ頑張りますよ！

【10年2月9日／都内・梅ヶ丘『吉田道場』にて収録】

いものを作っていかなきゃいけないんじ

大晦日快勝の陰に内藤あり
現役続行の陰に所あり!?

所英男×内藤大助

オヤジの入口対談!

オヤジ一歩手前のお二方の豪華対談が実現!
ご存知国民的大スターである内藤大助と“世界のところさん”こと所英男である。
昨年末の『Dynamite!!』では内藤が来場してツーショットが実現したが、そもそも二人の関係とはいったい!?
そして内藤の現役続行宣言の真相についても迫ってみた!

聞き手／松下ミワ　撮影／梅木麗子　試合写真／乾真也、©DREAM

——内藤選手には初めて『kamipro』にご出演いただくんですが、お伝えしていたとおり、今号のテーマは「オヤジ」なんですよ。

内藤　えぇ？　オヤジぃ!?　そんなの聞いてないよお！

内藤のマネージャー　言ってなかったですっけ？　でも、会見のときに自分で自分のことさんざん「オヤジだ、オヤジだ」だって言ってたじゃないですか。

内藤　あ、そっか。ま、オレはまだいいけど、所くんはねえ。いま何歳だっけ？

所　今年33歳です。

内藤　誕生日は？

所　8月22日ですね。

内藤　ギリギリ獅子座かあ。オレ、8月30日だから乙女座なんだよねえ。はあ、でもオレ今年36歳だもんなあ。四捨五入したら40だもんねえ。おっさんだあ。

——たいへん失礼な企画ですみません！

内藤　でも、これは『kamipro』って雑誌に載るの？　なんか最近格闘技雑誌が一つ潰れたっていう話じゃなかったっけ？

所　それは『格闘技通信』です。

内藤　えぇ？　『格通』ってなくなったんだ！　へえー！　怖いねえ。不況だよねえ……（しみじみと）。

——そうなんですよねえ。で、今回、昨年末『Dynamite!!』の煽りVではお二人の関係がクローズアップされてましたが、そもそも知り合ったのはどういうきっかけだったんですか？

所　ボクと内藤さんの共通のトレーナーの野木（丈司）トレーナーがいて、それで一緒に練習させていただけるようになったのがきっかけですね。

内藤　そうだねえ。だからボクのほうが

所くんのイメージ？「フリーターの所」って感じかな？

age 35

あ、あ、お……

age 32

内藤　そうだねえ。だからボクのほうが

先輩なんだよね。まあ、一緒に参加させてくれという感じだったんで、しょうがないんだよ。うん。しょうがない。

内藤　しょうがないって……（笑）。

所　しょうがないよお！（真顔で）。でも、いつから来たんだあ？

内藤　ええっと、2年ぐらい前の沖縄の合宿が初めてです。そのときに初めて1週間ぐらい一緒にトレーニングをやらせていただきました。

――そのときの印象ってどうでした？

所　うーん、「所英男」って名前は知ってたけどね。「闘うフリーター」ってニックネームついてたでしょ？　そのイメージがあったから「あ、フリーターの所だ」って感じかな。うん。

――まるでフリーターが本業みたいな言い方ですね（笑）。所さんはどうでした？

内藤　いやもう内藤さんは世界チャンピオンだったんでホントに光栄でした。テレビも観てましたし、練習してるところも観たことあったんで。

所　そうだよ、世界の内藤だぞお！　でもね、ずっと話してたらだんだん「あ、まともにしゃべれない子なのかなあ……」って思いましたねえ。

内藤　……（無言でニヤける）。

所　もうね、「あ、あ、あ」とか「お、お、お」しかしゃべらないから、「大丈夫かな、この子？」って感じだなあ。

内藤　あの、こんな感じでよくボクのモノマネをしていただいてたんですよ。

所　だってしゃべれなかったでしょ？　だから「ごめんね。しゃべらなくていいんだよ」って言ってあげたんだよ。ま、最近はようやくしゃべれるようになってきたよねえ。

――所さん、すっかりイジられてるんです

撮影時には、まったくまともなキメカットが撮れないほど暴れまくり、サービス精神旺盛＆おちゃめすぎる内藤。一方、直立不動の所には「そんなんじゃダメだよお！」と厳しく喝ッ！

つらい練習も楽しくやろうよってそういうタイプなんだよね（内藤）

ね（笑）。

所　でもやっぱり内藤さんとしゃべるなんて、若干の緊張があったんで。でも、そのつらい合宿の最中に内藤さんがこんな感じで冗談とか言ってくれるのが凄いうれしいなって思いましたね。

内藤　オレは冗談は言わないぞ！（眉間にしわを寄せて）。

所　あ、あ、お……。

内藤　ほら、こんな感じになるでしょ？

所　す、すみません（笑）。でも、ホントに場を和ませてくれるのも内藤さんだし、練習を一番引っぱってくれてるのも内藤さんなんですよ。だから内藤さんがいる合宿といない合宿とでは全然感じが違うと思います。

内藤　あ、そう。たとえば？

所　いや、内藤さんがいない合宿にまだ行ったことがないんでわからないんですけど……。

内藤　なんだ、そりゃ！（笑）。でもまあ真面目な話になっちゃうけどさ、ホントに野木さんのキャンプってつらいんですよ。で、選手ってみんなそうだと思いますけどつらいだけじゃ、正直やれないんだよね。「つらい、つらい」と思いながらやってたら本当につらいんだよ。だから、まあ矛盾するかもしれないけど、どうせだったら楽しくやろうよ、笑いながらやっていこうぜってね。もう「笑うな」とか「歯を見せるな」とかさ、昔の話なんだよ。

所　凄いですよねえ。でもボク、それでもつらかったです（笑）。初めてキャンプに参加したんですけど、「こんなにきついんだ……」って思いました。

内藤　何言ってんのお。そんなの試合前だって一緒なんだぞ。ボクは試合の直前まで笑って話してたいタイプだから。冗談も交えながらね。そして「内藤選手、出番です」ってなったら、そっからバシッと切り替える。だからボクはメリハリを凄く大事にしてるというか、逆にダメなの、張りつめたまんまリングに上がりたくないもん。

所　それ疲れるんですよねえ……（ボソッと）。

内藤　だからボクが心がけてるのはみんなで「試合終わったらこうしようぜ、ああしようぜ」って言ってて、そして入場になったときに「よっしゃ、いくか！」って気合いを入れる。そのほうが集中できるんだよね。まあ、それは人それぞれだと思うけどな。

所　ボクの場合はやっぱり追い込むというか、気分的に追い込まれるんですよねえ。緊張しまくってます。

内藤　もう、コイツはそういうタイプなんだよお！（ドンッ）。だからホントはもうちょっとほぐすヤツがいたほうがいいのよ。ほら、ボクがいればねえ。下手したらうるさすぎて「出てけ！」って言われるかもしれないけどさ（笑）。

――ちょっと話は戻りますが、所さんが野木トレーナーの合宿に参加するようになったのは、2年前というと具体的に誰と試合したときぐらいですか？

所英男×内藤大助

リング降りたら「なんて言ったの？」って言われたからビックリしました（所）

所　本格的にやり始めたのは山本篤戦のあとですね。その前もちょこちょこゴールドジムとか具志堅ジムで教えてもらってたりはしてたんですけど、ちゃんと力入れてやり始めたのは山本篤戦のあとです。

――そうすると、所さんがけっこう苦しい時期に参加するようになったというわけですね。

内藤　だから、スタミナなかったんだよなあ。

所　そうなんですよ。ほぼ長距離とか走ったことなくて、いきなり一発目のゴルフ場ランニングでヒザ壊しました。

内藤　そう、ボクも一緒。みんなそうだしね。あのね、初めてのキャンプに合同で参加させてもらって、ボクも初日で壊れたんだから。だから次の日から走れなくてねえ、一人だけ特別メニューでゴルフ場をウォーキングしたんだよね。

所　あ、ウォーキングを。

内藤　それはラクだったよ。でも、逆にもの凄いショックだったねえ。せっかく気合い入れてキャンプに行ったのに、合同で走れないんだよ。もう損したぐらいの気持ちだよね。だからボク野木さんのトレーニングに参加させてもらって、「あ、走るってこういうことなんだ」って思ったもん。それまでのロードワークはただのジョギングにしかすぎねえなって。でも、所くんが来たのって山本篤戦のあとだったんだ。

――その後、内藤さんは所さんの苦しい時期をともにして、何か凄く声をかけてくださったんですよね。

所　というか、試合前後はけっこう声をかけてくださるんですよ。

内藤　でも、誰が3連敗の相手だったんだっけ？

所　DJ・taiki選手なんですけど、そのあと丸坊主にして千葉合宿に参加させてもらったんですよ。

内藤　ああ、なるほど、なるほど。

――所選手が3連敗と聞いたときはどう思いました？

内藤　まあ、どうでもよかったね（キッパリ）。

所　あ、あ、お……。

内藤　まあ、こっちは自分のことで精一杯ですからね。それより、なんで坊主にしてんのかな？って思ったよ。

所　だからそのときボクずっと「出家した、出家した」って言われてたんですよね。

内藤　「なんで出家したの？」って、たしかそんなこと言ってた気がするなあ。でもさあ、逆に「残念だったね、惜しかったよ、また頑張れよ」って、まあそれでもいいんだけど、それってありきたりだしさ、つまんねえしさ、負けたときは何を言われても一緒なんだよね。逆に、へんに慰めるよりズバッと言っていいときもあるというか。でも、山本篤戦で思い出したけど、じつはボク、KID選手とはちょっと面識があるんですよ。

――あ、そうだったんですか。

内藤　だからまあ所くんがKID選手と試合するときは「KID選手を応援するからね」ってもう言ってあるからね。

所　……（ニヤニヤ）。

内藤　ホントだぞ！　もう練習とか調整具合とか、情報流しちゃえって感じだからね。

所　でも、こんなこと言ってても励ましてくれたりするんですけど、やっぱり内藤さんみたいな世界のトップになった人に言葉をかけてもらえると、ちょっと言われるだけでズシンときますね。

内藤　ただ、さ、普段はオレから声をかけたりするのに、大晦日はそうじゃなかったでしょ？　所くんのほうが「試合に勝ったら言いたいことがある！」とか言うからさ、もうホントにドキドキしたよ。そのときはもうオレ世界チャンピオンじゃなかったからさ、いままでさんざんズバズバ言ってきたツケで「オレのほうが上だ！」とか「この負け犬があ！」って言われるのかと思ってたんだから。

所　日頃の恨みですね。

内藤　やっぱり恨みがあんのか!?　……でもさあ、結局何が言いたかったのかわからなかったんだよねえ。

所　ワハハハハ！　やっぱりわからなかったんですね。

内藤　だって「内藤さん、もう一丁、お願いします」って、なんのことなんだよお。

――ホント、なんでああなっちゃったんですか？

所　あ、なんか、リングの下でみんなが「早くしろ！　早くしろ！」とか言ってるから、ボクも凄い焦って、考えてきたこと全部忘れちゃったんですよ。

内藤　でも、勝ったら言いたいことがあるって決めてたんじゃないの？

所　一応、こんなことを言いたいなって考えたことはあったんですけど、なんか巻きだったから、凄い混乱しちゃって……。

内藤　んもう、気が小さいんだよ！　ホントにこの男はさあ！

所　す、すみません（笑）。

内藤　格闘家なんだから「うるせえ！　オレにはオレのペースがあるんだ！」とか言うぐらいじゃないとダメよ。

所　ホント、いま思うと、全然そこでしゃべってもよかったなって思いました。でも、リング降りて内藤さんに挨拶に行った

「勝ったら内藤さんに言いたいことがある」と煽りVで宣言し、見事勝利を収めた所だったが、試合後のマイクでは「もう一丁、お願いします！」とだけ言い残し、会場をはてなの渦に巻き込んだ。今回のインタビューで案の定、内藤にもその意味合いが伝わってなかったことが発覚。

ら一番最初に「なんて言ったの?」って言われて、ビックリしました。

内藤 ビックリしたって、こっちがビックリだよ! あとで「伝わってなかったです」とかコメントしてたから、「伝わるわけないじゃない」ってねえ。

──じゃあ、リングの下でようやく言いたいことがわかったという感じだったんですね。

内藤 いやいや、それがそうじゃないんだよ。わざわざリングの下に来たから「なんて言ったの?」って聞いたの。そしたら、また「あ、あ、あ」とか「お、お、お」って感じなんだよね。そこでもハッキリ言わないから、結局最後までわからずじまい。

──そうだったんですか(笑)。

内藤 だからマイクしたあともずっとドキドキしてた。「どんなヒドイことを言われたんだろう」と思ってたんだから。きっと悪口言われたんだろうなと思ってね。だからね、悪いんだけど試合中なんかは「負けろ、負けろ」と思って観てたんだよ。

所 ヒドイじゃないですか!

内藤 正式にはまだですよ。まあ、雑誌を読んで「なんとなくこういうことを言いたかったのかなあ」って思ったんだけど、そこで言っちゃったから「もう伝わっただろう」って思ったんじゃない?

所 あ、でも、リング下でも伝わってないって思ったんで、控室でもう一回言った気がするんですけど……。

内藤 そうだったの⁉

所 ……………人にものを伝えるというのは難しいですよね(ボソリ)。

──あ、そこまで振り出しに戻りますか(笑)。

所 でも、その控室で内藤さんと前田(日明)さんが話してるのを見て、なんか凄い感動してました。前田さん、「もっかい亀田選手とやんないと」とか、そんな話をしてましたよね?

内藤 そういう声をかけてくれてた感じかな。でもオレも「ああ、あの前田選手だ!」って思ったよ。「テレビで見てる人だ!」って。だからこっちは緊張してたんだよね。

──へえ~、我々からすると内藤選手も「テレビの人だ!」って感じです。

内藤 そうだよ。だけど、一回見たことあるとかしゃべったことある人だったら免疫ができるけど、そうじゃない人はやっぱり一般ピープル目線になっちゃう。いまだにそうだよ。

3連敗後、気合いの丸坊主姿でエイブル・カラム戦を闘った所。しかし、坊主姿を見た内藤からは「出家した?」というなんともあっけらかんとしたリアクションが返ってきたというからさすがだ。

所英男×内藤大助

──でも、そういう意味ではお二人とも世間的には格闘家にして〝テレビスター〟というイメージがありますよね。

内藤 うーん、どうだろうねえ。まあ、いまでこそだいぶ慣れてきた感じだけど、ホント最近まで信じられないところがあるって感じだったんだから。だってみんなボクのこと知ってるわけじゃない。それが不思議だったね。「なんで知ってるんだろう」って。

所 でも、内藤さんはまだ普通に電車にも乗ってますよね?

内藤 なかなか性格なんて変わるもんじゃないんだよ。でも、まあ生意気だけど自分でも有名になったとは思うんですけど、あんまり認識がないのと、あとはそう思わないようにしてるの。思いたくもないしね。なんか有名になって変わる人とかけっこう見てきたところがあるから、そういうのキライなのね。で、やっぱり「サインください」とかは凄く多くなったけど、でも負担に思わないようにいしてるし、声かけられるのはうれしいことだからね。

──でも、それって本業の負担にはならなかったですか? たとえばテレビ出演が増えたことで練習ができなくなったり。

内藤 まあ、自分で言うのもなんだけど、それはないな(キッパリ)。だって、凄い心配性なんですよ、ボク。だから常に「練習しなきゃ、練習しなきゃ」とか「練習しないと勝てない、勝てない」ってずっと思ってるよ。それに練習しないでリングに上がるなんて、そんなファンをバカにしたようなことはできないよ。だから練習をしないというのは絶対にない。常に「自分ははまだまだ、まだまだ」って思うように心がけてるしね。

──所選手はどうですか?

所 そうですねえ。前田さんとか、野木トレーナーに見られてないとすぐ手を抜いてしまうことがありますね。

内藤 あっ、おまえそういう考え方だったの⁉ ナメてんねえ!(グイッと詰め寄って)。

所 い、いや。だからボクサーの方の練習を見てやっぱり気持ちは変わりましたよね。そこは正直凄く変わりました。

内藤 足が速くなったしね。でもねオレ、30歳目前のときに知り合いに「そういえば内藤いくつだっけ?」って言われたの。だから「29です」って答えたら「あ、もう終わりだな」って言われたことがあったんだよね。でも、それはもの凄くカチンときたんだよねえ。

所 ……(無言で聞き入る)。

内藤 実際ね、30超えても全然ですよ。まだまだですよ。やればやるほど伸びるし、いまは昔と違うしね、現にボクなんか32歳でチャンピオンになったしさあ。だから、歳なんて関係ないんだよ。まあ、なんでもそうだけど、あきらめたらもう終わりだと思うしね。

──今回、現役続行を決意されたのも、そういう思いがあるわけですね。

内藤 そう、やっぱり悔しさ。それがどんどん大きくなっていった。あと、まだ一緒にみんなとトレーニングしたいなという気持ちもあったんだよ。まあ一番は亀田選手にリベンジしたいなってことだし、このまま引退したくないなというのが一番だけどね。でもへんな話なんだけど、つらいんだけど、みんなと一緒にトレーニングしたいなって思ったんですよ。現役を続ければそれができるんだなあと思ったしね。正直つらいよ。引退してしまえばラク

さ。でもそれ以上のものがあったんだよね。だから辞めたくないって、そっちのほうが強かったなあ。

——そのときのご家族の反応はどうだったんですか？

内藤　奥さんはね、「いいよ」って言ってくれました、すぐね。凄くいい奥さんですよ。ウチの母親からはこっぴどく叱られましたけど。

——な、なんで叱られるんですか？

内藤　もう「辞めろ！　辞めろ！」って言ってた。

所　ハハハハハ。

内藤　だから現役続行するって決めたときはもう連絡しなかったもんね。怒られると思ったから。先に記者会見出ちゃえって。だって電話したら怒られるの目に見えてるからさ。

所　あの、この前北海道合宿があって、内藤さんの実家にお世話になったんですけど、内藤さん、世界チャンピオンになっても家で「大助！」って怒られてるから、ボクはそれを見られて凄くよかったです。

内藤　よかったぁ⁉　この野郎ぅ。でもね、昔の人なんですよ。だからほめられたことは一度もない。

——それは、世界チャンピオンになってもですか？

内藤　だってよ、ポンサクレック戦で勝ったときだってそうだったんだもん。オレ、地元で後援会ができてから、試合終わったら必ずそこに顔を出すようにしてるんですけど、ポンサクレック戦のあとってインタビューとかでいろいろあったから遅れて着いたんだよ。そしたらさ、母親の第一声が「遅いんだよ、おまえは！　みんな待ってんだよ！　早く挨拶しな！」だったからねえ。もう、これはハッキリ覚えてるよ。

まだまだできるとは思ってない。でも、まだできるし返り咲けると思ってる

内藤さんには田村さんや桜庭さんとまた違う感じで刺激を受けてます

ないとう・だいすけ■1974年8月30日、北海道出身。96年プロデビュー。04年日本王座獲得。07年7月、3度目の挑戦でポンサクレックを倒しWBC世界フライ級王者に君臨。その後、6度目の防衛戦で亀田興毅と対戦し、フルラウンド闘うも敗北。引退がささやかれたが、堂々現役続行を宣言し、王座返り咲きを狙うおちゃめな35歳。

ところ・ひでお■1977年8月22日、岐阜県出身。05年『HERO'S』アレッシャンドリ・フランカ・ノゲイラ戦で波乱のKO勝ちを奪い一躍時の人に。その後、DREAMを主戦場とするも、08年から09年にかけて3連敗と窮地に追い込まれる。しかしエイブル・カラム戦で復活を遂げると『Dynamite!!』でも快勝。10年も絶好調でいきたい32歳。

所　ボクらには凄く優しいんですけど、なんか内藤さんにはすんごい厳しい方でした（笑）。

内藤　何、トクした気分になってんだよお！（怒）。

——一方、昨年は所さんも引退の窮地に追い込まれました。

所　まあ、もうエイブル・カラムに負けたら4連敗だったんで、これは辞めるしかないなって思ってました。そう思って挑んだんですけど、まあ、勝ったんでよかったです。そこは内藤さんと一緒で「あ、まだ続けられるんだなあ」って凄くうれしかったんですよね。

——じゃあ、まだまだできる喜びを感じたというか。

所　それはホントにうれしかったですね。

内藤　でもね、実際オレ「まだまだできる」とは思ってないんだよ、でも「まだできる」とは思ってる。まだできるし、返り咲けると思ってるから。ボクね、前から決めてるのは「あ、こんなヤツがいるんだったらもうオレはムリだな」とか、そう思った時点で辞めようというのは決意してました。でもね、それはまだなんだよ。まだできると思ってる自分がいるんだよね。だから続けることを決意したの。

所　年上の内藤さんがこんなふうに言ってるんで、ボクなんか、まだまだですよね。

内藤　まだまだまだまだ！

所　はい（笑）。それに、前田さんも野木さんも「まだ強くなる」って言ってくださるんで、そのあいだは強くなれるのかなって気はしますし、内藤さんだとか、一緒にトレーニングしてるボクサーがまだまだ頑張ってるんで、まだやらないとって思ってますね。なんか田村さんや桜庭さんとはまたちょっと違う感じなんですけど、凄く刺激を受けてます。

内藤　でもね、ボクは次負けたらそれはもうおとなしく引退します。それはもう決めてる。で、これは一番大きいんだけど今回は興行権あるってことで、オプションで世界チャンピオンに挑戦できるというのと、あと勝てなくはないってね。

——また世界王者を取り戻せる自信がある、と。

内藤　そうだよ。まだ勝てると思ってるからやる。自分的にはできると思ってる。ホントに痛感したら即辞めてるからね。だから、このあいだの試合も負けはしたけど、「ああ、もう完全に内藤は落ちる一方だな」って思ってないし、年齢的なものが問題だとも思ってないし、周りはどう思ってるかわからないけど、やり方次第で勝てると思ってるんでね。

——となると、それはまた見逃せない試合になりますね。しかし、内藤さんがこういう姿勢だと所さんも下手にやめられませんね。

所　そうなんですよ。ボクもまだ強くなりたいなって思いますし。

内藤　そうだぞ！　これからまたどんどん一緒に練習する機会が増えると思うから、しっかり練習するからね！

所　あ、お、よ、よろしくお願いします！

【10年2月9日／都内・某ホテルにて収録】

TK現役復帰!?

×高阪剛

age 39

“40歳枠”とは何か？
不惑の同級生対談

まだルールも定まらない、バーリ・トゥード黎明期から闘い、総合格闘技というジャンルを作ってきたサクとTK。同級生であり、今年度ともに40歳を迎えながら、片や現役、片や体調良好ながら引退。二人は今後の格闘技人生をどう考えているのか？　そして、サクがことあるごとに口にするTKの現役復帰はありえるのか!?　ぶっちゃけ同級生トークをお届けします！

聞き手／堀江ガンツ　撮影／タイコウクニヨシ　試合写真／乾晋也

age 40

桜庭和志

自分は早生まれなんでサクより１歳下です。40歳と39歳では大きな違いがあるから（笑）

TSUYOSHI KOSAKA

ＴＫ　今日はなんの話なんですか？

――ええとですね……。

桜庭　（遮って）ＴＫの現役復帰の話ですよね？

ＴＫ　だからしないって！（笑）。

――まあ、その話もありつつ。

ＴＫ　あるんかい！（笑）。

――同級生であり、日本の総合格闘技界を黎明期から牽引してきたお二人にいろいろと振り返ってもらいたいんですよ。お二人とも40歳になられたんですよね？

ＴＫ　いや、自分はサクと同い年といえば同い年なんですけど、まだ40歳にはなってないんですよね。

桜庭　あ、早生まれだ！

ＴＫ　３月生まれなんで、まだ30代なんですよ。

桜庭　そんなこと言っても、小学校時代は同じ時期に、同じことやってたじゃないですか。

ＴＫ　だからね、小学生の頃は（早生まれなのが）凄く嫌だった。４月生まれの子とは、ほぼ１年違ったからね。

桜庭　小学校に上がって、みんなはそれなりにまじめに授業受けてるのに、ＴＫだけ鼻垂らしてたんだ（笑）。

ＴＫ　１年生の頃なんて、ほぼ幼稚園児のままですからね。身体だけは異常にでかかったけど。

――巨大な幼稚園児のような小学１年生って、わけがわからないですよ（笑）。

桜庭　でも、子どもの頃、１年違うと全然違うっていうのはわかりますよ。僕は７月生まれなんでちょうど真ん中くらいですけど、４月生まれの子は、ちょっと運動神経よさそうだったし。

ＴＫ　４月生まれは子どもなりに洗練されてるんですよね。だから自分も昔は早生まれってことでいろいろ苦労したんだけど、この歳になったら早生まれでよかったなと思う。

――早生まれでいいことあるんですか？

ＴＫ　だって同学年がみんな40代の〝リアルオヤジ〟になってる中で、自分はまだ30代ですからね。オヤジかオヤジじゃないかの線引きで、40歳と39歳じゃ全然違うから（笑）。

桜庭　（口を尖らせて）そんなん、オヤジはオヤジで一緒だよ！

――お二人と同い年の吉田（秀彦）選手が引退を表明しましたけど、吉田さんも40歳になったから踏ん切りがついたのであって、39歳だったら「もう１年頑張ろう」と思ってたかもしれませんね（笑）。

ＴＫ　やっぱり39歳と40歳の差はでかいな〜。

桜庭　でも、吉田さんが辞めるということで〝40代の枠〟は一個空きましたね。

――格闘技界にはそういう枠があるんですか（笑）。

ＴＫ　秀彦が引退する４月には、俺も40歳になってるな……。

桜庭　というわけで、４月以降の大会で試合、よろしくお願いします。へんなサムライの格好して解説してる場合じゃない！

――高阪さんが鎧兜を着て解説する、謎の煽りＶですね（笑）。

ＴＫ　ああいうのね、いまは好きなんですよ（笑）。以前だったら「それはナイな」って思ってたのが最近おもしろくなってきたっていうのは、ある。

――でも、同い年の桜庭さんや吉田さんが身を削って闘ってるときに、ああいうことやってていいんですか？

ＴＫ　俺もね、別の意味で身を削ってるから（笑）。あの撮影、何時間かかってると思う？　あれ２時間以上かかってるからね。

桜庭　（佐藤）大輔さんはいろいろやらせるから。

ＴＫ　２時間以上撮影して、放映されるのは２分だから（笑）。

――たぶん煽りＶって桜庭さんと高阪さんのやつが一番手間暇かかってるんじゃないですか？　桜庭さんは実際に試合する人だからわかるんですけど。

ＴＫ　まあ、いいじゃないの（笑）。

――いいですけどね（笑）。桜庭さんは40代になったという実感はありますか？

桜庭　年齢とかにはこだわらないんで、ただ単に「まだできるな」って。さっきも柴田（勝頼）くんと練習しましたよ。マウス・トゥ・マウスで。……ってマウス・トゥ・マウスじゃないでしょ！　マンツーマンでしょ（笑）。

ＴＫ　いや俺、39歳なんでそういう40代のオヤジギャグには、まだついていけないんで、ツッコメないですね（笑）。

桜庭　だぁ、同い年のくせに。でも、年齢っていうのは飯食うときに、ちょっと感じますね。あんまり食えなくなったんで。

――高阪さんは今年40歳ということでどうですか？　年々体調よくなってるように思いますけど。

ＴＫ　悪いけど、体調はすごくいいんだよね〜（笑）。

――現役じゃないのに絶好調ですか（笑）。

ＴＫ　この調子のよさはなんなんだろうね。一つは体重を無理に増やさなくてよくなったから、というのはあると思う。現役の頃は「ヘビー級でやる」って言っちゃ

れてるんですよね。だから自分も昔は早

TK　やっぱり39歳と40歳の差はでかい

った以上は、最低100キロは維持しようと思って、わざと増やしてましたからね。みんなが減量してる中、自分だけは「今日、鶏肉何キロ食べなきゃいけない」とか。2キロぐらいは毎日食ってたからね。

桜庭　わざと体重増やしてたのは、僕も一緒ですね。PRIDEのときは93キロ以下でやってたのに、86か87キロしかなかったんで。でも、みんな普段100キロ以上ある人が落としてくる階級だったんで。

——通常体重で15キロ近く差があったわけですか。

桜庭　でも、僕はTKほど食べれないから、飲み物飲んで液体でごまかしながら無理やり増やしましたよ。

TK　たぶん俺らの時代って階級がなかったから、体重軽いからとか言い訳きかない時代だったんだよね。

——身体大きくないとデビューできないような時代でしたよね？

桜庭　そうですね。

——UWFインターもリングスも入門したらまず「とにかく食え！」「食って身体をでかくしろ」って言われる時代。

TK　自分がリングスに入門したての頃、練習後のちゃんこの時間に当時の道場長だった長井（満也）さんに言われたんですよ。「髙阪、道場のしきたりとして、新弟子はどんぶりでちゃんこ5杯とメシ5杯がノルマだからな」って。その話を自分は6杯目をよそいながら聞いてたんですよね（笑）。

——ダハハハ！　ノルマをとっくに更新してる状態で聞いてた（笑）。どんだけ食うんですか！

TK　リングス入って、「ここは天国だ」って思いましたからね。新弟子の雑用はありますけど、飯は食い放題だし、住むところもタダだし、練習もし放題ですから。

——プロレスから続く、道場の入門制度って強くなる環境としては最適だったわけですね。

TK　もちろんつらいことも多かったけど、いまの選手は仕事やバイトをやって自分で飯代や家賃を稼いで、練習もして、体調管理もしてっていうのは大変だなって思いますよ。ま、一長一短あるんで、どっちがいいとは言いきれませんけどね。

——そんな同時期にU系で若手時代をすごしたお二人が、面識ができたのはいつからなんですか？

TK　97年ぐらいですかね？　金原さんがリングスに移籍してきて、たしか前田道場での練習に桜庭さんを呼んだんですよ。

桜庭　その前に二子玉川ですれ違ってるでしょ。

4月に吉田さんが引退したら〝40歳枠〟が一個空くんで、そこにTKが入ればいい（笑）

KAZUSHI SAKURABA

——でも、同い年の桜庭さんや吉田さん

TK　いや、全然知らない（笑）。別人じゃない？

——でも、あまり見間違う顔ではないと思いますけど（笑）。

TK　類いなき顔だからね、ってコラ（笑）。

——練習を一緒に始めた頃の印象はどうでしたか？

桜庭　（グラウンドで）せっかく上になったのに、下からひょいって足を入れてひっくり返してきて「ふざけんな、このゴリラ！」って思いました。

——TKシザースに腹が立ちましたか（笑）。

桜庭　だって顔も身体もゴリラみたいにごついのに、凄い柔らかい動きするんですよ！　この風貌だったら、普通身体は硬いでしょ、みたいな（笑）。

役の頃は「ヘビー級でやる」って言っちゃ

TK　残念ながら、昔から身体は柔らかいんだよね。この風貌と身体の柔らかさは、神が与えたものだから（笑）。

——髙阪さんのほうは？

TK　自分は逆に「サルなのに、なんでこんなに力が強いんだ！」って（笑）。

——ダハハハ！　お互い見た目と違う強さを持っているって感じたわけですね。

TK　またサクは性格の悪いやり方をするんですよ。スリーパー取りにきて、こっちが首に入れさせないようにアゴを引いたらフェイスロックを極めてくる。で、それも嫌だからこっちはもっとアゴを引くと、今度は口の中に手首をねじ込んできますからね。むかつくからその腕を噛んでやろうと思うんだけど、おもいきり絞められてあご関節が極まってるから噛めない（笑）。

桜庭　いまは高橋（渉）とかに噛まれますよ。

TK　飼い犬に腕を噛まれる（笑）。

——当時はそうやってスパーリングをしながら、手探りでバーリ・トゥードの勝ち方を見つけていた感じですか？

桜庭　いや、バーリ・トゥードとか考えてなかったですね。関節の取り合いみたいな。

TK　自分らは、バーリ・トゥードを特別なものって考えてなかったんですよ。97年ぐらいのときって、倒して殴るってことを必要以上にフィーチャーされて「危ないことをやってる」って言われてた時代ですよね。でも、自分は殴ってこられても大丈夫だって自信はあったし、ノールールっていうのも、逆にいろんなことができていいんじゃないかって思ってましたから。

——桜庭さんも「いろんなことができていいな」って思ってましたか？

桜庭　僕はそういうことも考えてない。ただ単に相手からギブアップを取りたい

っていう気持ちしかなかった。そのための動きをしていたら、自然とできるようになったんで。

TK　自分も初めてUFCに出た頃っていうのは、細かいことはともかく、ギブアップ取れば勝ちだって思ってましたね。

――髙阪さんってナンバーで言うと、UFCいくつから出てるんでしたっけ？

TK　『UFC16』ですよ。

――いま『UFC109』ですから、ホントに黎明期。

TK　まだ1ラウンドが12分で、なぜか2ラウンドが3分しかない時代ですから（笑）。

――なんで、そんなに1ラウンドと2ラウンドで時間が違うんですか？

TK　意味がわからないでしょ？　聞いたら、その前まではラウンドなしで15分一本勝負だったのが、みんな終盤ガス欠になるんで、12分で一旦休憩を入れよう、と。そして休んだあと、残り3分闘うという（笑）。

――ルール自体が手探りな時代だったわけですね。

TK　当時は大会ごとにルールが変わってましたからね。自分がバス（・ルッテン）とやったときは、グラウンドでの顔面へのヒザ蹴りがOKだったんですけど、それを知ったのは試合中ですからね。ヒジがOKになったときも、自分の前の試合でヒジを使ってるヤツがいるから、「あ、ヒジは使ってよくなったんだ」って気づいたり（笑）。

桜庭　僕もUFC-Jに出たとき、ルールなんてどうでもいい感じで、「ああ、これもありなんだ」って感じでやってました。ほぼノールールでいくつかやっちゃいけないことあるんだなみたいな感じで。

――PRIDE初期もそんな感じですか？

桜庭　そうですね。最終的に極めちゃうか、KOしたらいいんだなって感じはありました。

TK　レフェリーとかも細かいとこは、わかってない部分とかもあるから。あまりルールに頼ってということは考えてなかったですね。

桜庭　KOのときは、レフェリーに止められても「まだできる！」って言う選手もいますけど、ギブアップした人は何も文句言ってこないからいいですね。自分の意思でタップしたから、何も言えない。それが気持ちいい（笑）。

TK　相手に負けを認めさせるっていうのは、気持ちいいよね。

――髙阪さんは、最近の桜庭選手の試合をご覧になって、解説者としてはどう感じてますか？

TK　あいかわらず嫌なことするなって思って観てますよ（笑）。でも、その「嫌なこと」っていうのを説明すると長くなるから「凄いですね」「うまいですね」って短く言ってる。

――「うまいですね」の中には、「性格悪い攻め方してますね」という意味も含まれている（笑）。

桜庭　試合中に相手が嫌がる顔っておもしろいですよね。精神的にもそうだけど、肉体的に嫌がってる顔とかいいですよ。

――〝嫌な攻め方〟をしながら、嫌がってる相手の顔を見てほくそ笑んでるわけですか（笑）。

桜庭　しっかり見てますよ。「お、嫌がってる、嫌がってる」って。

TK　でも、それって重要なことなんですよね。

桜庭　相手の嫌がることをするっていうのは、格闘技にかぎらずどんなスポーツでもそうだと思います。だから、スポーツマンというのは、みんな〝意地悪〟ということで（笑）。

TK　そうなんですよね。いい子で試合に負けるくらいだったら、ルールの中でできるだけ相手が嫌なことやって、しっかり勝つというやり方を覚えないと、結局何もついてこないですよね。それであとで後悔するのは自分になっちゃうから。だから、選手はどんなことをされると相手が嫌がるのかっていうことも気づかないといけないんですよ。

桜庭　サッカーなんかでも、一瞬でシャツを引っぱって倒したりするじゃないですか。水球なんか、水面の下で蹴り合ってるっていいますもんね。

TK　柔道なんかの場合は、道衣をつかんでたら殴ってもOKなんで。襟をつかんでアッパーを入れてから、背負いで投げたりとか、みんなけっこうしてるんですよ。それをやられて負けて悔しがったところであとの祭りだから。だったら先にやったほうがいいんですよね。足払いという名のローキックを放ったりね（笑）。

桜庭　僕もレスリングでわざと痛いところにヒザ乗っけたりしてますよ。

TK　自分がよくやったのは、奥襟を取りにいきながらのラリアット（笑）。これがよく決まるんですよ。

――で、髙阪さんは、いま桜庭さんの試合を観ていて、観客が気づかない桜庭さんの〝いやらしい技〟がちらほら見えるわけですね。

TK　凄くよくわかる。いま痛いところにヒジ押し込んでるな、とか。それを見て、一人で楽しんでますよ。でも、それって全然悪いことじゃなくて、ルールにのっとったテクニックの中に入るものだからね。

――ベテランならではのテクニックというか。桜庭さんは、最近の髙阪さんをどう思いますか？

桜庭　年末に柴田くんのセコンドついたとき、蝶ネクタイしてリングサイドに座ってるんで、「そんなところで解説してる場合じゃないだろ」って、蝶ネクタイ引っぱってリングに上げようと思いました。

TK　あの蝶ネクタイ、伸びるからやめて（笑）。

桜庭　それか入場のとき、急にTKを指差して「この人までできる！」って言ってやろうかな、とか。

TK　お客さんにアピールしてどうするんだよ（笑）。

桜庭　今日もこの対談の前に打ち合わせがあったんですけど、TKは早く着いちゃったからって、着替えてマット運動始めてましたからね。やる気充分。

昨年10月25日の『DREAM.12』で桜庭は、若いゼルグ・〝弁慶〟・ガレシックに見事一本勝ち。そして、サクよりもあきらかに体調がよさそうなTKは、その試合のテレビ解説を務めていた。TK、スーツを脱ぎ捨てよ！

TK　待ってるあいだ、暇なんだからしょ

――小学1年生の頃、6年生だった人た

のがおもしろいんですよ。

桜庭　そうですね。最終的に極めちゃう

TK　でも、それって重要なことなんです

でアッパーを入れてから、背負いで投げた

ましたからね。やる気充分。

TK　待ってるあいだ、暇なんだからしょうがない（笑）。ちなみにここのジムは今日初めて来たんですけど、俺は「道場の匂い」っていうのがわかるから、地図も見ないで一発でたどり着いたからね。

桜庭　嗅覚まで現役じゃん。だから4月に40代の枠が一枠空くので、そこにどうぞ。

TK　いつそんな枠組みができたんだって（笑）。

――4月の吉田選手の引退試合の相手として、桜庭選手も期待されていますけど、どうですか？

桜庭　吉田さんとは全然体重違うじゃないですか。いま20キロぐらい違いますよ。勘弁してくださいよ。

TK　でも、20キロ差なんて、いままでさんざんやってきたじゃない（笑）。

桜庭　いや、いまはもう階級分けされた時代だから。

TK　そういうときだけ「階級分け」かい（笑）。

桜庭　逃げる逃げる（笑）。

――桜庭選手がダメなら、髙阪選手はどうですか？　髙阪さんはDREAMとの選手契約もないから、フリーとして『アストラ』にも出やすいと思うし。

TK　どうやっても、そこに話を持っていこうとするんだ（笑）。

桜庭　もう、やっちゃえばいいじゃないですか。僕、よく言うんですけど、50歳とか60歳になったら、試合やりたくても二度とできないですよ。いまだからできる。

――ランディ・クートゥアーvsマーク・コールマンなんて、二人とも年上ですしね。

桜庭　ランディって、いまいくつですか？

――ランディが46歳で、コールマンが45歳ですね。

桜庭　うわっ！　僕らなんてまだ若造だ。

サクと初めて練習したとき、「サルのくせになんでこんなに力が強いんだ!?」って思った

僕は「見た目も身体もゴリラみたいなのに身体が柔らかくてふざけんな」って（笑）

KAZUSHI SAKURABA × TSUYOSHI KOSAKA

さくらば・かずし■1969年7月14日、秋田県出身。93年にUWFインターでデビュー。98年よりPRIDE参戦。グレイシー一族を次々と破り総合格闘技人気を牽引。「Laugter7」ジムを主宰。180cm、84kg。

こうさか・つよし■1970年3月6日、滋賀県出身。94年リングスでデビュー。98年からUFCに参戦、"世界のTK"と呼ばれる。その後、パンクラス、PRIDEなどで活躍し、06年に引退。「A-SQUARE」ジムを主宰。

――小学1年生の頃、6年生だった人たちですからね（笑）。

TK　大学でいうと、俺らが1年のときに、ランディは卒業して2年目の人だから、大先輩。自分から話しかけちゃいけない領域ですよ。ランディは凄いね。ここ2～3年でまた強くなってる気がしますよ。

桜庭　いま何キロ級だっけ？

TK　93キロだね。

桜庭　じゃあ、TKと同じだ。

TK　はい、くると思ったよ（笑）。でも、確かに、いまもしやるんだったら93キロ級かな。84キロまで落とせるかもしれないけど、下でやるのは嫌だな。

――ちょうどいいタイミングで、今年DREAMの93キロ以下、ライトヘビー級GPがあるらしいですよ。

桜庭　日本代表は決まりましたね。

TK　なんでそんなに軽々しく（笑）。

桜庭　でも正直、TKが出ないと重い階級なんて誰もいないじゃないですか。

TK　90キロ超えると急にキツくなるからね。

桜庭　やっぱり外国人のほうが身体能力高いし、そこでTKが活躍する姿見たいなあ。

TK　一つ言えるのは、ヘビー級って理屈じゃないんですよね。化け物みたいなヤツらばかりだから、いろいろ考えちゃうと、闘えなくなるんですよ。深く考えないほうがいいんですよね。

桜庭　それにヘビー級っていっても、人間だからどこかに弱点はあるし、そこを取っちゃうのがおもしろいんですよね。

TK　そうそう。俺もヘビー級で試合してるとき、試合中にそこが見つかったとき、凄くおもしろかった。「うりあああああ！」って向かってくるヤツが、ヘナってなる瞬間があって、そこを見つけて攻めるのがおもしろいんですよ。

桜庭　ミノワマンもボブ・サップをやっつけ、チェ・ホンマンをやっつけ、最後はソクジュまでKOしちゃいましたからね。やっぱり「超人」って感じですよ。

TK　ああいう感じでいいんだよね。

――ミノワマンのように、深く考えないほうがいい（笑）。

TK　いや、ミノワマンはいろいろ考えようとしてるんだけど、それが的外れだから、考えてないのと同じ効果があるんちゃうかな（笑）。でも、でかいヤツを倒すっていうのは快感だし、だからヘビー級で試合をするのがやめられなかったんですよね。

桜庭　そして、いまもやめられない。

TK　いまはもう辞めてるから（笑）。

――桜庭さん、次の試合はいつ頃ですか？

桜庭　春ぐらいじゃないですか？

――ブログでは、3・22横浜アリーナ大会のカウントダウンとかやってますよね？

桜庭　あんなのネタじゃないですか。いまはべつに、試合については言われてないですね。

――では、髙阪さんの次の試合は？

TK　だ・か・ら（笑）。

桜庭　それは……（笑）。

――では、桜庭さんの次戦は春頃、髙阪さんは春以降ということで、この対談を締めさせていただきます（笑）。

TK　ちょっと、ホントに40歳枠の話しかしてないじゃん。

桜庭　だって、今日はそういう対談でしょ？

TK　まあ、いいや。『東スポ』と『kamipro』はなんでもありだから。

――では、「髙阪現役復帰」の大見出しの下に、小さく「!?」とか入れておきます（笑）。

【10年2月10日／都内・Laughter7にて収録】

ついに09年は0試合……何がやりたいんだ、ユー!?

赤いパンツの頑固者が語る

四十路からの人生設計

田村潔司

age 40

09年は0試合に終わったこともあり『kamipro』へはひさびさの登場となる田村。引退を決意した吉田秀彦と同じ40歳の田村はいま何を考えているのか？　自ら指定した取材時間から遅れること4時間、3月のDREAMへの参戦も噂される〝赤いパンツの頑固者〟が幻の『ハッスル』参戦、山口日昇との関係、気になる今後の試合について等々、四十路からの人生設計をたっぷりと語りました。

聞き手／阿修羅チヨロ　撮影／菊池茂夫　試合写真／乾晋也

「潰れるんだったら『ハッスル』に出ておけばよかった」

聞き手／阿修羅チョロ　撮影／菊池茂夫　試合写真／乾晋也

──田村さん、おひさしぶりです！

田村　『kamipro』の取材なんて、ホントひさしぶりだよねぇ。

──まあ、田村さんは09年は1試合もしてなかったですからね。

田村　なんかトゲのある言い方するなぁ。

──しかも、今日はたっぷりと4時間近く待ちぼうけを食らってしまいましたし。

田村　えっ、4時間も待ってたの？

──取材は14時からって言われてたのに、田村さんが現われたのは18時でしたから。

田村　いやいや、それは申し訳ない。まあ待たせたついでに、ゆっくりU-FILE大会観てってよ。

──わ、わかりました。で、早速なんですが、今回のテーマは〝オヤジ〟でして。

田村　あれ、テーマは〝2000年代を振り返る〟じゃなかったっけ？

──いろいろありまして2000年代を振り返りつつ〝オヤジ〟についても語ってもらえればと。田村さんは見た目は若いですけど、年齢的にはもう40歳ですし、立派なオヤジじゃないですか。

田村　うるさいわ！（笑）。

──（気にせず）で、田村さんも対戦した吉田選手が引退されるということで、アラフォーの〝オヤジ〟がまた注目を集めているということもありますし。たしか、吉田選手とは同い年ですよね？

田村　そうだね。僕も四十路なんで。

──四十路にしては、あいかわらずコンディションはよさそうですね？

田村　全然バッチリ。ケガもないし、体調はな～んかわかんないけど、いいねぇ。

──それは何よりで。あんまり年齢とかも気になったりはしないですか？

田村　さすがにね、四十路になると歳を感じるけど……、いや、歳はね、感じないんだよね。

──どっちなんですか!?（笑）。

田村　やっぱりね、歳取るといろんな問題が増えるのよ。先週もタイヤ交換したばっかりなのにパンクするし、女問題もそうだし（笑）。

──え～、結婚生活で何か問題でも？

田村　まあ、問題はないけどね（笑）。

──それはよかったです。衰えもとくに感じないですか？

田村　衰えは感じてるけど、なんかわかんないけど調子がいい。調子がいいっていうか、調子が悪くはない。

──それは素晴らしいじゃないですか。練習内容もここ数年は変わりはなく？

田村　いや、内容は変わってきてるね。いまは技術を習得するより、いかにコンディションを保つかっていうことが大事だと思ってるんで。自分の考えとしては、総合格闘技という意味では、いまから細かい技を覚えようと思っても、もう追っつかないと思ってるんで。

08年の『Dynamite!!』で何年越しかの一騎討ちを行なった田村と桜庭。12年半ぶりの対戦で勝利を収めた田村だったが、それ以降、試合からは遠ざかっている。「体調はバッチリ」と言う田村だが、次の試合はいつになるんだ？

やっぱり、四十路にもなるといろんな問題が増えるんだよね

──そういうのはあるかもしれませんね。指導者としてはUWFやUインターの新人時代のような無茶な練習はさすがにさせてはいない感じですか？

田村　まあそうだね。いまは一人一人の長所をいかに伸ばしてあげるかって感じで。怒りどきっていうのもあると思うし。でも、もうホントに昔ほどはまったく怒らなくはなったかなぁ。

──ジムを立ち上げたばかりの頃と比べると田村潔司も丸くなった？

田村　そうだね。ただ、目的を持ってるコには練習中は叱咤激励というか、怒るというよりは煽るような言い方はするけど。試合に出たい、体力を維持したい、それぞれ目的ってあると思うから様子は見てるかな。練習は練習、会話はフレンドリーに。

──でもジムでは自分より年下のコがほとんどで、会話をしていると話が合わなくて疎外感を感じることもあるらしいじゃないですか（笑）。

田村　そうそうそう（笑）。疎外感っていうか、違うからね、世代が。さすがに同年代の人とは育ってきた環境も近いんで会話も成立するけど、20代でも、21とか22とかっていうのは、やっぱ、会話の中に入れないから。それはちょっと寂しい……かなぁ。寂しいから、こっちから声をかけて会話の中に入るしかないからね。

──田村さんのほうが気を使っていると（笑）。でも逆に、四十路を迎えた田村さんに叱咤激励をしてくれる存在の人って、いまはいないんじゃないですか？

田村　いないね。だから、そのへんは自分に負けないように頑張るだけだよね。

──頑張ってください（笑）。そういえば、田村さんは『ハッスル』社長の山口日昇さんと密会してるって聞きましたよ。

田村　べつに密会はしてないけどね（笑）。

──山口社長は元気でした？

田村　よくわからない。付き合いは長いけど、いまだによくわかんないから。

──お互い変わり者といえば変わり者ですからね（笑）。

田村　いやいや、俺は変わり者じゃないから（笑）。

──そういう関係もあって、以前は『ハッスル』へのオファーもあったらしいですけど、可能性はあったんですか？

田村　「出てくれ」っていうのは坂田（亘）の結婚式の二次会で言われたんだよね。

──また凄いシチュエーションでのオファーですね（笑）。

田村　そのときは髙田（延彦）さんとかからお酒を飲まされて、よく覚えてないんだけど「出る」って言ったらしくて。写真も残ってるんだよね。

──えっ、どんな写真ですか？

田村　『ハッスルGP』出場とか書かれた紙を持たされた写真を撮られて「これ証拠

写真だから」って言われて（笑）。そのときは嫁もいたんだけど、嫁はお酒は飲んでなくて、一部始終を見てたらしいんだけど。

——さすがに髙田さんとかに飲まされてたら奥さんも助けられないでしょうね。

田村　過去を振り返ってもしょうがないんだけど、どうせ潰れるんだったら出とけばよかったかなぁって思って（笑）。

——山口社長的には、まだ『ハッスル』していきたいみたいですけど。坂田さんも春頃から『ハッスル』していくと言ってましたし。

田村　そうなの？（笑）。でも実質、潰れたようなもんでしょ。

——どうなんでしょう？　まあ、それに伴なって『kamipro』もなくなるんじゃないかとよく言われるんですけどね。

田村　あ、それも聞いた。潰れるんでしょ、『kamipro』も。

——いやいや、なくならないですよ。ただ、田村さんもよく出ていた『格闘技通信』は2月で休刊するらしいですけど。

田村　そうみたいだね。いや～、厳しいよねぇ。いまは業界的にもそうだし、世間というか世の中もさぶいからね。でも、『格通』がなくなるっていうのは業界にとっては死活問題だよね。

——媒体がなくなったら選手にとっても影響は出てくるでしょうし。

田村　影響も当然あるだろうし。ただまあ、紙媒体自体が、いま大変なんでしょ。

——マット界にかぎらず大変なことになってますよね。そんな時代だからこそ〝オヤジ〟にももっと頑張ってもらわないと。

田村　また強引に話を戻してくるね（笑）。

——自分もアラフォーなりに頑張らないと。ちなみに、吉田さんの引退についてはどう思われますか？　一時期、再戦をアピールしていたこともありましたけど。

田村　吉田選手は同世代ではあるけど、どうなんだろうねぇ……。そんなに付き合いは長くないっちゃあ長くないから。

——まあでも、リベンジしたいっていう気持ちは少なからずあるわけですよね。

田村　確かにそういう気持ちもあったんだけど、俺はね、子どもだったたね。

——と言いますと？

田村　いろいろと大人の事情というのがあるんだなって、最近になって気づいた（笑）。

——この世界はいろんな大人の事情があるって言いますからね。

田村　そうそう（笑）。大人の事情っていうのがあるから、いくら俺が「やりたい」って言っても無理なんだよね。ただ、これは毎回言ってるんだけど、やりたいと思ってもできなかったり、やりたくないと思ってるときにスパッとはまったりするんで。それぱっかりは不思議な世界というか、おもしろなぁって。いがみ合ってた二人が闘うことになるときもあるしね。

——そういうところはありますよね。吉田戦にかぎらず、田村さんにもいろんな大人の事情もあるんでしょうけど、試合から遠ざかっているあいだも団体や選手からのラブコールは多かったですよね。

田村　そうなの？

——昨年末の『Dynamite!!』でも菊田早苗さんから対戦をアピールをされてましたし、それを聞いた金原弘光さんも「菊田とやるなら俺だってやりたい」と対戦表明をしてましたし。

田村　あ～！　なんかそうみたいだね。

——菊田さんはU-FILEの大会でグラバカとの対抗戦をやったときにも直接対戦をアピールして、そのときは田村さんも前向きに考えるみたいなことを言ったとかで、菊田さん自身は対戦実現にかなり手応えを感じていたみたいですけど。

田村　俺が菊田とやるっていうのは、まずファンが観たいかどうかっていうのもあるし。まあ、どこまでしゃべっていいうのかっていうのもあるんだけど、菊田っていう選手は昔から知ってるからね。

——Uインター時代から知ってるわけですからね。その後はリングスとパンクラスで、お互いにチャンピオンになって、いまはともにジムを経営しているという共通点もあって、菊田さん的には立場的には並んだという自負もあるみたいで。

田村　ただ、ぶっちゃけちゃうと俺のところにそういう話は全然なかったから。

——本人からのアピールは耳にはしたけど、具体的なオファーはなかったと？

田村　そうそう。だから、そこも大人の事情で俺が「やる」って言ってもできない事情もあるわけで。すべてが噛み合ってないとできないので、だからややこしいんだよ。大人の事情っていうのは（笑）。

——大人って大変なんですねぇ（笑）。

田村　結局、大晦日も俺のところに来たのは違うオファーだったからね。まあ、菊田とも昔からの仲だから、いつかはっていう気持ちはあるよ。

——可能性がないわけでもない、と？

田村潔司

4月25日に引退試合を行なう吉田秀彦とは03年5月の『PRIDE GP』で対戦し、袖車で一本負けを喫した田村。その後、リベンジマッチを望む発言をしていたこともあった田村だが、40歳同士のオヤジ対決は……ないか?

田村潔司

田村　やるかもしれないし、やらないかもしれない（笑）。

――年が明けてからも、菊田さんと登戸のファミレスで偶然会ったと聞きましたけど。田村さんはジムが登戸にあるので、まだわかりますけど、登戸で遭遇するってかなりの確率ですよね。

田村　そうだよね（笑）。そこでも「今年はお願いします」って言われたけど、まあなるようにしかならないんじゃない?

――菊田戦はともかく、田村さんはウェルター級に階級を落として、3月のDREAMでマリウス・ザロムスキーと対戦するのではという噂が出ていますけど、その可能性はあるんでしょうか?

田村　あれ、今回の取材って「2000年代を振り返る」ってテーマでしょ?

――最初はそうだったんですけど、ちょっとテーマが変わりまして。

田村　俺、今日はその話題は出ないだろうなって思って来たんだけど。

――まあ、四十路を迎えた田村さんの試合を期待しているファンも多いですし、可能性だけでも聞かせてもらえれば、と。

田村　さっきも大会のときにファンの人から「Uインターの頃から応援してます」ってリップサービス的な言葉をもらったんだけど、それはそれで凄いうれしいんだけど、歳を取れば取るほど、さかのぼってのファンの人ってついてると思うんだよね。俺が入門したときから観ている世代だったり、髙田さんとの試合を観た人だったり、ファンにもいろんな人たちがいるんだなっていうのを今日は実感させられて。ただまあ、若い人もドンドンドンドン出てきてるから、どこまで自分が必要とされてるかっていうのは考えちゃうんだよね。

――自分でもつかみきれていない?

田村　そうそうそう。ハッキリ言って、気分は若いけど、もう年寄りだからね。

――肉体的にも充分若いと思いますけど。

田村　ただ、ずっと俺とかサク（桜庭和志）とか吉田選手もそうだし、そういう選手がいることによって下が出てこないのかなって思ったりもするし。たとえば、吉田選手のファンとかも、4月で引退するってことで、そこでスパッと興味をなくすんじゃないかなっていうのもあるし。

――引退とともにファンを卒業するっていうのはプロレスや格闘技の世界にかぎらずあることですからね。

田村　そうだよね。そのへんが難しいかなって。俺も「40歳なのに頑張ってる」とは思われたくないし、まだまだ自分の中で上を目指すっていうか「若いもんに負けない」って気持ちじゃないとやっていけないから。ただ、現実的な話をすると、周りから見る目と俺が発信する気持ちっていうのは当然ギャップもあるしね。

――まだまだ、レジェンド扱いはされたくないっていう感じですか?

田村　そうだねぇ。してほしいときとしてほしくないときがあるんだけど（笑）。

――複雑なんですね（笑）。桜庭さんとかもそういう扱いをされることが多かったと思うんですけど、昨年の10月にミドル級のトップファイターのゼルグ〝弁慶〟ガレシックに一本勝ちをしました。田村さんもまだまだ一線級で闘っていけるというプライドや自負もあるんでしょうし。

田村　いやいや、それはない。

――あ、そうなんですか（笑）。

田村　ないけど、俺らはこうして生き残ったりしてる。……生き残るっていうか、俺は試合してないから、そんなに偉そうには言えないけど（笑）。

「40歳なのに頑張ってる」とは思われたくない。でもね……

――充分生き残ってると思います（笑）。

田村　まあでも、それはお互いさまだしね。主催者から「この選手とやってくれ」っていうのは、ＰＲＩＤＥの頃が一番プッシュがあったんだけど、いまはそのプッシュに対して、出るべきなのか出ないべきなのかっていうのは凄い悩む。悩む。悩む。悩む。

――田村さん、悩みすぎです（笑）。

田村　いや～、でも悩むよ、正直。

――ＰＲＩＤＥ時代って、いまと比べてファイトマネーも格段によかったでしょうし、ファイトマネーで納得させるっていう部分もあったと思うんですよ。

田村　うん、それはあったよね。

――プロとしてお金にこだわるっていうのも重要なことだとは思うんですけど、いまはマット界にかぎらず不況ということもありますし、そこの部分はモチベーションにはなりづらいのかなって。

田村　そうだね。でもお金はそんなに困ってないから。山口さんみたいに（笑）。

――アハハハハ！　まあ、山口さんもちょっと前までは「俺は金に困ったことはない」というのが口癖でしたけどね（笑）。

田村　いまはかなり困ってるみたいだけどね（笑）。でも、お金に関してはＰＲＩＤＥ時代から、とくにこっちからけしかけたことはないから。けしかけるっていうのもへんな話だけど（笑）。

――あ、そうなんですか。そういう部分でも頑固者なのかなって思ってる人ってわりと多いと思うんですけど。

田村　俺はそういうのはないんだけど、たぶん、あいだに入ってる人が凄いやってくれてたんだなって思う。いまになってみると。そういうのってあいだに入ってるマネージャーみたいな人の力も凄い左右するんだなって思うし。結局、何か個性があっても、それを活かす人がいないと個性も潰れちゃうから。そういう意味ではＰＲＩＤＥ時代はどっかに乗せられてたのかなって思ったりもする。

――それはよくも悪くも？

田村　よくも悪くも。自分一人の力だと思ったときもあったけど、いまになって考えると周りから助けられたって部分もあるし。要は、四十路になって丸くなったんだろうね。

――頑固者も丸くなってきてる、と（笑）。

田村　そうそう（笑）。そういう意味では、山口さんっていうのは自分にとって、大人の事情の中の一人で、俺に対して凄くいろいろやってくれた人だからね。

――ＰＲＩＤＥ時代は田村さんのマッチメークなどにも関わっていたみたいですからね。

田村　バラさん（榊原信行ＤＳＥ代表）からの伝達かどうかわかんないけど、山口さんってプロレスの要素というか発想をＰＲＩＤＥに持ってった人だと思うからね。だから、凄い貢献してる人だと思うし。いま会ってもそういうことに対しての感謝の気持ちを持ってるからね。

――いい話ですねぇ。田村さんは引退ということは考えたりはしないですか？

田村　たぶんね、ジムを出さないで一人で練習をしてたりすると、どっかしら自己満足で終わってると思うんだけど、いまはジム生とかと練習して、逆に俺が練習をさせてもらってる感覚もあるんだよね。

――ジム生に練習をさせてもらってますか（笑）。

田村　いい意味でね。若いコは俺を見て「こんな40歳もいるんだ」って思ってくれてるかもしれないし、俺は俺で若いコと一緒にやってて凄いエネルギーをもらってるんで。だから、いい連鎖というか相乗効果というか。そういう刺激がなかったら、たぶん引退してたと思うよ。

――世代も違うし、会話は噛み合わないかもしれないですけど（笑）、やってることは一緒ですからね。

田村　やってることは噛み合う（笑）。まあ、引退するにしても大人の事情もあるだろうし、「もういいかな」と思ったり、「いや、まだ頑張れる」と思ったり、それの繰り返しで。ただ一つ言えるのは、スパーリングとかやってて「もうキツいかな」って思ったときは辞める時期なのかなって。おかげさまで、いまのところは大丈夫だけど。

――でも、そろそろリング上で脚光を浴びたいという気持ちになってるんじゃないですか？

田村　いや、それはね、どっちもどっちで。試合に向けて練習も集中してやらないといけないし、試合までの時間も凄い嫌だったりするから。

――いろんな大人の事情はあるんでしょうけど、とりあえず3月ぐらいに田村さんの試合が観られることを期待してます！

田村　今日のテーマは〝2000年代を振り返る〟って聞いてたんだけど。何度も言うけど、これカットしないでよ（笑）。

――全然カットはしませんけど、やっぱり、読者的には時事ネタも聞いておかないとっていうのもありますし。

田村　オイ、それが『ｋａｍｉｐｒｏ』のやり方か!?（ちょっぴり長州口調で）。

――微妙なモノマネはやめてください！

田村　アハハハハ！　まあ、試合に関してはあんまり期待しないで。大人の事情でどうなるかはわかんないから（笑）。

【10年2月6日／都内・西調布アリーナにて収録】

たむら・きよし■1969年12月17日、岡山県出身。88年に第二次UWFに入団、翌89年5月に鈴木みのる戦でデビュー。その後はUインター、リングス、PRIDE等で活躍。08年は『DREAM.12』で船木誠勝、『Dynamite!!』で桜庭和志と対戦するも09年は0試合。はたして10年は？ 180cm、84kg。ブログアドレス→http://ameblo.jp/tamura-blog/

田村潔司も本部席から熱視線！

『U-FILE45』

東京・西調布格闘技アリーナ
3月7日（日）開場12:30 開始13:00

田村主催のU-FILE興行、3月大会では7月の決勝大会に向け、2月大会から始まった6団体（U-FILE CAMP、武蔵村山道場、ZFC、宇留野道場、横浜グランドスラム&網島柔術、move）によるグラップリングの総当たり対抗戦の2回戦を開催。興味のある方はどうぞ！

お問い合わせ
U-FILE CAMP　TEL.0424-80-3731
http://blog.livedoor.jp/u_st/

45歳にして13年ぶりのUFCメインに出場
されど46歳の鉄人ランディの前に散る

MARK COLEMAN

age 45

熱血オヤジの一番長い一日

2.6『UFC109』ラスベガス大会で、じつに13年ぶりにUFCのメインイベントに出場。ランディ・クートゥアーとの、UFC初となる殿堂入り同士の対決に挑んだマーク・コールマン。結果はクートゥアー相手に防戦一方の一本負けだったが、コールマンにとって特別な思いで挑んだ試合だった。試合前日のインタビューを交え、インサイドストーリーをお届けしよう。

文／堀江ガンツ　撮影／Josh Hedges（UFC）

「すべてタイミングのせいさ」

試合前日、母国アメリカでのクートゥアーと自分の評価の違いについてコールマンに尋ねると、そんな言葉が返ってきた。

2・6『UFC109』のメインイベントで組まれた、ランディ・クートゥアー戦。UFC初の殿堂入りファイター同士の対戦であり、コールマンにとっては、13年ぶりのUFCのメイン登場でもあった。

コールマンはフリースタイルレスリングでバルセロナ五輪7位に入賞。MMA転向後は、UFCとPRIDE両方で初代ヘビー級王者となるなど、レスリング、MMA両方でクートゥアーに劣らない実績を残している。しかし、アメリカでの評価はクートゥアーのほうがはるかに上。〝MMAの象徴〟であるクートゥアーに対して、コールマンはオールドタイマーのアンダードッグと目されていた。

その評価の違いをコールマンは「すべてタイミングのせいさ」と言う。

「俺がUFCでチャンピオンになったときは、UFCはまだマイナーな存在だったからね。逆にランディはUFCが著しく成長を遂げたとき、その場所にいた。俺はそのとき、ヒョードル、ミルコ、ノゲイラという世界最強の男たちと試合をしていたが、アメリカのファンはそれを知らないんだよ。ただ、それだけのことさ」

ただ、UFCを〝裏切った〟過去は、アメリカでの評価だけでなく、のちのコールマンに影響を与えることになる。

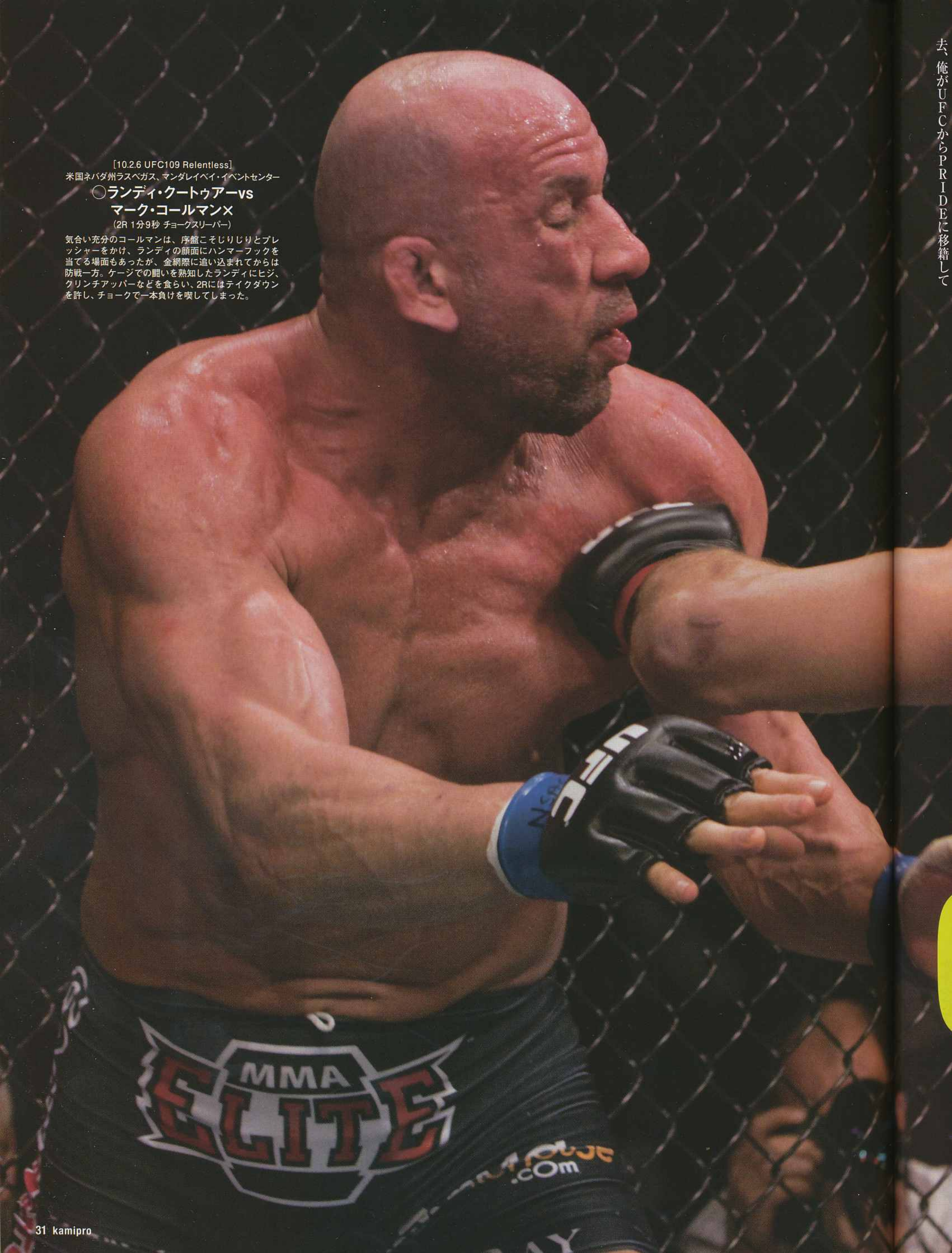
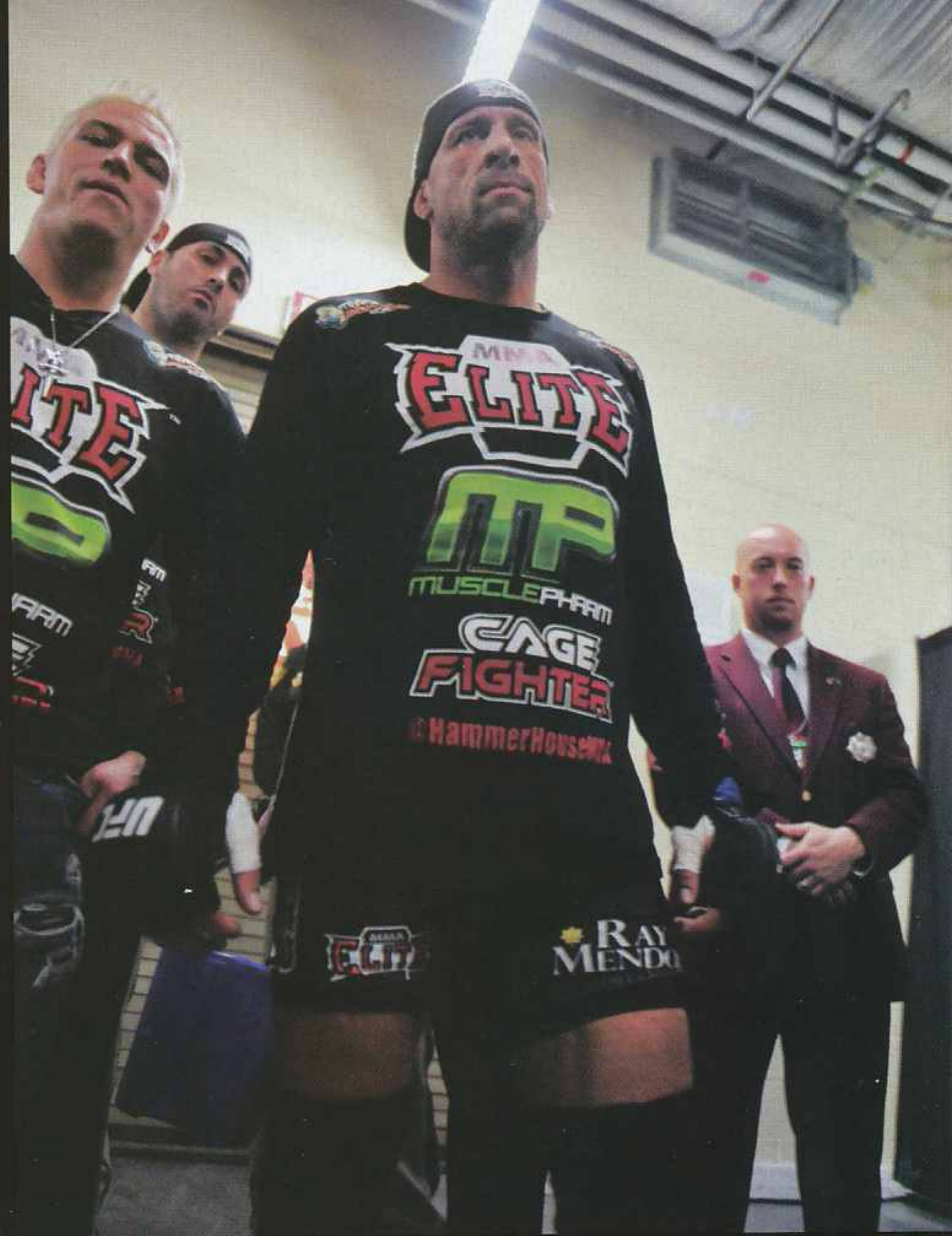
「PRIDEが活動休止したあと、多くのファイターはUFCと新しい契約を結ぶことができた。俺もすぐにでもUFCと契約したかったんだが、オファーがなかったんだよ。おそらくUFCとしては、過去、俺がUFCからPRIDEに移籍して

［10.2.6 UFC109 Relentless］
米国ネバダ州ラスベガス、マンダレイベイ・イベントセンター

◯ランディ・クートゥアーvs
マーク・コールマン×

（2R 1分9秒 チョークスリーパー）

気合い充分のコールマンは、序盤こそじりじりとプレッシャーをかけ、ランディの顔面にハンマーフックを当てる場面もあったが、金網際に追い込まれてからは防戦一方。ケージでの闘いを熟知したランディにヒジ、クリンチアッパーなどを食らい、2Rにはテイクダウンを許し、チョークで一本負けを喫してしまった。

去、俺がUFCからPRIDEに移籍して

いったことに対する罰として、長い時間待たされたんじゃないかと思う。

だから、最初はほかの団体で試合をするっていうことも考えたけど、『絶対にUFCからオファーが来る』って信じて待ち続けたんだ。そしたらやっと電話があって、俺はUFCに復帰できることになったんだ」

コールマンは09年1月の『UFC93』でオクタゴン再デビュー。マウリシオ・ショーグンと闘い、大善戦したものの3ラウンドにTKO負けを喫した。

「UFC復帰がようやく決まったのはよかったんだが、そのときはお金も底をついていたから、質のいいトレーニングができなかったんだ。その状況でベストの試合はできたと思ってるけど、3ラウンドを闘い抜けなかったのが悔しかったね」

じつはコールマンには正式なトレーニングチームがなかった。〝筋肉三兄弟〟が所属する「ハンマーハウス」が所属チームということになっていたが、これは〝営業用〟のチーム名であり、実際には存在しないものだった。コールマンはこれまでずっと、地元オハイオ州コロンバスでの〝自主トレ〟だけで、試合に挑んでいたのだ。

決して地元を離れようとしなかった理由には、溺愛する二人の娘の存在があった。

「俺は二人の娘、モーガンとマッケンジーを溺愛しているから、彼女たちに寂しい思いをさせたくなかったので、コロンバスから一時でも離れたくなかった。でも、いまでは彼女たちも俺がやっていることを理解できる年頃になり、今回の試合に関しても、『ダディ、ラスベガスに行って試合のために練習することはわかってるよ』って言ってくれるようになったんだ」

今回コールマンは、初めてパーソナルコーチを雇い、トレーニングチームを結成し、ラスベガスで2カ月間のキャンプを張った。これまで〝自主トレ〟だけだった男が、アメリカでの最大の大一番を前に、過去最高の準備を整えたのだ。

俺は娘たちの誇りとなる存在にならなきゃいけないんだ

「娘たちの存在は俺の人生のすべてなんだ。今回、試合のために家を離れて60日が経ったけれど、早く試合を終えて、どれだけ娘を抱きしめたいかという気持ちを、どう表現していいかわからない。ただ、俺は娘たちの誇りとなる存在にならなきゃいけないんだ。だから負けられないんだよ」

こうして、アメリカ国内で自分よりはるかに高く評価されるクートゥアーに対し、人生の大逆転をかけて挑んだコールマン。

しかし、結果は残酷なものだった。

オクタゴンの闘いを熟知したクートゥアー対し、コールマンは完全に浦島太郎状態だった。金網に押しつけられ、至近距離からのヒジやパンチを浴びまくり、2ラウンドにはテイクダウンを奪われ、最後はチョークを極められ万事休す。現時点でのコンディションと、オクタゴンでの実力差を見せつけられる結果となってしまった。

今回、客席で観戦した〝盟友〟フィル・バローニは、試合直後、目に涙を溜めながら次のように語ってくれた。

「俺はコールマンが、今回どれだけの思いを抱いてこの試合に臨んでいるか知っているが、残念ながら彼は自分の力を発揮することができなかった。敗因はオクタゴンでの経験の差につきる。ランディは数えきれないほどUFCのメインで闘ってきたのに対し、コールマンは大昔にしかメインに出たことがないから、新人がデビュー戦で戸惑うように、浮き足立ってしまったんだろう」

それでも、この45歳の敗者には観客から拍手が送られたし、UFCでのコールマンの闘いはまだ続くものと思われた。

ところが、大会終了後のプレスカンファレンスで、ダナ・ホワイトから衝撃の発言が飛び出したのだ。

「コールマンは今回でフィニッシュだ」

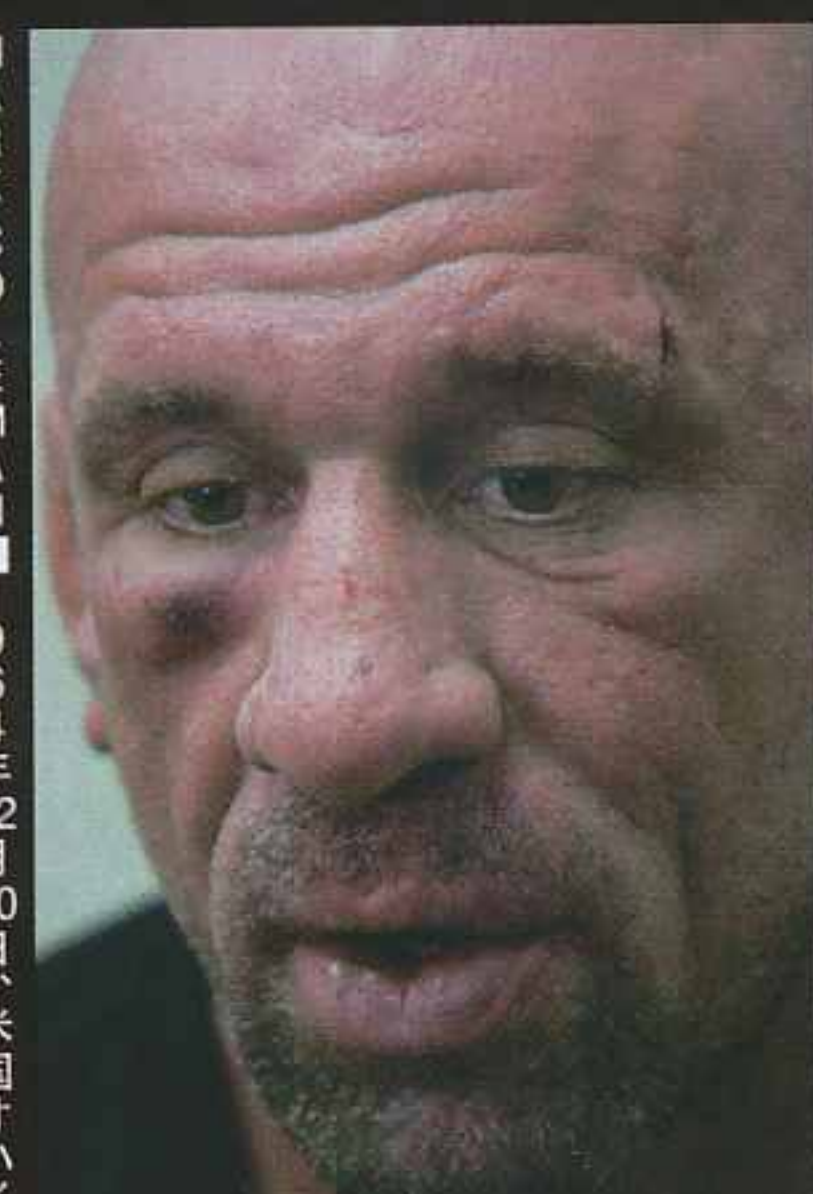
まさかの引退勧告。

そして大会の数日後、コールマンの契約解除がUFCから正式に発表された。

栄光と挫折を繰り返し、家庭を壊した苦い経験を持ちながら、娘を溺愛する映画『レスラー』を地でいく男、マーク・コールマン。インタビュー中、この映画について聞いたとき、「自分の一部を見ているようであったけど、エンディングはもっといいものであってほしかった。あのまま終わってしまったことにショックを受けたんだ」と、言っていたが、皮肉にも映画同様コールマン自身もハッピーエンドを迎えることはできなかったこととなる。

しかし、コールマン劇場にまだエンドロールは流れていない。

「俺は今回の試合で負けるかもしれない。でも、勝とうが負けようが、自分の愛する娘と、応援してくれるファンの声援があるかぎり、ハンマーは闘い続けるよ」

試合前に行なったインタビューの最後の言葉がそれだった。

MARK COLEMAN■1964年12月20日、米国オハイオ州出身。バルセロナ五輪レスリング7位入賞。96年にUFCでデビューし、初代UFCヘビー級王座を獲得。その後、初代PRIDEヘビー級王者にも輝いた。185センチ、93キロ。

ングチームがなかった。"筋肉三兄弟"が

ーチを雇い、トレーニングチームを結成

手が送られたし、UFCでのコールマン

RIDEヘビー級王者にも輝いた。185センチ、93キロ。

シワの数こそ人生の年輪！
激シブな男たちの生き方に学べ!!

ここのオヤジたちは いったい誰なんだ!?

アラフォーどころかアラ還！

村田　誰だって第一線から退かざるをえ

200勝投手、村田兆治——。その独

ても誰も気がつかない」なんて言われる

らい、ガラガラで（笑）。でも、そこはプ

30歳になったら35歳の自分。30歳すぎた

ら1年1年が勝負になる。自分とどう向

元ロッテオリオンズ（投手）

村田兆治

age 60

日本にはランディ・クートゥアーより凄いオヤジがいた!! 現役引退から20年経過してもなお、140キロの速球を投げる村田兆治のことである。インタビュー収録したホテルの喫茶店には山口日昇というダメオヤジが偶然居合わせましたが、私は村田さんから人生を学びたいと思います。

聞き手／ジャン斉藤

サンデー兆治がやってきた!!

60歳で140キロの速球を投げるオヤジ

フォークボールを覚えるために ナイフで指の腱を裂いたんだよ

200勝投手、村田兆治――。その独特のフォームは〝マサカリ投法〟と呼ばれ、落差の激しいフォークボールで三振の山を築いた一流のプロ野球選手である。

村田兆治の凄さは〝いま〟も感じることができる。伝説のプロ野球OBたちがプレーするマスターズリーグでは、140キロの速球と切れ味鋭いフォークボールを披露！　こんなオヤジ、見たことないよ！　というわけで、さっそく取材をしてきました。〝サンデー兆治〟の人生先発完投ぶりから学びましょう!!

――村田さんは現役引退したいまでも140キロの速球を投げるそうですね。とても60歳の人間ができる業とは思えないんですけど（笑）。

村田　それは「こうなりたい!!」って志している自分がいるわけです。「まだまだこんなもんじゃない」と。

――60歳になっても！

村田　現役時代からずっとそうですよ。もう一人の理想の自分と闘うから頂上を目指して頑張れるわけで。普通はオヤジになったら若いときのような力は出ないし、衰退していくわけだからね。腹は出てくる、免疫はなくなるわ。オヤジに残っているのは経験、体験を活かした駆け引きだけだよ。そうなると、やっぱり「まだまだ」と言ってもどこかに区切りをつけなきゃいけないのよ。

――その区切りの一つが「現役引退」であるんですよね。

村田　誰だって第一線から退かざるをえなくなる。そりゃあどんな大選手でも世代交代をしなきゃならない時期はあるし、エースとしての役割を求められた自分がどんなに頑張っても10勝しかできない。これは区切りをつけるしかないよね。

――しかし、村田さん、40歳で二桁勝利を飾るのは凄いことですし、それで引退だなんてカッコよすぎますよ！

村田　それはプライドの問題でもあるのよ。プライドはプロにとって凄く大事だよ。パ・リーグはお客が入らないから何度、手抜きしようかなと思ったけど（笑）。

――冗談で「川崎球場では殺人が起こっても誰も気がつかない」なんて言われるくらいガラガラで（笑）。でも、そこはプライドが許しませんか。

村田　売れないもんだからって手抜きをしちゃあダメなの。

――村田さんの場合は手抜きどころか座右の銘が「人生先発完投」ですもんね。現代野球では考えられないですよ！

村田　だから私が引退したときにふと思ったんだよ。俺はここまでやって身体も酷使してきて、夜も眠れないくらい身体が痛むんだ。身体が疲れて筋肉が痛くて寝られないんだよ。悩んで寝られないんじゃないんだよ。でも、筋肉痛ってのは心の病に比べれば、いいもんだけどね。

――それでも、その身体の苦しみから解放されたいと思わなかったんですか？

村田　確かに、どんな一流のプロ野球選手でも、（現役を）終わったときにブクブク太ったりする人が多いんだ。いままで積み重ねたものを現役引退という区切りでリセットするわけだけど、決して人生を引退するわけじゃない。まだまだ続くんだよ。

――だからこそ、村田さんはいまでも140キロを投げられる身体があるわけですね。

村田　若いときから私はそう心がけてきて、20歳になったら25歳の自分を目標に、30歳になったら35歳の自分。30歳すぎたら1年1年が勝負になる。自分とどう向き合っていくかという部分を大切にしなきゃならない。いずれ年を取ったらおじいちゃんおばあちゃんになって、杖も持たなきゃいけないんだろうけど、「年寄りはそうなるもんだ」って決めつけちゃいけないのよ。

――村田さんは一日どれくらいのトレーニングをされているんですか？

村田　トレーニングは量じゃなくて意識の問題よね。仕事やなんかで集中してるときはそんなにしないけど、ちょっと時間があるときや移動のときには何かしら身体を動かしている。

――常に身体を鍛えるという意識を持って生活してるんですね。

村田　そういう意識があるか、ないかによって、60歳になったときに凄い差が出てくるから。

――いやあ、村田さんの言葉には説得力がありますねぇ。

村田　そこがホントにパワーの源になるんだっていう。（ボールを取り出して）これ、フォークボールの握りで持って）これ、二本指だけで持ってるんだけど、おもいっきり引っぱってみ？　絶対に抜けないから。

――せ～の！……ダメだ、全然ビクともしない（笑）。このフォークの握りを習得するために、普段から二本指だけで物を持ったり、人差し指と中指のあいだの腱を切って広げたりしたんですよね。

村田　悔しいからナイフでやったんだよ。でも、切ったら元にくっつくまで大変だよ。

――す、凄く大変でしょうねぇ。

村田　だからね、どうしてそこまでやったかというと、自分の仕事として（打者に）

打たれたくないんだよね。だって、俺の代わり（の投手）はいっぱいいるじゃないか。そこにある程度長い目で見ていくっていう部分も大切なんだけど、プロ野球選手という職業はすぐに結果を出さないとクビになるんだから。代わりの選手はほかにもいるんだから。

――だからこそ、文字どおり血がにじむような鍛錬をされた、と。

村田　そう。そりゃあ「何がなんでも勝ちたい!!」っていう気持ちになるよ。勝ちたいっていうより、絶対に打たれたくない。打たれなきゃ勝てるんだから。そうだろ？　そう考えたら、勝ちたいっていう前に何をしなきゃいけないのかってことがあるじゃん。

――だからそこまでやった、と。

村田　若いときはね、周りから変人と思われるくらいにならないとダメよ。「あいつ、変わってるな～！」っていうぐらいに。

――一流が集まるプロの世界で突き抜けなくちゃならないわけですからね。

村田　奇人じゃあダメなのよ。奇人、変人、達人までいかなきゃ。現場に入ればいろんな職人とかいるじゃない。性格がいいのもいれば性格の悪いのもいる。いろんな人間がいるよ、そりゃあ。そういう世界で勝負しないといけないんだから。それこそ技術だけじゃダメなのよ。「打つなら打ってみろ！」という気概がなきゃ。

――そういう闘争心が必要になってくるんですね。

村田　練習だって「打つなら打ってみろ！」と思ってやるの。ただ投げてばっかりなのはバッティングピッチャー。闘争心がこもってない。へんな意味では開き直りじゃないんだけど、「打つなら打ってみろ」っていうのは簡単なようで怖いもんだよ？　たとえば張本勲がバッターのときなんて、いまでこそ顔は怖くないけど、当時は凄い迫力だったんだから。

いまでこそマリーンズとして垢抜けた感のあるロッテだが、かつてはホーム球場を持たないジプシー球団であり、無骨な野球人が集っていた。旧ユニホームもシブいぜ！

プロは奇人じゃダメなのよ。奇人、変人、達人までいかなきゃ

――〝安打製造機〟と呼ばれた大打者ですからね。

村田　そんな打者に投げるときは「俺の肉を切られるかもしれないけど、相手の骨を断ってやる！」という精神力を持って投げないといけない。やっぱりエース同士の対決になってきたら、避けて通れない問題があるわけだろ。そこでフォアボールを出すんだったら誰でも出すわね。

――逃げることができない勝負があるわけですね。

村田　ただ、試合展開によってはベンチから指示があって「フォアボールにしなさい」とかなっちゃう。そこでイヤだって首を振ったらもうね、これはもう業務違反だよ。

――そうなりますよね（笑）。

村田　でも、業務違反でも勝負しないといけないときだってあるのよ。

――村田さんは左腕の腱を右ヒジに移植するという大手術を受けましたけど、当時はヒジにメスを入れることはタブーだったわけですから、よく決断されましたね。

83年、右ヒジを故障した村田はフランク・ジョーブ博士の移植手術を受けるべく渡米。のちに桑田真澄など多くの選手がジョーブ博士のもとで執刀を受けるが、日本人プロ野球選手としては村田が初めてだった。村田は手術後、2年間という長期にわたるリハビリ期間を経て復帰。開幕11連勝という見事なカムバック劇でファンを魅了した。凄いぜ兆治！　ちなみにニックネームの〝サンデー兆治〟の由来は、中6日のローテーションで日曜日の登板が続いたからである。

村田　それはいったい誰の人生かってこと。限りなく自分の人生なんだから、自分が責任を持って決断すべきなんだよ。たとえば親がどう思おうとね。親はいなくても子は育つんだっていうことも大切。そりゃあ感謝の気持ちはどっかで持っとかなきゃダメよ。「たかが野球でそこまでやらなくていいじゃない」って言う人もいるんだけど。でも、25歳で辞める人もおれば、30歳までやった人もおる。「30歳までやったんだからいいだろう」って若いときは思うかもしれないけど、辞めるときはみんな心のどっかで悔いの大きさや小ささはともかく、絶対に悔いは残るんだって。俺はそう思ってる。

――全力投球してきたならば、よけいに。

村田　それに成績を残してない人は解雇になるんだから。やる気はあるんだよ。でも会社がもう契約しない。これは悔いは残るのよ。

――プロ野球の世界だと、1年1年が勝負ですもんね。

村田　だから毎年のように自分でテンションをあらためていくんだよ。そこはね、やっぱりアマチュアとプロでは全然違ってくるから。プロは朝から晩まで野球をやってるんだから。高校のときは授業と

緊張感を保つため、いまでも毎朝冷たい水をかぶるんだから

かあるけどね。

―毎年そんなサバイバルレースをしていたら、相当タフになりますよね。

村田　だからこそプロは自立しなきゃいけないんだよね。自分の好きなことを職業としてやる。でも、そこには当然競争があるんだけど、それは自分自身の人生の挑戦だと思って生き残らないといけない。そこで負けたら、次の人生を考えないといけない。さっきも話に出たけど、私だって33歳のときに左手首の腱を手術してゼロからの出発した。その前はいろいろと悩んだもんだよ。だから誰もいないところ、たとえば田舎の森の中を歩いていると、そりゃあ鬱病みたいになるよ。ノイローゼみたいになるよ。

―あ、村田さんでもそんな状態に。でも、日本人選手としては前例がなかった手術なわけですから、不安にもなりますよねぇ。

村田　それからカムバックしたときのうれしさはいまだに忘れないし、あのときの緊張感を持って生きていくことは忘れないよね。だから、いまでも毎朝、冷たい水をかぶるんだから。「自分にウソをつかない人生であっていきたい。正直に生きたい」って。

―村田さんから見て、いまの若い人にはどんな印象がありますか？

村田　いろいろと難しい時代だよね。たとえば教育にしても、いじめる側もいじめられる側も問題はあるんだよ。でも、最近はちょっとしたことでも暴力だと受け止める。ふざけ合ったつもりだけど、いじめだと。そういう意味では難しい時代にきてる。

―ちょっと過敏なのかもしれないですね。

村田　で、昔みたいにね、まず他人に迷惑をかけないということをあんまり言われたことがない人が多いでしょ。小さいとき、そう言われたことない？

―ありますね。

村田　言われてない子も多いんだよ。最近は多いと思いますよ。私は講演なんかで学校関係とかけっこう行ったりするからよくわかるんですけど。で、いまのゆとり教育を受けてきた人たちは何歳くらいなの。

―それはちょうどいま30歳手前ぐらいの人ですね。

村田　そういう人たちが時代とともに豊かになってくるとね、自由奔放っていう部分もわかるんだけど。まあ、ゆとりだから何をやってもいいって部分があるんでしょ。で、片一方は陰湿な、ちょっと触っても「イジメだ」と言う。難しいね。

―村田さんから見ていまの野球界ってどうですか？

村田　野球界はね、練習意欲を持ってる子と持ってない子と両極端なの。

―それはどうしてなんですか？

村田　それはある程度、満たされてるために反骨精神が薄いのかな。たとえば私はアメリカっていう国は格差社会だと感じる部分もあるわけ。生まれたときに何もなくても、やれば上に行ける実力主義というところはあるじゃん。でも、日本はアメリカとかほかの国と比べたら格差がない社会だから

―ほかの国と比べたらまだ格差はないですね。

村田　それでも日本は文句を言う。努力しなくても文句を言う。だから、まともに努力してる人は本当に救ってやらなきゃいけない。私ができるのはそんなことくらいかな。

―よくわかりました！　村田さんを見習って今日から冷水を浴びようと思います（笑）。

【10年2月1日／都内・某ホテルにて収録】

全国で野球教室を開催、精力的に活動するサンデー兆治。MMA界の鉄人オヤジ、ランディ・クートゥアーも裸足で逃げ出す還暦ぶりだ。

むらた・ちょうじ■1949年11月27日、広島県出身。1967年、ドラフト一位で東京オリオンズに入団。1989年に200勝を達成。1990年に23年間の現役生活に別れを告げる。最多勝、最優秀防御率、最多セーブ、最多三振など、あらゆるタイトルを総ナメにした大投手。現在は、元プロ野球選手たちと、まさかりドリームスを主宰。離島の子どもたちのために全国を飛び回っている。

——こんばんは〜。

んも大晦日に初めてセコンドについた

てたみたいだけど、それは言い訳にはな

それだけなんだから。

あの挑発行為が物議を醸してるのは

廣田瑞人と そのバイト先のおっちゃんの 友情物語

「ももや食堂」のナイスなご主人 藤沢輝夫 age 65

なんでも『戦極』ライト級王者の廣田瑞人は日頃、練習の合間をぬって食堂の手伝いをしているとか。そのお店の名前は「ももや食堂」。『kamiproムーブ』の日刊ブログやテレビ番組『戦極G!』でも紹介されたこともあるので、ご存知の方もいるのでは？ 今回はこの「ももや食堂」に潜入取材、廣田とおっちゃんの心がホッコリするエピソードをお届けします！

聞き手&撮影／鈴木佑　試合写真／乾晋也

――こんばんは～。
藤沢 はい、らっしゃい！
――あ、取材にうかがった『kamipro』のものなんですが……。
藤沢 あぁ、廣田のやつね？ ちょっと仕事が一段落つくまで座って待っててくれよ！
――あ、はい、失礼します。
藤沢 （調理をしながら）しかし、大晦日は残念だったな！ あれ、おっちゃんもセコンドついてたんだよ。
――え？ ご主人が、ですか⁉
藤沢 そうそう。
――……それは冗談じゃなく？
藤沢 うん！ でも、最後に技かけられてたときはコーナーポストで見えなかったんだよなぁ。まぁ、あとで話すからさ、少し待っててな！
――は、はぁ……。『Dynamite!!』のセコンドに食堂のおっちゃん⁉
〈仕事が一段落ついて〉
藤沢 いやぁ、悪ぃな、待たせちゃって！
――いえいえ。ここはアットホームな雰囲気のお店ですね～。ご主人、今日はこちらで働いている廣田さんについてお聞きしたいんですよ。ちなみにお名前を聞いてもいいですか？
藤沢 あ、藤沢輝夫っていいます（急にかしこまって）。で、兄さん、メシは食ったのかい？
――あ、じゃあオススメメニューの撮影もしたいんで、取材のあとに作ってもらえますか？ しかし、藤沢さんは本当にセコンドについてたんですね。待ってるあいだに廣田さんにメールで確認したら、「ついてましたよ」って返信がありました（笑）。疑っちゃってすいません！
藤沢 ハッハッハッ！ いや、おっちゃんも大晦日に初めてセコンドについたんだよ。アイツが「じぃさん、冥土の土産にどうだ？」ってな（笑）。
――冥土の土産（笑）。そうそう、廣田さんは藤沢さんのことを「じぃさん」って呼んでるんですけど、それはなんでなんですか？
藤沢 わかんねえんだよ。じぃさんとかじじいとかな（笑）。でも、アイツはかわいいヤツだよ。わざわざトランクスに「ももや食堂」ってここの店名を入れたりさ（うれしそうに）。

店内には廣田と一緒にポーズを決めるおっちゃんの写真が! 上はケージフォースでベルトを奪取した試合後の記念撮影、下は『戦極』で北岡を下したあとに店内で撮った写真。男同士の友情を感じるってもんだぜ!

――セコンドってことは、藤沢さんも大晦日の花道を歩いたわけですよね？
藤沢 そうそう、おっちゃんが肩にベルトをかけてさ。ハッハッハッ！
――あの大観衆を前に緊張とかしなかったですか？
藤沢 うん？ あのくらいの人間じゃなんとも思わねえよ。全然緊張しない。むしろ気持ちよかったよ！
――度胸ありますね～。あの日は廣田さんも晴れ舞台だったわけですけど。
藤沢 まぁな。アイツも前日に体調崩してたみたいだけど、それは言い訳にはならないしな。
――本人もそれは出してほしくないみたいで。
藤沢 そこがアイツのいいところなんだよ。まぁ、でもあのときは負けるとは全然思わなかったよな。おっちゃんもほかのセコンドみたいにタオルを持ってたんだけど、投げるなんて全然考えてなかったし。
――藤沢さんもタオルを持ってましたか！
藤沢 ただ、さっきも言ったけど最後に勝負が決まるときはちょうどコーナーポストに隠れてて、まったく廣田が見えなかったんだよな。
――じゃあ、折れた瞬間はわからなかった、と？
藤沢 うん、それは全然わからんかった。とりあえずレフェリーが試合止めたときにすぐにリングに上がったんだけどさ、こっちは素人だから下手なことはできねえしな。
――試合後に興奮した青木真也さんが、廣田さんに挑発行為をしてましたけど、あれには気づいてました？
藤沢 いや、そのときは相手なんか関係ねえから見てなかったよ。それこそ最初に青木を見たときは、青白くてヒョロっとしてるから「なんか貧弱そうな男だな」って思ったんだけどさ（笑）。まぁ、でも強かった。試合だから結果はしょうがねえよ。どっちかが勝つか負けるか、それだけなんだから。
――あの挑発行為が物議を醸してるのは知ってます？
藤沢 ここに来るお客さんが教えてくれたよ、話題になってるって。でも、べつにおっちゃんはなんとも思ってないよ。男と男の勝負、勝てば官軍なんだから。そういや廣田がさ、ドクタールームに行くときに「じぃさん、なんもできなくてごめんな」って言ってたな……（しみじみと）。
――なるほど……。そもそも、お二人の出会いのきっかけというと？
藤沢 アイツがまだアマチュアんときに、たまたまウチの店にフラッとメシ食いに来たんだよ。いまと場所は違って、廣田が所属してた道場の近くだったんだけど。
――ガッツマン修斗道場ですね。
藤沢 そうそう。それからずっと毎日のように来てさ。廣田が上京したての頃だから、もう7年くらい経つのかなぁ。
――長い付き合いなんですね～。じゃあ、もう廣田さんにとっては東京のお父さんみたいな感じなんじゃないですか？
藤沢 まぁ、そんなもんなのかもしれねえな。へへへ。
――それからどういう経緯で、廣田さんはこのお店の手伝いをするようになったんですか？
藤沢 もともとアイツはビル清掃の仕事をしてたんだけど、ケージフォースでベルトを獲ったときに辞めたんだよな。

俺、廣田に「冥土の土産にどうだ？」って言われて大晦日はセコンドについたんだよ

で、廣田が自分のお母さんに「働かないならおっちゃんのところを手伝いなさいよ」って言われて、ウチで働き始めたってわけだよ。それからだから、まだ1年くらいなんじゃねえかな。

——廣田さんのお母さんのこともご存知なんですね。

藤沢 うん、廣田に会いに東京に出てきたときなんかに親子で来たりさ。そんときにアイツのお母さんが、おっちゃんの着るものなんかを持ってきてくれんだよ。あとは地元の長崎から野菜を送ってくれたりな。アイツが朝晩毎日ここでメシ食ってるからって、いろいろ気を使ってくれてさ。

——藤沢さんは廣田さんが格闘家だっていうのはいつ知りましたか？

藤沢 あぁもう、最初からわかったよ。いっぱい荷物を持ってたし、いいガタイだったしさ。でも、ほら、アイツは無口だろ？ 毎日来るのに一っ言もモノ言わねえんだよ（笑）。しゃべるようになったのもずいぶん経ってからじゃねえかな。

——なるほど（笑）。ちなみに廣田さんはここでどのくらい働いているんですか？

藤沢 いや、お昼の2時間くらいだよ。まずアイツにメシ食わせて、そのあとにちょっと手伝ってもらうって感じだな。

——それはアルバイト代を払って？

藤沢 うん？ そんなのやらねえよ。

——あ、やらない（笑）。

藤沢 いや、最初はやってたんだよ。そしたら廣田が「母ちゃんからもらっちゃダメだって言われた」ってさ。まぁ、そのかわりにアイツのメシの面倒は全部見てやってね。

——廣田さんの働きっぷりはどうですか？

藤沢 あぁ、もうまじめまじめ！ そうじゃなきゃこっちも面倒見ないよ。でも、手伝いっていってもべつに料理させるわけじゃねえから。配膳なんかと、あとは「ちょっと買い物に行ってこい」くらいなもんでさ。まぁ、今度複雑骨折でもした日には料理でも覚えさせねえとな。ハッハッハッ！

——仕事も世話しますか（笑）。

藤沢 そういや、この近くにドンキがあってさ、廣田に買い物に行かせるんだよ。アイツもちょっとずつ顔が売れてきたから、話しかけられるかどうかって試す意味合いでさ。で、声をかけられなかったら「よし、もうドンキには買い物に行くな！」なんて冗談で言ったりな（笑）。

——ダハハ！ SRCの大スポンサーなのに（笑）。藤沢さんは廣田さんの試合もよく観に行くんですか？

藤沢 うん、俺はアイツがアマチュアでヘッドギアを着けてる頃からずっと観に行ってんだよ。いろんなとこ行ってるよ。千葉のなんかこまいところに、駅から長い距離をトコトコ歩いてとかさ。

——それは廣田さんに誘われて？

藤沢 いや、アイツも照れ屋だろ？ まぁ、やっぱりかわいいヤツだから、こっちが気になってさ。でも、おっちゃんはもともと格闘技には興味ないんだよ。

——あ、そうなんですか？

藤沢 うん、あんまり好きじゃねえから。廣田と出会うまでは観に行ったこともねえよ。だから会場に行っても廣田の試合しか観ねえしさ。

——へ〜。

藤沢 とりあえず会場行くだろ、廣田の試合があるまでは喫煙所で煙草吸いながら缶ビール飲んでんだから（笑）。

——ダハハ！ これまで廣田さんの試合を観てきて、印象深い一戦というと？

藤沢 うん、やっぱりどれも印象に残ってるけど、最近だと北岡（悟）のときは見事だったよなぁ〜（しみじみと）。あのときも廣田に「勝てるやろ？」って聞いたら、「絶対勝つ！」言うて行きよったから。「ボッコボコにしたれよ！」言うたら「わかってっから」ってさ。

——しかし、廣田さんがこんなに活躍するようになるとは思ってました？

藤沢 まぁ、プロで3戦くらいやってからは「あ、コレはいけるぞ」って思ったね。アイツは試合に向けたらチャランポランなところがねえから！（キッパリ）。弱音とかは絶対に吐かねえし、仕事も試合前以外は休まないしな。

——なるほど。ちょっと藤沢さんご自身のことも聞きたいんですが、出身はどちらなんですか？

藤沢 生まれは岡山だよ。それから中学を卒業して大阪に出てきて、日本料理の店で修行してさ。あれは昭和35年だから……もうこの道50年か。

——料理の世界一筋なんですね〜。独立したのは？

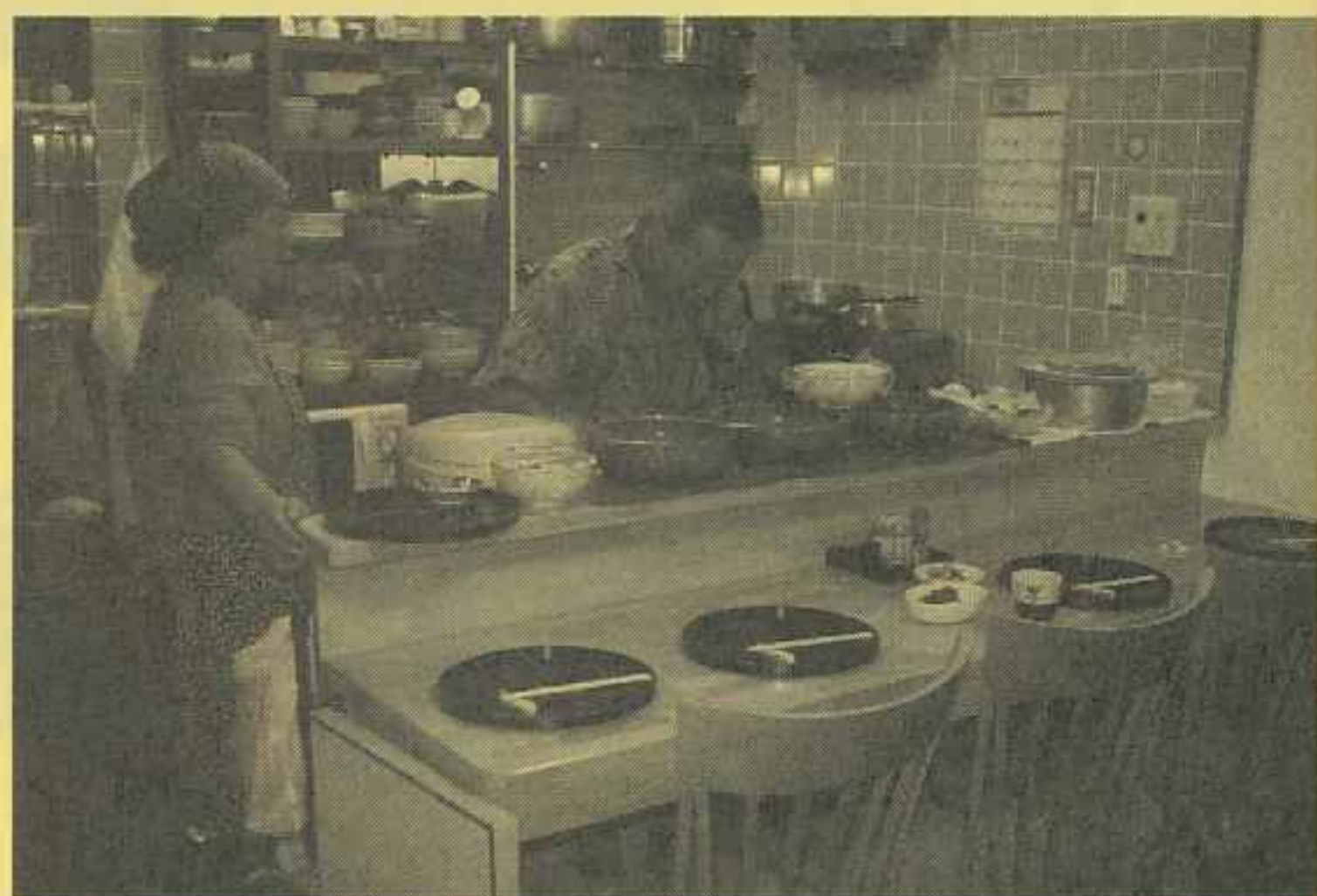
藤沢 自分の店を持つようになってからは20年くらいだな。この界隈で場所を転々と変えながらね。廣田は「じぃさん、どんどん店が俺ん家から遠くなってくよ」って言ってたけどな（笑）。

——近場で転々としてるってことは、常連さんも多いんじゃないですか？

藤沢 そうそう。みんな廣田のことをかわいいって言ってるよ。ようやくアイツも最近、お客さんとボチボチしゃべるようになってきたからさ（笑）。

廣田vs青木の一戦、確かにコーナーポストの下には心配そうにリングを覗き込むおっちゃんの姿が!「アイツは絶対にギブアップはしなかっただろうな。腕が折られても本人は納得してるよ。でも、気持ちは折れてないからな!」(おっちゃん談)。

廣田も成長したと思うよ。でも基本的にアイツは“甘えた”だからな（笑）

廣田瑞人と
そのバイト先のおっちゃんの
友情物語

—ちなみに藤沢さんはお子さんはいるんですか?

藤沢 うん、いっぱいいてるよ。5人いるんだけど、みんな女なんだよ。

—じゃあ廣田さんは本当に息子みたいな感じなんですね。

藤沢 そうそう一人息子(笑)。もう子どもたちは30すぎだし、とっくにコッチの手は離れてるしな。おっちゃんは孫もたくさんいるからね。

—あぁ、だから廣田さんは藤沢さんを「じぃさん」って呼ぶんですかね。

藤沢 いや、そんなん関係なくアイツは前から「じぃさん」って呼びよるんだよ。見た目で決めたんだろ(笑)。

—ダハハハ! お店以外でも付き合いとかあるんですか?

藤沢 廣田が誕生日のときに焼肉屋に連れてってやったりね。アイツ、誕生日が5月5日の子どもの日なんだよ。だから子どもっぽいんだよな、アイツは。ハッハッハッ!

—でも7年前と比べて、廣田さんも変わったところはあるんじゃないですか?

藤沢 まぁ、成長はしたと思うよ。ちょっと大人になったっていうかさ。まぁ、でもあいつは基本的には"甘えた"(近畿圏の方言で甘えたがり)だから(笑)。

—なるほど(笑)。廣田さんは退院してからお店には来ました?

藤沢 一回メシ食いに来たよ、それから実家に帰って。そのときに「おまえ、いつ戻ってくんだ?」って聞いたら「5月くらい」って言いよるから、「アホかい!」って言うてやった(笑)。まぁ、もうちょっとしたら帰ってくんじゃねえかな。

—もうこのお店の看板息子みたいな感じなんじゃないですか?

藤沢 そうそう。まぁ、アレがいるからってこの店がそこまで繁盛するもんでもないけどな(笑)。でも、付き合いが7年にもなれば、ここにおってあたりまえだと思うからさ。まぁ、おっちゃんにしてみりゃかわいいヤツなんだよ……(しみじみと)。

—あれ? 藤沢さんも廣田さんばりに髪の毛の色を染めてません?

藤沢 お、コレかい? 大晦日にセコンドつくって話をしたらさ、ウチのお客さんの美容師が稲妻のかたちに染めてくれたんだよ。

—よくお似合いで(笑)。

藤沢 ハッハッハッ! もうだいぶ色が落ちたから、まだらになっちまってるけどな。まぁ、一種の願掛けみたいなもんでさ。でも正直なこと言えば、大晦日はガックリきたよな……。アイツ、負けるときでもいつも判定だっただろ?

—一本負けは初めてでしたね。

藤沢 でも、いい試合するよ、アイツは。ほら、リングの上で寝転んだままずっとやってたってさ、観ててもおもしろくもクソもねえから!(キッパリ)。

—わかりにくい、と?

藤沢 そうそう。まぁ、いまは本人も意外とサバサバしてるしな。「おまえ、大丈夫か?」「うん」くらいのもんだから。

—そのアッサリした感じがいいですね、無駄な言葉はいらないというか。

藤沢 でもさ、お客さんの中にはおっちゃんに気を使ってんのか、廣田のことを言いづらそうにしてる人もいるんだよな。情けねえけど試合終わってからおっちゃんがガクっときて、半月くらいボケ〜ってしてたもんだから。ありゃ、死んでたな(笑)。

—やっぱり相当ショックだったんですね。

藤沢 この店で元旦に、新年会と廣田の残念会ってことでお客さんたちと飲んだんだよ。そしたらやっぱり悔しかったのか、おっちゃんも途中からヤケ酒みたいになっちゃってな。こっちは酔っぱらってよく覚えてねえんだけど、あとからお客さんに涙流してたって言われたよ、ハハハ。いや、あんときはまいった。親の死に目でも泣いたことないっていうのにな……(しみじみと)。

—……。

藤沢 まぁ、でもアイツは根性あるから大丈夫だ!(キッパリ)。少なくともあと2年は頑張ってもらわねえと。で、ゆくゆくは自分でジムでも持てばいいんだよ。まぁ、とにかく次は勝つとこを見せてほしいよ。また負けたら今度はおっちゃんがリングに上がっちゃうよ、ホンマ(笑)。

—あとは一日も早くお店の手伝いにも復帰してもらって。

藤沢 ホントそうだよ! なんてったって看板息子なんだからな、ハッハッハッ! じゃあ、取材はこんなもんでいいだろ? あとはメシでも食ってってくれよ!

—はい、ごちそうになります!

【10年1月28日/都内・「ももや食堂」にて収録】

店内は一軒家を改装した作りなので非常にアットホーム。カウンター4席のほかに6人がけのテーブルが一つ。おっちゃんファンが多く、お医者さんからテレビ局職員、プロのスノーボーダーなど、さまざまな職種のお客さんが来店する。

代表的なメニューはメインが魚料理の「柿定食」と、肉料理の「栗定食」。ちなみにこの日の「柿定食」は茶碗蒸し、菜の花のおひたし、切り干し大根、大根の煮物、アジのたたき、ブリの照り焼き。廣田が食べる場合はさらに焼肉など大皿料理がつく。

『ももや食堂』は丸ノ内線「方南町」駅より徒歩8分。おっちゃんの似顔絵が書かれた看板が目印です!
東京都中野区南台5-22-23/TEL 090-1254-0060/営業時間 ランチ:11:30〜13:30、ディナー:17:30〜22:00/定休日 年中無休(土日のみランチが休み)

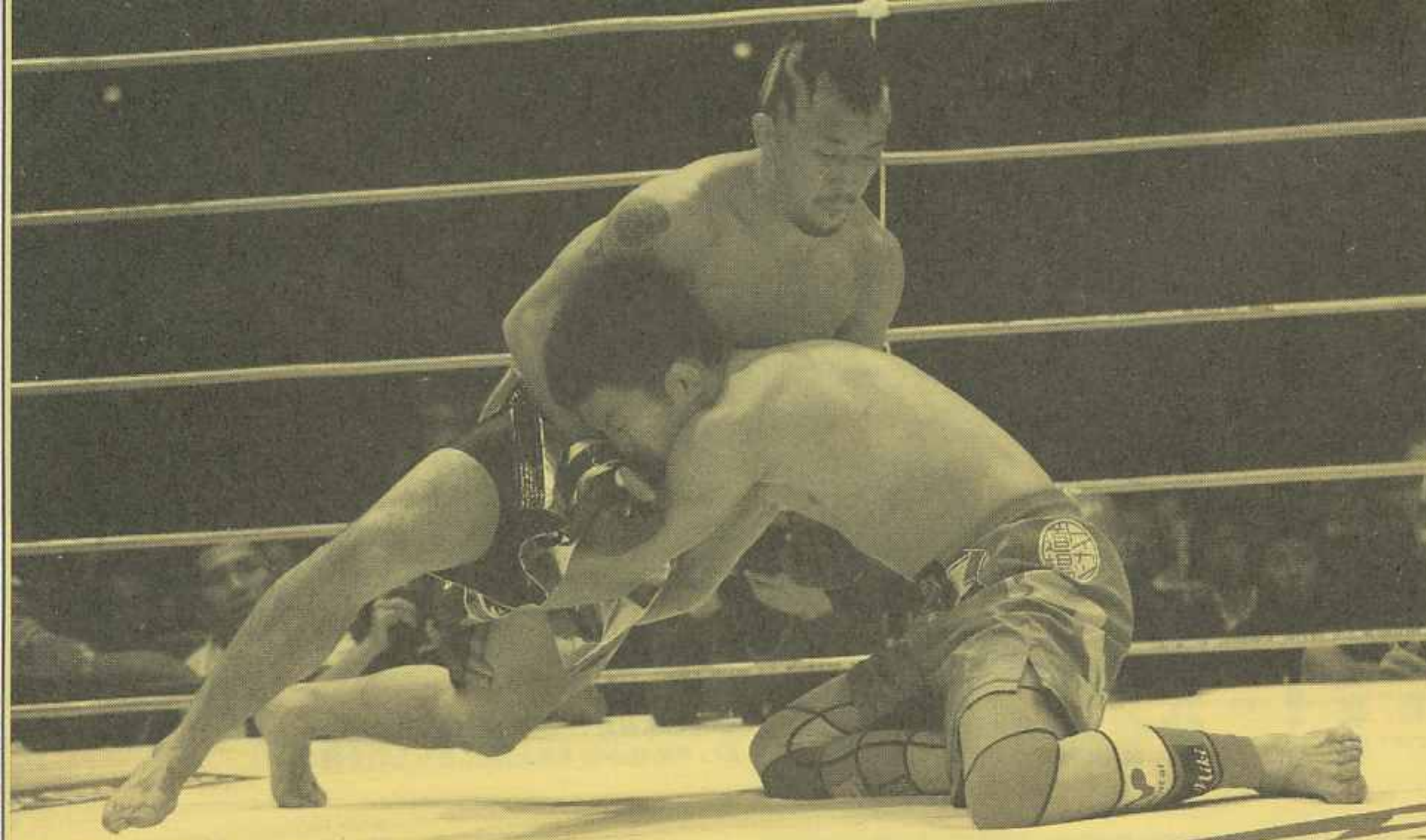
『Dynamite!!』廣田戦にパパは何を思う？

父の告白

青木正（パパ）

age 56

オヤジ特集といって、ぜひ取材したいオヤジといえば、
青木パパもその一人だろう。昨年末『Dynamite!!』の廣田戦では、
腕折り&中指を立てた行為に対して非難が飛び交った青木だが、
その父親の心境やいかに？
静岡にいる青木パパに電話取材で直撃した。

聞き手／松下ミワ　試合写真／乾真也、DREAM

――じつは今号の『kamipro』では「オヤジ」特集を組もうと思ってまして、いろんな名物オヤジにご登場いただいてるんですよ。

パパ　ああ。オレ、へんなオヤジだもんね（笑）。

――ハハハ。『kamipro』でもけっこうな名物オヤジです（笑）。で、青木パパといえば、いつも青木選手の試合は会場でご覧になってますが、やはり一番おうかがしたいのは『Dynamite!!』の廣田戦についてなんですよ。

パパ　ああ、やっぱりそれが来ますか。まあ、あの試合に関しては、腕を折ったことと中指のことを分けて考えてる人もいるみたいだけど、結局リンクしちゃってますよね。だから折ったことも問題でしょうし、非難されて当然でしょう（キッパリ）。

――「折ったことは競技の範囲内」という意見が多いですが、お父さんはそうじゃない、と。

パパ　だって、折ったうえに指を立てたことがこんなに問題になってるんでしょう。折ったことがあまりに衝撃的だったから、指立てももう一緒になっちゃいましたよね。でも、結局あれは試合が始まったときのテンションがずっと落ちなかったんですよ。だから、もしフルラウンド死力をつくして闘ってれば、もうちょっとテンションも下がってたのかもしれないけどね……。相手が90パーセント参ったの状態なのに闘い続けたというのは、そんだけテンションが上がりきっちゃってたんでしょう。

――それに加えて、廣田選手は絶対にタップしないと決めてたみたいです。

パパ　うーん、でもそれは難しいよねえ。あの時点で我慢するというのもやっぱり異常だと思っちゃうし。廣田選手の気持ちは充分わかりますけど、あそこは正直言って参ったしてほしかったです。セコンドだってタオルを投げてほしかったですよ。

――やっぱりそこは複雑な心境なんですね。

パパ　だってアイツだって同じ場面があるかもしれないんですよ。でも、なんでアイツが中井先生をセコンドにしているのかということだと思うんですよ。アイツ自身、考えて考えて考えて、「もう下駄を預けるのは中井先生しかいない」って結論を出してるわけですから。もうアイツだけじゃないですよ、たとえば川尻選手にもYさんがいますしね。

――山田（武士）コーチのことですね。なぜイニシャルトークにするのか不明ですけど（笑）。

パパ　（聞かずに）だから川尻選手はYさんに命を預けてるんですよ。ウチの息子は中井先生に命を預けてる。その中で、「アイツを五体満足で返してくださいよ」って気持ちは私にもあるんですよ。だから、廣田選手の場合もそういうことを考えちゃいますね。山登ってるときに危険だってわかってても登ってみる、それじゃやっぱよくないし、止めてほしいです。

――なるほど。

パパ　ただ、アイツがあの場面で手を緩められたかというと……それも困っちゃうよなあ。廣田選手の腕を取ってたとき、その手を抜いてチョークに移るべきだったという人もいるかもしれないけど、でもあれは無理なんですよ。だって宇野（薫）さんとの試合なんかは、アイツが2回も極めてたのを逃げたっていうんだからねえ。

――そういう前例があるだけに、絶対に離せなかったんですね。

パパ　そうそう。宇野さんとの試合では「2回完璧に取った」って本人も言ってましたから。「足もそうだし、三角絞めも完璧に取ったと思った」って。逆に抜けられたのが信じられないって言ってましたから。もう「あれは宇野さんの頭が極端に小さくて、しかも逆三角形だったからスルッと抜けられたんじゃねえか。それしか考えられない」って。そうなると取ったと思ったらもう全力で極めざるをえないんだよね。でも……そこで全力で極めたのがやっぱマズかったな。折ったのもマズけりゃ、指立てはもっとマズかったよ。

――そこは本人も超興奮状態だったんでしょうね。

パパ　そうなんだよねえ。だからアイツの考えは練習で100パーセントじゃなくて、試合で120パーセント、150パーセント出す、そういうスタンスだからね。そうしないと意味がないというのが昔からの彼の考え方だから。まあ、それを言ったのはオレなんですけどね（サラッと）。

――あ、お父さんの教えでしたか（笑）。

パパ　だから練習のチャンピオンというのはいくらでもいるんですよ。練習でバカ強いのが本番で強いのかというと決してそんなことないでしょ。だから本番でいかに120パーセント、150パーセント出すのかというと、やっぱあそこまでテンションを上げないとダメなんだよね。でもねえ……。

――なんか堂々めぐりになっちゃいますね。そもそも今回の試合前というのは、非常にカードが二転三転しましたが、試合前の青木選手というのはどんな感じでした？

パパ　そんなの、もうこっちは腫れ物に触る感じだから、こっちからは一切連絡はしませんよ。向こうから女房のところにメールが来て、それに返信する程度だよね。そのくらいピリピリしてますか

全力で極めたのがやっぱマズかったな
折ったのもマズけりゃ指立てはもっとマズかった

骨折りと中指立てで話題騒然となった廣田戦。青木パパは親という立場から「（廣田には）タップしてほしかったし、セコンドにもタオルを投げてほしかった」と複雑な心境のよう。パパ自身も考えが堂々めぐりのようだ。

ら。こっちのほうから「調子はどう?」なんて下手なことをした日にゃ、火に油を注ぐようなもんですよ!

——噛みつかれますか。

パパ　そりゃそうだよ。昔は毎年狂犬病の注射を打ってたけど、もういまは打ってないからアイツに噛みつかれたらたいへんなことになるよ!（笑）

——青木選手は狂犬病ウィルス持ち（笑）。でも、カードが二転三転してたというのはご存知でした?

パパ　そりゃあ、あんたたちの知ってるとおりだよ。12月の初っぱなかな、ホントは川尻さんで決まってたという話だからね。「川尻さんと決まったけど、自分はやるよ」って言ってたよ。

——そのあと、カードが変わったことが青木選手の怒りの原因だと言われてますが、それについては何か言われてましたか?

パパ　うん。いっぱいあるけど、それはしゃべれねえよ。それはオレよりも本人に聞いてくれ。ただ、そんなことより、オレって川尻ファンなんですよねえ（恥ずかしそうに）。

——あ、お父さんは川尻ファン!

パパ　まあ、向こうはわかってるかどうか知らないけど、オレ、2回握手してるからね。

——それはけっこうなミーハーじゃないですか（笑）。

パパ　だって川尻さんってもの凄く実直じゃん!　あのファイトスタイルがもう好きなんだよな。

——そうすると、青木選手と川尻選手の試合が決まりかけたというのは、かなり複雑だったんじゃないですか?

パパ　まあ、二人は同門みたいなもんだからねえ。オレとしては「ホントにやらなきゃなんねえの?」って気持ちもあるし、ただ川尻さんも描いてる絵があるだろうしね。だから川尻さんとやらなきゃなんねえんだったら、それはやるしかないよな。

——川尻選手は昨年の後半からずっとタイトルマッチを望んでます。

パパ　でも本音を言うと、相撲みたいに同門対決はやめてもらいたいよ。みんな観たくないよ、そんなの。格闘技だってあんまりやってほしくねえと思ってるのに、ましてや同門対決なんてね。

——え、お父さんは青木選手が格闘技をやること自体、あまり賛成じゃないんですか?

パパ　そりゃそうだよ!　ケガのねえウチに辞めてもらいたいと思ってる。だって、誰が好き好んで自分の子どもに格闘技をやらせたいと思う?　そりゃあさ、喜んでこっちも会場に観に行ってるわけじゃないんだから。でも、なんでオレが会場に行くようになったかというと、ウチにいて「どうなった!?」なんて言ってるほうがよっぽど身体に悪いんだよ。

——ああ、心配で居ても立ってもいられない、と。

パパ　だからいつからだろうなあ、2戦目か3戦目からか、もうオレも楽しんじゃうことにしたんだよ。青木真也が息子だというのを忘れて、ある程度楽しんじゃう。そうしないと、やっぱり自分の子どもが誰かを殴るのもイヤだし、殴られるのはもっとイヤだからね。……そう考えると、そうだなあ、ケガさせちゃったってのやっぱり申し訳ないね、廣田選手に。

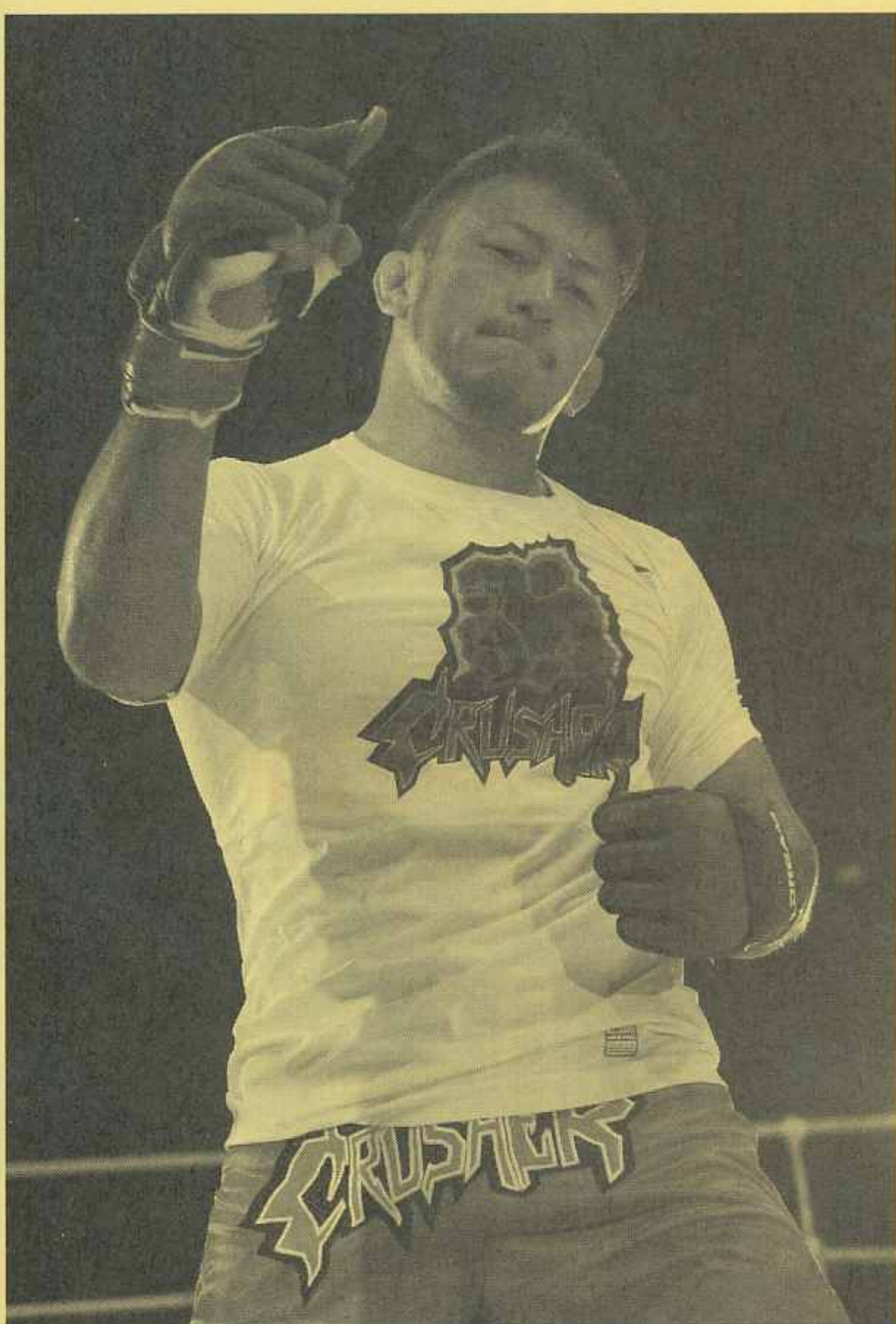
——廣田選手自身は「青木選手は全然悪くない」と言ってるみたいですけどねえ。

パパ　ありがたい話だねえ。そういうコメントが雑誌に載ったのを見たときには非常にありがたいと思ったよ。ただ、リングなんてのは上がったことないからわからないんだけどさ、オレなんかが上がったらホントにおしっこ漏らしちゃうかもしれないような場所じゃない。だからそんな場所で闘ってる子どもをやっぱり責めることはオレはできないんだよ。あそこのところであんだけテンション上げていかないといけないところだからね。……それに、小さい頃からアイツがあんな場所で平気だと思ってたら大間違いなんだからさ。

——といいますと?

パパ　いや、大きな間違いなんだよ。もう、本当にそこらへんにいるような普通の人と一緒でね、小学校のときの柔道の小さい大会でも本当に緊張しきってたよ。高校のインターハイでも東海4県で

宇野戦は足と三角絞めが2回完璧に極まっていたにもかかわらず、脱出されてしまったという。そうなると、廣田にもいつ逃げられるかわからないという恐怖が青木の脳裏にあったのも確か。

ケガのねえうちに辞めてもらいたい 誰が好き好んで子どもに格闘技をやらせたいと思う?

青木パパ自身、川尻の大ファンだというビックリ発言! いったい青木vs川尻となったらパパはどうなってしまうのか。その前に、青木vs川尻の行方はどうなるんでしょう?

優勝したぐらいだから、そこそこの実力は出せる選手だったんだけどね。でも、アイツが高校2年生のときかな、静岡県代表で出ててね、その大会がひな壇での試合だったんですよ。フラットの畳じゃなくて10センチぐらい上がったところなんだけどね。それが本部席の真ん前だったんで、緊張しちゃって負けちゃったんだよねえ。

──もの凄い緊張体質なんですね。

パパ　そういうのもね、アイツは一つ一つ乗り越えてきたんです。全部自分の中で消化して克服してってね。だからあいつが天性のノータリンだと思ってたら大きな間違いで、本当にナイーブな優しい子なんですよ。だからオレはよく言ったよ、「相手だって足が二本、腕が二本なんだからおまえと一緒だよ」って。それがいつの間にか格闘技型人間になってリングに上がってるんだけどね。それも緊張すると思うし、よくあそこまで堂々と上がれたもんだよ。だから、たまたま総合格闘技に考え方や体格がピッタリで、それに研究熱心だし、練習好きなんだよな。

──青木選手は部類の練習好きで有名ですよね。

パパ　柔道選手のことだって、全部「どこどこの誰々」って、そういう話をすると話が長くなるもんな。だからその研究熱心さと練習好きがいまのアイツを作ってるんだよ。ただ、メンタルの部分をどう作ってったらいいのかということだよねえ。そこは困っちゃうよなあ。

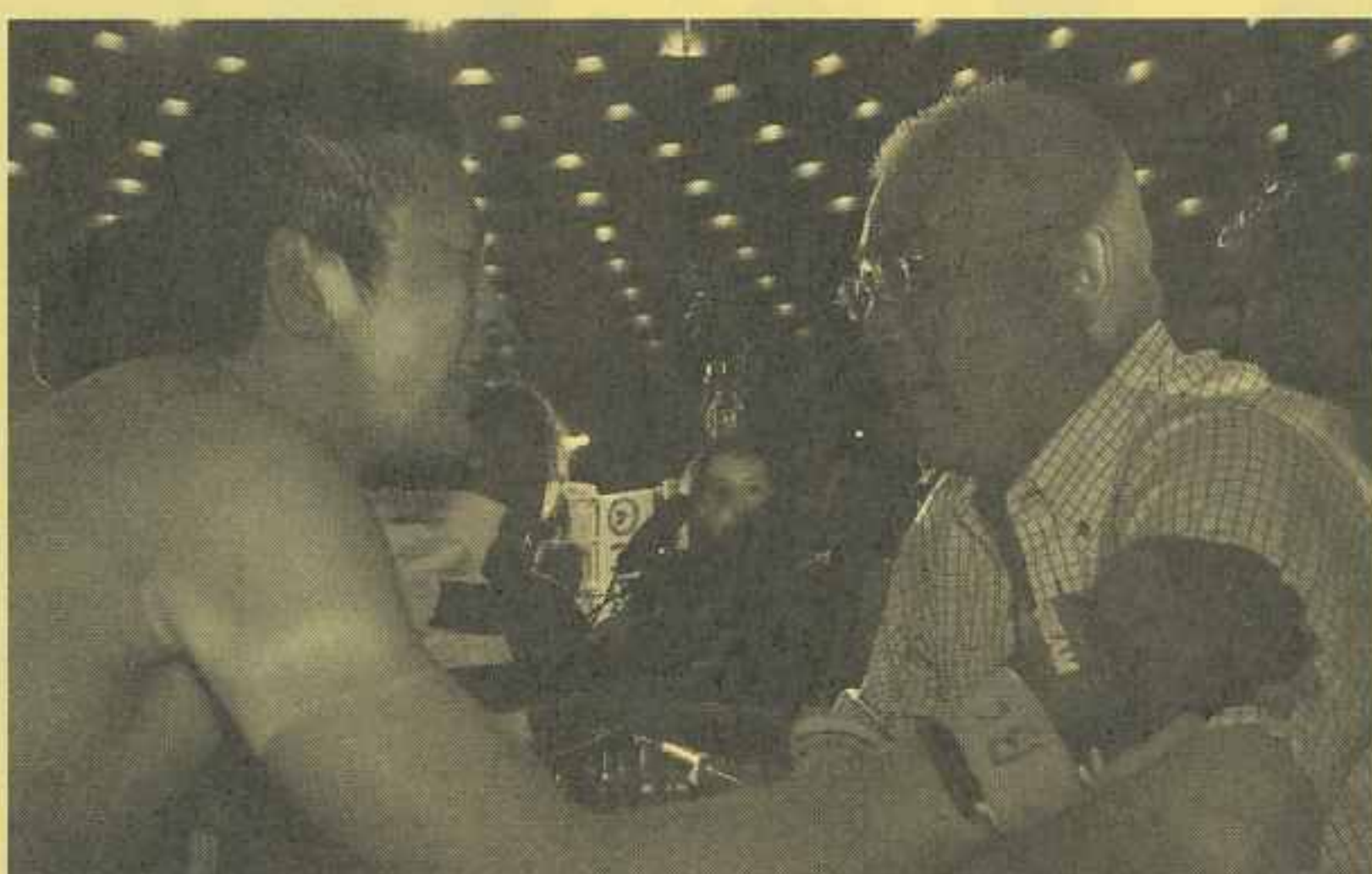
──お父さんも困っちゃいますか。

パパ　困っちゃう。オレにコメントを求められても困っちゃうしね。このインタビューだって、いいところだけを使ってもらわないと、「あのクソオヤジ！」ということになるしね。

──気をつけます（笑）。でも、ただ単純に『Dynamite!!』の廣田戦を観ても、青木選手ってホントに強いなって思っちゃいますね。

パパ　たまたまいいところが出ただけでしょ（アッサリ）。

──そんなご謙遜を。

パパ　いや、そりゃそうでしょう。また能書きタレちゃうけどさ、相手の一番弱いところに自分の一番強いところをぶつけて勝つというのが格闘技でしょ。それが、たまたま勝ちにつながっただけですよ。だからそれは逆もあることで、廣田選手の一番強いところがアイツの弱いところにあたったかもしれないんでね。だからいままでアイツが勝った相手だって、次やったら勝てないかもしれない相手ばっかりだからね。そのくらい勝負は厳しいんだよ。

あおき・ただし■1953年5月26日、静岡県出身。最強のグラップラー・青木真也を息子に持つ、最強の林材業（？）。青木真也の試合には必ず駆けつけており、よくビジョンにも大写しされる「この親にしてこの子あり！」な名物パパである。

父の告白

──でも、こうなってくると青木選手を海外で観たいというファンがますます増えていると思うんですよ。お父さん自身、青木選手が海外で試合をするというのはどう思いますか？

パパ　まあ、オレには細かいことはわからないけど、単純に海外から需要があるということが嬉しいだろうし、非常に光栄なことだと思いますよ。

──青木選手自身もけっこうワクワクしてるんじゃないですか？

パパ　うーん、どうだろうねえ。意外と彼は二面性を持ってるからな。ただ、彼の求めてるものが確実にあるわけじゃないですか。それがアメリカにあるだろうことも事実なんだろうし、そこで自分を見せたいのかというのはあるだろうね。で、やっぱり30歳でアメリカに行くというのもできるだろうけど、でもいま行くのとはまったく違うからね。だからいま行って闘えるのであれば、試合ができるという喜びに浸ってるんじゃないですか。アイツの心中を察すると。

──やっぱりそうですよね。

パパ　その件で直接話したわけじゃないけどね。で、これも昔から言ってることだけど「おまえの試合が観たい」って言われたときに、シュンとしてビビっちゃうこともあるんだけど、「待ってました」って堂々と出ていけってことだよね。それはもう「待ってました」と言って出るほうが断然いいんだから。人が「どうしよう……」と思うときにおまえも「どうしよう」なんて思っててどうするんだよって。それを自分のところに引き寄せてくるぐらいじゃないとダメだって言ってたんだよ。

──そんなところまでフォローを。心強いですね、お父さんは。

パパ　そんなことねえよ。でも、いままでさんざん挫折を味わってきたくそジジイが言うことだからね。オレの人生なんて挫折の繰り返しだよ。でもね、そういう話ってのはアイツはけっこう覚えてるところあるんだよね。

──ほう、それはどういうところで感じるんですか？

パパ　感じるも何も、銭湯なんか行って話をしてるときにさ、なんとなくガキのときに話したことを覚えてたりするんだよ。ガキのときから繊細だったからね。でも、そんなヤツに「おまえは気が小さい」とか言うとダメで、「やっぱ勝負師は違うねえ、繊細じゃないとやっぱり勝てないんだな！」とか言ってあげてたんだよね。そしたら、アイツなんかすぐその気になっちゃうんだから。わかるでしょ？

──ええ、それはわかるような気がします（笑）。

パパ　「図太い神経でアホ面下げてるヤツはろくなヤツいねえ」ぐらいのことを言ってやらんとね。だからこそ細かいことを一つずつ潰していくような感じで練習しているんだよ、アイツは。

──青木さんが練習熱心なのはそういう理由もあるんですね。

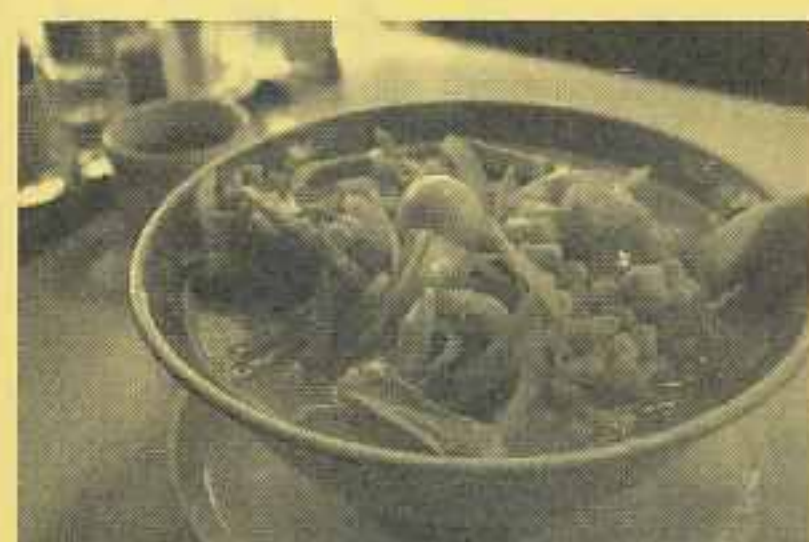
パパ　だから本当は普通のヤツなんだよ。それがあそこまでになったんだからね……（しみじみと）。これを読んだ人は「くそオヤジ、バカなことばっかり言ってやがる」と思ってると思うけど、ホントにアイツはそういうヤツなんですよ。わかってくれとも言わないけどさ。

【10年2月3日／電話取材にて収録】

分に向いてるのかもわからなくな
ん。能力がありゃワンマンでやれば
てるんじゃないの？
ま、TBSは
って八百長するだろうが。言ってな
て三島由紀夫って知ってるでし

なぜか

中華屋のオヤジが最近の若者とマット界にもの申す！

「人生ってのは八百長なんだよ！」

神楽坂の『中華麺屋 龍朋』のマスター

松崎隆明

age 62

オヤジ特集になぜか中華屋のオヤジが登場！ 最近無事に引っ越しを済ませた『kamipro』編集部、ご挨拶がてら、ご近所の中華屋へ取材にいったところ、なんとも深い発言が連発。せっかくなので、この道40年、重みのあるオヤジの言葉を聞け！

聞き手&撮影／松下ミワ

——あのー、私どもは、最近近所に引っ越してきた『kamipro』編集部の者なんですけど……。

中華屋のオヤジ（以下、**中華**）ああ、聞いてる、聞いてる。あのツースリー（『kamipro』本誌のデザインを手がけるデザイン事務所）の3階に引っ越してきたプロレス雑誌だろ？

——そうなんです！　マスターはプロレスや格闘技に詳しいんですか？

中華　観てるよ!!　ツースリーにもサダハルンバ（谷川貞治FEG代表）にそっくりなヤツがいるしな。

——んあ～！　谷川さんのことは知ってるんなら詳しいほうですね。今回はマスターのように歯切れのいいオヤジさんから若者世代に活を入れていただくべく、ご挨拶がてら取材にやってきました。

中華　あ、そう。ここの店はね、もう31年ぐらいやってるから。最初は板橋で4年ぐらいやって、そして神楽坂に引っ越してきたんだけどね。

——老舗中の老舗なんですね。

中華　経っちまえばすぐだけどね。もちろん下積み期間もあったんだけど。だから18歳で修行を始めて、27のときに独立したのかな。まあ、たいしたことないんだけどさ。

——そもそも中華麺屋をやろうと思ったのはどうしてなんですか？

中華　そりゃ、俺にはこれしかなかったからね。だから消去法だよ。会社はイヤだし、勤めたとしても上司とソリが全然合わないだろうし。そういう自分の性格がわかっていたからね。で、高校3年のときにしょうがねえから面接だけでも受けようと思ったんだけど、会社の前まで行って帰ってきちゃったんだよ。

——あら、そんなにイヤだったんですね（笑）。

中華　フフフ。先生もしょうがないから「自衛隊の面接でも行ってこい！」って言われて、まあそれは先生の顔を立てて受けたんだけどね。でも、そしたら一緒に面接受けに行ったヤツが「東京でラーメン屋やってる知り合いがいる」って言うんで、じゃあラーメン屋でもやろうかっていう感じだよね。

——それで中華麺屋に!?

中華　食いもん屋だったら腕一本で勝負できる世界だからね。だから俺はこの世界しか知らないんだよ。

——でも、料理の世界って修行がつらそうですよね。

中華　確かにな。でも、辞めたいだとか、そういうことは一切考えなかったんだよね。まあ出前の仕事が多かったから、それが唯一つらかったぐらいかなあ。もう昔は梅雨といったらホントに毎日雨が降ってたんだよ。で、カッパはあるけど、いまみたいな軽いカッパじゃなくて、雨が染みてきたらどんどん重くなってね。それを5年間やったかな。あれはきつかったねぇ……（しみじみと）。

——周りには辞める人っていなかったんですか？

中華　やっぱいた。でも、いまのほうが辞めるのが普通だろ？　どんどん辞めるということは、ほかにも仕事があるということなんだろうけど、そうするとじゃあ結局何が自

馬鹿にならないとダメ！ 40年も中華屋やってるオレも馬鹿だけど

分に向いてるのかもわからなくなっちゃうんじゃないの？

——それがわかる前にイヤになるんでしょうかね。

中華　まあ、やっぱり崖っぷち感がないよ。結局そこが希薄だよね。だからもう「芽が出る」とか「石の上にも三年」とかいう言葉は死語だよ、死語!!（バンバン）。

——確かに最近は聞きません。

中華　でもね、いまの若い者はかわいそうだとも思うよ。だって、なんにしても情報が多すぎるでしょうが。いまの若い人たちなんか、俺たちが若い時代よりも100倍ぐらい情報があるもん。俺たちの時代は雑誌だって『週刊新潮』と『週刊朝日』と『文藝春秋』ぐらいだったよ。でも、いまみたいに情報過多だったら頭脳明晰なヤツじゃないと分析できないよな。ウチの女房だってケータイに振り回されてるもんね！

——奥さんも情報に翻弄されてますか（笑）。ちなみにマスターはお弟子さんを取ったことはないんですか？

中華　ああ、開業するときに一緒に修行をしてたヤツがついてきたんだよ。だから弟子というより後輩だな。でもそいつも、もうリタイアしちゃったなあ。開業というのもね、やっぱり自分で思ってたのと実際は相当ギャップがあったよ。だって自分が教えたとおりにならないもん。能力がありゃワンマンでやればいいのかもしれないけど、俺なんか普通の人間だからワンマンじゃ潰れちゃうと思うしね。だから、自分の店でも思いどおりになるのは半分ぐらいじゃないの？

——ただ、マスターはけっこういまの若い世代に同情的ですよね。

中華　だって、俺らの時代だって松下幸之助なんかは使い捨てのニッポンを作ったわけだろ？　そんなの若い人にだけ責任があるわけじゃないよ。それに、なんだかんだ言って、俺らの世代は戦後の生まれだから自由主義なんだよね。だから、俺が子どもの頃は近所のオヤジにも怒られたけど、俺らが大人になって怒ることはないんだよ。最近はそういうのが重要だって言うけどさ。俺、娘が3人いるんだけど、「おまえらのことは信用してるから」って言ってるもんな。

——近所のオヤジが叱りつける時代もいまや幻想なんですね。でも、いまのオヤジ世代ってめちゃくちゃ元気があるし、実際に凄い方が多いですよね。

中華　そうかい？　でも王（貞治）とか長嶋（茂雄）だって先天的に凄いわけじゃないと思うよ。やっぱり努力だと思う、好きなことを一生懸命やってね。そうすると勝手に周りが騒ぐんだから。でも格闘技でいうと、亀田（興毅）なんかはよくやってるんじゃないの？　ま、TBSはやりすぎだけどな！

——TBSはやりすぎですか（笑）。

中華　TBSもあれだよ、楽天が買収しかけたぐらいからもう焦ってるもんな。空回りだよ。だから亀田の番宣なんかやってるけど、あれも異様だもんね。あんなにいっぱいやってたら逆に試合を観たくなくなるよ！　しつこいんだよ!!

——中華屋のオヤジさんも食傷気味ですか。

中華　ま、さすがにあれだけやるからウチの娘なんかも「亀田どうなった？」って気になってたみたいだけどねぇ。

——娘さんは気になってる、と（笑）。

中華　そうなんだよね。ところでさ、いまのプロレスでいうと、棚橋（弘至）なんかが一番人気になっちゃうなのかね？

——うーん、どうなんですかねぇ……。

中華　まあ、プロレスは難しいよね。プロレスも「八百長じゃないか」とかって言ってさ、けっこう嫌いな人は嫌いだもんな。でも俺が思うに、そういうヤツは完全に考えが足りないんだよ！　だってプロというのは八百長なんだよ。

——“プロ＝八百長”ですか！

中華　そうだよ！　プロとはお金でしょ？　お金が動いてる世界で八百長はあたりまえなんだから!!

——あたりまえ！（笑）。

中華　だって中国なんてサッカーの八百長で大変だろ。セリエAだって同じだよ。どこもかしこも八百長で成り立ってるの。あんたら編集者だって八百長するだろうが。言ってないこと書いてるんじゃないの？

——さすがに言ってないことを書いたりはしないですけど（笑）、“演出”という名の編集はしますね。

中華　でしょ？　俺だって八百長するんだから。

——マスターも八百長を!?

中華　俺だってごまかしながらやってるんだよ。みんな八百長しながら生きてるんだよ！

——確かに素直に生きるって難しいですよねぇ……。

中華　うん、正面切って言えないことは多いけど、プロとは八百長を織り交ぜながらうまく生きてるんだよ。まあ、プロレスに話を戻すと、昔のプロレスラーが痛がってた技をいまどんだけやっても痛がってないって問題もあるけどな。

——そ、そうですね。

中華　でも、俺がプロレス好きなのは技の凄さとかだけじゃないんだよ。結局、自分で店を経営してるから思うけど、あの過酷な業界のことを考えると、あれは凄いと思う。だって何人のレスラーや関係者が自殺してるんだって話だよ。

——確かに……。

中華　そのくらい過酷だってことだろ？　まあ、ほとんど金がらみだと思うけどね。でも、そういう場所にいたからプロレスラーは国会議員になっても平気なんだよな。

——議員になったレスラーは多いですね。馳先生は現役ですし、猪木さんも大仁田厚もそうですよね。

中華　でも、本来なら政治家の世界なんてとんでもないはずだよ。だって三島由紀夫って知ってるでしょ？　あの人が中曽根康弘を見て「この人にはかなわない」って言ったんだから。要するに魑魅魍魎の世界だよ。

——そこで渡り合えるのがプロレスラーってことなんですね。

中華　半端じゃないって。三沢光晴も事故だけど、そこまでしないといけないって話だからね。もう馬鹿だよ、馬鹿。まあ、40年も中華屋やってる俺も馬鹿なんだけどね。でも、馬鹿にならないとダメだよ。

——結論的には「馬鹿になれ！」。

中華　まあ、そういうことだろうな。……って、いいのかい？　こんなとりとめのない話になったけど。

——いやいや、たいへん勉強になりました！　これからもご近所さまとしてよろしくお願いします。

【10年2月1日／都内・『中華麺店 龍朋』にて収録】

現役最古参のオヤジが
衝撃のノア脱退劇、
そして引退について激白！

age 61

力道山の息子

百田光雄

「偉大な父の時代から
プロレスを見続けてきたのが
俺の財産なんです」

日本のプロレスの始祖・力道山の次男であり、全日本プロレスの旗揚げメンバー、
そしてノアでは副社長を務めていた百田光雄。ノア退団後の動きに
注目が集まるプロレス界の生き字引が、その半生を振り返りながらいまの胸中を語ってくれた。

聞き手／阿修羅チョロ、鈴木佑　試合写真／平工幸雄

百田光雄

俺には馬場さんや猪木さん以上にプロレスを見続けてる自負がある

幼少時代に兄の義浩氏（00年11月22日没、享年54）とともに、偉大な父が見守る中でプロレスごっこに興じる百田。義浩氏は80年にプロレスデビュー、87年まで現役を続けた。

—いやぁ、今回は取材を受けていただいて恐縮です!

百田　いやいや。俺なんかのイメージだと昔から『週刊プロレス』と『週刊ゴング』がある中で、気づいたら『kamipro』が名を上げてきたっていう感じがしてるんだよね。まぁ、門ちゃん（門馬忠雄）からも『kamipro』は公平な立場で書くよ」って聞いてるし。

—ありがとうございます（笑）。でも、百田さんもご存知だと思いますが、我々は長いあいだノアさんからは取材拒否されてまして……。

百田　あ、そうなの?

—え、ご存知じゃなかったですか?

百田　うん。ほら、基本的に取材とかそういう管理は広報というか、いわゆる背広組がやってるから。俺個人はこれまでにもどこも取材拒否とかしたことないしね。

—そうだったんですね。

百田　で、今日は何を話せばいいの?

—今回は百田さんの長いプロレスキャリアを振り返ってもらいながら、やはり昨年に電撃退団されたノアや今後のことを中心にお聞きしたいと考えてまして。

百田　なるほどね。そうか、もう全日本プロレスをみんなで退社して2000年にノアを立ち上げてから、今年でまる10年になるんだな……（しみじみと）。

—百田さんにとっては相当濃密な10年だったんじゃないですか?

百田　そうだね。ただ、俺の場合は今回の退団以前にも、日本プロレスを辞めてる過去があるから。

—日プロを辞めたときは、百田さんのお兄さん（百田義浩）を日プロの社長にするという約束を反故にされたのが理由なんですよね。

百田　まぁ、要するに俺の父である力道山が亡くなったとき、その株を未亡人が相続して社長になったわけ。で、あくまで口約束なんだけど、ウチの兄貴が成人したら新社長に就任するという話があったの。でも、いつまで経ってもその話が進まないから、俺がそのときの代表だった芳の里さんに直談判に行った、と。まぁ、それで結局物別れに終わったから俺は日プロを辞めて、そのあと馬場さんが全日本プロレスを旗揚げするときに声をかけてもらってね。

—1972年ですね。

百田　それから全日本で2~3年やってからメキシコで1年、さらにアメリカで1年。そのあとは日本に戻って、この小さい身体でずーっとやってきて……そう考えると長いね（笑）。

—日本のプロレス界をずっと見続けてるというか。

百田　そうだね。やっぱり父が作ったプロレスっていうものを、少なくとも俺は馬場さんや猪木さんたち以上に近場で見てきてるという自負はありますね。で、これは僕の考えなんだけど、やっぱりプロレスの会社はその時代のトップのレスラーが社長になるべきっていうのが、常々思ってることなんだよね。

—そのあたりは今回のノア退団の理由の一つに上げてましたよね。百田さんは小橋建太選手を社長に推薦して。

百田　そうね。そのトップで頑張ってるレスラーをファンも信頼してくれてるわけだし、それを周りが盛り立てれば、俺は会社っていうのはある程度スムーズに動くと思うんだよね。逆にトップでないレスラーが上に立つと、いろいろ不平不満も出やすくなると思うから。

—それは選手からもフロントからも?

百田　そういうことだと思う。でも、たとえば新日本もいまは選手が社長をやってるわけではないし、それがいいか悪いかっていうのは別の話でね。WWEにしてもビンス・マクマホンがずっと社長だし。でも、やっぱりスターがその団体の象徴としてトップでいるべきだとは思うね。まぁ、全員がスターっていうのはもちろんありえないというか、俺としては一人か二人っていうかたちが理想なんだけど。

—なるほど。

百田　あんまりスターがいすぎちゃうと、ファンの憧れもそれだけ薄くなると思うから。無論、第1試合からスターがいる必要はないしね。第1試合っていうのは技にとらわれずに基本に忠実にやって、メインで「これがほんとのプロレスだ」っていう凄さをお客さんに見せられればいいのかなって思うんだけど。

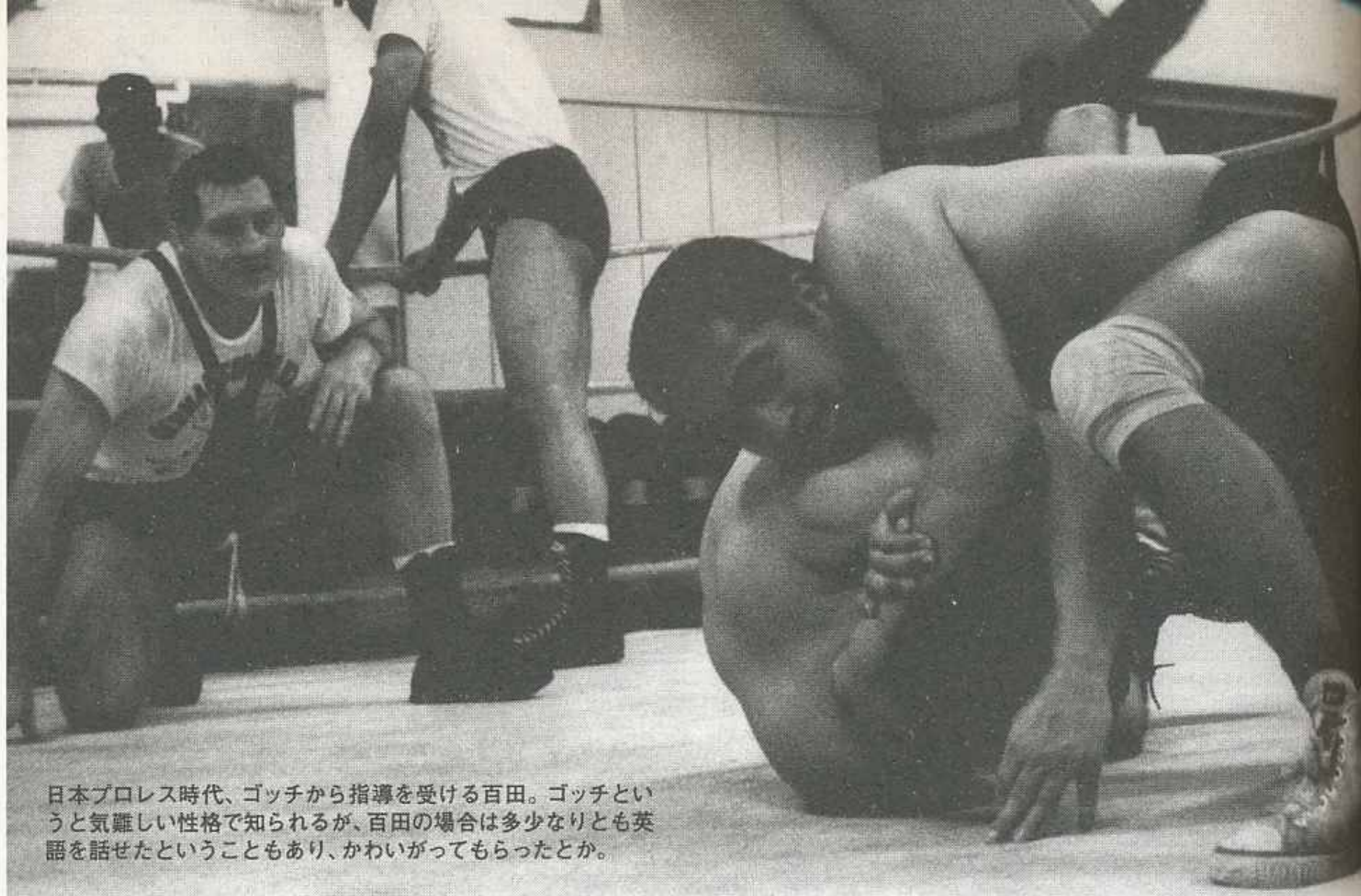
—いまは第1試合からどんな技でも使う風潮というか。

百田　うん。昔は「先輩の技は絶対に使うな」というのが暗黙のうちにあった。でも、馬場さんも全日本になってから多少変わってきたんだよ。「使うのはいい。だけどそれをウリにしてる選手よりうまく使えるんなら使え。そうじゃなきゃやめろ」というのが馬場さんの考え方だったから。極端に言えばラリアットにしろ、ハンセンより迫力を出せるんならやれってことだよね。で、トペ・スイシーダなんかは日本人で俺が一番最初にやってるんだけど、そのあとに俺よりきれいに飛ぶヤツがいっぱいいたからさ（笑）。

—ほかにも使う選手が出てきた、と（笑）。

百田　まぁ、だから俺が第1試合を

俺は30代までは若手選手と同じ練習メニューをこなしてたから

やってるときは基本的には地味な試合しかさせなかったよね。べつに教育係というわけじゃないけど、やっぱり俺はデビュー直後の選手と対戦する場合が多かったから。全日本のときには三沢光晴選手や川田利明選手。もちろん日プロのときは藤波辰爾選手なんかも俺とやってるし、

日本プロレス時代、ゴッチから指導を受ける百田。ゴッチというと気難しい性格で知られるが、百田の場合は多少なりとも英語を話せたということもあり、かわいがってもらったとか。

佐々木健介選手もジャパンプロレスで全日本に参戦したときによくやってるしね。

——百田さんは"6時半の男"って言われてましたけど、いろんなトップ選手が若手時代にその胸を借りたわけですね。

百田 三沢選手も川田選手にしろ、俺と100試合前後はやってるんじゃないかな。で、たぶんこっちが9割以上の勝率だと思うんだよ。まぁ、俺に一旦勝てばあとはメインまで上がってっちゃうからなんだけど（笑）。

——逆に百田さんはメインイベンターを志したことは？

百田 いや、俺は自分の能力を知ってるから。抜群の運動神経や体力を持ってるわけでもなんでもない。人にはそれぞれ役割があるからさ。レスラーは「俺が俺が」が多いんだけど、俺はそういうタイプじゃないし。

——なるほど。

百田 だけど、俺はプロレスに入ったときから、何より基本っていうものをかなり叩きこまれてるからね。まず、自分の身体を守るっていう意味では受け身。これが何より一番大事なの。あとは技の基本、入り方の基本だよね。当時、日プロでゴッチ教室っていうのがあったんですよ。

——カール・ゴッチをコーチとして招聘したんですよね。

百田 そうそう。そのあとゴッチは新日なんかにも来てたけど、一番最初に教えられたのは俺なんかなのよ。

——相当キツかったらしいですね。

百田 そりゃあもう！ もう10時になったら「鍵を閉めろ」って言って、月曜から金曜まで一日4時間ぐらいぶっ続けで練習してたから。ゴッチは理論的だから黒板で技の説明をするんだよね。簡単にいえば、クォーターネルソン、ハーフネルソン、フルネルソンの違いから始まって、力を入れずにテコの応用で相手をうまく倒す方法とかね。

——当時、練習といえば新日本がいわゆるセメント的なスパーが中心なのに対して、全日本は受け身を重視したものだったって言われてますけど、このあいだターザン後藤さんに話を聞いたら「百田さんには極めっこで相当シゴかれた」って話をしてたんですよ。

百田 そんなシゴいた覚えはないけどね（ニヤリ）。ただ、俺は30代までは間違いなく若手選手と同じ練習メニューをこなしてたから。だって、自分がやってないのにほかの選手に「やれ」とは言えないじゃん。俺自身がやってないやつに「やれ」って言われるのが嫌だったからね。

——それを裏づけるエピソードだと思うんですけど、新日の真壁刀義さんが05年にノアに参戦した当時、試合前にノアの選手に新日の意地を見せようとして、ずっと練習を続けてたそうなんですね。で、だんだん周りの選手たちが練習を切り上げていく中で、最後まで残ってたのが小橋さんと百田さんだった、と。

百田 フフフ。まぁ、小橋選手の場合は基本的に練習好きだし、練習しないと不安になるんだろうね。俺の場合はちっちゃいから、練習をしないと身体を維持できないっていうのがあるんだよ。やっぱりリングに上がるからにはお客さんにみっともない身体は見せられないから。

——そのへんはプロ意識というか。

百田 俺が一番気にしてたのは、花道を歩くときに「お、まだ凄いな」って言われるとホッとするわけ。でも「なんだ、あの身体」って言われた時点で、俺はもう引退しないといけないと思うから。

——そういう考えっていうのは誰の影響が大きいんですか？

百田 やっぱり親父だろうね。親父が亡くなったのは39歳のときなんだけど、当時はプロレス以外に事業もやってるし、もう一日中忙しいわけ。でも、どんなに夜中に帰ってきても、朝の7時ぐらいにパッと起きて、自分の部屋で腕立てとダンベルをガーっとやってパンプアップさせてからじゃないと外出しなかったからね。冬場だろうが人前に出ていくときに半袖しか着なかったりさ。そういう

百田光雄年表

1963年
12月　父・力道山が永眠。

1968年
2月　日本プロレスに入門。
12月　高千穂明久、戸口正徳らと韓国に遠征、現地の選手相手にデビュー戦を行なう。

1970年
11月　vs新海弘勝戦で日本デビュー。

1971年
12月　上層部との衝突から日本プロレスを退団。

1972年
10月　全日本プロレスの旗揚げに参加。兄の義浩もリングアナとして参加。

1974年
2月　メキシコに初遠征。リキドーザン・セグンド（力道山2世）のリングネームを名乗り、デビル・ムラサキとのコンビで活躍。

1975年
メキシコからアメリカに渡り、アマリロやテネシーでファイト。
12月　『力道山13回忌追善特別試合』に出場のため帰国。

1989年
4月　仲野信市を破り世界ジュニアヘビー級王座を獲得。その後、二度の防衛に成功。

1990年代
若手選手の壁として立ちはだかり、"6時半の男"のニックネームが定着。一方でジャイアント馬場、ラッシャー木村とファミリー軍団を結成、永源遙や大熊元司ら悪役商会とのカードは「休憩前のメインイベント」といわれるほどの人気を博す。

2000年
6月　三沢光晴とともに全日本プロレスを退団し、ノアに移籍。副社長に就任。
11月　自身のデビュー30周年記念試合。小林健太（現KENTA）相手に、基本に忠実な往年のファイトを披露した。

2003年
12月　菊地毅と組んで丸藤正道&KENTAが持つGHCジュニアヘビー級タッグ王座に挑戦。

2004年
2月　新日本プロレス両国国技館大会で獣神サンダー・ライガーが持つGHCジュニアヘビー級王座に挑戦。
7月　ノア初となる東京ドーム大会の第1試合で永源遙と対戦。

2008年
2月　川畑輝鎮の持つGHCハードコア王座に59歳にして初挑戦。

2009年
1月　「レジェンドヒール百田」のリングネームでスキンヘッド姿で登場。
6月　試合中に三沢光晴が死去。7月6日に田上明が新社長に就任すると、自らが推した小橋建太が社長にならなかったことを不服として、7日に辞表を提出してノアを退団。

三沢社長が亡くなるときを看取ったのは俺だけだからね……

プロ意識があってこそ、トップとしてやってこれたんだろうし。

——トップという意味では、百田さんとしては全日本やノアの社長を三沢さんがやっていたのはベストでしたか？

百田　そうそう。リング上の活躍に加えて、三沢社長の場合には決断力も責任感ももの凄くあったから。俺は副社長だったけど、社長が「（債務は）僕が全部受けます」って言うんだから、こっちは何も言う権利はないよ。もちろん三沢社長が株を過半数持ってたっていうのはあったけど。

——でも、百田さんは副社長として三沢社長をサポートしてきたわけですよね？

百田　やっぱり力道山、百田家の名前があるんで、それで対応できることは全部してきたつもりだし、それは三沢社長も理解してくれてたしね。何かトラブルが起きたときに俺がカバーしたこともあったけど、まぁそういうのは話に出すようなことじゃないから。

——昨年、その三沢さんの身に悲しい出来事が起こりました。

百田　うん……。やっぱり三沢社長がプロレスに入ったときのことも知ってるし、亡くなるときを看取ったのも俺だけだからね。あのときは病院に搬送して、心臓マッサージをしてるあいだに一回だけ心電図が反応したんだよ。でも、最終的には先生に「そろそろ瞳孔が開いてきてるんでちょっと厳しいです」と言われて、「もう先生の判断にお任せします」ということで、奥さんにもすぐ来てもらってね。やっぱり三沢社長こそがノアの象徴だったからね……（しみじみと）。

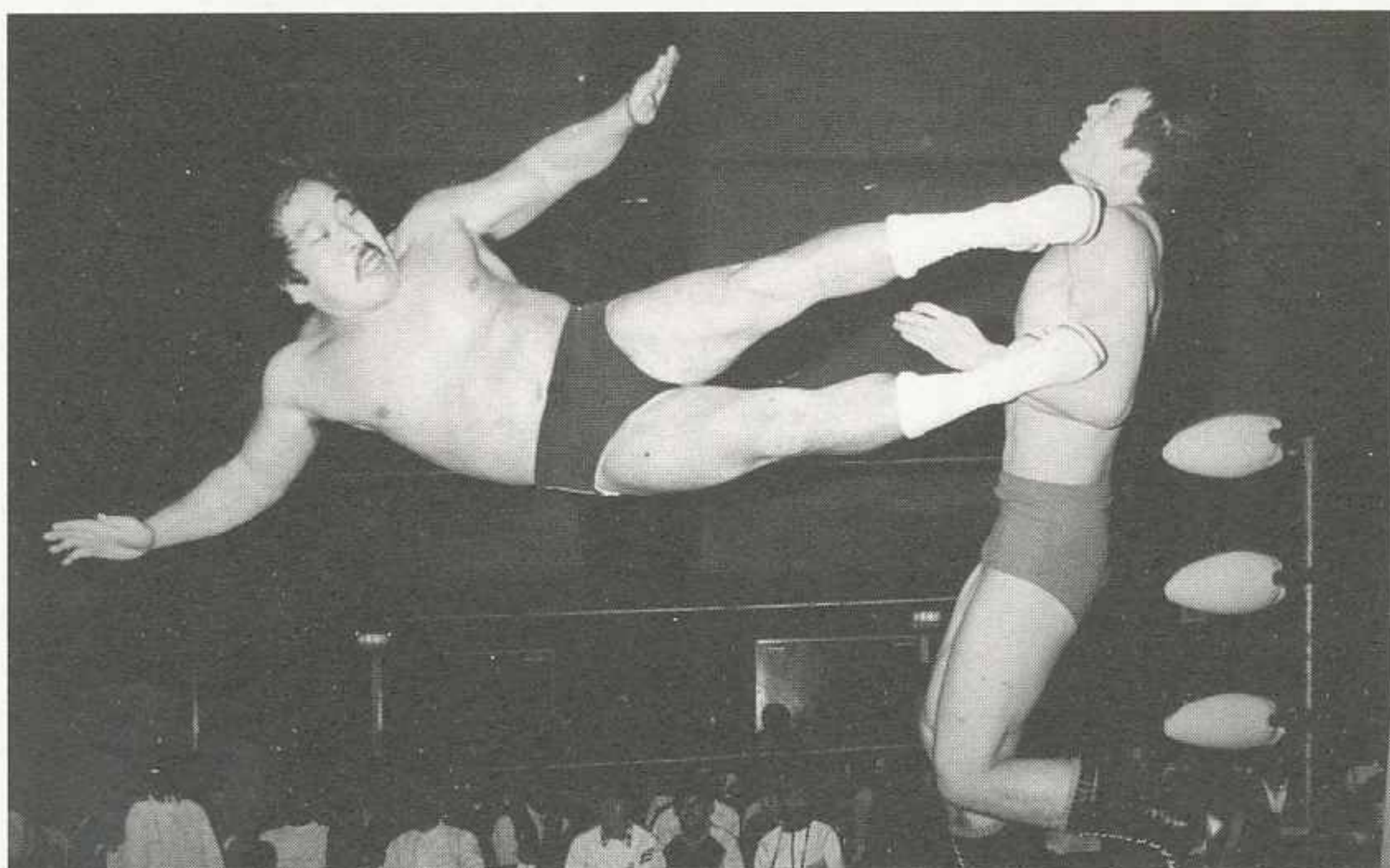
——そのノア旗揚げのときは全日本からの大量離脱というかたちになりましたけど、その中に百田さんがいたのは大きなことだったと思うんですよ。

百田　あのときは分裂ではなくて、完全に新団体の旗揚げみたいなかたちをとらないとイメージが悪いと思ったから、俺が選手それぞれに意思確認をしたんだよね。ただ、本人が全日本に残りたいっていうことに対しては、俺がどうこうする必要はないと思ったけど。まぁでも、できればみんなで移ったほうがいいってことは言ったよ。それはのちのち、テレビ局をつけるためとかそういうことも含めてね。

——ノアの地上波中継開始に関しては、百田さんのご尽力が大きかったみたいですね。

百田　ウチの兄貴と俺とで日本テレビへ行って、会長から社長から「ぜひお願いします」ということで挨拶周りをしてね。で、旗揚げから半年くらいして地上波がつくことになって。まぁ、はっきり言って、その見通しがなきゃあれだけの大所帯で旗揚げはできないよ。

——そういう意味では立役者というか。

百田　立役者かどうかは知らないけどさ。あのね、俺なんかはプロレス団体では選手が一番大事だと思ってるんですよ。これは言い方が悪いかもしれないけど、営業とかそういうものに関してはいつでも切り替えがきく、と。だけど、選手っていうのはすぐに切り替えはできない。だからこそ商品として大事に扱わないといけないから、そういう意味では選手をまとめるっていうのはもの凄く重要なことだと思うの。そもそも全日本を出る大きな原因は、この環境じゃ選手のためにならないっていうことだったからね。

「これはなかなか貴重でしょ?」と百田がニヤっとしたのがこの写真。百田の横にピーンと一直線に伸びたドロップキックを受けているのは、デビュー間もない頃の三沢光晴だ!

——オーナー側との対立ですよね。

百田　俺なんかは会社が潤えば選手も潤うわけだから、いろいろ努力しようとしたけど、それが全日本ではスムーズに運ばないような状況にあった。だったら、それが可能な会社を作らなきゃダメなんじゃないかってことだよね。たとえば選手にとって一番問題なのはケガをしたときのことだから、その保障制度とかね。選手を使い捨てにするんだったら会社としては楽だよ。だけど、選手にしてみればなんのためにいままで一生懸命頑張ってきたかっていうことになるから。

——それを全日本の中では改革するのは難しかった、と。

百田　三沢社長にしろ副社長の俺にしろ、会社の最終決定権はなかったから。要するに株とかそういう問題を含めてね。だから、ノアではそういう部分で風通しをよくして。レスラーはバリバリ活躍するときにいいギャラをもらって蓄えにして、それからギャラが落ちるにしても、ある程度の期間までは働けるというような状況を作ってあげる、と。まぁ、そこらへんは三沢社長がいる頃は社長が全部債務を負ってるし、俺たちがどうこう言える問題ではないから。でも、三沢社長が亡くなった時点で、みんなで合意のうえでことを進めるべきじゃないのかなとは思ったね。でも、そうはなりつらい部分があったから、「もう俺は退かなきゃいけないのかな」ということで、今回の決断に至ったわけだけど。

——ノアも最近こそ客足が落ちてきたと言われてますが、旗揚げ当初は順調でしたよね。

百田　でも、いろんな会社とかに融資してもらいながら始めた会社で、財産があって始めたわけじゃないからね。やっぱり皆さんのご協力を得て、興行も出だしからスムーズだったし、テレビもつくことになったし。やっぱりいまの不況の原因の一つには、テレビ局がスポーツ関係にかなり厳しいっていうのは大きいよね。

——それはプロレスにかぎらず？

百田　そういうこと。日テレにしろ、読売ジャイアンツっていう切っても切り離せないものが地上波から消えちゃってるんだから。やっぱり、テレビ局がスポーツ番組をやってもスポンサーを得られないという現状がある。だからこそ、こっちは頑張らなきゃいけないっていう部分はあると思うけどね。俺がプロレスを40何年見てきてる中で、業界の浮き沈みは何度もあったんだから。

——なるほど。

招待券をまくとお客さんが買わなくなる？　それは絶対に違う！

百田　たとえば、一時期の日プロっていうのは日テレとテレビ朝日がついて、1週間に2時間半のゴールデンタイムを持ってたの。その放映料だけで当時で年間5億～10億ぐらいあったと思うよ。それは相当大きいよね、黙っててもそれだけのお金が入ってくるんだから。そんな時代もあれば、猪木さんや馬場さんが抜けたら日プロは一気にガタガタになって、あっという間に潰れちゃったわけで。

――日プロもそうだし全日本もそうですけど、やっぱりテレビがないと団体は存続が難しい？

百田　やっぱり、昔と違っていまは地方にプロモーターがいないから。昔はその土地土地にプロモーターがいたから、会社に負担はそんなにかからなかった。でも、いまはほとんどが手打ち興行だから、営業が会場を決めて現地のホテルを決めて、それからポスターを貼って宣伝カーを回してというかたちになる。これは厳しいと思うよね。だけど俺に言わせれば、そういう時期だからこその営業努力が足りないんじゃないかって。

――といいますと？

百田　やっぱりどんなに小さな町でも市でも、全部の会社が不景気なわけじゃないんだから。そういう情報を集めて、エリアの中で一番景気のいい会社に招待券でもなんでも持っていって、次にその町に来たときに切符を買ってもらえるぐらいの営業をしないと。ただ決められた会場を押さえて、ポスターを貼ってどうのこうのっていうだけだったら誰だってできる。だから、いま一番大事なのは地道な営業努力だよね。

――百田さんは試合以外に、そういう面でもいろいろやられてたりしたんですか？

百田　俺の場合は幸いにうちの父の名前があって、いろんな会社とお付き合いがあったから。そういうところに普段から招待券を配って、「その代わり大きい試合があるときには必ずお付き合いお願いしますね」ということを頼んだりね。そういう普段からの行動も営業努力の一つだとは思うよ。

――なるほど。

百田　だって、たとえばノアでも武道館で幕を張ってけっこう席を潰してるじゃない？　あれだったら「招待客を入れろよ」って俺は思っちゃうんだよね。

――でも、招待券をまくとお客さんが買わなくなるとも言われますよね。

百田　それはでも絶対に違うよ！（キッパリ）。どんな興行でも招待券のない興行はないんですよ。たとえ最初は招待券でも、実際に観て「お、おもしろいじゃない。今度はいい席で観よう」って感動してもらって、次に一枚でも切符買ってもらえればそれが利益になるんだし。だっていまは地上波もないし、プロレスを観るきっかけがない人もいるわけだから。

――ノアのレスラーが提示しているものはクオリティとして自信がある、と？

百田　試合に関して言えばノアは素晴らしいと思うよね。ただ、少し前にファンだった人もいろんな理由で前ほど会場に来れなくなったりするわけだから、常に新規のファンは開拓していかないと。そこは営業にきっかけを作ってもらって、商品である選手がいい試合を提供する、と。

――フロントとレスラーの連係ですね。

百田　だけど、きっかけがないとその連係も生まれないから。選手はまじめに練習して試合に取り組めばそれで充分だと思う。あとはできるならいろんなバラエティ番組なんかに選手を売り込むのも営業努力だよね。それがノアでは少なすぎた気は

00年6月、全日本プロレスから川田利明、渕正信ら4名をのぞく全選手、さらに多くのスタッフが参加するかたちで旗揚げされたノア。その際の会見の席で百田は移籍の理由について問われると、「これだけの人数がついてきたのがすべてです」と語った。

90年代からは馬場率いるファミリー軍団の一員として、ラッシャー木村とともに前座をにぎわせていた百田。馬場亡きあと、ノアでも百田は木村とたびたびコンビを結成していた。

『週刊大衆』のインタビューは暴露じゃないと思ってるから

するね。

——そういう浮き沈みの中でノアが一番上り調子だった頃っていうと、二年連続で東京ドーム大会をやった時期なんですかね。

百田　そうだね、会社の雰囲気的にもよかった。あと、ノアの場合には三沢社長と並んで小橋選手があれだけ団体を引っぱってきたっていうのがあるけど、やっぱりケガや病気に泣いてる部分があるよね。それだけ激しい試合をしてるっていうことだと思うんだけど、最近はほかにもケガ人が多いみたいだから。

——所属選手でお祓いに行ったという話も聞きますね。

百田　やっぱり自分の身体を守るのもプロとしての意識の大事な部分だから。いまは受け身が取れないような、技じゃない技がけっこう増えてるからね。ちょっと想像できないようなところに飛んでいったり。

——百田さんはいわゆる四天王プロレスと言われるような、危険な大技を乱発する試合についてはどうご覧になってたんですか？

百田　あのね、基本的にはリング上でどんなに激しくやろうと、これは時代の流れとしてある程度はしょうがないと思う。ただ、飛び技にしてもやっぱりフェンスまでだよね。お客さんが安心して観れるところまでにしないと。それは興行としてはあるべき姿ですよ。……ところで『Kamipro』って、なんでノアに取材拒否されてたの？

——直接の原因はいわゆるミスター高橋本を取り上げたことなんですよ。ちなみにあの本に関して百田さんはどういう見解を持ってますか？

百田　いや、俺はそもそもその本のことをよく知らないし、そういうのは興味ないもん。ミスター高橋っていうのが新日本のレフェリーをやってたのは知ってるけど、暴露本っていうのは過去に何人も書いてるからね。俺なんかはプロレスっていうのは一つのエンターテインメントではあると思うけど、ある意味で格闘技だと思ってるし。

——プロレスは格闘技だ、と。

百田　やっぱり他の格闘技と比べて、レスラーは迫力のある技を踏んばって切り返すからお客さんも喜んであって、それが一番のプロレスの醍醐味だと思うんだよね。それをいかにもいろいろ作りであったというような話を書くのは、実際にいま頑張ってリングに上がってる人間に対して失礼でしょ。

——真偽はともかく、あの本がプロレス人気が低下した原因の一端にはなってると思うんですよ。

百田　俺はべつにそういうことを書いた人間をとくに批判する気もないし、読む気もない。俺には俺のプロレスへの哲学があるから、べつに人の意見を入れる必要はないと思ってるし、俺よりあとに入って早く辞めてるような人間の言うことを、そんなに聞く必要はないのかなという気はするけどね。

06年に発見された腎臓ガンを皮切りに、ゼロゼロ年代後半は病気やケガに悩まされ続けた小橋。そのたびに不屈の闘志で立ち上がってノアを支えてきた"鉄人"を、百田は社長に推したのだが……。

——信念があるわけですね。

百田　やっぱり、俺はプロレスが大好きなんだよ。とくに俺の場合は自分の父がやってたということもあるし。まぁ当然、父にはおよぶべくもないけど、キャリア的にはだいぶ追い越したなっていうのもありますよ。小さいことかもしれないけど、自分の中ではそれだけでも満足してるんです。

——なるほど。

百田　レスラーとして最高に尊敬できる存在の父を見て育ってきて、俺は少しでも選手として一日も長く、恥ずかしくないように生きられればっていう気持ちがあって、それは全うしてきたと思うから。だから最後の花道として、いつになるかはわからないけど一応引退試合だけはして辞めたいかな、と。

——もう引退を視野に入れてるわけですね。

百田　ほら、この世界でけっこういるじゃない、引退してカムバックするのが。それは俺にはできない。昔でいえばテリー・ファンクにしてもね、「引退さよならツアー」を組んでおいて復活するなよ」と思っちゃうけどさ（笑）。やっぱりそれはお客さんをだますようなかたちになると思うから、俺は最後にちゃんとしたかたちで引退試合だけはやりたいかなと思って。

——中には新団体設立とかっていう噂も聞かれますけど？

百田　あぁ、それは絶対にないですよ！（キッパリ）。俺は昔からそういう画策のできるタイプでもないし、基本的には地味ないちレスラーなんでね（笑）。まぁ、今回ノアを退団したことに関しても、べつに選手に対しては何もないんです。「選手にない」っていうとほかにあるのかって思われちゃいそうだけど（苦笑）。

——いろいろ噂は聞きますね（笑）。

百田　まぁ、それは皆さんで勝手に想像していただいて、自分がとった行動は間違ってないと思ってるし。だから最後のリングでファンの皆さんに「ありがとうございました」という気持ちを表したいし、やらないとダメだと思ってる。

——なるほど。今回、百田さんが『週刊大衆』でインタビューに答えるかたちで書いてあったことが、一部では暴露だという意見もありますが……。

百田　（さえぎるように）あれは単純に俺がノアを辞めた理由であって、暴露じゃないと思ってるから。事実は事実なんで。あのね、辞めた原因の一つとして、俺はやっぱり新人事で役員を降ろされてるからね。それでも会社に残るのは、俺としてはしがみついてるような感じだからさ。

——そこはプライドというか。

百田　うん。役員の若返りということで通達されたかたちだけど、一般的な会社だったらべつに俺みたいな60ぐらいの役員なんてざらにいるわけだしね。まぁ、三沢社長に言われたら仕方ないと思うんだけど、亡くなってからなんにも相談なしに……まぁ、こういうことはあまり細かく言うと愚痴になるからさ（笑）。

——先ほど画策できるタイプじゃないとおっしゃってましたね。

百田　俺は社長になりたいとかは全然ないし、むしろ社長になるべき人

百田光雄

引退後に表立って団体の経営なんかに関わる気は一切ない

間ではないと思ってるから。まぁ、日プロ、全日本に続いてこれで3度目だから、もういいかなと思って。昔から大黒柱が亡くなると揉めるからね、この業界は。

——これもプロレス不況の一環だと思うんですが、今年になってノアでも選手がリストラされました。

百田　それは俺も聞いてますよ。選手本人から挨拶の電話があったし。でも「俺も辞めてるからもう力になってやれないんだよ、悪いな」って言うしかないよね。基本的に俺がノア立ち上げのときに「一緒にまとまってないとダメだ」ってことで声をかけて、全日本を辞めてきた連中だからさ。何もケアしてあげられないのは忸怩たる思いというか、なんとも言えない部分はありますよ。

——なるほど。

百田　ただ、俺がもし残ってたら、実際に業界の現状を考えてギャラの大幅カットこそあるかもしれないけど、最初に旗揚げしたときからいる選手たちなんだから、「リストラだったらまず社員からだろ」とは思っちゃうよね。まぁ、リストラってかたちは極力とらないほうがいいけど、それがいまの会社の考え方だから。

——三沢さんがご存命だったら同じような考えだったでですかね。

百田　あのね、去年の1月の段階で7人の試合数が減ったんですよ。で、ある選手がクビ切られるのかなと思って「長いあいだお世話になりました」って三沢社長に挨拶に行ったら、「バカ野郎、べつにクビにしたわけでもなんでもないよ。世間がこういう状況だから試合数は減らしたけど、おまえらはまだウチの所属選手なんだから、ウチのリングを使って練習すればいいし。また景気がよくなれば試合数を増やして元に戻すことはあるけど、現状ではまず会社自体を存続させるのが第一だから」っていう言い方をしてたらしいよ。まぁ、いまとなっては仮定の話をしてもね。

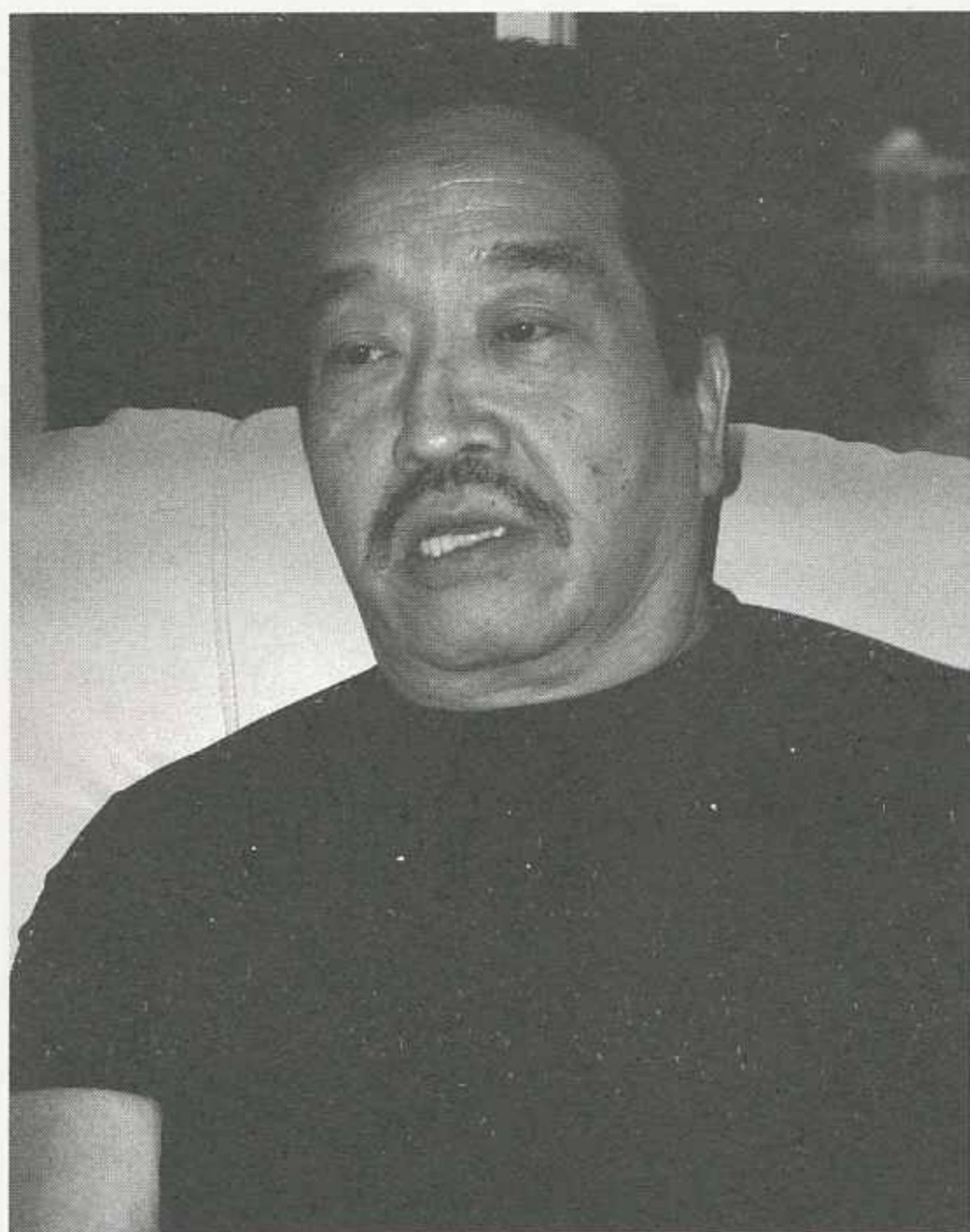
——新日本もユークスによる買収後は大規模なリストラがありましたけど、どういうふうにご覧に？

百田　これは会社の運営の仕方っていうのはそれぞれ全然違うからね。たとえば、馬場さんは基本的にクビを切るのはあんまり好きじゃなかったんですよ。でも、なんていうのかな、馬場さんはそのへんがうまいんだよね（笑）。

——噂には聞きますね（笑）。

百田　でも、辞めた人間に対するフォローもうまかったと思うよね。その地元で興行をしてやったりさ。たとえば「おまえが地元に帰ってプロモーターになったら、安く興行売ってあげるから」ぐらいのことは言ったのかもしれないしね。

——確かに全日本を辞めた選手は、新日本に比べると表立って愚痴を言うイメージはないですね。

百田　ただ基本的にレスラーはプロレス以外になんにもできない場合が多いんでね。とくにいまは就職自体が困難な時代だから、俺みたいなジジイの歳ではもの凄く厳しいだろうし。

ももた・みつお■1948年9月21日、東京都出身。70年11月17日、新海弘勝戦でデビュー。全日本プロレス時代は"6時半の男"と呼ばれ、前座の人気者として若手選手たちを鍛え上げた。89年4月、世界ジュニアヘビー級ベルトを獲得。00年からはノアで副社長を務めながら選手としても活躍。10年にノアを電撃退団。173cm、92kg。

——百田さんのいま現在の主な活動というと？

百田　一応、ウチの嫁が社長を務めるリキエンタープライズの所属として、講演とか力道山に関する話とかが来てるんで、そういう仕事を受けたりしてますね。

——なんでもノア時代に選手たちをバラエティ番組に出演させたのもその会社だって聞いたんですが？

百田　そうだね。三沢社長や秋山準選手に出てもらったTBSの『スポーツマンNo.1決定戦』だとかね。いま、地上波中継がないぶん、そういうふうにいろんなところで選手の顔を売るっていうのは大事なことだと思うんだけどね。

——退団して他団体から試合のオファーは？

百田　そういう話も耳には入ってきてます。引退するのは事実だけど、それまでにいい話があればね。これからの状況によっては、他団体にも協力をお願いしなきゃいけないということも出てくるかもしれないし。

——引退興業はどれくらいの規模を考えてますか？

百田　一応、俺の頭の中では後楽園ホールでできればな、と。そりゃ武道館とかでやればいいけど、それで客席がスカスカになるよりはやっぱり後楽園でビッチリにしたほうが格好もつくのかなって。まぁ、昔から地味なタイプなんで、堅実なほうを選ぶというか（苦笑）。

——無茶な冒険はしない、と（笑）。

百田　あと、なんか門ちゃんが言ってたけど、いままでの現役最年長の出場記録はオジキ（ラッシャー木村）の61歳と10ヵ月らしいんだよね。で、俺がいま61と4ヵ月だから、あと5、6ヵ月で新記録を達成できるらしいのね。

——凄いですね！

百田　基本的にはそういうキャリアとかでしか勝負できないんで（笑）。まぁ、まだこうやって取材に来てもらったり、ファンの頭の片隅に置いてもらっているあいだ、少なくとも年内には引退興行をやらないとって思ってますよ。

——引退後もプロレス業界に関わっていこうという気持ちは？

百田　それはないです（キッパリ）。この世界はクセの多い人が多すぎて（苦笑）。ただ、やっぱり父のこともあるし、まったく関わらないでいくっていうのは難しいと思うんだよね。だけど表立って団体の経営だったり、そういうのには一切関わらない。

——一歩引いたかたちになる、と。

百田　ただ、たとえば知識の源としてプロレスについて何かを聞かれれば、後生に伝えていくことはできると思うんだよね。日本選手権でウチの父が木村政彦とやった試合なんか観たことないでしょ？

——それはさすがに観たことないですね（笑）。

百田　俺なんかは間近で観てきてるわけだから。そういったことで、プロレスになんらかの恩返しができればとは思うよね。これまでプロレスに携わってきた時間、それだけが俺の財産だからさ。

【10年2月1日／茨城県・百田光雄の自宅にて収録】

ブロンド

ちょい不良(ワル)オヤジが語る
アウトロー、プロレス哲学

プロレスとは明日ある闘いである

保永昇男 age 54

プロレス界のちょい不良オヤジといえば、
ヒール軍団、ブロンド・アウトローズやレイジング・スタッフとして活躍した保永昇男が思い浮かぶ。
IWGPジュニア王座にも3度君臨し、98年に現役引退。
新日退団後もWJやリキプロでレフェリーとして活躍する保永がアウトローなプロレス哲学を披露!

聞き手／阿修羅チョロ　試合写真／平工幸雄

——先日、ノアの丸藤（正道）選手が

保永　そうだね。そういうときのた

もしなれなかったときに造園とか植

ようになって。そういう生活を1年

の練習方法というか（笑）。

俺はプロレスっていうのは職業として考えてたから

—先日、ノアの丸藤（正道）選手が3月14日に行なわれる自身のプロデュース興行の会見をやりまして、自分の対戦相手として保永さんを指名したんですけど、ご存知でした？

保永　初めて聞いた。そんな試合なんてやるわけないじゃん（苦笑）。

—そうなんですか。てっきり、話ができていて名前を出したんじゃないかと思ってました。

保永　いやいや、リップサービスもいいとこだよ（笑）。

—そうでしたか（笑）。丸藤選手は「興味があるのは保永昇男だけ。時代が彼を求めている」と保永さんの名前を出していたんですけどね（笑）。

保永　フフフ。辞めて何年経つと思ってんの（苦笑）。もう12年だよ。

—もう、そんなに経ちますか。

保永　平成10年に引退したから。

—でも、つい最近までリキプロで若手と一緒に練習はしてたみたいで。

保永　練習はやってたよ。いまもやってるしね。リキプロの道場は閉めちゃったから公共のジムとかで。

—それは自分自身のために？

保永　まあ、それもあるよね。

—ちなみに、いまはお仕事は何をやられているんですか？

保永　いろんなこと（苦笑）。いまはプロレスじゃ食えないんでね。

—1月のリキプロの大会ではレフエリーをやられてましたけど、レフエリー業は話があったぐらいで？

保永　そうだね。そういうときのために身体は鍛えておかなきゃね。

—なるほど。で、今回はオヤジ特集ということで、職人派レスラーとして活躍した保永さんにオヤジのプロレス論を語っていただければと。

保永　まあ、俺なんかでよければ。

—保永さんはプロレスラーになる前は植木職人をやられていたそうですが、それはどういった経緯で？

保永　経緯っていうか、要するに事務職なんかはとてもじゃないけど、できないしさ。それで、俺が行った大学に園芸学部っていうのがあってね、そこで造園とか習ったの。

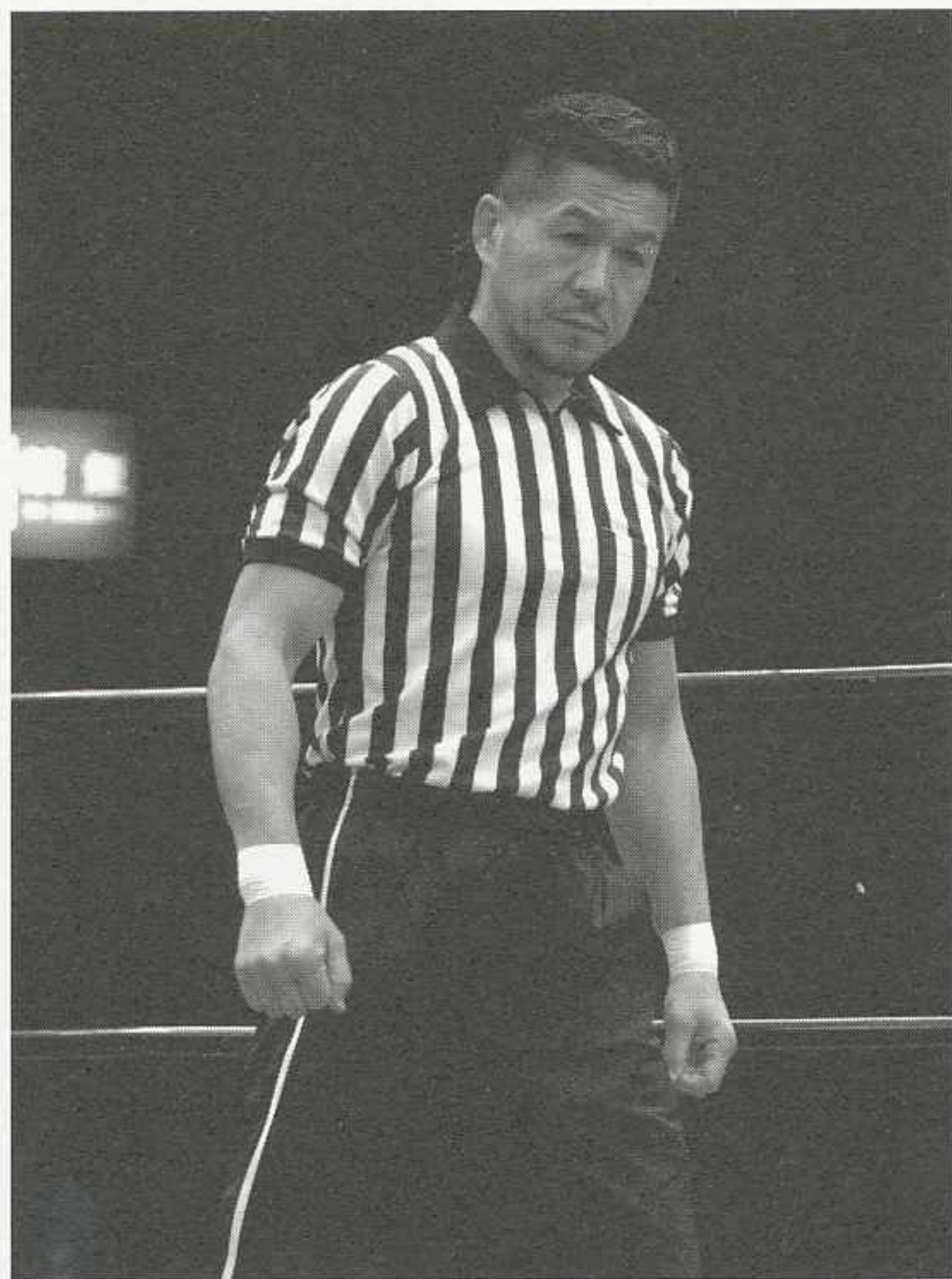
—北海道の拓殖短期大学ですね。

保永　それで、レスラー志望だけど、もしなれなかったときに造園とか植木職人にでもなろうかと思って、そっちのほうを2年間ぐらいやったの。

—そうだったんですか。大学卒業後には一度、全日本プロレスの入門テストも受けてるんですよね。

保永　そうそう。東京に帰ってきて、2年ぐらい植木屋をやってたんだけど、その頃も仕事が終わってからボディビルに行ったりして身体は鍛えてたの。でも、いよいよこれは年齢的にまずいぞって思って、近くに全日本のリング屋さんをやってるところがあって顔も合わしたことがあって話をしてみたんだよね。でも考えが甘いっていうのが顔に出てたのか、落っこちゃったんだよね（苦笑）。

—残念ながら、全日本には入れなかったんですね。

保永　それから植木屋も辞めて、八百屋さんで早朝からお昼まで働いて、午後は徹底的にウェートをやるようになって。そういう生活を1年ぐらいやって、今度は新日の事務所に行ったの。で、山本（小鉄）さんにお会いして、入門のお願いをしたら「あ、いいよ」って言われて（笑）。

会社から「辞めろ」と言われ、98年2月の新日本武道館大会で引退発表、同年4月に引退試合を行なった保永。引退から12年経ったいまでもトレーニングは欠かさないとのことだが、まだまだ現役として充分やれそう。頑張れ、オヤジ!?

—新日本はあっさり入門許可が出たんですね（笑）。

保永　「明日から来い」って言われて「え、いいんですか」って（笑）。

—小鉄さんぐらいになると、モノになるかどうか見たらわかるのかもしれないですけど。

保永　山本さん自身も小柄で苦労したっていうのもあったんじゃない？　自分は身長は180ぐらいはあったけど、身体は細かったからね。

—最初に全日本を受けたっていうのは、もともと全日派だったとか？

保永　いや、みんな観てましたよ。全日、新日、国際、12チャンネルの世界のプロレスも観てたし。

—誰のファンというよりも、プロレスラーになりたいという感じで？

保永　そう。俺はプロレスっていうのは職業として考えてたから。誰々のファンっていうのはなくて、金を稼ぎたくて入ったの。極端な言い方すれば、どこでも入れてくれるところがあれば入ってた。

—新日本に入門したのは24歳と、当時としては遅い入門ですよね。

保永　遅かったよね。

—実際に入門してみて、プロレス界は想像どおりの世界でした？

保永　まあ、そこは想像以上ですよね。だって、基礎体（力運動）を嫌っていうほどやってから、それからスパーリングですから（苦笑）。

—昭和の新日本プロレスならではの練習方法というか（笑）。

保永　もうありえない（苦笑）。

—常人ではなれない職業ってことですよね（笑）保永さんのプロレスの師匠というと誰になるんですか？

保永　やっぱり、山本さんかな。あと、道場でいえば藤原（喜明）さんとか星野（勘太郎）さんとか。まあ、星野さんなんかは言葉数は少ないけど。

—「見て盗め」みたいなタイプなんですかね？

保永　試合を観て参考にしたっていったらあれだけど、お金を取ってお客さんに観てもらうっていう意味でのプロレス観を勉強したのは星野さんかな。で、レスラーの基本的な部分を教わったのは藤原さん。お客に見せない道場内の部分ではね。

—それで新日でデビュー後はメキシコ修行に行かれたんですよね。

保永　行ったねぇ（懐かしそうに）。

—メキシコ遠征を経験した人は食事が合わなくて体調を崩される人も多いっていいますけど、保永さんはどうだったんですか？

保永　食事もそうなんだけど、メキシコはお金が安いんですよ。だから、やる気がなかった（苦笑）。

—あ、お金の問題（笑）。まあ、プロレス界にはお金を稼ごうと思って入ってきたわけですからね。

保永　そうそう。試合はけっこうあったんだけど。その頃の円に換算すれば1試合8000円ぐらいで、日曜日は3倍ぐらいになったのかな？　でっかい野球場みたいな会場があって、そこの試合は2～3万ぐらいになったんじゃないかな。

—へぇ～、それでも安く感じた？

保永　まあ、円に換えれば20万とか30万になったし、平田（淳二）選手、（ヒロ）斉藤選手とか一緒に住んでたから、一時期は向こうのお金のペソがうなってた（笑）。ただ、半年したら、貨幣価値が下がっちゃって1試合4000円ぐらいになったんだよね。

――あらら、それは大変ですね。

保永　まあでも、向こうは物価も安いし、日本食とかもしょっちゅう食うわけじゃないし。メキシコのものを食ってれば何百円とかの世界だし。ただね、また何ヵ月かしたら、さらに下がっちゃったんだよね（苦笑）。

――さらに下がりましたか（笑）。

保永　2000円ぐらいになっちゃった（苦笑）。そうなると月で6万ぐらいにしかならなくてね。で、平田選手とか斉藤選手とかは半年ぐらいしたらカナダに行って俺は一人になっちゃって。とりあえずアパート代は払えてたんだけど仕事もドンドン減らされて。で、その頃、向こうに日本人学校があって、そこで先生をやってる女の人に頼んで手紙を書いてもらおうと思ったんですよ。

――え、誰宛ての手紙ですか？

保永　メキシコからフロリダは近いんで（カール・）ゴッチさんのところに転がり込もうと思ってね。

――メキシコでは試合もあまりないし、それだったらゴッチ道場で練習をしたほうがいいと？

保永　そうそう。それでお願いしようと思った頃に日本から帰ってこいって連絡があったんだよね。

――でも、帰国後間もなく、保永さんは新日本からジャパンプロレスに移籍されましたけど、そのときはどういう経緯があったんですか？

保永　あんだけ結束力があった新日が、外から帰ってきたらよくわかるんだけど、みんな好き勝手な方向を向いてたんだよね。

――帰国したのはUWFとかで大量離脱があったあとぐらいですよね？

保永　いや、そのときは水面下でいろいろあって、UWF問題がガーンって出るちょっと前だったの。で、実際、何人か抜けてったりして、俺も「おもしろくないなぁ」って思って。「もうやめちゃおうかなぁ」って。

――それはプロレスを？

保永　そう。結局、メキシコくんだりまで行かされて痛い思いをして帰ってきたら「こんな状態かい？」って。「辞めちゃおうかなぁ」って思って実家に雲隠れしてたんですよ。

――実際に行動に移したんですね。

保永　そう。結果的に自分も引っかき回した一人になったんだけど。

――保永さんもUWFからも声がかかってたりはしたんですか？

保永　いや、それはなかったね。

――格闘スタイルのプロレスはそれほど興味はなかった？

保永　藤原さんとか前田（日明）選手だったり、UWFに行った人たちに惹かれるのはあったけど、あのスタイルをやりたいとは思わなかった。まあ、結局、新日には戻らずにジャパンに行くことに決めたんだけど。

――ジャパンからWJ、リキプロと長いあいだ長州さんと行動をともにすることになるわけですが、保永さんにとって長州さんというのはどういう存在になるんですか？

保永　どっかでも言ったことがあると思うんだけど、歳の近いアニキみたいな感じで俺は接してたから。勝手にだけど（苦笑）。

――年齢的には4歳ぐらいしか違わないですからね。

保永　まあ、好き嫌いは分かれるレスラーなのかもしれないけど、俺からしたら、そういうのはあまり感じなかったから。気がつけば、ずっと一緒にいたというか（苦笑）。

――ジャパンプロレス設立当初はプロレス界も勢いがありましたし、長州さんやマサ（斎藤）さんはかなり羽振りがよかったみたいですが、保永さんも待遇はよかったんですか？

08年5月にスタートした蝶野プロデュース興行『PREMIUM』では、マシン、ヒロ斎藤とともにルール委員に就任した保永。しかし08年12月以来、大会は開催されず。ガッデム!

俺のプロレスのベーシックは永源さんと高千穂さんの試合

保永　あ～、そうですね。かなりギャラも上げてもらったからね。

――金を稼ごうと思ってプロレス界に入った保永さんにとって、移籍するにあたって、そこは大きな理由になったわけですよね。

保永　そうですね。俺にとっては凄いメリットもあったし。たしか、メキシコから帰ってギャラは1万1000円ぐらいになったのかな？　デビューして8000円ぐらいだったのが3000円アップしたんですよ。

――海外修行を経て3000円アップしましたか（笑）。

保永　そうそう（苦笑）。

――ジャパンプロレス経由で全日本に出るようになるわけですけど、一回辞めようと思ったプロレスが全日本に上がることで、またやりがいを感じるようになったんですか？

保永　そうですね。もう全然やりやすくて。まあ、やりやすいように迎えてくれてたんだと思うんだけど。ただ、向こうの人は「やりづらい」って言ってたみたいで（苦笑）。

――全日本サイドのレスラーからはそういう声が多かったですね。

保永　ほかの選手はわかんないけど、俺は「こういうプロレスがやりたかったんだなぁ」って思って。ガキのときにテレビや雑誌で観てた選手がいっぱいいたしね。昔さ、『ヤングプロレス』って番組があったんですよ。

――『ヤングプロレス』？

保永　NETで。いまのテレ朝で放映してたの。30分枠で日本プロレスの若手の試合だけを放送していて。それで永源（遥）さんと高千穂（明久＝ザ・グレート・カブキ）さんの試合がメインイベントでよくやってて。全日本に上がるようになって、そういった子どもの頃に観てた憧れのスターと実際に対戦するようになったからね。俺からしてみたら、憧れた歌手とか映画スターとかに会えるみたいな感じだったから。

――テレビの中で観てた人と実際に闘うことになったわけですね。

保永　そうだね。そういう思い入れみたいなのもあったし、俺にとっては溶け込みやすかったっていうか。

――そのあとに新日本に戻ったときも、周りからは試合スタイルでよく怒られたみたいで。

保永　フフフ、よく怒られた（苦笑）。

――「ファイトが柔らかすぎる」とか、「もっとバチバチやれ」とか言われて、「プロレスはそうじゃないと思うけど」と感じていたとか。

保永　まあ、しょうがないかなとは思ったけどね。レスラーなんだから、そこのプロモーターの好みとするスタイルができなければプロじゃないわけですから。メシの食い上げになっちゃうわけだから。

――そうですよね。そこは反発するのではなく、プロモーターの要請に

合わせて多少妥協もしていたと？

保永　多少はね。そういう要素も入れつつ、みたいな（苦笑）。

――その後は新日本でジュニアのチャンピオンにもなりましたし、プロモーターにも保永さんのスタイルが受け入れられたってことですよね。

保永　まあ、そうなるのかな。やっぱりね、俺なんかが思うのは、プロレスっていうのは明日がある闘いをしてるわけだから。

――「プロレスは明日ある闘い」！

保永　俺はそう思うよ。

――プロレスは相手にケガをさせてはいけないわけですし、ストーリー的にも、その日だけでは終わらない闘いを続けていくのがプロレスだと？

保永　そうそう。そこは純粋な格闘技とは違う部分だと思うし、相手をケガさせたり、お客さんを乗せるならともかく乗せられちゃったらダメだと思うし。言われつくした言葉だけどね。バックドロップとかでも危ない角度で落としたりさ、ああいうのはナンセンスだと思うし。

――やっぱり、お客さん乗せられるのはよろしくないですか？

保永　と思うよ、俺は。そりゃあ客は喜ぶだろうけどさ。そっからまだ続くわけだから。レスラーのストーリーは。お客さんはその日だけで終わっちゃうのかもわかんないけど。……なんか、オヤジの小言みたいになってない？（苦笑）。

――いやいや、そんなことはないです。レフェリーとして試合を観ていて歯痒い思いもあるわけですね？

保永　まあ、そうだね。そういう意味では、俺の底辺にあるのは、さっき言った永源さんと高千穂さんの『ヤングプロレス』時代の試合だから。だいたい15分1本勝負なんだけど、そんなに技らしい技もなくても、フルタイム目を惹きつける試合をしてたからね。まあ、いまの若い人が観たら首かしげるかもわかんないけど、俺の基本には永源さんと高千穂さんの試合が染みついちゃってるから。それ以上はないんだよね。あくまでも、そこがベーシックで。

――永源 vs 高千穂戦が保永さんのベーシックでしたか。平成のファンからしたら、永源さんはツバを吐くひょうきんファイターのイメージが強いでしょうし、高千穂さんもカブキさんとしての試合しか知らない人も多いでしょうけども。

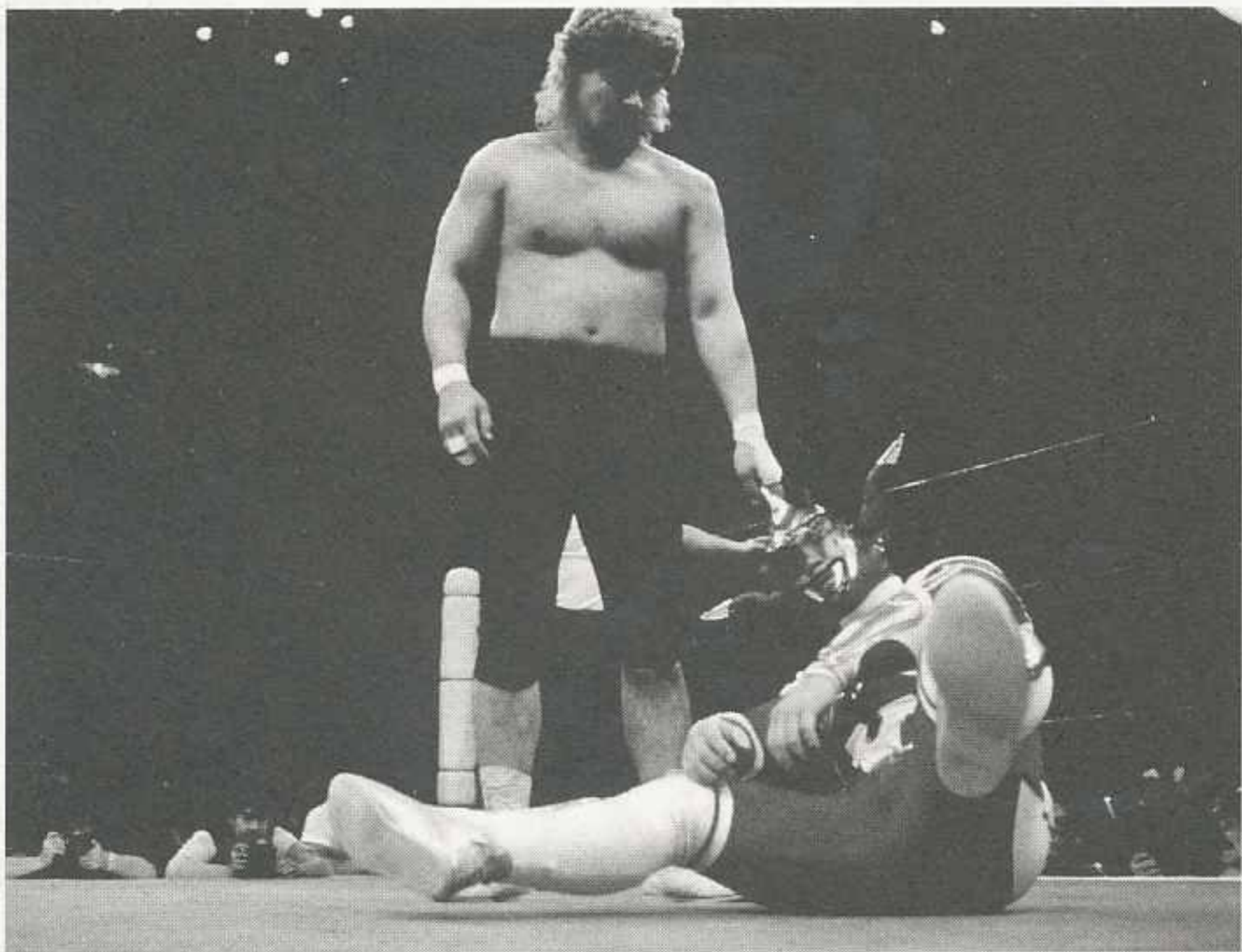
保永　そういうギミックは一切なかった。15分フルタイムとかしょっちゅうやってたけど、あの試合に色をつけていけば30分ぐらい楽に組み立てることができるから。

――ほぉ～、勉強になります。そんな保永さんがプロレスラー人生で一番楽しかったのはヒールに転向したときなんですよね。レイジング・スタッフとかブロンド・アウトローズとかいろいろとやられてましたけど。

保永　それはやっぱり、自分の予想してた真反対のことが起きたっていうんで楽しかったっていうか。

――プロレスラーになる前はヒールの自分は想像できなかった？

保永　いやいや、そういう意味ではなくて、集まった4人は絶対うまくいかないと思ってたから（苦笑）。

91年4月の両国大会のメインでは獣神サンダー・ライガーを下し、「トップ・オブ・ザ・スーパージュニア」を制するとともにIWGPジュニア王座を獲得した保永。試合後はレイジング・スタッフのマシン、後藤らが我がことのように大喜び。その後、保永は野上彰、ワイルド・ペガサスを下し、同王座を3度獲得。

IWGPジュニア王座を初めて奪取したライガー戦は大会前、奥さんから「アンタがライガーに勝てるわけがない。勝ったら10万円あげる」と言われ、発奮した保永は見事ライガーから3カウントを奪い新王者となると観客席の奥さんに向かって指を10本突き立てアピール！　う～ん、プロレスって奥が深いですねぇ。

――レイジング・スタッフ時代の平田さん、ヒロさん、後藤達俊さんと保永さんの4人ってことですか。

保永　そうそう。ヒロさんが年下で一番先輩。7つぐらい下なんだけど。で、ほかの二人は同学年ぐらいなんだけど、平田さんは先輩、後藤ちゃんは一番下。だけども、歯に衣を着せぬタイプだしね。絶ッ対にうまくいかないと思ってた（キッパリ）。

――たしか、血液型も見事なまでにバラバラなんですよね（笑）。

保永　後藤ちゃんがAB、ヒロさんがAかな？　平田選手はBで俺がO。絶対に空中分解すると思ってたから。結成してすぐに「何ヵ月もつかなぁ？」って予想してたんだけど、いざフタを開けてみたら、うまく回ったんだよね。予想に反して4人で仕事がうまく回るから、巡業に行くのも楽しみだったというか。……いや、楽しくはないか（苦笑）。

――どっちですか（笑）。昔は酔っぱらって日本刀を振り回したこともある後藤さんは「俺よりも酒乱」「怒らせたら一番怖い人」と保永さんのことをブログで書いてたんですけど、それは事実なんでしょうか？（笑）。

保永　いやいや、俺なんか酒癖は悪くないよ（苦笑）。たまにあるけど、10年に一回ぐらいでね。

――後藤さんは、保永さんは若手がしょっぱい試合をしたら、よくブン殴ってた、とも書いていました。

保永　殴ったのは一回しかないよ。

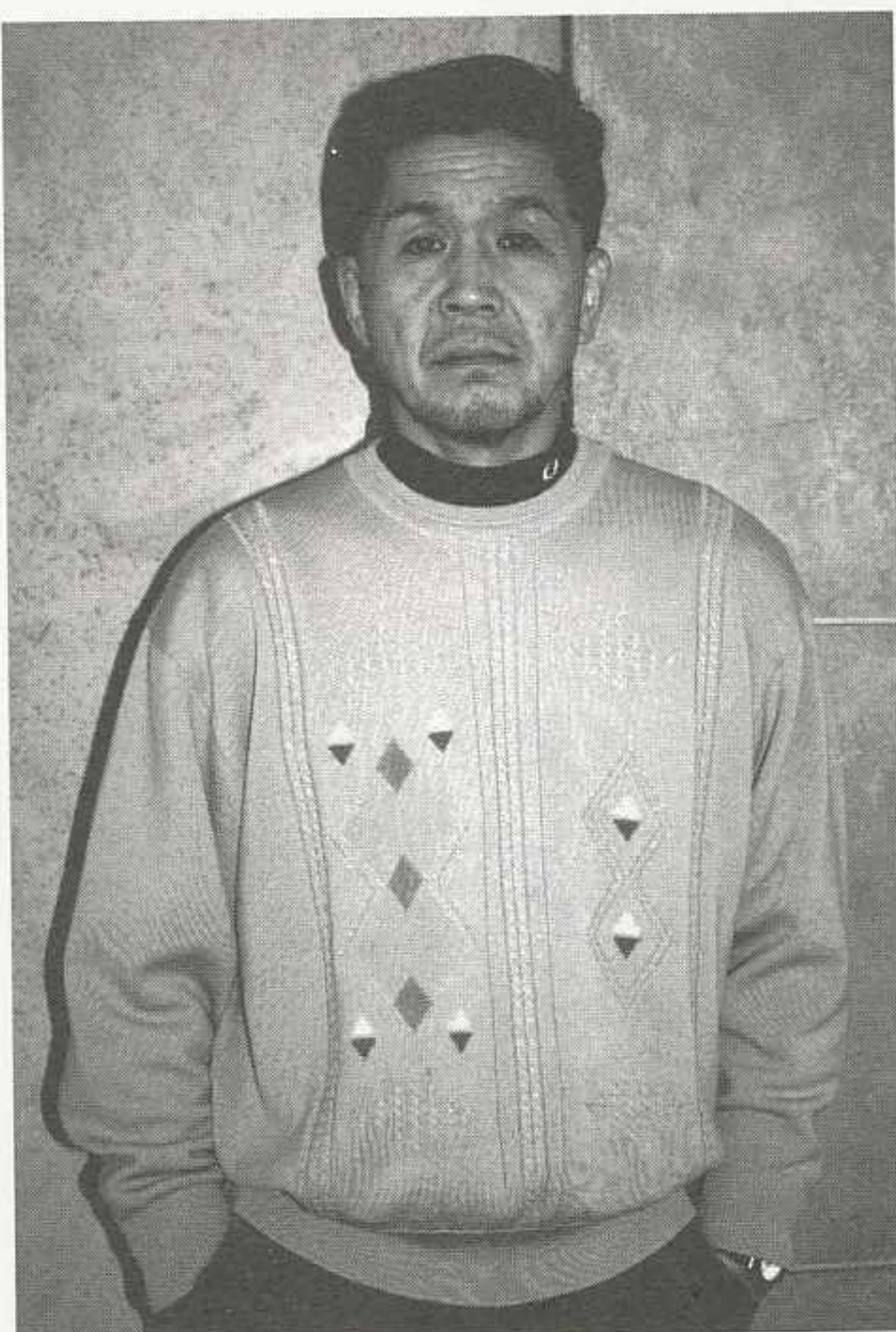
――また誇張表現でしたか（笑）。ちなみに誰を殴ったんですか？

保永　柴田（勝頼）と井上（亘）。

――どこがダメだったんですか？

保永　要するに、危険な試合でね。井上がビハインドから受け身を取れないような技を出したの。そのちょっと前に福田（雅一）が亡くなったっていうのがあって。そのときにレフェリングをしてたんで必要以上に神経質になってたのかもしれないけど。「そんなことしなくてもお客さんを沸かせられるだろう」っていう思いがあったんですよ。
――意味もなくブン殴ってたわけじゃないんですね。
保永　そりゃそうですよ。レスラーの話は、話3分の1ぐらいで聞いとかないと（笑）。
――以後気をつけます（笑）。ちなみに、ブロンド・アウトローズは、その名のとおり全員金髪にしてましたけど、あれは誰のアイデアですか？
保永　あれはねぇ、誰が言い出したんだっけな？　忘れちゃったよ。
――抵抗はなかったですか？
保永　あったッスよぉ。凄いあった。
――かなり抵抗はあった、と（笑）。
保永　だって、その頃はあんまりいなかったから。いまでこそ、Jリーグとか、サッカーの人たちが染めたりしてるけど。当時は西葛西に住んでたんだけど、夜道で女のコとかに会うと逃げてったもん（苦笑）。
――そんなこともありましたか（笑）。あと、レイジング・スタッフも最初は全員マスクを被っていましたけど、平田さん以外はすぐに素顔に戻ったじゃないですか。あれは何か理由があったんですか？

俺ってプロレス界のバブルって味わってないんだよなぁ……

保永　なんだろ？　苦しくて試合にならなかったからじゃないかな。
――あ、そういう理由でしたか（笑）。
保永　そういう意味では、ホント、ライガーには敬服するよ。
――ライガーさんはマスクだけじゃなく、全身コスチュームですからね。
保永　ほとんど皮膚呼吸状態だよ。あんなの俺はできない。たしか、マスク着けてるとき星野さんと試合をして「マスク取ってください」って小声でお願いした記憶があるな（笑）。
――アハハハハハ！　結局、ケガなどもありながら、プロレスラーとしては新日本で引退したわけですが、引退は会社の上の人間から言われて受け入れたかたちだったみたいですね。
保永　そうッスね。
――当時は上層部の意向を受け入れるしかなかったんですか？　それとも「しょうがない」という感じで？
保永　まあ、その頃はもう結婚してたっていうのもあるし。ぶっちゃけて言えば、そのときは「レスラー契約なら1年」って言われて、「それを飲むなら引退後はレフェリーで残れるようにする」っていう話で。ちょっと話に乗ってしまったというか。いまになってみれば間違いだったかなと思うけど（苦笑）。
――独身だったら、辞めてフリーとしてやっていくという選択肢もあったんでしょうけど。保永さんの引退後は実際にそういう選択をする選手も何人か出てきましたよね。
保永　そうだよね。こんな状態になるなら、いまだにやってたかもわかんない。……それはないか（苦笑）。
――レフェリー転向後の2003年には新日本からWJに移籍されたわけですが、そのときは長州さんから誘われたって感じなんですか。

ほなが・のりお■1955年8月11日、東京都出身。79年に新日本に入団し、翌年4月の斎藤弘幸(現・ヒロ斎藤)戦でデビュー。その後、メキシコ修行に旅立つも帰国後、ジャパンプロレスに合流し、全日本に参戦。ジャパンプロ崩壊後は新日本に復帰。98年の引退後はレフェリーに転向。03年にWJに移籍。現在はリキプロでレフェリーを務める。

保永　決めたのは自分だけどね。誘われるまま行ってしまったというか。
――旗揚げ当初のWJは羽振りもよかったみたいですし、新日本よりもいい条件を提示されたとか？
保永　まあ、条件的にはそんなに変わらなかったと思うんだけど。
――そうなんですか。結果的にはWJは数年で崩壊してしまいましたが、客観的にこれは長く続かないだろうなっていうのは感じてました？
保永　そういうのは感じてはなかったね。やっぱりさ、俺はビルの中の人間じゃなくて、現場でドッタンバッタンして汗を流してる側だから。だから、「内部事情はどうだったんですか？」とか聞かれても、逆に「へぇ〜、そうだったの？」って感じで。
――それこそ『東スポ』とかを見て、現状を知る、みたいな（笑）。
保永　そうそう。現場の人間は練習の時間がくれば、給料が振り込まれてなかろうが練習はやってたから。ただ、いまでも悔いが残るのは、その頃、残ってた若手とかをもうちょっとヘルプできなかったかなぁって。
――若手でも志半ばで引退という道を選んだ人も何人かいましたからね。でも、保永さんも結婚されてるわけですし、WJの末期は生活的に厳しかったんじゃないですか？
保永　だけど、子どももいないしさ、あんまり変わんないって言っちゃあ、なんだけど（苦笑）。
――変わらないと言いますと？
保永　平成元年ぐらいにこれだったの（と言って指を○本立てる）。
――ん？　どういう意味ですか？
保永　○○万ぐらいだったの。
――平成元年の月収が○○万ぐらいってことですか？
保永　そう。平成元年って新日に戻ったぐらいなんだけど、結婚した当初が一番安い給料だったの（苦笑）。
――それは厳しいですね。
保永　たとえば、その頃100万とかもらってたら、WJが1年ちょっとでダメになって大変なことになってたと思うんだけど。ウチの女房は働いてるんだけど、WJのときは結婚当初ぐらいに戻ったという感じだったから（苦笑）。まあ、子どもがいなかったのもよかったんじゃない？
――まあ、お金がかかりますからね。
保永　そう考えると、俺ってプロレス界のバブルって味わってないんだよなぁ……（しみじみと）。
――お金を稼ごうと思って入った保永さんのプロレスラー人生というのは、こんなはずではなかったっていう思いが強いんでしょうか？
保永　まあでも、浮き沈みってプロレスにかぎらずあるから。何度も言うけど、底辺から始まって、チャンピオンにならせてもらったり、いい思いもして、また落ちたっていうだけで。でも、どうだったんだろうね、俺のプロレス人生って（苦笑）。
――いやいや、素敵なプロレス人生だと思いますよ。
保永　大丈夫、こんな感じで。「あのオヤジ、生意気なこと言いやがって」とか思われないかな（苦笑）。
――いやいや、まったく問題ないと思います。今日は含蓄のあるオヤジのプロレス論、ありがとうございました！

【10年2月5日／都内・某所にて収録】

掟ポルシェの萌え萌え女々苑DX

age 44

age 41

プロレス界の美熟女
蹴撃エンジェル
風間ルミを掟ポルシェが萌え直撃!

桃色豚豚のことを考えて一日が終わったりとかよくある41歳・掟ポルシェの『萌え萌え女々苑』。
今回は、こってりオヤジ特集の一環ということで、
脂の乗りきった美熟女代表“蹴撃エンジェル”こと風間ルミさんが登場!
東京・神楽坂に本格的豚料理の店『豚菜キッチン〜絆〜』をオープンされたと
あっちゃあ行くしかない! いまだに写真集『ルミエール』を枕の下に敷いて
寝ている俺にとっては、メイドカフェに行くのの数万倍テンションが上がります!!

撮影／阿修羅チョロ　試合写真／平工幸雄

けですが、そのときは長州さんから

——ん? どういう意味ですか?

【10年2月5日／都内・某所にて収録】

風間　いらっしゃいませ！
掟　おお、さすがはアイドルレスラー！いい声してますね！
風間　声はほめられるんですよね（笑）。「ラジオ向き」とかよく言われるんですけど。
掟　いや、『都会の流星』でレコードデビューされてるだけありますよ！
風間　ありがとうございます（ニコッ）。
掟　実際、あの『都会の流星』は売れたんですか？
風間　売れたみたいですよ。ハート型のレコードだったんですけど、日本では私、西村知美、本田美奈子、あとソフィー・マルソーしか出してないみたいで。カラーも4色ぐらいあったんですよ。
掟　全員当時のトップアイドルじゃないですか！　ホントに鳴り物入りのデビューでしたもんね。
風間　凄かったですよね、東芝EMIが凄く頑張ってくれて（笑）。
掟　アイドルとして普通にデビューするのと、プロレスラー兼任なのと、どちらが希望だったんですか？
風間　いや、歌とかは唄いたくなかったので。プロレスにも全然自信がないときで「いま歌なんて出したって、そんなの無理！」って感じで。両立できないので断ってたんですけど、会社の売り方としてはそっちでいかなきゃダメだってことで。
掟　ジャパン女子は当時、芸能事務所のボンドと提携してましたからね。
風間　そうです。私もそこに入るかたちになったんですけど。
掟　試合の合間に歌のコーナーがあったり。
風間　唄ってましたよね。私も帽子を客席に飛ばしてました（笑）。
掟　沢田研二の『勝手にしやがれ』風に（笑）。帽子って毎回回収してたんですか？
風間　いや、プレゼントですよ。
掟　気前のいい話ですねぇ！　そのとき拾って大事にしてる方、いるんでしょうね。
風間　もしお店に持ってきてくれたら、何かサービスします！
掟　気前がいいですね（笑）。当時、バラエティ番組にも出演されてましたよね。
風間　そうですね。ジャパン女子の頃にはドッキリに引っかけられたこともあって。結婚式の衣装を着てイベントをやるから「控室で待っててくれ」って言われて。控室には試着用のドレスとか置いてあるんですけど、「いや～、こういうの着たいよね」とか言ってると、いきなり鏡が割れたりとか、マネキン人形が倒れてきて、「キャー！」みたいな（笑）。
掟　極悪同盟みたいにドッキリの内容に関わるギミックとして出てくるんじゃなく、仕掛けられるほうというところがアイドルですね（笑）。
風間　そのときは稲川淳二さんが「ドッキリでした！」って出てきて。私と半田美希とオスカル智でビックリして蹴り込んじゃったら、肋骨が折れちゃって（笑）。
掟　ガハハハハ！　さすがは〝蹴撃エンジェル〟！
風間　マジギレされましたからね（笑）。
掟　そこは「悲惨だな、悲惨だな～」では済まさないと（笑）。ここ数年の芸能活動というと、なんといっても写真集『ルミエール』ですよね。当然持ってますよ！
風間　あれは自分の中での記念みたいな感じで。プロレスに入る前から写真誌とかから「グラビアやらないですか？」っていう声がかかってたんですけどお断りしてて。ジャパン女子時代に、セミ（ヌード）っぽいのはやらされてたんですけどね。でも、60歳とかになって「あのとき撮っておけばよかった」とか思うのが嫌なので、やっとこうと思って（笑）。
掟　実用頻度の高い素晴らしい写真集だと思います！
風間　ちょっと、世のぽちゃっとした女性に希望を与えようと思って（笑）。
掟　ちょっと前には『劇画マッドマックス』で、風間さん原作による風間ルミ処女喪失漫画というのもありましたよね。
風間　あれ、ズルいんですよ！　本が出る前に見せられたときはタイトルは小さかったのに、できてから見たら表紙にも「風間ルミ処女喪失の真相」みたいにドーンって入ってて。「聞いてないよ！」って（笑）。
掟　そこがコアマガジンクオリティです（笑）。その漫画では最初のお相手は、すでに亡くなられている某俳優「T」さんということを明かしてましたよね。
風間　そうです。……アハハハハ！（急に笑い出す）。なんか恥ずかしいですね（笑）。あの漫画を読んだ人からは、漫画の絵とか、亡くなられているというイメージで「田宮二郎さんなんじゃない？」って言う人が多くて。
掟　大物俳優で亡くなられている「T」さんといえば、もちろんたこ八郎さんですよね？
風間　違いますよ（笑）。でも、あの漫画に描かれていた歳もイニシャルも実際とは違うし、わかんないと思います。
掟　多少ぼかしてあったんですね。そういう思い出を語ってもいいと思ったのは、何か心境の変化があったんですか？
風間　相手の方も亡くなってしまったし、自分の思い出の一つとしていいかなって。漫画だったので、そういう残し方をしてもいいのかなって。
掟　その後は参議院議員になった神取忍さんの秘書としてもお仕事されてましたよね。どれぐらいやられていたんですか？
風間　1年半ぐらいで辞めました。
掟　どうでした、政治の世界は？
風間　おもしろかったですよ。なかなか体験できないことだし。私には大学院のその上の学校みたいに見えましたけどね。
掟　ホントに縁遠い世界に入っちゃったというか。
風間　そうですね。でもやっぱり、国が動くっていうか、社会が動くっていうのを目の当たりに見れたので、けっこうおもしろかったですよ。
掟　神取さん自身が出馬するときに「ぶっちゃけ、政治のことはよくわからないから」みたいなことを言ってて、ちょっと不安だった部分があったんですけどね（笑）。
風間　アハハハハハ！　そうなんですよね（笑）。今年選挙ですよ、また。どうなっ

『豚菜キッチン～絆～』
風間さんの右が店長の澤井知子さん（イーグル沢井）、左がプロレスだけでなく総合格闘技でも活躍した副店長の小河真子さん。素材にこだわった豚しゃぶをメインに15時から23時まで絶賛営業中。女子プロ関係者に遭遇する確率はかなり高いですよ！問い合わせは以下のとおり。〒162-0825 東京都新宿区神楽坂3-6-40 かぐらビル2F TEL.03-6265-0141 http://blog.goo.ne.jp/kagurazaka_001/

風間ルミ
掟ポルシェ

ちゃうんでしょうね。

掟　試合の話をすると、やっぱり印象深いのが全女との対抗戦。初めてJWPと全女の選手が対戦した92年、全女の川崎市体育館大会に、LLPW旗揚げ後ということもあって挨拶がてら観に行ったら、リング上の北斗さんから「神取、おまえ、ホントはやりたいんじゃないのか?」って話しかけられましたよね。

風間　そうそうそう。

掟　最前列の席を用意されて。それって、仕掛けられちゃったわけですよね?

風間　そうなんですよね。私たちはべつに行かなくてもいいやって思ってたんですよ。で、「来てくれ」って言われたからとりあえず行っておいたほうがいいのかな、みたいな感じで行ったんですよ。ちょっと観て帰ろうとしてたんだけど、まさか席が用意されてると思わなくて、行ったら阿部四郎から「早くしろ!」とか言われて。「なんで、アンタにそんなこと言われなきゃいけないの」って思って。

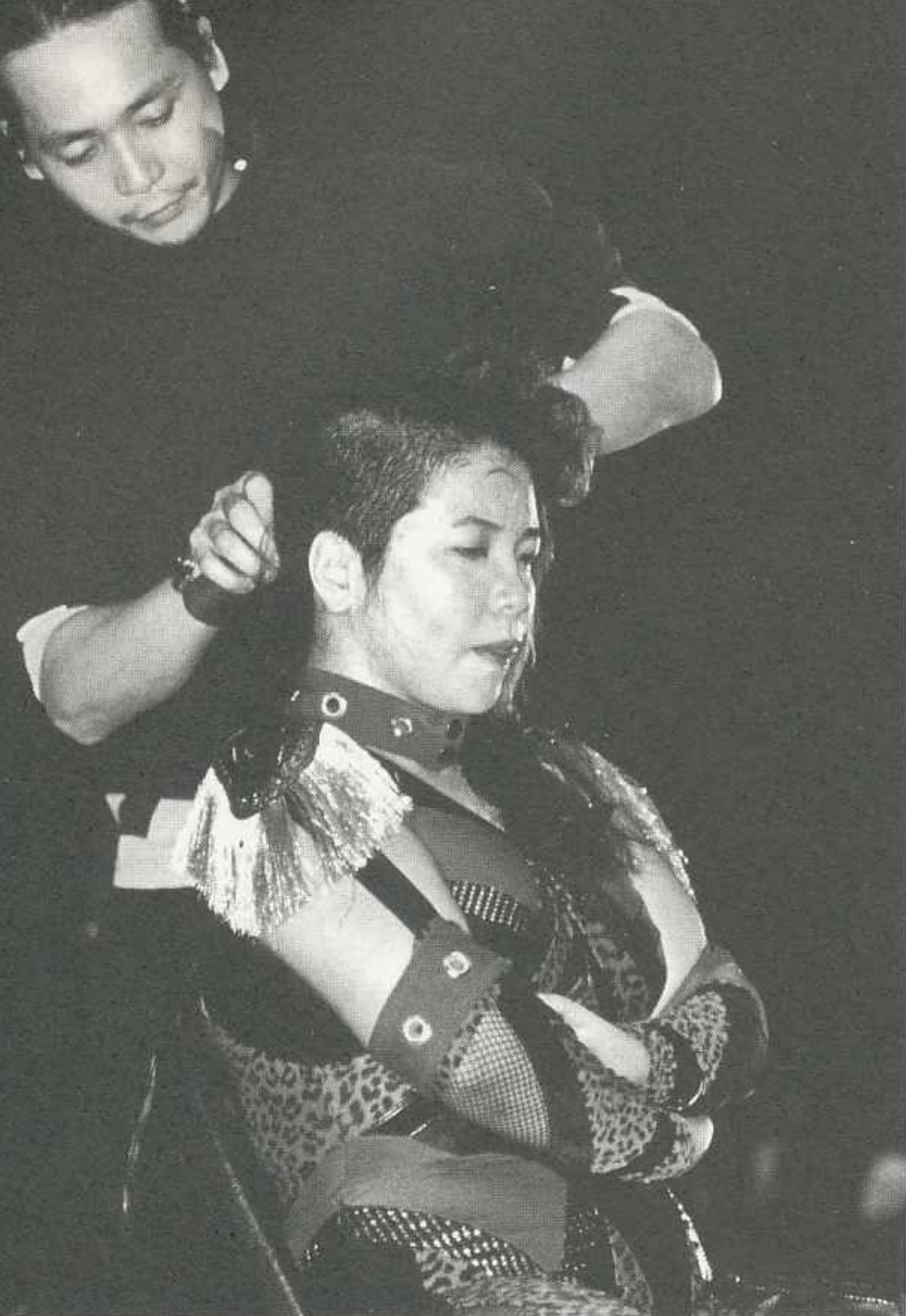
掟　極悪レフェリーに文句を言われて（笑）。

風間　それで控室みたいなところに通されて「席を用意してるんで、一番前に座って」とか言われて「いやいや、全然うしろでいいんで。なんなら2階でいいんで」って言ったら、「いや、大丈夫だから」って言われて連れていかれて、そしたら当然周りもざわめくじゃないですか?

掟　まあ、そうでしょうね。

風間　神取と「だから嫌なのよね」とか言ってたら、「もう北斗の試合が始まっちゃうから」とか言って。「関係ないし」って思って、わざとちょっと遅れていったんですよ。お客さんが入ってから、こっそり入ろうと思ったんで。で、その試合が終わったら、いきなり神取に振られて、「何これ、やられた」って。

掟　そこからですよね。対抗戦の歴史が始まったのは。

風間　私たちも「いつかやりたいです」ってことは正式には言いに行ったんですけど、こんなかたちでやられるとは、みたいな。もう真っ向から喧嘩を売られたなっていう感じだったんで。まあ、私や神取の体質として、売られた喧嘩は買わないと、みたいな感じがあったので（笑）。

93年11月9日、LLPW駒沢大会で行なわれた風間と北斗晶の髪切りマッチ。試合後リング上では敗れた風間の自慢のロングヘアにバッサリとハサミが入れられるも、坊主に慣れていない美容師さんが気を使ってか、仕上がりは五分刈り状態。マルコメ!

全女との対抗戦は本気で「ふざけんな!」ってことが多かったです

掟　喧嘩上等だと（笑）。

風間　そうそうそう（笑）。本気で「ふざけんな!」ってことがけっこう多かったですよ。全女との対抗戦は。

掟　実際試合でも、リアルに危険で殺伐とした感じがありましたよね。

風間　これはお互いだったと思うんですけど、練習しない技を本番で出しちゃったりとか（笑）。

掟　受け身の取りようがないってことですよね。

風間　そう。北斗の技はとくに受け身が取れなかったですよ。全部後頭部でしか受けられない状態だったので。だから、あの“デンジャラスクイーン”っていうのは、ホントにリアルな名前だなって（笑）。

掟　客で観てるぶんには最高にエキサイトしましたけど、やられるほうはたまったもんじゃないですよね。

風間　ただ、対抗戦時代は神取・北斗っていう、あの二人が中心になって盛り上がってた部分もあるし。北斗も神取戦で上がったんだろうし、神取もあの北斗戦があったから上がったと思いましたけどね。

掟　対抗戦前まで北斗晶っていう選手は、序列的にそんなに凄い選手という印象はなかったと思うんですよ。対抗戦の前までは、全女ファンのあいだでも、それほど強いとも怖い選手だとも思われてなかったですし。

風間　だから、お互いがあのときはいい相乗効果にはなったのは事実ですよね。

掟　神取さんと北斗さんがプロレス史に残る凄い試合をしたことで、北斗さんは一躍トップ選手になりましたし、神取さんの強さにも実像が与えられてよかったですし。で、その北斗さんと、風間さんは髪切りマッチもやられましたよね。

風間　やりましたねぇ。あのときは試合前、マスコミはみんな私の髪の毛を見るんですよ。「何、見てんのよ? 目を合わせようよ」みたいな話をしてて（笑）。

掟　「切るんでしょ?」みたいな感じで?

風間　そうそう。「切っちゃうんだぁ」みたいな感じで見てくるから、「べつに負けないから!」みたいな感じになって（笑）。

掟　残念ながら敗れましたけど、丸坊主のはずだったのに、ちょっと長くて、五分刈りになっちゃったんですよね。

風間　そう! 美容師さんがへんな気を使ってくれちゃったみたいで。なんかカットするヤツを長めに設定しちゃったんですよね。私はもう普通に丸坊主にしてほしかったんだけど、終わったあとに自分の頭を見て「あれ?」みたいな（笑）。

掟　自分でもおかしいと思った、と（笑）。

風間　私さえも「ちょっとな?」って思ったぐらいだったんで。

掟　ようやくあの五分刈りの謎が溶けました（笑）。しかし、あの日のほかの試合は、ヘタすりゃ2～3分とか異常な短時間で終わる、なんといったらいいか、ひどい試

風間ルミが格闘技生活20周年を記念し02年に発売したヘアヌード写真集『ルミエール』（双葉社刊）。社長兼レスラー（当時）のド迫力ボディは必見! ちなみにロケ地は中国です。

合もありましたよね。キャロル美鳥さんと豊田真奈美さんの試合なんて、ローリングクレイドルだけで終わっちゃったり。

風間　みんな控室帰ってくると泣いてましたからね。私にしたら、「ウチいつからパンクラスになったの?」って感じで(笑)。

掟　秒殺だらけで(笑)。

風間　あれはひどかったですよね。

掟　あれは自分も観てていろいろ腹が立ちましたね。

風間　というか、「プロとしてどうなの?」「人の興行、潰すわけ?」みたいな。

掟　「ジルバを踊ればジルバを」という、プロレスのいい試合のセオリーを成立させる気がないんだって話ですよね。

風間　そう。全女のファンだって来てるのに、「魅せたくないんだ」って。プロとして最低だと思いましたね、あのときは。

掟　でも、結果的にはそれがよかったんでしょうね。それこそ生の感情が表われてくるわけじゃないですか。全女とＪＷＰの対抗戦なんかは「普通にいい試合になるんだろうな」っていうのがなんとなく目に見えるんですけど。

風間　あ～、予測がつくっていうか。

掟　結果が予想つかなくておもしろかったんですよね。そういった時代を経て、最近、豚料理メインの店をオープンされたわけですが、メニューの写真見ただけで、これはぜひ食べてみたいと思いましたよ!本当においしそうです!

風間　ありがとうございます!

掟　風間さんが子どもの頃、お母さんがお店をやってて、開店にあたって大変そうだったのを見てるから、自分で飲食店を開こうなんて思いもしなかったんですよね?

風間　そうなんですよ。お皿を揃えたり、カップを揃えたりっていうのは面倒くさそうみたいな感じがあったんで(笑)。

掟　そこですか(笑)。両親共働きだったから、基本的に家では一人で食事をしてたんで、大勢で食卓を囲むのが好きだとも言ってましたし。

風間　そう。でも、ふと始めようかなって思って。「何かやってください」「やりたいですね」っていうやりとりもあって。で、去年たまたま食育インストラクターの資格を取って。それで訴えていくっていっても講演とかになっちゃうじゃないですか。そこをリンクさせていくにあたって、自分はレスラーだったから、健康と運動と睡眠っていうのは大事だって思ってたし、やっぱり家族との団らんとか、食べてみんな幸せな気持ちになってっていうのが凄く素敵なことだと思って。だったら自分でお店でも作って、みんなに食べてもらったほうがいいなって。ファンの方にもそれで恩返しができるんだったら、いいんじゃないかなって思って始めたんです。

掟　元プロレスラーの方が始められる店はだいたい、ちゃんこ屋だったり、ドリンクバーだったりするわけですけど、食事がメインで、ちょっといいお酒もセレクトされてて、メニューをパッと見て、食べてみたいなって思わせる店って、なかなかないと思うんですよ。

風間　ありがとうございます!　私は根本的には飲んべえなので、お酒にあったおつまみとか意識して出すようにしてるんですよ。

掟　お酒はかなり飲まれるみたいですけど、量的にはどれぐらい?

風間　すぐ酔っぱらっちゃうんですけど、酔ってから長いので、なんかずっと飲み続けちゃう感じで(笑)。

掟　じゃあ、強いのは強いんですね。

風間　いや、強くはないと思うんですけど。朝起きちゃうとだいたい昨日の記憶はないですね(笑)。

掟　酔うとどうなるんでしょう?

風間　そのときにもよりますけど、噛み癖があるんですよ(笑)。なんか肩が凄く噛みたくなってくるんですよ、隣の人の。なんか歯がうずうずしてきちゃう、みたいな(笑)。

掟　犬じゃないんですから(笑)。

風間　アハハハハ!　凄く酔ってるから力の加減知らないみたいで、けっこう強く噛むみたいですよ。だから、気がつくと私の両脇には誰もいなくなってたり。

掟　ファンの方々、運がよければ風間さんが肩の肉噛みちぎってくれるかも!?　そういえば先日、男性の格闘家の方がお店に来られて、「ビンタしてください」って言われたとか。そういう要望ってけっこうあるんですか?

風間　私、そのときが初めてでしたけどね。ほかのお客様もいたので、「いやいやいや」って言ったら、「ホントにお願いします!」って言われて。で、おもいっきりやったらホントにキレイに入っちゃって(笑)。

掟　一瞬だけマジな目が見られて、その目に惚れたって書いてましたね。

風間　私も拝見しました(笑)。耳がキーンってなったって言ってたので、「あ、鼓膜破ったかなぁ」って思ったんですけど。過去、試合で3人ぐらい鼓膜を破ってるので。

掟　ゲッ、そうなんですか!?　場合によってはお店では鼓膜破りサービスも!?

風間　いやいやいや(笑)、そんなことはないですよ。

掟　そういうサービスはないそうなので、安心してお越しください!

風間　『豚菜キッチン～絆～』をよろしくお願いします!　■

かざま・るみ■本名＝斉藤ルミエ。1965年11月28日、東京都出身。シュートボクシングを経て1986年にジャパン女子プロレスに入団。ジャッキー佐藤、ナンシー久美、神取忍とともに四天王として脚光を浴びる。ジャパン女子解散後の92年7月にLLPWを設立。社長兼レスラーとして活躍するも、03年8月に現役引退。その後はLLPWのスーパーバイザーを務めながらタレントとしても活躍。今年1月に都内で豚しゃぶ屋をオープン。ブログアドレス→http://blog.livedoor.jp/sexy1128/

おきて・ぽるしぇ■1968年5月3日、北海道出身。掟ポルシェと田代まさしのユニット『マーシー☆ポルシェ』のCD即売&サイン会ツアー開催!　2.26(金)札幌sound Lab MOLE(011-207-5101)、2.27(土)旭川CASINO DRIVE(0166-26-6022)、3.7(日)伊勢CLUB RHYTHM(0596-39-0107)、3.12(金)高崎woal(027-326-6999)、3.14(日)広島CLUB CHINATOWN(082-247-5270)他、以下詳細はブログをチェック、もしくは各自調査!→http://blog.excite.co.jp/porsche/

酔うと隣の人の肩が凄く噛みたくなってくるんです

風間ルミ
掟ポルシェ

2000-
特集
マット界の2000年代
MMA&PRO-WRESTLING
2009

マット界にとって2000年代の10年間というのは、激動の10年間だったと言っていいだろう。
桜庭vsホイスの決闘に始まり、その後、ヒョードルら“PRIDE3強”の活躍により総合格闘技人気が沸騰。
その一方で、プロレスは“ミスター高橋本”の後遺症もあり、総合と入れ替わるように人気が低迷。
しかし、2000年代後半には総合もPRIDE活動休止により難しい時代を迎え、
プロレスは小さいながら新たな息吹が見えてきた。
はたしてマット界の価値観が一変した2000年代とはなんだったのか？
特集としては1〜2カ月遅い気もするが、重要なテーマなので、ここで振り返ってみよう。

“変態”の価値観で独断と偏見で選ぶ

2000年代 JAPANESE MMA BEST BOUT 50 & 俺たちの2000年代

浅草キッドの玉ちゃんと語る

変態座談会

桜庭vsホイスの伝説の闘いに始まり、PRIDEヘビー級3強による“60億分の1”をめぐる闘いや、
五味をはじめとしたライト級の激闘など、さまざまな名勝負が展開された2000年代。
今回はそんな栄光の10年間を浅草キッドの玉ちゃんと、毎度おなじみ変態座談会で振り返りながら、
“変態的”ベストバウト50を選んでみました!

構成／堀江ガンツ

ガンツ　さて、このあいだやったばっかりなのに早くも変態座談会のお時間がやってまいりました。

玉袋　2週間にいっぺんってUFCばりにハイペースじゃねえか。

椎名　UFCとステーションカジノ、『kamipro』と『ハッスル』って規模は違うけど、状況は似てるしね（笑）。

玉袋　山口ハイセルな（笑）。まあ、『kamipro』にアブダビ王子みてえな人はいないけど、ちゃんと続くみてえだから、今日も乾杯だな！

ガンツ　では、例によって飲みながら、今回は2000年代の格闘技界をここ加賀屋で総括しちゃおう、と思います。

玉袋　2000年代とは大きく出たねえ。この10年っていうのはよ……（ゴソゴソ紙袋をあさって）こっからだろうな、『PRIDE GP2000』からだよな。

椎名　DVD持ってきてるんだ（笑）。

ガンツ　だから00年代って何から始まったかというと、UWF系vsグレイシー一族の最終全面戦争みたいなかたちで始まってるんですよね。まず1月に『PRIDE GP』1回戦として、髙田延彦vsホイスがあって。

玉袋　ずっとグラウンドで抱きついたまま終わっちゃって、本部長が男を下げちゃった試合ね。でも、あそこから男祭りを取り仕切る男にまで変貌するとは思わなかったよな。

ガンツ　まさかアサヒビールのCMに出るまでいくとは思わないですよね。

椎名　「とりあえずもう1杯！」（笑）。

玉袋　でもまあ、髙田自らが先頭に立って、グレイシーという外敵と闘ってたってことはすげえよ。

ガンツ　その髙田vsホイス戦の翌月には田村潔司vsヘンゾ戦です。

玉袋　リングスKOKだ！　会場で観たよ！

椎名　俺、あのKOKシリーズは大阪も含めて全部行ったから。

玉袋　KOK全部追っかけるのが変態だよな。

座談会出席者

age 41

age 42

椎名基樹

1968年、静岡県出身の41歳。本誌の好評長寿コラム『サムライ三昧』でもおなじみフリーライター、放送作家、構成作家。真剣勝負にあくなきこだわりを持ち、格闘技番組のチェックは欠かさないインドア系変態。

玉袋筋太郎

1967年、東京都出身の42歳。ご存知、浅草キッドの片割れ。子どもの頃から蔵前に通った変態プロレスエリート。大晦日は息子を連れて『Dynamite!!』観戦。2月26日（金）にお台場で恒例の『スナック玉ちゃん』を開催する。

堀江ガンツ

1973年、栃木県出身の36歳。本誌変態座談会主宰者。子どもの頃から変態的プロレスファン、UWF信者として鳴らし、『kamipro』編集部に入ってからもUWF研究家を自称。昨年末、京都の鞍馬寺であの"小太刀"を購入。

椎名　KOKのヘンゾは強くてカッコよかったね。あと（アンドレイ・）コピィロフが強くて驚いた！

ガンツ　柔術世界王者が16秒でタップですよ！

玉袋　ヒザ十字だよな。あれ気持ちよかったな〜。

ガンツ　あのとき椎名さんがコピィロフのコラムを書いてたんですよね。当時、佐藤ルミナも秒殺で騒がれてたから「ロシアの佐藤ルミナ、見てみろよ、このルックスの違い！」って（笑）。

椎名　ハハハハハ！　片やサウナにいそうなハゲオヤジだからね（笑）。

玉袋　だからよ、あの頃っていうのはPRIDEも盛り上がってたけど、まだ俺たちは〝前田の兵隊〟でもあったからさ、気持ち的にすげえ挟まれてたんだよな。それに俺はテレ東の『格闘コロシアム』って番組もやってたから、『コロシアム2000』ってのもあったんだよ！

椎名　あったね〜、『格闘コロシアム』。謙吾と魔裟斗が出てたヤツ（笑）。

玉袋　それで俺はずっと言ってたわけよ、「『格闘コロシアム』でもリングスの試合を取り上げてください！」って。そしたら「WOWOWの使用料が高くて使えません」だって。あそこは俺たちも格闘してたな。

ガンツ　だから当時って、PRIDE、リングス、『コロシアム2000』と、全部舞台は違ったのに、すべてが影響し合った一本の物語がありましたよね。

玉袋　あったねえ！

椎名　あとリングスはなんといってもヒョードルを生んだのが凄いよ。ノゲイラはもともと強かったけど、ヒョードルはKOKで勝つためにリングス・ロシアが鍛えた選手でしょ？　その選手が10年後もまだ世界最強の男っていうのが凄い！

玉袋　ロマンがあるよな〜。

椎名　俺、この時代のリングスのビデオとか、PRIDE初期の桜庭vsニュートンとかいまだに観ますもん。

ガンツ　まだ観てんですか（笑）。

玉袋　まだ戻し利かせてんの？

椎名　戻しましたねぇ（笑）。

玉袋　いま当時のビデオ観てるって、このご時世に樹まり子でヌイてるようなもんだよ！

オムツ着用で観戦した桜庭vsホイスの決闘

ガンツ　そういったKOKという最高のB面もありつつ、A面はやっぱり桜庭vsホイスですよね。

椎名　あれはもう最高！

玉袋　最高だよ。ルール決定に至るまでで、こっちはもう乗っかってるから。要は猪木vsモハメド・アリの記者会見みたいなもんでさ。あのとき「アリ側のルールを全部飲む！」って言ってた猪木がカッコいいじゃない。

ガンツ　『水曜スペシャル』ですよね。

玉袋　そう！　あの映像、いま観てもカッコいいんだよ。それでサクちゃんもグレイシーの要求全部飲んでさ、あの熱がよみがえった気がするよ。

ガンツ　昭和の猪木さんは試合用のガウンを着込んで会見に挑んで、2000年の桜庭選手はオムツ着用で会見に挑んで「何時間でもやります」って言ったんですよね（笑）。

玉袋　だからよ、これは『お笑い男の星座』にも書いたけど、桜庭vsホイス当日は俺もオムツして行ったんだから。してかなきゃいけねえだろって。

ガンツ　そういう仕掛けには、観客も乗っていかないと（笑）。

玉袋　そうだよ。だから松永vsボーゴの「人間焼肉マッチ（ファイアーデスマッチ）」のときも、俺とテリー（伊藤）さんは、叙々苑の前掛けして観戦したからね。「焼肉マッチの正装はこれだろ！」って。

ガンツ　ダハハハハ！　やっぱり大一番は観客も一緒になって作るものですよね。

玉袋　あとよ、桜庭vsホイスはトーナメントの1試合なのに、その試合だけルールが全然違うってのが凄いよ。

ガンツ　1ラウンド15分の無制限ラウンドですからね。

椎名　1時間以上闘っても相手がギブアップするまでやるって、そんなのいまありえないじゃん。しかも、桜庭vsホイスっていう果たし合いみたいなカードで。そりゃ、試合がスイングするとかしないとか関係なく、こっちも何時間でも観るよね。

玉袋　ちなみに、今日1月25日は大場政夫の命日なんだけど、昔のボクサーも世界戦は15ラウンドやってた

[2000.5.1 PRIDE GP2000決勝戦]
東京・東京ドーム

○桜庭和志 vs ホイス・グレイシー×

(6R終了 TKO)

1

髙田vsヒクソンから続いたUWF系vsグレイシー一族の決着戦ともいえる大一番。『PRIDE GP2000』の2回戦として組まれた試合だが、グレイシー側は判定決着なしをを要求。桜庭がこれを飲んだため、この一戦のみ15分無制限ラウンドで行なわれた。試合は“プロレス代表”を表現するかのように“サクマシン”の覆面姿で入場した桜庭が終始圧倒し、6R終了時にホイス陣営がついにタオルを投入。桜庭が90分におよぶ決闘を制し、ここから総合格闘技人気が爆発し

[2003.11.9 PRIDE GP2003決勝戦]
東京・東京ドーム

○A・ホドリゴ・ノゲイラ vs ミルコ・クロコップ×

(2R 1分45秒 腕ひしぎ十字固め)

2

“プロレスラーハンター”として名を馳せ、鳴り物入りで2003年6月から本格参戦してきたミルコ。“妖刀”左ハイキックで次々とPRIDEファイターをなぎ倒し、PRIDE4戦目でヘビー級王座挑戦が決定したが、ヒョードルの負傷のため急きょ、ノゲイラとの暫定王座決定戦が組まれた。ここでもミルコはノゲイラを一方的に攻め立てるが、2Rにノゲイラがテイクダウンに成功すると、大逆転の腕十字で一本勝ち! 歓喜のノゲイラと悔し涙を流すミルコのコントラストも印象的だった。

[2005.9.25 PRIDE武士道—其の九—]
東京・有明コロシアム

○五味隆典 vs 川尻達也×

(1R 7分42秒 スリーパーホールド)

3

PRIDE武士道で連勝街道をひた走り、“武士道のエース”としてPRIDE中量級の顔となりつつあった五味隆典。そこに立ちはだかったのが、当時、修斗世界ウェルター級現役王者だった川尻達也。その二人による宿命の日本人頂上対決が、PRIDEライト級GP1回戦で実現。試合はお互い一歩も引かない白熱の一戦となったが、パンチで上回った五味が、チョークで一本勝ち。この一戦から日本メジャーシーンにライト級が完全に定着した。

[2007.12.31 やれんのか! 大晦日! 2007]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ

三崎和雄 vs 秋山成勲

(1R 8分12秒 TKO→後日無効試合)

4

06年大晦日の桜庭戦で、身体中にクリームを塗り込んで出場するという反則を犯し、大ヒールとなっていた秋山成勲。しかし出場停止処分となり、なかなかリング上で秋山を“成敗”することができず、ファンのフラストレーションが溜まっていたが、『やれんのか!』で、大連立が実現。三崎が、秋山と対戦。三崎は見事に秋山をKOしたが、後日ノーコンテストになってしまった。

わけだし、ルールが整備される前の世代ってのはすげえんだよな。

椎名　昔のボクシングはレフェリーも止めませんもんね。メチャクチャですよ、あれ。何度倒れても、起き上がってきたら「ファイト!」で、『あしたのジョー』のままだもん。

ガンツ　そういえば桜庭と90分闘って負けたあとのホイスも、ホセ・メンドーサばりに急激に老けた感じでしたよね。

玉袋　あんだけ闘ったら老けるだろ。あの試合はまた途中で画面に抜かれるエリオがいいんだよ。最高の名優だろ、あれ。大滝秀治だよ、もう。

椎名　ホイスが負けたあと、エリオ爺さんが木村政彦に負けてからの人生が走馬灯のようによみがえる、みたいなね。

玉袋　桜庭vsホイスは、すべてを出しつくしたようなインパクトがあったよな。

ガンツ　でも、サクvsホイス戦のあの大歓喜の3週間後に、船木がヒクソンにひとひねりされて、振り出しに戻っちゃうんですけどね(笑)。

玉袋　あのあと、なんで桜庭vsヒクソンが実現しねえんだって話だよな。

ガンツ　観たかったですよね。

玉袋　だから残念なのは、桜庭vsヒクソンが実現しなかったことと、『Dynamite!! USA』で桜庭vsホイスの再戦が実現しちゃったことだよ。続編はいらないぞ、と。『銀河鉄道999』はあれ1本でいいんだよ、『さよなら銀河鉄道999』はいらないよ。『ピーターパン2』作ってどうすんだっていう。

ガンツ　桜庭vsヒクソンという正統な続編というか、完結編があればよかったんですけどね。

椎名　そうすれば『格闘コロシアム』って番組もまだ続いてたかもしれない(笑)。

玉袋　いや、あれはすぐ終わっちゃったと思うよ。だってメインのMCの人がさ、「馬場と猪木どっちが強いの?」って言う人だから。

椎名　ハハハハハ!

ガンツ　『ひるおび!』のほうが合ってますね(笑)。

玉袋　あの時代に言ってたからね。そりゃ終わるだろ。それに一緒にいたのが来栖なんとかだよ、ミニスカポリスの。

椎名　元・彼氏を訴えたことで有名な(笑)。

ガンツ　そう考えると10年って長いですね。

椎名　アイドルが擦れっ枯らしになって、彼氏を訴えるまでになるんだからね(笑)。

格闘技版ウッドストック 真夏の国立競技場

玉袋　で、2001年はどうだったの?

ガンツ　2001年はU系vsグレイシーが終わり、桜庭vsヴァンダレイで幕を開けるんですよ。

椎名　PRIDEのルールが変わって、本格バーリ・トゥード時代のスタートだ。

ガンツ　さらにK-1vs猪木軍もスタートします。

椎名　藤田和之vsミルコ・クロコップ!

玉袋　なんだかんだ言って、あれが

[2001.8.19 K-1 ANDY MEMORIAL]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ

○ミルコ・クロコップ vs 藤田和之×

(1R 0分39秒 TKO)

8

桜庭vsホイスによってメジャーになりつつあった総合格闘技を、K-1、新日本プロレスを巻き込んだ一大ムーブメントとしたきっかけとなったのがこの試合 。猪木軍vsK-1の対抗戦第一弾として行なわれたこの大会で、猪木軍の"大将"藤田と、K-1GP準優勝の実績はあるものの、この年は予選落ちしていたミルコが対戦。下馬評では藤田圧倒的有利の中、ミルコは藤田のタックルにヒザ蹴りを合わせて、衝撃のTKO勝利。この試合が大晦日の『INOKI BOM-BA-YE』につながり、ミルコはここからMMA界のスーパースターとなっていく。

[2002.8.26 Dynamite!]
東京・国立競技場

○A・ホドリゴ・ノゲイラ vs ボブ・サップ×

(2R 4分3秒 腕ひしぎ十字固め)

5

国立競技場に主催者発表で9万人以上の大観衆を集めて、格闘技史上、空前絶後の大会となった『Dynamite』。その中で、いまや伝説となっているのがこの試合。当時、ケタ外れの巨体とパワーで手がつけられない強さを見せていたサップとノゲイラが激突。ノゲイラはいきなりパワーボムでマットに叩きつけられ、柔術技もパワーで弾き返され防戦一方となりながら、2Rに大逆転の腕十字で一本勝ち! ノゲイラにはこのときの再現をUFCでレスナー相手に見せてもらいたい!

[2008.5.11 DREAM.3]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ

○エディ・アルバレス vs ヨアキム・ハンセン×

(2R終了 判定 3-0)

9

やるか、やられるかの総合格闘技において、一進一退となるハイレベルな技術の攻防戦にはなかなかなりにくいが、文字どおり最高の名勝負となったのがこの一戦。DREAMライト級GPの2回戦として行なわれたこの試合は、アルバレスとハンセン両者ともに、持てる技術を駆使して真っ向勝負。その結果、フルラウンド動きが止まらぬ名勝負となり、試合後にはスタンディングオベーションが起こったほど。勝ったアルバレスはもちろん、敗れたハンセンも大きく評価を上げた。

[2003.11.9 PRIDE GP2003]
東京・東京ドーム

○ヴァンダレイ・シウバ vs Q・"ランペイジ"・ジャクソン×

(1R 6分28秒 TKO)

6

シウバといえば、桜庭和志との3度にわたる激闘がハイライトであるが、PRIDEミドル級王者となってからの最大のライバルといえば、このランペイジだ。PRIDEミドル級GP決勝戦として実現したこの試合は、お互いの意地がぶつかり合う、PRIDE史上に残る壮絶など突き合いに! 不適な笑みをうかべながらランペイジを殴り、ヒザ蹴りでKOしたシウバの姿は、強烈なインパクトを残した。そしてこのライバル抗争は計3度行なわれ、シウバの2勝1敗となっている。

[2009.12.31 Dynamite!!]
埼玉・さいたまスーパーリーナ

○青木真也 vs 廣田瑞人×

(1R 2分17秒 アームロック)

10

DREAMvs戦極(SRC)対抗戦として行なわれた一戦。この試合の前までに対抗戦は、4勝4敗というまったくの五分。"大将戦"として両者負けられない中、青木はストライカー廣田を捕獲すると、腕を極めたままマウントを奪い、そのままアームロックへ。ガッチリ極まっているにもかかわらず廣田がタップしないと、そのまま腕をヘシ折ってしまった。試合後の"中指"ばかりがクローズアップされるが、意地と技術が凝縮された戦慄の名勝負でもあった。

[2005.8.28 PRIDE GP2005決勝戦]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ

○エメリヤーエンコ・ヒョードル vs ミルコ・クロコップ×

(3R終了 判定 3-0)

7

人類60億分の1、世界最強の男を決めることがコンセプトの一つであったPRIDE。最強を目指し数々の激闘が展開されたが、その中でも頂上対決中の頂上対決といえば、このヒョードルvsミルコになるだろう。ミルコにとっては紆余曲折を経ての3年越しの念願となる大一番。試合はヘビー級とは思えない超スピードの激闘となったが、ヒョードルが当時の最強ストライカーであるミルコに打撃で打ち勝つという、まさかの展開で勝利。名実共に世界最強の座を確固たるものにした。

格闘技ブームの始まりだよな。あそこからは凄かったよ。やること全部当たってよ。

ガンツ 初めて大晦日にTBSで『猪木祭り』をやって、視聴率14パーセント獲るんですよね。

玉袋 安田劇場だろ? あれはよかったよ。あのとき俺、富士急ハイランドの営業で観てたんだよな、寒い中、楽屋にテレビ持ち込んで。現場に行けないのが悔しくてな。

椎名 僕、猪木の炊き出しを追っかけたんですよ。

ガンツ 椎名さんの炊き出し追っかけは恒例になりますよね(笑)。

玉袋 そういう炊き出しとか、『猪木祭り』を成功させるっていうところにプライドの怪人がいたんだよね。

椎名 あのときカードが全然決まらなかったんですよね。

玉袋 そう。あのとき百瀬さんがスタッフ全員集めて「おまえら! 今回は選挙だと思え。アントンを当選させるって気持ちでやるんだよ!」って言って炊き出しが始まったみたい。

椎名 あの時代の猪木の存在感って大きかったですよね。

玉袋 やっぱり格闘技も猪木が入ってきてドカンドカンのお祭り騒ぎになったし、〝猪木変態〟が新日本で熱を放出できねえから、猪木のいるPRIDEで放出するような感じだったよ。

椎名 一時期、PRIDEも猪木劇場が試合より盛り上がってましたもんね。

玉袋 そうなんだよ。リング上じゃ真剣勝負やってたりするのにね。やっぱあのズンドコ感がよかったな。

あと国立競技場の『Dynamite!』っつうのも凄かったよ、あれ。

ガンツ あれ会場に行きました?

玉袋 行った行った!

椎名 もちろん行った!

椎名・玉袋 ウッドストックですよ!

ガンツ ガハハハ! 声を揃えて言いますか(笑)。

玉袋 あれは会場に行かなきゃダメだろ。9万人の変態が集まったんだからな。

椎名 あのとき吉田秀彦がデビューして、グレイシーストーリーが完全な終焉を迎えましたよね。

玉袋 吉田のデビュー戦は良かったよ。入場曲と326のTシャツを除けば完璧だったね。

椎名 326も事件起こす前だ。10年も経つとみんな何かしら事件を起こしてる(笑)。

ガンツ 格闘技界もいろいろ事件があって、07年にはPRIDEが消滅しちゃうわけですからね。

玉袋 じゃあ、よかったのは正味5年間ぐらいだったわけか。

椎名 でも、03年にミルコが来てからのPRIDEは最高だよね!

玉袋 全部おもしれえよ。ミルコがランデルマンに負けたりする衝撃もおもしれえんだから。毎回、驚くことが起こってたからな。そして「あれこそゴッドアングルですよ!」って言ってたターザンが真っ先に消えたというね。

ガンツ 跡形もなく消えましたね(笑)。で、04年には『PRIDEヘビー級GP』に小川直也が参戦ですよ!

玉袋 あれは驚いた! ちょっと前に橋本vs小川戦があったあとだか

ら、小川幻想っていうのもいい感じで膨らんでたときだからね。

椎名 1・4の「目を覚ましてください」はいつ?

ガンツ 99年ですね。そして「橋本真也負けたら即引退SP」が2000年です。

椎名 あのときの小川が最後のプロレス幻想だったね。しかも、その幻想が大金になるという。長者番付にまで載っちゃって。

ガンツ PRIDEはなんだかんだ言って、オーちゃん参戦時が人気のピークでしたからね。

玉袋 あの熱はなんだったんだろうな。それまでオーちゃんファンなんていなかったのに、急にみんな小川に乗っかったんだよ。

椎名 柔道、新日本とずっとヒールでしたもんね。

ガンツ その一方で、プロレス界最後の切り札でもあったから、グレイシーの大将がヒクソンであると同じように、プロレス界の大将でもあったんですよ。

玉袋 そうだよな。そうだよな、じらしにじらしてヒクソンが『PRIDE GP』に出るみたいなもんだったかもしれねえな。だから小川には燃えたよ。小川なら、もしかしたらヒョードル倒してくれるんじゃねえかって思わせてくれたから。

ガンツ さいたまスーパーアリーナのスタジアムバージョンで前売り完売。当日追加席を求めて徹夜組が長蛇の列を作りましたからね。

玉袋 でも俺はあのとき思ったよ。小川を上げられるんだから、PRIDEは誰でもリングに上げられるん

11

[2000.2.26 リングスKOK]
東京・日本武道館

○田村潔司 vs ヘンゾ・グレイシー×

(2R終了 判定 3−0)

U系にとって"打倒グレイシー"が至上命題であった当時。リングスKOKで田村vsヘンゾが実現。田村はUを背負い『UWFメインテーマ』で入場し、判定勝ち。見事、グレイシー狩りをはたした。

12

[2002.6.23 PRIDE.21]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ

○ドン・フライ vs 高山善廣×

(1R 6分10秒 TKO)

お互いノーガードで顔面を殴り続ける、格闘技史上に残るド突き合いを展開。このド迫力の闘いが、のちにフライは"PRIDE男塾塾長"、高山は"プロレス界の帝王"となるきっかけとなった。

13

[2002.11.24 PRIDE.23]
東京・東京ドーム

○田村潔司 vs 髙田延彦×

(2R 1分0秒 KO)

髙田の引退試合として、"因縁の愛弟子"田村との禁断の真剣勝負が実現。新弟子時代のような丸坊主姿で入場した田村が、フック一発で見事に髙田を介錯し、一つの時代に幕を下ろした。

14

[2004.8.15 PRIDE GP2004決勝戦]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ

○エメリヤーエンコ・ヒョードル vs 小川直也×

(1R 1分4秒 腕ひしぎ十字固め)

元・柔道世界一、そしてプロレス界の暴走王として巨大な幻想があった小川直也が、PRIDE.GPにまさかの参戦。64秒で敗れたものの、PRIDEにハッスルブームを巻き起こした。

15

[2005.12.31 PRIDE男祭り2005]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ

○吉田秀彦 vs 小川直也×

(1R 6分4秒 腕ひしぎ十字固め)

実現不可能と思われていた柔道時代から続く超因縁マッチが実現。小川は、この年に急逝した"破壊王"橋本真也のテーマ曲で入場。試合は吉田が勝利となり、両者は試合後、握手を交わした。

16

[2005.12.31 Dynamite!!]
大阪・大阪ドーム

○山本"KID"徳郁 vs 須藤元気×

(1R 4分39秒 TKO)

"神の子"KIDと"トリックスター"元気という、軽量級のスーパースター対決がHERO'SミドルGP決勝で実現。向かい合っただけで銭が取れるこの試合を、KIDは一撃のパンチで制した。

17

[2006.9.10 PRIDE無差別級GP2006決勝戦]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ

○ジョシュ・バーネット vs A・ホドリゴ・ノゲイラ×

(3R終了 判定 2-1)

ブラジリアン柔術とキャッチレスリングによる、寝技の真っ向勝負。試合は一進一退の攻防となったが、ヒザ十字、ネックロックを極めかけたジョシュが僅差で柔術マジシャンを退けた。

18

[2008.12.31 Dynamite!!]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ

○青木真也 vs エディ・アルバレス×

(1R 1分32秒 ヒールホールド)

日本が誇る"DREAMの大黒柱"が、世界クラスの大物であるアルバレスと激突し、電光石火のヒールホールドで見事に一本勝ち。BJペンに次ぐ"世界2位"であることを全世界に証明した。

19

[2000.5.1 PRIDE GP2000決勝戦]
東京・東京ドーム

○藤田和之 vs マーク・ケアー×

(1R終了時 TKO)

新日本から独立した藤田が、MMAわずか2戦目で"霊長類ヒト科最強"と恐れられたケアーを判定で撃破。桜庭和志と並ぶ、プロレス界の救世主として、一躍時の人となった。

20

[2001.12.31 INOKI BOM-BA-YE2001]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ

○安田忠夫 vs ジェロム・レ・バンナ×

(2R 2分50秒 前腕チョーク)

小川と藤田がともに欠場となり、急きょ、猪木軍の大将として出陣した安田がK-1の番長を撃破。借金王が娘を肩車して喜ぶ、一夜の夢は"安田劇場"として視聴者の涙を誘った。

だって。夢のカードは全部PRIDEでできるんだと思ったよ。

椎名 あのとき小川が何もできずに負けたのはショックだったけど、ますますPRIDEにハマっていきましたよね。

玉袋 ハマったよ! だから負けてもよかったんだよな、あれ。

ガンツ オーちゃんがヒョードルに負けた翌日言ってたんですよ。「これでもうプロレスとPRIDEが関わったりするのは終わりだ。だって俺がこれなんだもん」って(笑)。

玉袋 そうだよな〜。

椎名 それは凄く納得ですよね。プロレス界で手がつけられない強さの小川が歯が立たないくらいMMAのレベルが上がったんだから。

玉袋 でも、そのあとも物語を紡ぐってことで、小川vs吉田戦が実現したのにも驚かされたよ。小川がPRIDEに参戦しても、吉田戦だけは絶対ないと思ってたから。

ガンツ あるわけないと思ってましたよね。

玉袋 TKに聞いたって「あるわけない」って言ってたんだからさ。それを実現させた大晦日の『男祭り』はヤバかったな。

ガンツ その年の夏に破壊王が亡くなったんですよね。そして「橋本真也追悼」という大義名分でオーちゃんが吉田とやるんですよ。

玉袋 小川の入場前にオーロラビジョンに破壊王が出るんだよな。

椎名 『爆勝宣言』で入場するんだよね!

ガンツ そして小川の入場時に大橋本コールですよ!

玉袋　あれは変態的には最高だったよ。

ガンツ　ホント、誌面に入場シーンの『YouTube』貼りたいぐらいですよね。

椎名　みんなやっぱりプロレスファンなんだよね。PRIDEの会場なのに、大橋本コールなんだもん。

玉袋　できすぎだよな、あれ。仕込みの客だってあそこまでできないよ。ああいう物語に俺たちは弱いんだよ。亡き友のためにとかさ。ロッキーだってよ、アポロが死んでドラゴとやったんだから。ああいうの小川も好きなんだろうね。男なら一度はやらなきゃいけないっていう『キャプテン・ハーロック』的な生き方とかさ。負けると思ってもやらなきゃいけないときがあるとかさ、ああいうの好きなんだよね。

ガンツ　変態世代にはたまらない要素ですよね。

玉袋　だからこっちもグッときて、乗っかるんだよ。

ガンツ　あの小川vs吉田戦が05年の大晦日で、あの年初めて『Dynamite!!』の視聴率を『男祭り』が上回るんですよ。

玉袋　盛り上がってたよ、あの頃は。佐藤大輔も大暴れって感じだったもんな。

ガンツ　あのあと正月にDSEに行ったら、フジテレビから「祝・高視聴率」の花がたくさん届いてたんですよ。

玉袋　胡蝶蘭来ちゃってな。

ガンツ　で、バラさんが得意げに、『Dynamite!!』、あれは格闘技と言えるんですか?」みたいなこと言って（笑）。

21

[2005.7.6 HERO'S]
東京・代々木第一体育館
○所英男 vs アレッシャンドリ・フランカ・ノゲイラ×
(延長R 0分8秒 TKO)

伝家の宝刀ギロチンチョークを武器に、修斗ライト級絶対王者に君臨したペケーニョから無名の"フリーター"所英男が大金星! シンデレラボーイとして、一夜にしてスターとなった。

22

[2001.3.25 PRIDE.13]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○桜庭和志 vs ヴァンダレイ・シウバ×
(1R 1分38秒 TKO)

向かうところ敵なしだった桜庭をシウバが、ルール改正により解禁された4点ポジションのヒザ蹴りとサッカーボールキックで撃破。PRIDEはここから過激な戦国時代となっていった。

23

[2006.5.5 PRIDE無差別級GP2006開幕戦]
大阪・大阪ドーム
○マーク・ハント vs 高阪剛×
(1R 4分15秒 TKO)

「負けたら即引退」を公言して無差別級GPに挑んだ高阪が、2回戦でハントと激突。どんなに殴られてもひるまず相手に向かっていき、壮絶に散って、現役生活に幕を下ろした。

24

[2001.2.24 リングスKOK2000]
東京・両国国技館
○A・ホドリゴ・ノゲイラ vs ヴォルク・ハン×
(2R終了 判定 3-0)

"コマンドサンボの達人"として幻想の塊だったハンが、40歳にして実力測定の場であるKOKに出場。ノゲイラと真っ向勝負を展開し、その実力が本物であることを証明した。

25

[2003.8.10 PRIDE GP2003開幕戦]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○吉田秀彦 vs 田村潔司×
(1R 5分6秒 袖車絞め)

柔道金メダリストとプロレスラーによる異種格闘技戦のような様相で行なわれた一戦は、田村が吉田からダウンを奪うなど試合を支配。袖車で逆転負けを喫したものの、レスラーの意地を見せた。

26

[2005.12.31 PRIDE男祭り2005]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○五味隆典 vs 桜井マッハ速人×
(1R 3分56秒 TKO)

五味がPRIDEライト級GP決勝で、かつての先輩であるマッハと激突し、見事にパンチでKO勝ち。軽量級のトップに立ち、PRIDE初の日本人王者として念願のベルトを腰に巻いた。

27

[2002.4.28 PRIDE.20]
神奈川・横浜アリーナ
○ヴァンダレイ・シウバ vs ミルコ・クロコップ×
(5R終了 ドロー)

桜庭を破ったシウバと、"K-1のターミネーター"によるPRIDEvsK-1対抗戦。シウバは打撃の本職であるミルコとスタンドで真っ向勝負し、総合格闘家の強さをあらためてアピールした。

28

[2003.6.8 PRIDE.26]
神奈川・横浜アリーナ
○エメリヤーエンコ・ヒョードル vs 藤田和之×
(1R 4分17秒 チョークスリーパー)

ノゲイラを破りPRIDE王者となったヒョードルに藤田が挑戦。ゴリラフックで皇帝をKO寸前まで追い込むシーンを作るが、そこからヒョードルが異常な強さを発揮し逆転勝ち。

29

[2006.7.1 PRIDE GP2006 2nd ROUND]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○ヴァンダレイ・シウバ vs 藤田和之×
(1R 9分21秒 TKO)

「命懸け」の覚悟で3年ぶりにPRIDEへ出陣した藤田が、無差別級GP2回戦でシウバと激突。強烈なサッカーボールキックで敗れたが、I編集長が"これぞ殺し"と絶賛する勝負をやってのけた。

30

[2008.4.29 DREAM.2]
神奈川・さいたまスーパーアリーナ
○青木真也 vs J.Z.カルバン×
(2R終了 判定 3-0)

DREAM旗揚げ戦で無効試合となった一戦が、わずか1カ月半後に決着戦。青木は"キング・オブ・HERO'S"カルバンを寝技で圧倒し判定勝ち。巨大なプレッシャーから解放され涙を流した。

玉袋　あの頃のバラさん語録が一番おもしろいんだよな。

ガンツ　それなのに、その半年後にフジテレビから切られちゃうんですから（笑）。まさかの展開。

椎名　ホントにまさかだよね。俺なんて、いまだになにがなんだかわからないもん。

玉袋　だってあのときよ、『SRS』では東原亜希ちゃんが引退して西山茉希の一発目でK−1韓国大会弾丸ツアーっていうのやってたんだよ。K−1韓国大会の翌日、日本で『PRIDE武士道』を観るっていうね。

ガンツ　あのとき、ホントは『武士道』が初めてゴールデンタイムで流されるはずだったんですよね。

玉袋　だからよ、マッキーも初めてだから、PRIDEの選手名全部覚えたりして頑張ってたんだけど、その直後に切られちゃうんだからな。あのショックはねえよ。

ガンツ　しかも、五味隆典がようやくスーパースターになるってときでしたからね。

玉袋　そうなんだよな。サクちゃんに続く俺たちのスターは誰なんだってときに五味が現われてくれてよ。「よし、五味を担ぐぜ!」ってときに、お祭り終了。お祭りがなくなって、どうやって生きていきゃいいんだよ!

椎名　雨天中止じゃなくて、完全に終了だもんね。

玉袋　だんじりや裸祭りがなくなんねえだろ。『男祭り』だってなくなってたまるかよ! だから、あれはショックだったよな。でも、フジテレビがなくなっても、その年の大晦日はプライベートで『男祭り』に行っ

たからね。こっちはPRIDEのスタッフジャージ着てよ。

椎名　スタッフジャージがあるんですか。

玉袋　フジでやってるとき、もらったんだよ。それ『やれんのか!』のときも着ていったもん、俺。一応上っ張りは着て、試合が始まりそうになったときにガッと脱いでさ。桜吹雪をこうしろに見せるんだよ。

ガンツ　あのあとPRIDEがラスベガスに進出したときも、フジテレビの女性プロデューサーが自費でラスベガスまで来てたんですよね。だからフジテレビのPRIDEスタッフって、もう仕事を超えた熱を持ってたんですよね。

玉袋　だからよ、(佐藤)大輔がフジテレビ辞めるとき、俺と博士のところにCDが3枚届いたんだよ。あれは大輔が選手の入場曲とか、煽りVで使った曲をまとめてくれたCDでさ。それをもらって、大輔とさよならしたんだよな。

ガンツ　PRIDEのためにフジテレビ辞めるっていうのも変態ですよね。

玉袋　あれ一番変態だよ。

椎名　でも、彼がいないとPRIDEも『やれんのか!』も成り立たないよね。『やれんのか!』がオープニング映像で、プライマル・スクリームを使って超カッコよかったじゃん。それが去年の『Dynamite!!』は『翼をください』で、もうガッカリしちゃったよ。

桜庭vs田村が終わっても変態ロードはまだ続く

玉袋　あとはよ、どうしても俺たち

31

[2006.5.3 HERO'S]
東京・代々木第一体育館
○山本"KID"徳郁 vs 宮田和幸×
(1R 0分4秒 KO)

レスリング出身のKIDにとって、元レスリング五輪代表の宮田は天敵かと思われたが、KIDはゴング直後の跳びヒザ蹴り一発でKO。まさに神懸かった強さで難敵をくだした。

32

[2006.12.31 PRIDE男祭り2006]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○五味隆典 vs 石田光洋×
(1R 1分14秒 TKO)

キャリアにおいて"後輩"となる石田との試合前の舌戦で、五味のイライラが爆発。ゴングと同時にエンジン全開のケンカのような闘いで、石田を完全KOして、健在ぶりを見せつけた。

33

[2006.12.31 PRIDE男祭り2006]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○青木真也 vs ヨアキム・ハンセン×
(1R 2分4秒 フットチョーク)

PRIDEライト級で頭角を現わしつつあった青木が、初めて大物と対戦。当時、PRIDEでは初公開となるフットチョークで見事一本勝ち。新たなライト級のトップとしての存在感を強烈に示した。

34

[2003.11.9 PRIDE GP2003決勝戦]
東京・東京ドーム
○ヴァンダレイ・シウバ vs 吉田秀彦×
(3R終了 判定 3-0)

柔道金メダリスト吉田が、初めてMMAのトップと対戦。判定で敗れたものの、顔面を血で染めながらの殴り合いで、吉田がファンから"MMAファイター"として認められるきっかけとなった。

35

[2001.10.31 PRIDE.11]
大阪・大阪城ホール
○ゲーリー・グッドリッジ vs 谷津嘉章×
(1R 8分58秒 TKO)

幻のモスクワ五輪代表として、かつて日本アマレス史上最強の男と呼ばれた谷津が、44歳にしてPRIDE初出場。ゲーリーにボコボコに殴られながらの奮闘は、ファンの感動を呼んだ。

36

[2000.5.26 コロシアム2000]
東京・東京ドーム
○ヒクソン・グレイシー vs 船木誠勝×
(1R 11分46秒 チョークスリーパー)

田村vsヘンゾ、桜庭vsホイスに続く、U系vsグレイシーの大一番。船木はヤクザの出入りのような着流し姿で決闘に挑んだが、ヒクソンのチョークで失神。試合後、引退を表明した。

37

[2000.8.27 PRIDE.10]
埼玉・西武ドーム
○桜庭和志 vs ヘンゾ・グレイシー×
(1R 9分43秒 レフェリーストップ)

ホイラー、ホイスを破った桜庭が、3人目のグレイシーとしてヘンゾと対戦。伝家の宝刀アームロックでヘンゾの腕を脱臼させて、衝撃の一本勝ち。グレイシー3タテを達成した。

38

[2004.4.25 PRIDE GP2004開幕戦]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○ケビン・ランデルマン vs ミルコ・クロコップ×
(1R 1分57秒 TKO)

打倒ヒョードルの思い一つでPRIDEヘビー級GPに挑んだミルコ。しかし、1回戦で伏兵ランデルマンのカウンターのフックでまさかのKO負け。格闘技史上に残るアップセットだった。

39

[2000.10.31 PRIDE.11]
大阪・大阪城ホール
○小川直也 vs 佐竹雅昭×
(2R 2分1秒 スリーパーホールド)

暴走柔道王・小川が、K-1日本人エースであった佐竹と禁断の日本人対決。小川は佐竹と打撃で渡り合ったのち、チョークで一本勝ち。試合前に応援歌を歌った桑田佳祐に勝利を捧げた。

40

[2001.7.29 PRIDE.15]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○桜庭和志 vs Q・"ランペイジ"・ジャクソン×
(1R 5分41秒 スリーパーホールド)

シウバに敗れた桜庭の復帰戦として、"噛ませ犬"として呼ばれたと思われたランペイジが、驚異のパワーで大健闘。しかし、桜庭はパワーを見事に技術で制し、見事復活勝利を挙げた。

はPRIDEばっかりになっちゃうけど、PRIDEと一緒に『HERO.S』だって相当盛り上がってたんだよな。

椎名　『HERO.S』も違う世界観が成り立ってたよね。

ガンツ　KIDと元気が素晴らしかったですよね。

玉袋　よかったよ。所英男っていうスターも生み出したしよ。秋山成勲っていう魔王まで生み出してるからね。

ガンツ　サクのPRIDE離脱は衝撃的でしたけど、ヌルヌル事件はそれ以上にショックを受けましたよね。

玉袋　あれは最悪だよ。俺たちの桜庭が『HERO.S』って別の世界で汚ねえ手段使われて壊されちまうんだからさ。あれは海外旅行に行った友だちが現地で事件に巻き込まれて殺されたような、やるせない怒りがあったよな。

ガンツ　でも、そのサクもPRIDEの最後には帰ってきてくれましたからね。

椎名　桜庭が泣いて現われた最後のPRIDEは会場に行ったよ。

ガンツ　あのサクと田村がリング上に揃い踏みしたのは、実際に桜庭vs田村戦が実現したことより感動的でしたよね。

玉袋　そう! あれは二人が同じリングに立っただけでいいんです。実現しなくてもいいんだよ、それは。馬場と猪木だって、トップになってからは闘わなかったんだから。あの二人のツーショットがあるだけで、夢のオールスター戦の現場にいたようなもんだよ。

ガンツ　しかも、あの場には髙田本

部長もいたわけですからね。

玉袋　そうだよ、仲違いした本部長とサクちゃんが一緒にいるんだから、そこも変態にはたまらねえよな。

ガンツ　だからPRIDEと『HERO'S』で、物語がらせん状に続いていたんですよね。

玉袋　そういう物語をこっちは観てるんだよ。そして2010年になってもサクちゃんが闘ってるっていうのもいいよ。

ガンツ　田村潔司だって、40歳にしてウェートを落として、ザロムスキーとやろうとしてるわけですからね。

玉袋　だからよ、UWF通過してる人は観てるほうも変態だけど、やってるほうも変態だよな。俺さ、江頭2:50にね、「いつまでそんなことやってんだ。もういいじゃねえか」って言ったらね、「ダメだ、俺は結婚も何もしない。俺は12月24日に、いつも結婚しないモテないヤツを相手に、俺が教祖的なライブをやってるんだから、俺はそいつらのために結婚しない」って言ってんだから。

椎名　もの好きな人ですねえ（笑）。

玉袋　「でもそのお客がおまえの人生のケツ拭いてくれるか?」ってところを江頭には話すんだけど、やっぱそこも江頭の変態性と客の変態性があるよね。

椎名　凄いッスねえ!

玉袋　幸せになったっていいじゃん、ポルシェ乗ったっていいじゃん。サクちゃんと田村だって、もういいじゃねえかって思いもあるんだけど、いまでも闘い続けてくれる、俺たちにその後の物語を見せてくれるっていうのはうれしいよな。

41
[2004.6.20 PRIDE GP2004 2nd ROUND]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○セルゲイ・ハリトーノフ vs セーム・シュルト×
（1R 9分19秒 TKO）

ヘビー級GPのダークホースだったハリトーノフが、元パンクラス王者シュルトをマウントパンチで血だるまにして圧勝。その残酷な闘いぶりと現役軍人という経歴から幻想が巨大化した。

42
[2000.8.27 PRIDE.10]
埼玉・西武ドーム
○ハイアン・グレイシー vs 石澤常光×
（1R 2分16秒 TKO）

"新日本道場最強の男"と呼ばれた石澤が、新日本所属選手として初めてPRIDEに出場。しかし、ハイアンの嵐のようなパンチ連打で秒殺KO負け。プロレス界に衝撃を与えた。

43
[2004.12.31 PRIDE男祭り2004]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○マーク・ハント vs ヴァンダレイ・シウバ×
（3R終了 判定 2-1）

当初、桜庭と4度目の対戦をするはずだったシウバだが、桜庭負傷欠場のため、急きょハントと激突。対格差をものともしない勇敢な闘いぶりで、この日のベストマッチとなった。

44
[2001.5.27 PRIDE.14]
神奈川・横浜アリーナ
○藤田和之 vs 高山善廣×
（2R 3分10秒 肩固め）

高山善廣が初めてPRIDE参戦。長身を利したヒザ蹴りや、持ち前の打たれ強さを武器に野獣・藤田と真っ向勝負を演じ、"プロレス界の帝王"へ飛躍する一つのきっかけとなった。

45
[2005.5.22 PRIDE武士道ー其の七ー]
東京・有明コロシアム
○五味隆典 vs ルイス・アゼレード×
（1R 3分46秒 TKO）

PRIDE武士道が中軽量級に特化した一発目の大会のメインを任された五味は、シュートボクセの実力者アゼレードをワンツーパンチで豪快にKO! 五味時代がここから始まった。

46
[2003.12.31 PRIDE男祭り]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○A・ホジェリオ・ノゲイラ vs 桜庭和志×
（3R終了 判定 3-0）

大晦日民放3局が格闘技を放映するという超カオス状態で、対戦カードが決まらない中、桜庭はホジェリオと対戦。一回り大きいホジェリオと技術で渡り合い、意地を見せた。

47
[2001.12.31 INOKI BOM-BA-YE2001]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○ミルコ・クロコップ vs 永田裕志×
（1R 0分21秒 TKO）

この年の夏に藤田をTKOでくだしたミルコに、我らが永田さんが挑んだ伝説の一戦。しかし、ミスターIWGPの実力を見せる前に、ハイキックを食らい、わずか21秒で敗れてしまった。

48
[2004.2.15 PRIDE武士道ー其の弐ー]
神奈川・横浜アリーナ
○山本宜久 vs マーク・ケアー×
（1R 0分40秒 TKO）

ヤマヨシが"元・霊長類ヒト科最強"ケアーと対戦。ケアーがタックルを仕掛けたときに頭を打ち、自爆負けを喫したが、ヤマヨシは「プロレスラーだからDTTが出てしまった」と涼しい顔。

49
[2003.12.31 Dynamite!!]
愛知・ナゴヤドーム
○ボブ・サップ vs 曙×
（1R 2分58秒 TKO）

2000年代の格闘技バブルを象徴する一戦。元横綱・曙がK-1ルールでサップと対戦し、瞬間視聴率で史上初の『紅白』越えを達成したが、試合自体は日本中に笑いを提供してしまった。

50
[2001.12.23 DEEP.3]
東京・ディファ有明
○エル・カネック vs 大刀光×
（1R 4分55秒 TKO）

"ルチャリブレの帝王"カネックが、なぜか47歳にして初バーリ・トゥードに出陣。ルールもよくわからないまま大刀光と対戦し、パウンドの連打で勝ってしまったファンタジーバウト。

ガンツ　物語はまだまだ続いてるんですね。

玉袋　だからよ、俺たちもこれから新しい変態を育てる活動をしていこうよ。椎名はとりあえずインドア変態を。こっちはアウトドア変態で。

ガンツ　PRIDE全盛期はファイターもフロントもテレビ局の人も変態だらけでしたもんね。

玉袋　変態だらけだよ。

ガンツ　UFCだって、やっぱりダナ・ホワイトが変態的にMMAを愛していたから爆発したんでしょうしね。

玉袋　ダナは本気だよな。日本には"ダナ・ホワイト"が現われねえのかな。ヤスダナ・ホワイトじゃダメかな?

ガンツ　DREAM vs 戦極が実現した頃までは「ヤスダナ・ホワイト最高!」って言ってたんですけどね（笑）。

椎名　いまは本気になる方向がちょっと違っちゃったみたいだけど（笑）。

玉袋　やっぱり方向性がガッチリと決まれば、いい方向に向かいそうなんだけどな。

ガンツ　ダナがカッコよかったのは、"青木事件"のこと聞かれて「これは普通のスポーツじゃないんだよ、バトルスポーツなんだ」って、ほぼ椎名さんと同じようなことを言って青木を擁護してたんですよね（笑）。

玉袋　シーナ・ホワイトだ。

椎名　でも、俺は圧倒的にお金がないんだけどね（笑）。

ガンツ　では、ヤスダナ・ホワイトには、ぜひシーナ・ホワイトになってほしい、ということで今回の変態座談会はお開きにしたいと思います（笑）。

【10年1月27日／都内・『加賀屋』中野坂上店にて収録】

ファンの見方をくつがえしたかった

age 37

武蔵が語るK-1のゼロゼロ年代

09年を最後に現役引退を表明した武蔵。ゼロゼロ年代を通じて、K-1ワールドGPで唯一の日本人ファイターとして活躍してきたが、何かと批判の矢面に立たされることも多かった。ヘビー級という神の領域で世界を相手に、またファンや関係者の見方と闘ってきたこの男こそK-1のゼロゼロ年代を総括するのにふさわしいはずだ。

聞き手／坂井ノブ　撮影／梅木麗子　試合写真／乾晋也

――まず、ゼロゼロ年代は武蔵さんにとってどんな10年間でしたか？

武蔵　めまぐるしく劇的な変化があり、山場を迎えて終着点まで突っ走ったという10年でしたね。デビューしたのが95年で00年までは勝ち方を探している時期でした。身体もできていなかったし、体格差をどうカバーして世界と渡り合っていくかを考えてましたね。あと、自分の中ではファンの人のK－1に対する見方をくつがえしたかったんです。

――ファンのどういう見方ですか？

武蔵　日本人は勝てないでしょ？　という見方をずっとされてましたよね。決勝トーナメントには残っているけど、それはJAPAN GPで勝っただけでしょ？　というね。そういう見方はしゃくでした。それって〝ごまめ〟ってことでしょ。自分たちだけ勝ちやすいところで勝って決勝トーナメントに上げてもらっているわけですから。

――日本人だけずるいじゃんか、と。

武蔵　ファンの人がそういうふうに見てましたよね。だから僕はJAPAN GPで飛び抜けた存在になって「頑張れよ」というファンの見方から、「期待してるぞ」というふうにならなアカンと思ってました。

――99年まではK－1の日本人といえば佐竹雅昭さんが牽引者になってましたけど、その存在は意識してましたか？

武蔵　佐竹雅昭という人間の背中を追いかけても追い抜くことはないので、「俺がやっつけて、その座を奪う」という気持ちでデビュー当時からやってました。そうしないと俺の時代は来ないなと思ってましたからね。早くJAPAN GPから卒業したくて、実際にそうなって開幕戦から出させてもらいましたけど。

――結果的に武蔵さんのあとに続く日本人はなかなか出てこなかったですね。

武蔵　僕は卒業というかたちで出ていきましたけど、僕がいなくなったあとのJAPAN GPは観ててガックリきましたよね。「俺と同じモチベーションになってくれよ!!」「おまえらもうちょっと頑張らないと闘う場所がなくなるぞ」って思いました。僕は闘う場所をなくしたくないから必死で頑張りましたよ。実際に僕はそう言われ続けてきましたから。

――誰から言われるんですか？

武蔵　マスコミや関係者から常に言われてましたね。叩かれるのは僕だけなんです。

新顔として出てきて、いつの間にか消えたヤツもいっぱいいいましたよね

――なぜか武蔵さんって叩かれやすい存在でしたよね。ディフェンシブな闘いを「武蔵流」と批判されてましたけど。

武蔵　開拓者というのは文句を言われるものだと思います。体格差のあるヘビー級で闘っていくうえで考えたのが、打ち合わないヒット・アンド・アウェーだったんです。試合がおもしろくないという批判が出るのは仕方がないんで、いずれ納得させるぞと思ってました。でも、ほかに日本人選手がいるのに、なぜか僕だけが批判されてましたよね。日本人対外国人の5対5マッチで日本チームの大将が中迫（剛）なのに、僕だけが批判されたりして（笑）。言いたいヤツは言わせておけ、と思ってました。

――ほかの日本人選手を引っぱり上げていこうという気持ちはあったんですか？

武蔵　そういうふうに意識したことはないですね。自分だけ強くなればいい、おまえら強くなる気がないならやめろ、と思ってました。

――武蔵さんのそういう厳しい姿勢って、いままで表に出てなかったですよね。ちょっと意外です（笑）。

武蔵　新顔として出てきて、いつの間にか消えてるヤツというのもいっぱい見てきてるんで。「あいつ、どこ行った？」っていう選手がいっぱいいるでしょ？　生き残るのも大変な世界なんです。全アジア圏を見ても打撃系格闘技でヘビー級の選手っていないんですよ。たまたま佐竹雅昭と僕が続けて出ただけで、たまたまは続かないんです。

――日本人には厳しいんじゃないかという見方の中で、武蔵さんは03年、04年とK－1 WORLD GPで準優勝という結果を残しました。

武蔵　「やっぱり日本人が勝つにはこれしかないよね」って言われましたね（笑）。「ほれ見たことか」という気持ちもありましたけど、自分が信じてやってきたことが認められて嬉しかったですね。

――それと並行しながら、武蔵さんはモンターニャ・シウバとやったり、ボブ・サップとやったり、曙とやったりというモンスター路線の試合もやってますよね。

武蔵　よく見つけてきたなっていうモンスターばっかりでしたね。あんな大きい人たちとリングに入ると狭いんですよ。

――この頃からK－1がモンスター路線になってましたよね。

武蔵　正直に言うと「どうなのかな？」って思いました。ずっとK－1を観てきた人には違和感があったでしょうね。それまでのK－1は世界中の技術が集まってたんですよね。オランダだったらアーネスト・ホーストに代表される対角線コンビネーションとか、アメリカだとリック・ルーファスみたいなボクシングとサイドキック中心だし、オーストラリアならスタン・ザ・マンとかサム・グレコのパンチ主体のスタイルがありましたよね。でもモンスター路線になってからは技術じゃなくて暴れっぷりが求められるんですよ。でも、そういうのって続かないんですよ。「ウォーッ!!」って暴れてるだけじゃ勝てなくなってくるから、モンスター系の選手が技術を覚えようとするんですけど、それって凄くつまらないんですよ。結局、誰もボブ・サップになりたいと思わないでしょ？（笑）。アーツとかホーストとかアンディ・フグみたいになりたいっていう人は多いけど、モンスター路線になって、そういう色がなくなってしまったんですよ。「○○みたいになりたい」っていう心理は、じつは大事なことなんですよね。

――03年に谷川貞治さんがFEGに入ってから、その傾向が強くなった印象があるんですが。当時の谷川さんのマッチメイクはいかがでしたか？

武蔵　プロレス的な要素が入ってきたんで「どうなんだろうなぁ？」とは思ってましたけど、「ムチャクチャおもしろいな」と思うときもありました。

――武蔵さんには厳しい試合を課してい

期待を背負いながらも、どこか飄々とした雰囲気で世界のトップと渡り合ってきた武蔵。批判の対象にはなりがちだが、それってじつは凄いことなんだよなぁと、あらためて思います。さすが!

たような印象なんですけど。

武蔵　大会が近づいた頃にかかってくる谷川さんからの電話は嫌でしたねぇ。でも、誰と試合をすることになろうが自分の技術を見せるだけだという気持ちだったんで。モンスター相手でも異種格闘技戦みたいに盛り上げてやろうと思ってましたよ。

——新日本プロレスのリングで実際にやってますよね。04年に柴田勝頼選手と異種格闘技戦をやってますけど。

武蔵　憧れのリングに上がりましたよ！(小さくガッツポーズ)。僕の中では異種格闘技戦、イコール新日本プロレスなんですよ。子どもの頃はプロレスを観て興奮して育ってきてますからね。あの試合は藤田(和之)さんにも「良かったですよ」ってほめられてうれしかったですね。

——05年以降は「今年こそ悲願のGP優勝だ！」と期待されながら、なかなか結果が出ない時期に入っていきましたよね。

武蔵　その頃は自分の中で軸がブレてたんです。周りの身近な人から「接近して打ち合ってもいいんじゃないか」って言われて、自分でもどうやっていいのかわからない、試合をやってるけど自分じゃないような感覚の時期でした。

——GPでは05年がグラウベ(・フェイトーザ)にKO負け、06年はハリッド〝ディ・ファウスト〟に判定負けでしたよね。闘い方を元に戻そうというふうにはならなかったんですか？

武蔵　それで「自分は自分、自分らしく闘うしかない」という気持ちになって、07年7月にはロサンゼルスで1ヵ月合宿したんです。それで翌月のK—1アジアGPにはビックリするぐらい絶好調で、「これならワールドGPも優勝できるな」って

武蔵の10年

K-1 WGP準優勝 vsレミー

03年の武蔵は決勝トーナメントでレイ・セフォーとピーター・アーツに判定勝ち。04年は同じく決勝トーナメントでレイ・セフォーとガオグライ・ゲーンノラシンに判定勝利。決勝では2年連続でレミー・ボンヤスキーに敗れはしたものの、2年連続でファイナリストになるという日本人初の快挙をやってのけた。

モンスター路線 vs曙

現在IGFで大暴れしている"ブラジルの大巨人"モンターニャ・シウバにマウントパンチを食らったり、曙さんには押し倒されたところを殴られたりと、モンスター路線でも最前線に立ち続けた。とにかく、武蔵には相手を選ぼうという意識はまったくないようだ。

引退 vsゲガール・ムサシ

08年の大晦日に対戦したゲガールとの試合では「負けたらリングネーム剥奪」という前代未聞の煽りVTR（つまり公式な決定ではない）で対戦したがTKO負け。実質的な引退試合は、09年9月のK-1ワールドGP1回戦ジェロム・レ・バンナ戦ということになる。

「今年こそ優勝します」と言い続けてもう嘘はつきたくないと思ったんです

いうぐらいだったんです。でも、見事に反則をされてしまいまして……。

―合計4発の金的でドクターストップという結果でした。結局アジアGPでは優勝できずにワールドGPにも出られませんでした。これ以上ないくらいのコンディションに仕上げて金的4発で終わってしまうというのは悲劇ですよねぇ。

武蔵　よく反則される選手ですよね（笑）。まあ、それでも相手がいらつきや焦りで追い込まれてからの反則ですからね。「焦らせてるやん、俺」って思いました。反則自体は許さないけど、そこまでの選手になったということは喜ばしいなって。

―ある種の勲章だ、と。

武蔵　〝ごまめ〟からそういう位置まで自分を引き上げられたんですからね。

―08年の大晦日にはゲガール・ムサシとの試合がありましたね。

武蔵　あの試合には、あまり出る気はなかったんです。ムサシ選手の情報も何も知らなかったし。

―負けたほうが「武蔵」という名前を返上するという話になってましたけど（笑）。

武蔵　そんなのどうでもええやんって思ってたんですけどね。会場も総合ファンばかりで、雰囲気に飲まれてましたね。試合直前に谷川さんが来て「バダ・ハリもチェ・ホンマンも負けちゃったから頼むよ～」って言われて、よけいに固くなってしまいました。

―う～む、まさに谷川黒魔術（笑）。

武蔵　突然、ライオンの檻に入れられたような雰囲気でした。

―その試合でケガをして、結局その次の試合が引退表明してのジェロム・レ・バンナ戦でした。引退理由はべつに体力的な衰えじゃなかったんですよね?

武蔵　やっぱり僕の目標はワールドGP優勝なんですよね。デビューしてから「ワールドGPで今年こそ優勝します!」ってずーーーっと言い続けてきて、もう嘘はつきたくないと思ったんです。

―嘘ですか!?

武蔵　まあ、惜しまれつつ辞めるのが自分にとってはいい辞め方だと思ったし、ヘビー級の若い日本人選手に「おまえら頑張れよ」っていう意味もありますよね。

むさし■1972年10月17日、大阪府出身。正道会館に入門し、95年にK-1でデビュー。貴重な日本人ヘビー級選手ということで10年以上も世界のトップと闘い続けてきた。お笑い芸人、矢野・兵動の矢野と親交が深く、EXILEの歌とダンスを舞台で披露する「ヤノザイル」にも出演。活動の幅をますます広げている。オフィシャルサイト http://www.musashi-pfp.jp/

―魔裟斗選手も惜しまれながら09年大晦日を最後に引退しましたね。あれは武蔵さんから見て、どうでしたか?

武蔵　いい幕引きだったと思います。いろんな選手がいますけど、MAXは魔裟斗の大会だったと思うんです。あの盛大な引退セレモニーを観て「魔裟斗みたいになりたい」って頑張る若手選手がいないと、MAXの未来はないでしょうね。

―魔裟斗さんは「ヘビー級には負けない」と言ってましたけど、武蔵さんはMAXをどう思ってたんですか?

武蔵　いい刺激になりましたよ。MAXが盛り上がってる時期に、ヘビー級はモンスター路線でしたからね。「ヘビー級って、サップとかでしょ?」って言われて「なんでやねん!」って思ってました。同じヘビー級としては嫌でした。

―あと、最近はレフェリーが問題になっていますけど、選手としてはK－1のレフェリングはいかがでしたか?

武蔵　大惨事になるよりは早く止めたほうがいいと思いますけど、倒れるときは倒れますからね。レフェリングに自信がないならタイのルンピニーとかラジャダムナンで何千試合も裁いてるレフェリーを雇えばいいと思います。KOされて倒れる選手の頭を滑り込んで受け止めてますからね。ホンマ凄いですよ。そもそも93年のK－1 GPもレフェリーはタイ人でしたからね。ホーストが倒れるところをスライディングキャッチしてますから。凄いですよ。責任が取れないなら、責任取れる人を雇えばいいんですよ。

―なるほど。では、そろそろ最後の質問なんですが、いまはどういう活動をしてるんですか?

武蔵　僕はもうK－1は離れてますけど、練習だけはやってますよ。せっかくでかくした身体を失なうのも惜しいし、技術を忘れるのももったいないので。試合をするつもりはないですけどね。いずれは自分のジムを持って、格闘技やスポーツに貢献できればいいなと思ってます。

―吉本興業の舞台に出たり、バンド活動をやったり多才ですよね。

武蔵　格闘技を始めたのも、自分の人生が劇的に変われればいいな、生きていておもしろくなればいいなっていうことだけなんです。格闘技ではおもしろいことは突き詰められたと思うんですけど、これからおもしろいことを探しながら挑戦したいですね。格闘技を続けることに情熱を燃やすのは素晴らしいことなんですけど、僕の考えとしてはもっとほかのことに挑戦したいんです。格闘技でおもしろいことをしたいなって思ってた10代の頃と根っこは何も変わらないです。

―それ以外にもバイクとか釣りとか趣味も多いんですよね。今後の理想は所ジョージさんみたいな感じですか?

武蔵　最高ですねぇ。世田谷ベースみたいな基地を地元・熊本の天草に作りたいなって思ってるんです。格闘技とかフィットネスのジムも併設して、普段は東京にいて仕事と称して熊本に行って午前中から釣りしたりして。最高じゃないですか?（笑）。

―最高ですね。今後の人生も武蔵流でお願いします!

【10年2月1日／都内・某ホテルにて収録】

KOK優勝からPRIDE王座奪取、そしてUFCへ――

アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ

2000年代の10年間、トップを走り続けた男

2000年から2009年の10年間、格闘技界において常にトップ戦線で闘い続けてきた男といえば、このノゲイラだ。リングス『KOK2000』で優勝後、PRIDEヘビー級王座を獲得。UFC参戦後はヘビー級暫定王座にも君臨した。そして2010年代に突入しても、いまだ世界のトップを狙うノゲイラに、あらためてこの10年を振り返ってもらった。

聞き手／堀江ガンツ　通訳／Matter Rock　撮影／平工幸雄、乾晋也、Josh Hedges

――ノゲイラ選手、2・20『UFC110』のケイン・ヴェラスケス戦を前にした忙しいときにすみません。インタビューよろしいですか？

ノゲイラ　OK。カミプロはいつもボクの記事を載せてくれているからね。問題ないよ。

――ありがとうございます。今回は2000年代の10年間を振り返る特集なんですけど、やっぱりミノタウロこそ、10年間ずっと活躍し続けた一番のファイターということでインタビューしたいんですよ。

ノゲイラ　確かにこの10年間、本当にタフなファイトの連続だったからね。とくにPRIDE時代は忘れられないんだ。おそらくPRIDE時代が自分のキャリアとしてベストの時期だったと思う。ミルコ・クロコップ、エメリヤーエンコ・ヒョードル、マーク・コールマン、ヒース・ヒーリングらとの闘い……。日本でのキャリアは自分にとって一生忘れられないものだよ。

――PRIDEの前には、あなたが成功をつかむきっかけとなったリングスのトーナメントがありましたよね。

ノゲイラ　KOKだね。このトーナメントも、もちろん思い出深いよ。

――やはり、あのトーナメントで優勝したことは、あなたにとって大きなことでしたか？

ノゲイラ　もちろんだよ。その前にはアメリカで行なわれたWEF（ワールド・エクストリーム・ファイティング）でも優勝したけれど、KOKは規模も選手のレベルも格段に上だった。2001年2月のあの優勝から、本当の意味でボクのキャリアがスタートしたと思っているよ。

――あの当時、20万ドルという優勝賞金は、あなたにとってどんな意味がありましたか？

ノゲイラ　自分をいろんな意味でランクアップさせる資金になったよね。当時、そんな大金を払ってくれる団体なんて、世界中探してもほかになかったから、とてもうれしかったよ。ただ、お金も大切だったけど、あのトーナメントで優勝したことは、ファイターとしてその後のキャリアを築いていくうえで、金額以上に価値があるものだったんだ。

――そのリングスで最も印象に残っている試合はどの試合ですか？

ノゲイラ　ヴォルク・ハンとアンドレイ・コピィロフという、とてもタフでストロングなロシアンガイと闘ったことは、いまでもすぐに思い出すよ。あとはKOK決勝戦で当たったオーフレイムの兄（ヴァレンタイン・オーフレイム）との試合もね。そして「ベストファイトは？」って聞かれたら、それはタムラ（田村潔司）との試合になるだろうね。とてもテクニカルで、ファイトというより、アートのような試合だったからね。

――リングスKOKで優勝後、次のステップとしてPRIDEに戦場を移したときは、どういったオファーがあったんですか？

ノゲイラ　当時リングスの運営に関係していたこともあった人から電話があり「PRIDEのリングに上がらないか？」という話が来たんだ。

――やはり条件面で、PRIDEのほうがずいぶん上回っていたんですか？

ノゲイラ　いや、一試合目のファイトマネーはそんなに良くなかったんだけど、試合に勝ち続ければ、どんどんファイトマネーが上がっていくという内容で、自分にとってのチャレンジとしても刺激的であり、魅力あるオファーだったんだ。

――サラリーのようなかたちではなく、自分の力次第でビッグマネーを獲得できる、というところに魅力を感じたわけですね。いま振り返ってみて、PRIDEの最も素晴らしかった部分はなんでしょうか？

ノゲイラ　とにかくショーとして素晴らしかったということ。ショーの完成度という意味では、いまだにPRIDEを超えるMMAイベントはないと思っている。それはボクだけじゃなくて、当時のPRIDEを会場で観たことがあるファン、そして出場したファイターなら、誰もが思っていることなんじゃないかな。

――ショーとしてのレベルは、いまのUFCより上ですか。

ノゲイラ　テレビ放映の内容では、UFCのほうがまとまりがあって、いい面もあるけど、ショーとしてのレベルはPRIDEとは比べようもないよ。会場の大きさ、観客動員数、ファンの質からくる会場の雰囲気、すべての面で素晴らしいショーが行なわれていたからね。だからこそ、ボクらファイターもPRIDEで闘うことは常にエキサイティングだったし、「必ずいい試合を見せよう」という刺激になっていたんだ。

――ショーのレベルの高さが、ファイターたちを奮い立たせていたわけ

ANTONIO RODRIGO NOGUEIRA■1976年6月2日、ブラジル出身。99年にMMAデビュー。2001年にリングス「KOK2000」で優勝。同年、PRIDEヘビー級王座も奪取する。2004年、PRIDEヘビー級GP準優勝。2008年2月にUFCヘビー級暫定王者となるが、同年12月にフランク・ミアに敗れ王座転落。再び頂点を目指す。191cm、106kg。

Antônio Rodrigo Nogueira

PRIDEを復活させるなら日本で復活させてほしい

ですね。

ノゲイラ　マッチメイクもいまでは考えられないような、一夜に5つのメインイベントが組まれているようなものばかりだったからね。ヴァンダレイ、ショーグン、そして自分やヒョードル、ミルコが同じ日に試合をするなんて、いまのMMAイベントで考えられるかい？

—そして、その前座にダン・ヘンダーソンやクイントン・〝ランペイジ〟・ジャクソンが出ていたわけですからね（笑）。

ノゲイラ　ハハハハハ、それぐらい世界のトップファイターが勢揃いしていたよね。

—そのPRIDE時代で最も印象に残っている試合はなんですか？

ノゲイラ　2003年に東京ドームでやったミルコ・クロコップ戦だね。当時のミルコはMMA無敗で、もの凄く勢いがあるときだった。その自信に満ちあふれていたミルコに土をつけたんだからね。

—あの試合こそがPRIDE全試合のベストバウトという声も多いですよ。

ノゲイラ　ありがとう。ミルコにアームバーを極めた瞬間は忘れられないよ。

—逆にいまでも悔いが残っている試合はなんでしょうか？

ノゲイラ　それはもちろんヒョードル戦だね。それも2003年3月にやった一度目の試合。あのときは試合前に背中を痛めてしまい、充分なトレーニングができないまま、最高のコンディションに仕上がっていたヒョードルと闘ってしまった。あの試合は、自分自身の力を出せなかったことに悔いが残っているんだ。

—そんな思い出深いPRIDEがUFCに買収されたとき、どう感じましたか？

ノゲイラ　当時はすでにアメリカ（フロリダ州）に練習の拠点を移し、アメリカに移住する準備をしていたので、生活面ではちょうどいいタイミングだったんだ。ただ、買収後も日本でショーを引き続き行なうと信じていたし、ボクはUFCとPRIDEの両方、そしてアメリカと日本の両方で闘おうと思っていたから、日本で大会を開催しないってことを知ったときは失望したよ。

—PRIDEからUFCに移ることに対しては、抵抗はありませんでしたか？

ノゲイラ　当時はUFCとPRIDEは同じ会社（オーナー）になるはずだったから、それは抵抗はなかったけど、日本で開催されるPRIDEがなくなるっていうのは、本当に残念だったよ。

—UFCと契約すると同時に、ブラジリアン・トップチームを離脱することになりましたけど、チームを離れることには大きな決断が必要でしたか？

ノゲイラ　じつはBTTにいた頃から、自分には専属コーチがいたし、BTTとは別のトレーニング拠点を持っていたんだ。

—チーム・ノゲイラですよね。

ノゲイラ　そこでボクシング、レスリング、コンディショニングなど専属コーチを雇い、自分独自の練習を始めていたので、ある時期までBTTというブランドは使ってたけど、在籍する意義が薄れてしまっていたから離脱することになったんだ。すべて自分のキャリアを考えてのことだから、難しい決断ではなかったよ。

—そうして2008年からUFCでの闘いが始まるわけですが、UFCでの自分のパフォーマンスを、ご自身ではどう評価していますか？

ノゲイラ　だんだんよくなってきていると思う。正直言って、当初はルールも含めて、ケージでの闘いに慣れていなかったんだ。いまでは、どのようにケージを利用すればいいかまで身につけることができているので、以前とは比べ物にならないパフォーマンスができるよ。

—いまリングでの闘いとオクタゴンでの闘いでは、どちらを好みますか？

ノゲイラ　昔はリングのほうが合っていたけど、いまは自分のスタイルをオクタゴンスタイルにチェンジしたので、いまではオクタゴンのほうが合っていると思う。

—ダナ・ホワイトがPRIDEブランド復活の可能性を示唆しましたが、PRIDEブランドをアメリカで復活させることに興味はありますか？

ノゲイラ　MMAというスポーツを語るうえでPRIDEは避けて通れないし、MMAの歴史上、PRIDEはとても重要なものだからね。ぜひとも復活させてほしいよ。ただ、PRIDEというブランドを復活させるなら、アメリカではなく日本で復活させてほしい。あの日本の観客が作り出す会場の雰囲気を含めてPRIDEだと思うからね。

—PRIDEが復活しなかったとしても、UFCでのキャリアを終えたあと、日本マット復帰は考えていますか？

ノゲイラ　日本は自分のキャリアが本当の意味でスタートしたところだから、自分にとって大きな意味を持っているんだ。その日本のファンに自分の試合を観てもらうことで、これまで応援してくれたみんなへ恩返しをしたいと思っている。ベストはUFCが日本でショーを開催してくれることなんだけどね。

—では、これからのあなたのライフプランを教えてください。

ノゲイラ　MMAのキャリアに関しては、もちろんUFCヘビー級のタイトルを獲ること。ライフプランとしては、いまカリフォルニアに引っ越してきたところなんだけど、とくにサンディエゴやオレンジカウンティはとても気に入っているんで、ここに生活の拠点を置きたいんだ。ブラジルにいる弟も呼び寄せたいし、数年後には娘にも来てもらいたいと思っているんだ。

—では、最後に日本のファンにメッセージをお願いします。

ノゲイラ　10年以上にわたる応援、本当にありがとう。いまはアメリカで闘っているけど、ボクはまた必ず日本で試合をすることを約束するよ。その日まで、（日本語で）マタネ！

【10年2月5日／電話取材にて収録】

PRIDEヘビー級とUFCヘビー級、両方のベルトを巻いた唯一のファイターであるノゲイラ。UFCは暫定王座であったが、レスナーを倒し、真のUFC王者となることはできるか?

50人の語録で振り返るゼロゼロ年代

10年間の語録たちよ、出てこいやーーっ!!

マット界の歴史は身体同士のぶつかり合いだけではない。言葉の応酬もまた、物語性を増幅させてきたのである。というわけで、タイトルどおり、ゼロゼロ年代を語録で振り返るこの企画。名言珍言がありすぎて7ページじゃ全然足りなかった!

構成／編集部

お兄さん、ボクと勝負してください!!（桜庭和志）

▲あ、これって1999年のホイラー戦のときの発言じゃん! まあ、いいや。しかし、ゼロゼロ年代前半って桜庭和志全盛のイメージが強いけど、ヴァンダレイに2連敗を喫したのが01年……。その後はずっと体重差の壁に苦しみ続けていたわけで、それでもファンからはファンタジスタのイメージを持たれ、その期待に応え続けようとしていたからこそ、桜庭はいまでも愛されているのだろう。誰だよ、ミドル級を93キロ以下に設定したのは。

え〜、本当なの?（藤波辰爾）

▶『東京スポーツ』の報道でマット界や自分の会社の動きを知るズンドコ社長、我らがドラゴンこと藤波辰爾。文字どおり朝三暮四な社長業のため社長室の扉に「勝手に取材するな」の張り紙が貼られる始末。１９９９年から約5年近くもそんな男が社長をやっていたのだから新日本が凋落したのは当然か。最近はサッカー日本代表監督・岡ちゃんの指導力不足が叩かれてるが、ドラゴンを見てきたプロレスファンからすれば、たいしたことないのである。

プロレスLOVE（武藤敬司）

▲プロレスの仕組みを暴くかたちとなったミスター高橋本の影響、総合格闘技の台頭によって、その価値観が揺らぎまくっていたプロレス界。その危機を救ったのは、武藤敬司が発した“プロレスLOVE”という言葉だったんじゃないか。「プロレスを愛する」という統一意識の中、プロレス界はゼロゼロ年代を歩んでいった。ただし恋は盲目というように、むやみやたらにプロレスを守ってしまう風潮もあったのは確か。2010年代のプロレスはいったい何がキーワードになるのか。

落ちた、落ちた!!（吉田秀彦）

▶02年8月28日、『Dynamite!!』。柔道金メダリストのデビュー戦は、史上初の国立競技場開催!! ホイス・グレイシーとのジャケットマッチは、吉田が絞めの姿勢に入ったところでレフェリーに「落ちた!!」とアピール。それを受けてレフェリーが即座に試合を止めるも、ホイス陣営は猛然と抗議（あたりまえ）。当時は吉田秀彦の勝負師ぶりが際立ったものだが、いまとなると、なんだか10年経っても向上しないレフェリングの質が凄く気になる次第だ。ちゃんとやれや。

日本一のマザコンだから……（百瀬博教）

▲03年8月10日、『PRIDEミドル級GP』で実現した奇跡!! “PRIDEの怪人”と呼ばれていた作家の百瀬博教氏が全試合終了後、なんとリング上でマイクアピールを敢行!! この模様はフジテレビのゴールデンタイムでも中継されたが、振り返って調査すると、どの媒体にも百瀬氏の発言が報道されていないミステリー……。本誌も「日本一のマザコンだらか……」という言葉だけが記憶に残っている次第である。ちなみにPRIDEはこの回がゴールデン初登場、凄まじいデビュー戦だ!

流血の魔術 最強の演技 すべてのプロレスはショーである（ミスター高橋）

▶01年12月に発売された、プロレスの内幕を暴いた通称〝ミスター高橋本〟。海外では『レスリング・ウィズ・シャドウズ』といったドキュメンタリー作品でその内部事情が映像化されたが、本書は日本プロレス界初の団体内部からの告白となった。その話題性により売れ行きは10万部を突破。こうしてスタートしたゼロゼロ年代は、『ハッスル』などに代表されるエンタメ指向のプロレスも登場し、プロレスそのものが様変わりしていったのだ。

▼ゼロゼロ年代最大の珍事、03年大晦日『猪木祭り』のファン暴動!! そのズンドコな模様は本誌で何回も再録しているが、映像を観てない方はなんとかして手に入れてほしい。ミルコ欠場から始まった事前のズンドコ劇の結末がこの暴動だなんて本当によくできたシナリオなのだ。暴動の気配を察して控室に引き上げるヒョードルも、ガンを飛ばしながらアントンの護衛を務める藤田も最高! アントンの「さわってねえです!!」も名語録だった。

一っ!! 殺すぞ!（アントニオ猪木）

パンクラスの選手は実力もなければ人気もない（ドス・カラス）

▲02年前半期、DEEP。ルチャをナメくさりやがった謙吾がドス・カラス・ジュニアに腕を折られたことからスタートした、パンクラスvsルチャ軍団の血を血で洗う抗争劇。覆面レスラー相手だとなぜかMMAに登場してくる鈴木みのるも参戦し、46歳MMA初挑戦のソラールと対戦。しかし、みのるはタックルを切られたあげく、ソラールの二度にわたる金的攻撃で悶絶!! まったく反省の色を見せずに勝ちどきをあげるルチャ軍団は最低最悪。でも最高!! どっちが正しいとか、つまらない正論は聞きたくないのである。

俺はMMAのロナウドだ（ヴァリッジ・イズマイウ）

▲猪木につきまとう"闘魂ストーカー"ことイズマイウの自意識過剰ぶりもゼロゼロ年代を妖しく彩った。もともとカーウソン柔術の四天王の一人であり、ヘンゾやホイスから柔術マッチで勝利を奪った実力者だが、「俺が！俺が！」の姿勢がブラジリアンから失笑を買う。この発言をブスタマンチに教えたところ、あの鉄仮面な男が10分近く笑い転げたほど。「彼がそう言うんだからいいんじゃないか（苦笑）」（同席したノゲイラ）

ヴァー!!（佐々木健介）

◀02年1月4日、小川直也戦の反則裁定に納得がいかず謎の奇声を発する。あの当時の健介のイメージは「しょっぱい」であり、「正直スマンかった!!」という迷言もあった。それがまさか健介がバラエティ番組の常連になり、TOYOTAのコマーシャルに出るなんて（北斗晶の尽力も大きいけど）、誰も思いもしなかっただろう。ヴァー!!

敗者は去～れ!!（菊田早苗）

▶04年4月28日、『PRIDE・20』。当時パンクラスのトップだった菊田はひさしぶりのPRIDE参戦。強豪選手のマッチメイクが期待されたが、なぜか相手はアレクサンダー大塚に。噛ませ犬扱いに激怒したアレクは、菊田のプロレス軽視発言を引っぱり出し、パンクラスと因縁のあるソラールをセコンドにつけ、試合中は金的攻撃を狙うムーブを連発。PRIDE史上最低の泥試合となり、試合後も醜い舌戦が繰り広げられたが、お互いの人間性がむき出しとなってある意味で見ものだった。

奥さん、遺骨を貸してください!!（橋本真也）

▶03年5月5日の川崎球場、癌で余命幾ばくもなかった冬木弘道さんは、一夜限りの復活試合として、橋本真也と電流爆破マッチを行なうはずだった。しかし、冬木さんはその2カ月前に死去。試合当日、金村キンタローと電流爆破マッチを行なった破壊王は試合後、冬木さんの遺骨が入った骨壺を抱え、電流ロープに身を投げる。その破壊王も、冬木夫人と交際するなど複雑な人間模様の末、この世を去った。

悲しいことだが、いまのK—1は俺が命を削るような鍛錬をしてまで出ていく権威がなくなってしまった（ミルコ・クロコップ）

▲03年春――、MMAファイターとして覚醒しつつあったミルコが、当時まだ幻想を維持していたボブ・サップ撃破を手土産に、PRIDEへ電撃移籍!! K—1GP制覇の経験はないものの、当時K—1のアイコン的存在だったミルコの離脱は、格闘技界の盟主交代の瞬間ともいえた。アイコンを失なったK—1はモンスター路線に拍車がかかり、PRIDEはそのミルコの打倒ヒョードル物語を大きく展開することで空前のムーブメントを巻き起こす。ミルコの選択が両イベントの運命を大きく変えたのだった。

あは～ん!!（藤原紀香）

▲〝格闘技解説界の女王〟藤原紀香嬢。あの手この手の解説術で若手タレントの台頭を許さない。時にはヒイキ丸出しで選手愛を語り、時には「中腰で応援してます！」と意味があるようでないような姿勢をアピールすれば、な、な、な～んと、あえぎ声のような奇声を発するんだから誰も勝てないって!! かつては嫌悪感しかなったわけだが、あなたはもう紀香という麻薬なしではK—1を観ることはできないはずだ。え？ そんなことないって？ あは～ん!!

ビーストコールですねぇ（谷川貞治）

▲03年8月16日、サップvsキモ。ラスベガスで行なわれた、当時のモンスター路線を象徴するK-1バトル。知名度でサップを勝るキモに声援が集中、場内からは「キーモ!」コールが発生しているのに、エコヒイキ解説の名手サダハルンバは「ビーストコールですねぇ」とのんきな一言。最近になって判明したが、サダハルンバは本当に「ビースト!」コールが起こっていたと思っていたそうだ。2010年代もこの調子なんだろう。んあ～!

プロレスラーなので思わずDDTが出てしまった（山本宜久）

▲04年2月1日、『PRIDE・27』マーク・ケアー戦。薬物中毒から復活を遂げたケアーが開始早々得意のタックルを仕掛けたが、勢い余って頭をリングに強打!! プロレス技で言うところのDDTを受けた状態で失神してしまった。あきらかにケアーの自爆行為なのに、なぜかヤマヨシは「相手の心が折れた」だの得意げに勝利をアピール。ヘビー級GP出場どころか、制裁マッチとしてミルコ戦が決定してしまったのである。ある意味こっちも自爆!!

ルールを守れー

殺し（井上義啓）

▶06年12月13日に永眠された活字プロレスの始祖、I編集長こと井上義啓さん――。井上さんがいなければ、本誌どころかプロレスマスコミは存在しなかったと断言できる偉人。「プロレスは底が丸見えの底なし沼」などに代表される名文句を次々に世の中に送り出したが、リスペクトしてやまないのは老害が甚だしい昭和プロレスマスコミの中では唯一、MMA文化にも強い理解と興味を示し続け、斬新な発想でMMAのおもしろさを読者にお伝えしてくれた。井上さんに青木問題を語ってもらいたかったです。

ロシア人はロシア人が始末する!!（ヴォルク・ハン）

▶リングス・ロシア（ロシアン・トップチーム）は、強さとハッタリを兼ね備えた〝最後のプロレスラー〟集団だった。リング上の強さは言わずもがな。幻想が膨らむ言動も我々をしびれさせてくれたのである。このセリフは、トップチームを抜けてレッドデビル入りしたヒョードルに向けて。結局、ハリトーノフは刺客たりえなかったが、この言葉だけで何杯おかわりできたことか！

大晦日、判定ダメだよ、KOじゃなきゃ（五味隆典）

▲04年12月31日『PRIDE男祭り』。俺たちはギラギラする五味隆典が大好きだ。燃える五味を見せてくれ!!

俺の頭はどこへいった？
（ドス・カラス・ジュニア）

▲03年10月5日、『PRIDE−武士道其の一−』で実現したミルコvsドス・ジュニア。覆面で遮られた視界を広げるため、ルチャドールの命であるマスクを大胆に切り裂いてこの試合に臨んだジュニア（素顔に近い状態だった）。しかし、ミルコにジリジリと間合いを詰められ、左ハイキックが側頭部を直撃!! 試合を止めるレフェリー！ あわてて駆け寄ったセコンドにジュニアはこんなドラマチックな言葉をつぶやいたのだった。

なぁ〜にがやりたいんだコラ!!（長州力）

▲03年11月18日、ZERO-ONE道場内で勃発した橋本真也と長州力の口喧嘩!! 語尾に「コラ!」をつけて罵り合うことから"コラコラ問答"と呼ばれた。「噛みつきたいのか噛みつきたくないのか、どっちなんだコラ!」「何がコラじゃ!」「何コラ!タココラ! 紙面飾るなって言ってんだコラ!」「おまえが言ったんだろ、コノヤロウ!」「言ったのはてめぇだろうコラ!」「おい」「何コラ!」。以上、いい大人が真面目に怒鳴り合っておりました。

我こそが髙田モンスター軍総統、髙田だ！（髙田総統）

▶04年1月4日からスタートしたファイティング・オペラ『ハッスル』。本来は小川直也と橋本真也の二人が主役のはずだったが、『ハッスル2』から登場した髙田総統が徐々に存在感を増していく。全試合終了後の髙田総統のしゃべりが実質的なメインイベントであり、フジショックで揺れる『ハッスルエイド』ではエスペランサーとしてサプライズ出現!! 全身でハッスルを表現していた彼が姿を消した時点でファイティング・オペラの幕は下りていたと言いえる。

ヤバイ、かっこよすぎる、俺（山本"KID"徳郁）

▲06年5月3日、『HERO'S』代々木大会。苦戦が予想された宮田和幸をわずか4秒でKOしてのマイクパフォーマンス。「神様の子ども」に始まり、須藤元気戦後の「おまえらよくやった!!」もそうだし、KIDの語彙の独特さは他ジャンルのスーパースターのそれに通じるものがある。2010年代も言葉が映える活躍を期待したい!!

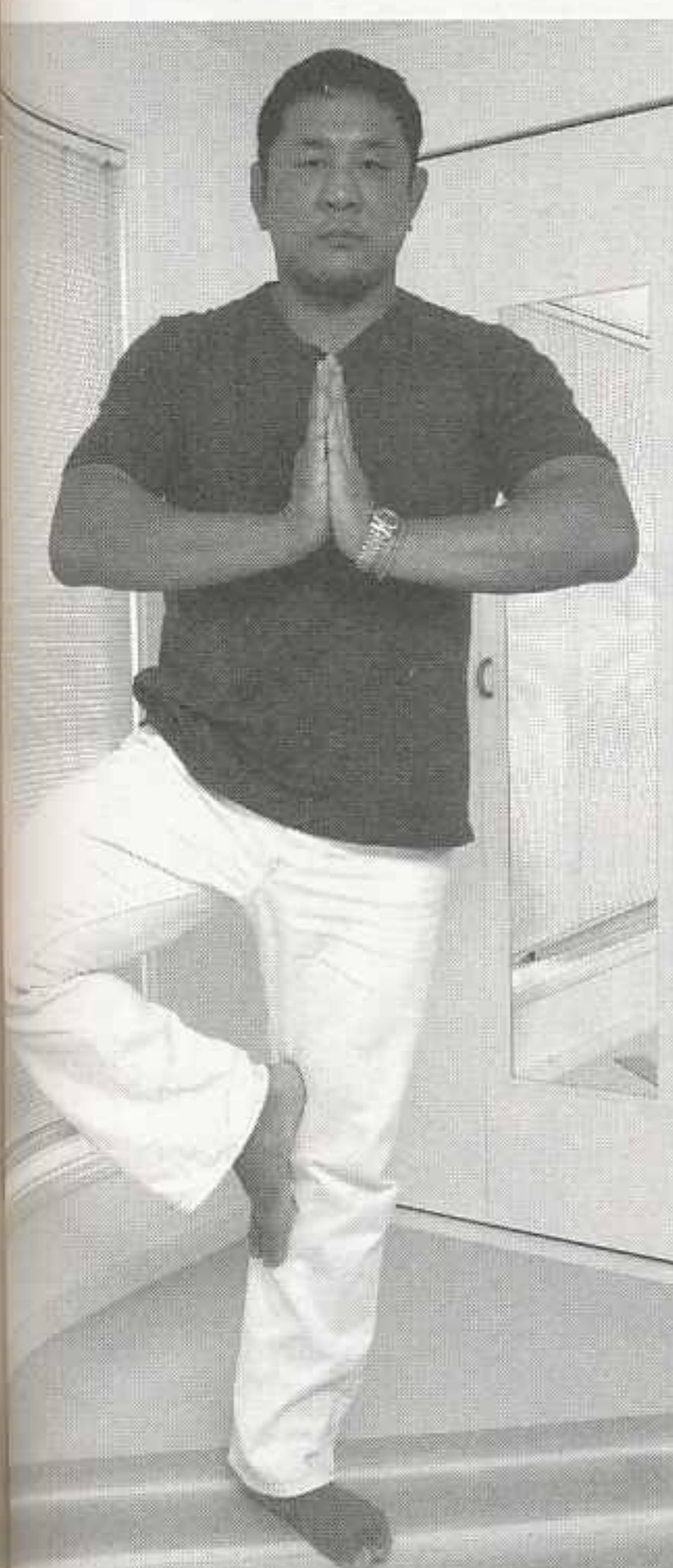
鳥肌立った!!（髙田延彦）

▶引退直後のPRIDEでビジョンに「引退してからパワーアップ!!」という失礼な文字が躍ったが、文字どおり統括本部長として大活躍!! 「おまえ、男だよ！」「出てこいやーっ!!」「ヘロ〜、アメ〜リカッ！」等の煽り文句でPRIDEを盛り上げた。解説者としても、格闘技の凄さをなんのてらいもなく表現する"驚き屋"の地位を確立。いま一度、解説席に戻ってきてほしい……桜庭和志の引退試合とかで！

シュポーーッ!!（上井文彦）

▶新日本執行役員から『HERO'S』プロデューサー、ビッグマウス興行へ。そして上井さんがたどり着いた"終着の浜辺"が上井ステーション!! 駅長ルックに身を包んだ上井さんは「出発、進行！」と叫び、笛を吹く。10年のあいだに、とんでもない路線を走ってしまったようだ……。

ニールセン戦とヒョードル戦とはジャンルが違うだろ。胸に手を当てて考えろ!!（永田裕志）

▶03年12月31日『猪木祭り』でヒョードルに惨敗した永田さんを前田日明がボロクソに批判!! ところが前田が自身の異種格闘技戦を引き合いに出したことに永田さんが噛みつき返す！ 永田さんの発言は、ある意味で一線を越えているので胸の内にしまっておきたい内容なんである。ちなみに永田さんは「いいんだね殺っちゃって！」「みんな離れてく〜（涙）」など名言を多数輩出。

中村和裕とは闘いません（ハイアン・グレイシー）

▲05年12月31日『PRIDE男祭り』。安生洋二を下したハイアンのもとへ中村カズが登場。カズは対戦を要求するが、ハイアンは吉田秀彦や桜庭和志の名前を挙げて無視。髙田本部長が仲介に入って、なんとか対戦を合意させようとするも、絶対に首を縦に振らないハイアン。そもそもファンからとくに待望論もなく、中村アップの狙いが丸出しで嫌らしいこのカード。団体側が無理に強いたレールを破壊するハイアンはとにかく最高だった。

吉田、一緒にハッスルしてくれよ!（小川直也）

▲06年12月31日『PRIDE男祭り』。柔道時代から不仲がささやかれていたため絶対に実現しないと言われていた日本人対決。小川はその年に急逝した橋本真也を背負って挑んだが、MMAでの経験に勝る吉田の前に一本負け!! 試合後、両者は抱擁し健闘をたたえ合い、美しいエンディング……を迎えるはずが、小川が吉田にハッスルポーズを要求! 頑なに拒否する吉田、食い下がる小川。大晦日の夜に非常にくだらない意地の張り合いだ!（笑）。

U-STYLE Axisをやってあげたから「出ろ」というのは、お門違い!!（田村潔司）

▶桜庭和志戦実現のためにいろいろな手段で田村を説得していたPRIDE。あるときはジムの前で張り込み、あるときは榊原代表が「ハッピーバースデー、タムちゃん♪」と誕生日を祝う。そしてU-STYLE興行までもDSEが開催！ これで桜庭戦に同意かと思いきや、「あれはあくまで瀧本誠戦を受けたときの条件」と突っぱねるから、さすが赤パン！ というわけで、二度とU-STYLE Axisが開催されなかったことは言うまでもない。

ねつ造です（榊原信行）

▶07年、PRIDEを襲った〝反社会勢力〟スキャンダル報道。PRIDE消滅の引き金となったが、毎回過激な発言を連発してくれた榊原氏もフェードアウトになってしまったからじつに残念。ちなみに榊原氏のラストインタビューのシメは「ロサンゼルスで10万人興行をやるくらい格闘技人気は高まってるんだからね。10万人きっと集まるよ（ニヤニヤ）」という『Dynamite!! USA』への強烈な嫌み!! なんたる捨て台詞だろうか（笑）。

おまえが闘わないなら、人が殺される（ボブ・サップ）

▲06年5月13日、K−1アムステルダム大会。アーネスト・ホーストの引退相手を務めるはずだったサップは試合直前にボイコット（契約問題のためと言われる）。サップは大会関係者に「脅された」とし、バンテージを巻いたまま逃走（凄い絵だ!）。日本で記者会見を開いてK−1を口撃するなど、醜い泥試合を演じたが、なんだかんだで1年後に和解。キン肉万太郎と闘ったりするから、この業界って凄く不思議!

人生はつらいもんなんだ!（フィル・バローニ）

▶06年10月21日、PRIDEラスベガス大会。試合後、ヒョードルに敗れたコールマンのもとへ自分の娘が駆け寄ったことについて、現地記者から「子どもに嫌なものを見せたのでは？」という意地悪な質問を飛ぶと、黙ってなかったのは〝夕焼け番長〟バローニだ！「なんでそんな質問してんだ？ 意味がわからない。俺が子どもだったらマークを誇りに思う!!」と大演説、万雷の大拍手!! つまらない正論を吹き飛ばしてやったのだ!! バローニ最高！

おまえはすでに死んでいる!!（ジョシュ・バーネット）

▶日本のサブカル文化に通じてUWFを愛する世界最強の男、ジョシュ・バーネット。多くのファンから愛され、いつブレイクしてもおかしくない逸材だったが、UFCとは金銭面で折り合わず、PRIDE登場時は地上波放映がなく、新日本やパンクラスはまあいいとして、なぜかIGFをチョイスするノーセンスぶり。トドメはヒョードル戦直前のドーピング検査で陽性反応！ 結果的にイベント自体を消滅に追い込んでしまった。この不遇ぶり、なんとかならんか!?

谷川黒魔術（菊地成孔）

▲音楽家にして文筆家、本誌でもおなじみの菊地成孔氏がサダハルンバの手練れぶりを的確に表現。いまではすっかり定着しているが、これ以前は「谷川マジック」などとポジティブな印象をもって捉えられていたんだからビックリだ。

ざまあみろ!!（前田日明）

▲新生PRIDE日本事務所の閉鎖により、事実上のPRIDE崩壊。それを受けて「UFCが出てきて金で選手を引っぱってどうのこうのと言ってたけど、おまえらが一番最初にやったんじゃないか!」とさんざんに罵倒した前田日明だが、これってDSE体制の崩壊じゃなくてロレンゾ側のギブアップ。破壊力は抜群だが、論点が間違いまくりなのはあいかわらず。「ちょっと落ち着け」と言いたくなるが、1を聞いて10を勝手に理解して暴走するからこそ前田日明なんだ!

▼もともとは飛龍革命（各自調査）の際にアントンがドラゴンに問いただした言葉。PRIDEの煽り映像で使用され始め（最初はたしかドン・フライ）、五味隆典をフィーチャーした『武士道−其の十三−』オープニング映像で印象を深める。06年10月、PRIDE活動停止を受けたスタッフや選手が、準備期間わずか4週間で大晦日イベント開催することになり、困難な状況に立ち向かう自分たちを奮い立たせる意味もありネーミングされたと言われる。

やれんのか!（立木文彦）

試合させてください。お願いしやす!!（川尻達也）

◀07年大晦日に開催された『やれんのか! 大晦日! 2007』。PRIDE沈黙から8ヵ月間――、再開を待ち続けたうちの一人が川尻達也だった。試合の予定もないのに黙々とトレーニングを続ける川尻の姿を佐藤大輔のカメラが追いかけると、川尻はへたり込みながら絞り出すように上記の言葉を発した――。PRIDEや格闘技への思いが詰まった名シーンであるが、こうして広まったのは青木真也の悪意を持った川尻モノマネのせいだったりする。「お願いしやす、ですよぉ（笑）」（青木）

多汗症なんです（秋山成勲）

▶2006年12月31日、秋山成勲vs桜庭和志戦。詳しい説明は不要だろう。この事件によってみんながうすうす気づいていた秋山の魔王性がむき出しに。その後もスター気取りで強豪ファイターとの対戦を回避するなど、ますますヒール度がアップ。UFCでもトップランカーでもないヴァンダレイ・シウバとの試合にこだわり（日本・韓国市場へのアピールがあるんだろうが）、あいかわらずの“秋山業”ぶりを繰り返しているんだから、さすが魔王なのであった。

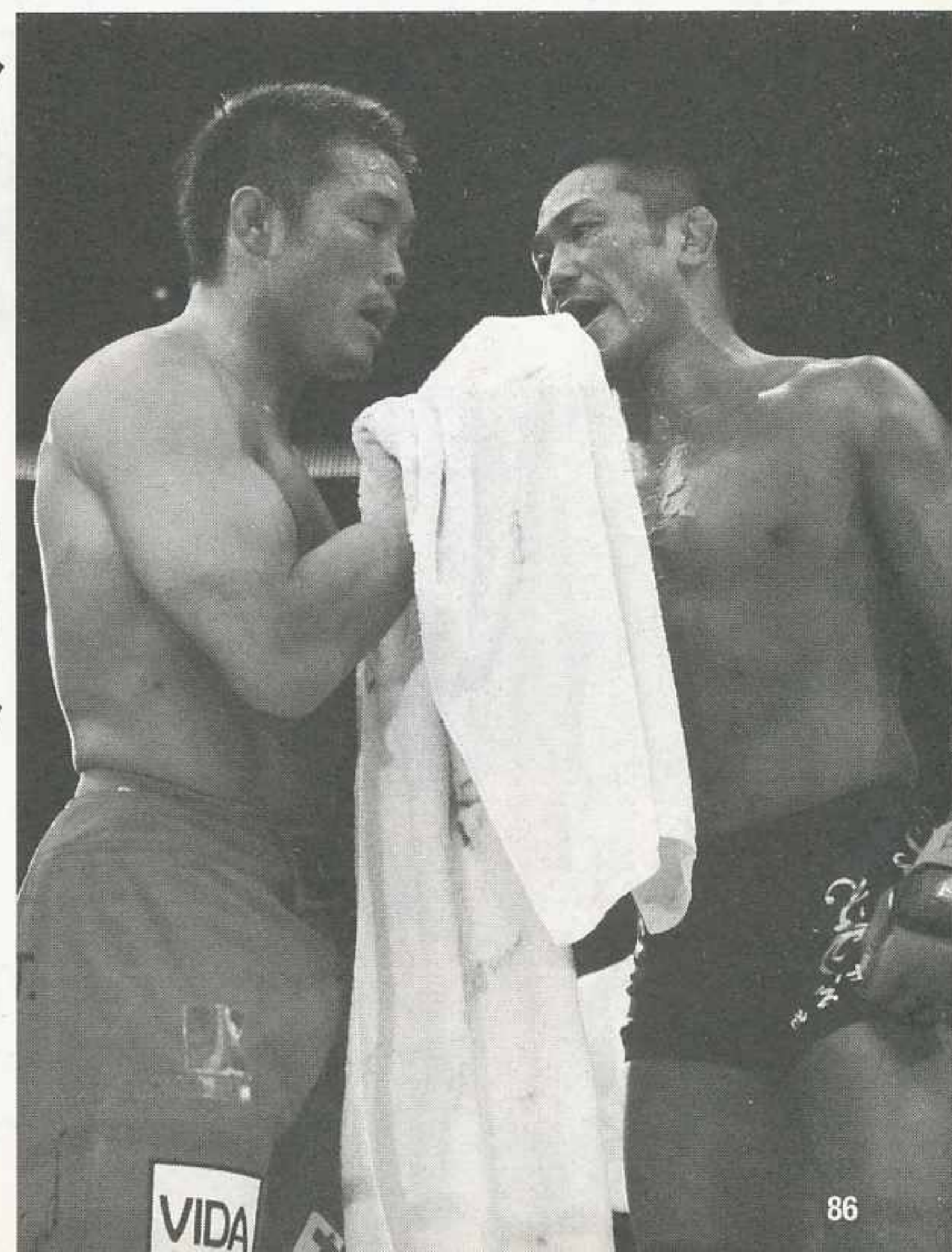
○○には負けられない理由がある（TBS）

▶家族ネタ、貧乏ネタ、病気ネタ……。なぜTBSが安易なお涙頂戴路線に走るかといえば、それは01年『猪木祭り』で安田忠夫のプロデュースに成功したから。安田と娘の家族物語の成功体験がTBS格闘技を作り上げたといっていい。まさにバカの一つ覚えとはこのことだが、10年間も続けたのだからある意味でたいしたもの。というわけで、2010年代も「負けられない理由がある！」を見続けることだろうなあ……。

いつまで夢を見ているんだ（『戦極』）

▲07年3月15日、旗揚げイベントのオープニング映像でいきなりDREAMを挑発した『戦極』（現SRC）。いきなりファンを「おまえら」呼ばわりするのはどうかと思うし、夢を見ることを否定しながらPRIDEの後継イベントをちゃっかりアピール。夢を見てるのはどっちなんだと言いたくなるが、夢への投資を惜しまないドン・キホーテの安田会長だけは大好きです!!

おまえは子どもたちを裏切った!!（三崎和雄）

▶大晦日には何かが起こる!! 07年『やれんのか！』で勃発した三崎和雄の説教劇場。試合直後のためテンションMAXの三崎は、敗者の秋山に「おまえの気持ちが俺に届いたっ!!」と詰め寄るも、意味不明な言葉に秋山は困惑。心が届かなかったばかりか、「柔道最高！」という秋山のキメゼリフを使用し、元・在日韓国人の秋山に対して皮肉とも誤解される「日本人は強いんです！」と叫ぶなど大暴走!! 三崎の狂気がおもしろく発露した一夜となった。

カ、カテエ!!（永島勝司）

▶プロレス劇画の第一人者、原田久仁信先生が『別冊宝島』のプロレスムックで大復活！ 永島のオヤジを主人公に据えて、ズンドコ団体WJの倒産までの珍道中を激筆している！『プロレススーパースター列伝』から変わりない、原田先生お得意のセリフ回しも物語の絶妙なスパイスに。最新作ではターザン！山本も登場!! 原田先生の筆が乗ってきたのか、キャラクターもじつに生き生きとしている。ウグッ、ネタがつきねぇ……。

▶もっと詳しく!!

ヤ○ザに妨害されている（ダナ・ホワイト）

今日は、ハッスルの『インリン様』を応援していただいたファンの皆様に、私、インリンからの悲しいお知らせがあります（インリン・オブ・ジョイトイ）

▲08年5月24日、みんなから愛されたインリン様が引退——。カーテンコールにおいて無言でムチを振り回すという感動的な演出をみせたが、数カ月後に事態は一変！ インリン様ことインリン・オブ・ジョイトイがギャラの未払いを告発したのだ！ しかもインリンの熱愛記事が週刊誌に出たことが、強制的な引退につながったことも判明。なんじゃそりゃ。さんざっぱら他団体をネタにしていた『ハッスル』が、スキャンダルをビジネスにできない段階でとっくに終わってるよ。

サクラ～バ、俺はまだ闘ってるぞ!!（ヴァンダレイ・シウバ）

▶ちょっと前の本誌で、落日を迎えるミルコ・クロコップのアンケートを掲載したときに、ナメくさりやがったコメントを送ってきやがった関係者様がいたんですが（泣く泣く掲載。まあノーギャラだしね）、格闘家には〝春夏秋冬〟があって、どんな強いファイターでも厳しい冬が訪れる。もしかしたら再び春の陽が差し込む前に力つきる戦士もいるだろう。もちろん批評性を失なってはいけないけども、男として闘い続けた彼らの〝死に様〟は尊敬の念を持って見届けたい。桜庭がマヌーフの狂拳に挑む直前、ヴァンダレイはこんなメッセージを送っていた。

ナメくさりやがって!!（桜井〝マッハ〟速人）

▶09年4月5日、DREAMウェルター級GP開幕戦で実現した青木真也vs桜井〝マッハ〟速人。青木の生意気な言動に激怒したマッハは、技術を超越した力で青木を秒殺！ なんとマッハはこの試合のために本格的な減量法を取り入れるほどの〝真剣モード〟だったが、肝心の決勝ラウンドは減量失敗で敗北!! 多くの関係者がズッコけたわけだが、それはそれでじつにマッハらしい。

因果律（高瀬大樹）

▲こんにちワッフル！『プライド時代の光と影』と題されたシリーズで、PRIDEの舞台裏を回顧するブログが大人気!! 一躍〝時の人〟となった高瀬大樹先輩。詳しいことは勝手に調査していただきたいが、因果律をキーワードにしたエピソードはムシャムシャと全部ほおばりたくなる。中村カズやマッハ、青木真也に絡んだりして、その影響力は國保氏ブログのコメント欄を見れば一目瞭然なのである。

どんな重い十字架でも背負う（齋藤彰俊）

▲09年6月13日、三沢光晴さんが試合中の事故により亡くなられた。三沢さんは1981年に全日本プロレスに入門。2代目タイガーマスクとして活躍。マスクを脱いだ90年代は小橋健太らと〝四天王プロレス〟という過激でハイレベルなスタイルを確立。馬場さん死去後、全日本プロレスを離れノアを設立した。そして今回の事故——。トップ選手が事故死するという前代未聞の事態は、対戦相手となった齋藤だけではなく、プロレスというジャンルを見続ける者も背負わなければならない十字架のはずだ。

刺せと言われれば刺しに行きます（青木真也）

▶09年12月31日『Dynamite!!』で青木真也が廣田瑞人の腕を折り、中指を立てて挑発するという狂気の大晦日!! DREAM vs『戦極』の大将戦となったこの試合は、『戦極』側の強い要請によって実現。内定していた川尻達也戦をキャンセルされたうえ駆り出された青木真也は怒り心頭。ある意味で予告どおりの凄惨な決着となったが、現役時代、青木以上にノーモラルだったアントンと前田日明が青木を否定するから逆におもしろいのである。

椎名基樹の サムライ三昧

第46回

『容赦のないオヤジ対決』

©Josh Hedges(UFC)

現地時間2月6日に開催された『UFC 109』のメインイベントはクートゥアーとコールマンの二人合わせて91歳というレジェンド同士のオヤジ対決。気合い充分のコールマンだったが、やはりオクタゴンではクートゥアーが一枚上手。2ラウンド、チョークでコールマンが無念のタップ! また明日生きろよ!

本誌今号の特集テーマは〝オヤジ〟ということらしいが、ランディ・クートゥアーとマーク・コールマンの、ランキングを超越した、レジェンド同士の〝オヤジ対決〟がメインに据えられた、『UFC109〜RELENTLESS〜』。

「容赦のない」という意味らしい、イベントタイトルどおり、45歳のコールマンが、46歳のクートゥアーに、ボコられたうえに、最後はバックチョークで絞め上げられてしまったのであった。

映画『レスラー』のランディは、荒れた生活で肉体もボロボロであったが、こちらのランディはグッドシェイプで、コンディションばっちり。

最近、肉体の衰えを痛切に感じ、気弱になっているときは「死んじゃうんじゃないか」とパラノうときもある筆者も、運動の大切さを、クートゥアーを見て実感(もちろん、コールマンだって凄い)。

それにしても、やる前からどうにもクートゥアーの勝利は動かないと思われたこのレジェンド対決。「容赦のない」というタイトルも、何かコールマンの惨敗を予想してつけられたのではないかと勘ぐってしまう。

ただ、試合直前、オクタゴン中央で、両者の並んだ画は、傷だらけ皺だらけの顔が、カカオの実同士が睨み合っているようであり、また、あんまり二人とも顔がぐちゃぐちゃなので(とくにコールマン)、「逆さまにしても顔に見える顔」のようであり、その味わい深さは、両者互角の迫力であった。

この『UFC109』の裏メインともいうべき対決が、セミで行なわれたミドル級の対決、ネイサン・マーコートvsチェール・ソネンである。マコト姉さんはパンクラスの元チャンピオンとしてもおなじみだ。対する、チェール・ソネンは、日本の期待、岡見勇信を下したことで日本人には知られていると思う。

岡見が負けたときは残念でならなくて「もう一歩でタイトルマッチなのになぜだ〜!」と思ったものだが、今回の試合で「岡見はこんな化け物みたいなヤツと闘っていたのだなあ」と思い知らされる。

この試合は、じつにUFC的な内容であった。グラウンド&パウンドでソネンが上になる展開に終始して、いつもならその試合展開はあまり好まないのだが、この試合はとても迫力があった。

両者が最後まで動き続けたのが、好試合の最大の理由で、鍛え上げられた男同士が、汗みどろになって取っ組み合う様は、まさにケンカ然として、MMAらしい魅力にあふれていた。

とくにそう思えたのは、期待していた柔術世界王者デミアン・マイアとダン・ミラーの試合が、へたくそなキックボクシングに終始する、じつに低調な内容だったからだ。

MMAの試合で、一番最低だと思うのがこの展開だ。その典型が、大晦日に行なわれた、泉浩vs柴田勝頼ではないか。

先月号で「好きだ」と書いて、上げておいて落とすようで申し訳ないが、打撃のバックボーンもない同士が、スタンドで膠着してしまう試合くらい、MMAを貶めるものもないのではないか。

観客は、素人の殴り合いを見るはめになってしまうのだ。何もわからない初めて観る人からすれば「いったいなんだ?」ということになるだろう。

デミアン・マイアは、やはり柔術王者なのだから、スタンドで膠着したならば自ら引き込んで闘う姿が観たかった。しかし、UFCで自ら下をチョイスすることは非常に勇気がいるだろう。結局、デミアンは判定勝ちしたのだから作戦は成功したと言えるのかもしれないが、このままのスタイルで勝ち続けるのも不可能なのではないか。そもそも、この日の判定も、なぜデミアンが勝ったのか、よくわからなかった。筆者はダン・ミラーが勝ったと思った。

UFCはヒジがあり金網で動きを封じられるので、下をチョイスしがたいのかと思うと、やはり想像をめぐらせてしまうのは「我らがKYグラップラー青木真也がUFCに上がったらどうなるのだろう?」ということだ。青木が鮮やかにUFCで勝ち続けることは、もはや日本のMMAファンに残された最後の夢である。

泉浩も石井慧も「ただ打撃の練習をしています」といった感じでなく、青木のように、自分のファイトスタイルを思い描き、それを構築するために、どうするのか、そういうものが見える試合を見せてほしい(デミアン・マイアも)。

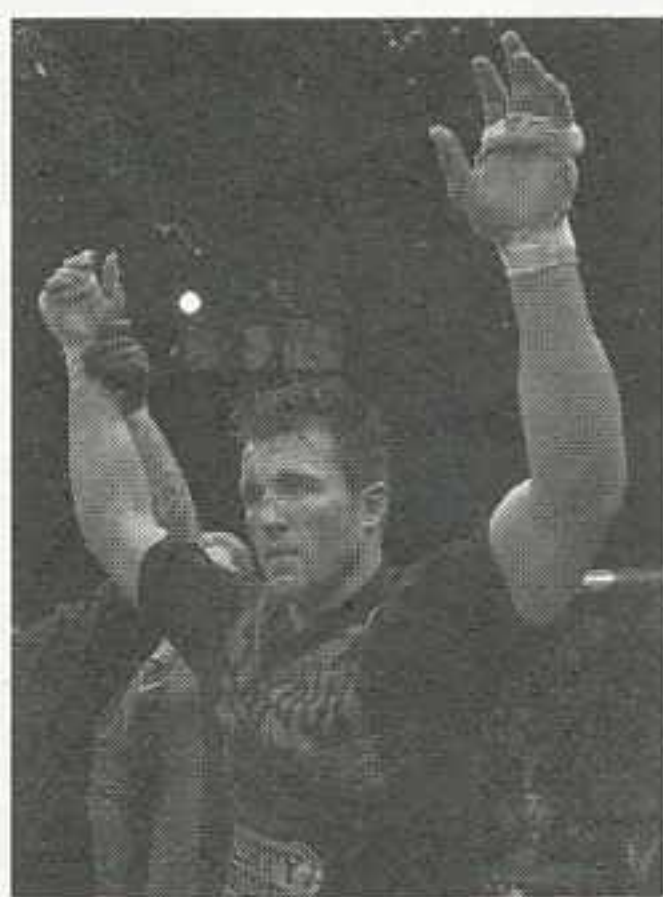
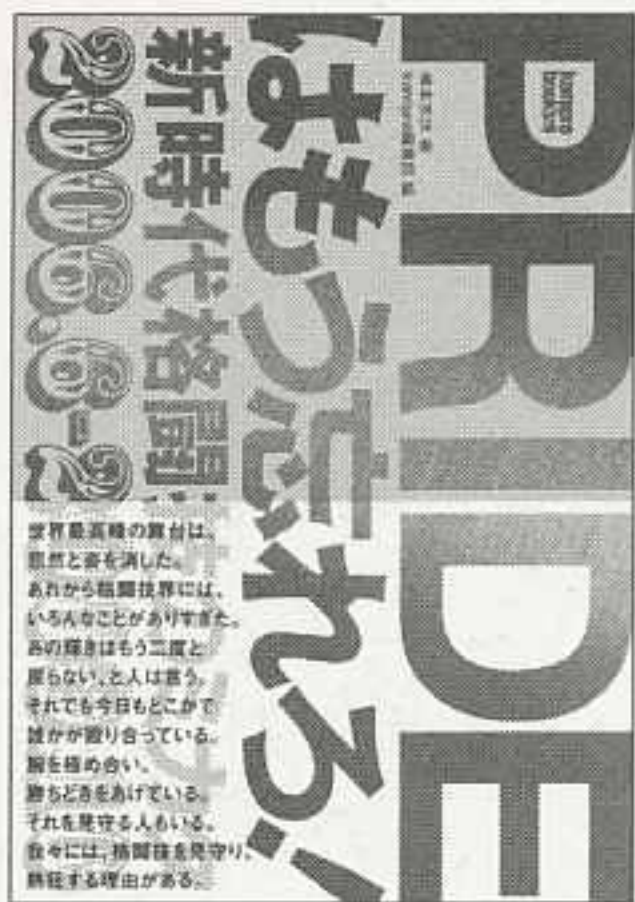
あと、『UFC109』の第1試合に登場した、ホーレス・グレイシー。あまりの闘いの不細工加減にがっかり。グラウンドで亀になって動かなくなってパウンドを浴びるなんて、グレイシーの名がつく者がすることじゃない。

UWFを崩壊させたグレイシーは、時が経っていまは、その幻想をずっと抱いていたいと思わせる存在だ。それは、かつてのUWFがいた部分に、そっくり入れ替わったようでもある。繰り返すが時が経ったんだなあ。

次回『UFC110』では、ヴァンダレイ・シウバと、このあいだまで『TUF』で観ていたマイケル・ビスピンがやるんだってな。やになっちゃうなあ。

この男が〝化け物〟チェール・ソネンです!

kamipro books

驚ガク! 衝ゲキ!! kamipro booksシリーズ!
死闘インタビューの歴史的目撃者になれ!!

PRIDEはもう忘れろ!

**フジテレビショックから始まった
日本マット界激動の歴史を追う!**

フジテレビショックは日本格闘技界に何をもたらしたのか? 本誌でおなじみのライター橋本宗洋が送るMMAクロニクル。本書は、本誌携帯サイト『kamipro Move』で好評連載中の週刊コラムを厳選収録したものである。PRIDE凋落の時期からスタートした連載は、あらためてPRIDEの存在意義、役割を見つめ直し、そしてPRIDE消滅後、それでも生き続ける格闘技のおもしろさを綴っている!

B6変型判　336ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

魔王　秋山成勲 二つの祖国を持つ男

**秋山成勲なのか
チユ・ソンフンなのか——。**

2006年12月31日大晦日『Dynamite!!』秋山成勲vs桜庭和志戦で発生したクリーム塗布事件。この一件以降、秋山は日本では悪質な反則選手、片や韓国では悲劇の元・在日韓国人と、評価が真っ二つに分かれた。本書籍は秋山成勲が、柔道界での挫折ののち、総合格闘技家としてデビューして"魔王"と呼ばれる怪物に至るまでを検証するノンフィクションである。

B6変型判　264ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

新日本プロレス学習帳

**"業界の盟主"の魅力を
凝縮したインタビュー12連発!**

★鈴木みのる&獣神サンダー・ライガー★小林邦昭★平田淳嗣★金本浩二★山本小鉄★新倉史祐★田中秀和★中西学★天山広吉&金原弘光★マサ斎藤★永田裕志★中邑真輔

『kamipro』に掲載された新日育ちのレスラー&関係者のインタビューが一冊に! これを読めば老舗団体の過去・現在・未来がまるわかり!

B6変型判　320ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

PRIDE機密ファイル　封印された30の計画

**ついにその秘密のベールを解禁!!
PRIDE幻の超極秘プロジェクト!!**

★高田vsヒクソンの前座に前田日明登場!?★長州力、橋本真也、船木誠勝の参戦計画★ホイスvsケアー消滅の計画★PRIDEが小錦獲得に動いた!?★"皇帝"ヒョードルを二度破った男 ほか

その消滅から早2年——世界最高峰のリングに封印された30の計画を発掘! さらに青木真也、三崎和雄ら6大インタビューも同時収録!

B6変型判　296ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

生前追悼 ターザン山本!

**え、ターザンが死んだ!?
90年代プロレスを徹底検証!**

★浅草キッド★いしかわじゅん★堀辺正史★更級四郎★松本晴夫★杉山頴男★谷川貞治★山口日昇★金沢克彦★市瀬英俊★小島和宏★菊地成孔★Oka-Chang★原タコヤキ君★椎名基樹 ほか

『週刊プロレス』編集長として辣腕を振るった山本さんの人生を通して、90年代プロレスブーム、はたまたプロレスという生き様を振り返る!

B6変型判　304ページ
定価=1,470円(本体1,400円+税)

八百長★野郎

**ミスター高橋本から7年……
"呪いなき"時代のプロレス再入門書!!**

★マッスル坂井★大槻ケンヂ★菊地成孔★森達也★杉作J太郎★ミスター高橋★菊池孝★高木三四郎★ハチミツ二郎★鶴見亜門★プロレス業界初"台本"全文掲載!

カミングアウト当事者から元ファンの知識人まで総動員してプロレスを再考! "プロレスの向こう側、『マッスル』"の世界に迫る!

B6変型判　296ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

U.W.F.変態新書

**ダメな大人たちへ捧げる
"変態"とUWFの晩餐!**

★UWF★前田日明★船木誠勝★高田延彦★桜庭和志★ターザン山本!★キン肉マン★PRIDE★プロレス★変態とは何か?(菊地成孔スペシャルインタビュー)★変態解説

プロレス界の一大潮流となったUWF。そのUWFに人生を学び、人生を狂わされた変態的プロレスファンたちが、UWF神話を語り倒す!

B6変型判 296ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

プロレス狂の詩　夕焼地獄流離篇

**プロレス狂がシビれる
凄玉たちのインタビュー集!**

★ジェラルド・ゴルドー★後藤達俊★小畑千代★ザ・グレート・サスケ×韮澤潤一郎★中島らも★大槻ケンヂ★シーザー武士★ダニー・ホッジ★高山善廣×金原弘光★真樹日佐夫×三池崇史

メインストリームからはみ出さずにはいられなかったファイターや、リング内外の裏表を凝視してきた関係者へのインタビューがテンコ盛り!

B6変型判　304ページ
定価=1,890円(本体1,800円+税)

底なし沼　活字プロレスの哲人 井上義啓 一周忌追善本

**井上義啓とは底が丸見えの
底なし沼である——!!**

★『週刊ファイト』&『SRS・DX』激筆再録★『猪木は死ぬか』、『不在証明あるいは猪木へのレクイエム』★新間寿★夢枕獏★ターザン山本&吉田豪★『kamipro』ラスト喫茶店トーク ほか

"活字プロレスの父"井上義啓氏の一周忌追悼本!! 氏を偲ぶインタビューや、人生最後の旅模様を振り返るエピソードも収録!

B6変型判　312ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

吉田豪のセメント!! スーパースター列伝 パート1

**吉田豪インタビュー11連発!!
インタビュー本の最濃傑作!**

★ストロング小林★阿修羅原★康芳夫★倉持隆夫★サムソン・クツワダ★猪木快守★イーデス・ハンソン★田中健一★小川宏★鶴見五郎★田代まさし

プロインタビュアーの吉田豪が、『紙のプロレスRADICAL』誌上で聞き手を務めたロングインタビューの一部を完全徹底再録!!

B6変型判　344ページ
定価=1,890円(本体1,800円+税)

enterbrain 発行／株式会社エンターブレイン 〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表)
発売／株式会社角川グループパブリッシング
[エンターブレイン総合サイト] http://www.enterbrain.co.jp/

“解凍”された奇才が語るゼロゼロ年代の構造

「次の10年、ネクストレベルの可能性があるのは“女子だけ”です」

文筆家であり、音楽家

菊地成孔 age 46

毎回鋭い分析、ユニークな発想で読者からの反響も大きい菊地成孔。
今回はゼロゼロ年代を多角的に考察してもらいながら、
この混沌たる10年間を独自の視点で振り返ってもらった。
すると、これからのマット界の鍵を握るものとして驚きのキーワードが!?

聞き手／ジャン斉藤

05年にDSE帝国崩壊について書きましたが当時は完全にシカト食らいまして（笑）

――今日は、マット界の00年代を振り返ってもらいたいんですが。

菊地　デカイくくりですなぁ（笑）。

――まず、菊地さんにとっての00年代っていかがでした？

菊地　あの～、私は90年代末に大きな病気をして、98年に入院するんです。で、死にかけて、治って、退院して。よくある話ですけど、生まれ変わったようにガーッと働きだしたんですね（笑）。

――プロレス・格闘技どころの話じゃない、と。

菊地　99年あたりから観なくなり、00年の船木（誠勝）vsヒクソン（・グレイシー）を最後に、そこから04年いっぱいまで凍結して、その年の大晦日に一気に解凍したんですよ。

――その様子を描いたのが、『サイコロジカル・ボディ・ブルース解凍』ですね。

菊地　当時・白夜書房の編集者に無理矢理、解凍させられて、最初に観たのが『PRIDE男祭り2004』（笑）。

――解凍したらいきなりピーク（笑）。

菊地　だから、たまアリに向かう車の中で、あの本は始まる、と。というわけで90年代末のPRIDE、UFCの危なっかしい頃は知ってますけど、00年から04年の動きはわからない。オーちゃん（小川直也）がハッスルポーズでブレイクし、それをPRIDEと同じDSEがやってるのも、そのとき一気に知りましたから。

――そりゃあビックリしますよね。

菊地　あのインパクトは忘れられないです。ハッスルカレーってあったでしょ？

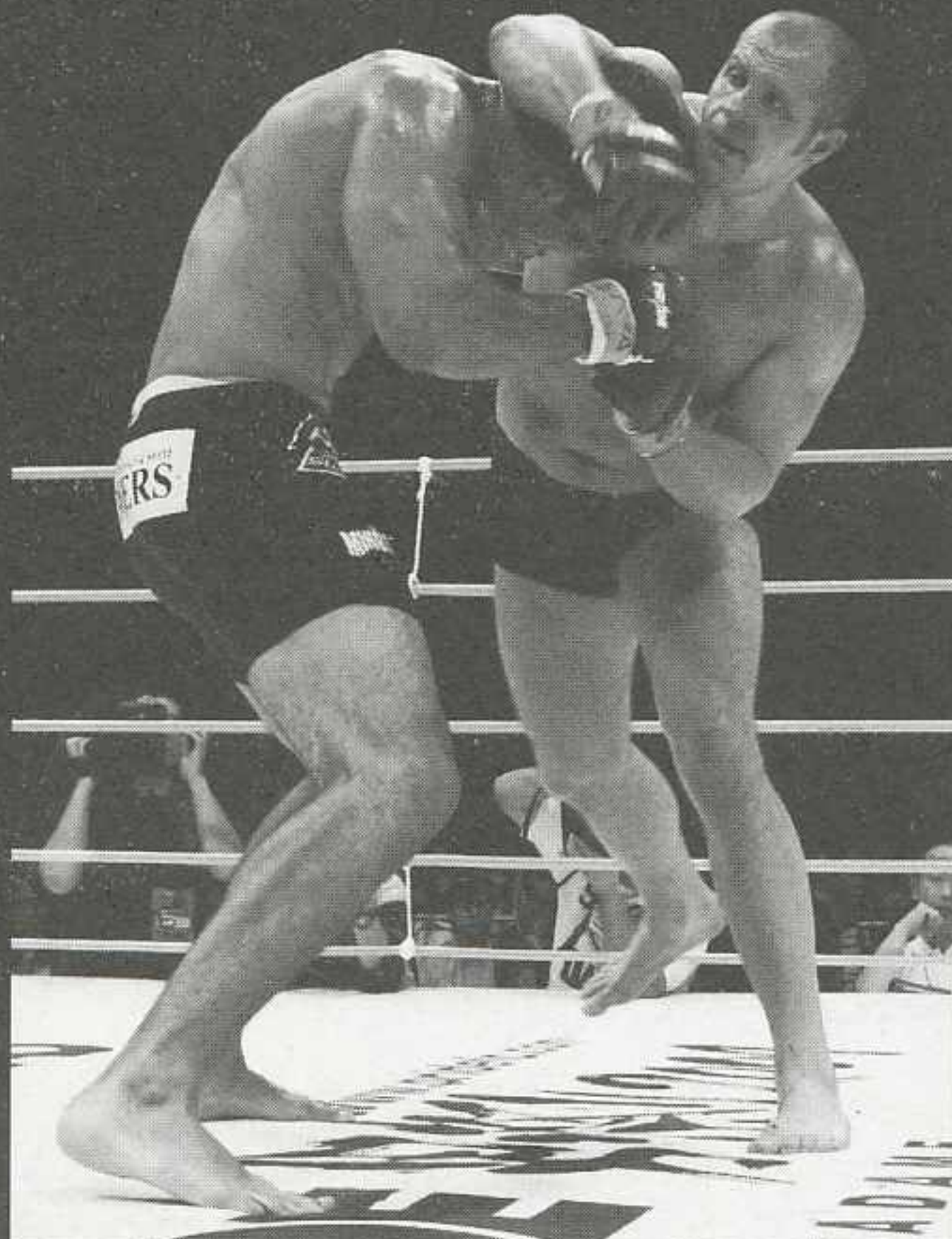
――ええ。小川直也がチキンカレー、破壊王がポークカレーで。

菊地　あれを取材前夜の12月30日に近所のドン・キホーテで初めて見まして。手に取って「これが『ハッスル』か！」と（笑）。

――ダハハハハ！

菊地　デイケイド（10年周期の年代区分）って、「70年代」とかいって、「00から09」が普通ですけど、「05から04」派の人もいるの。ハーフデイケイドと言いますが。第二次世界大戦が終わったのが45年で、そこから10年ずつという。45年から54年、55年から64年、どれも時代の変わり目の年です。で、そのまま95年が来る。95年はインターネットの爆発的定着の年であり、阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件の年で、日経誌がバブルの崩壊を正式に報道した年でもある。

――社会的に、凄く重要な年ですね。

菊地　その95年から04年までが90年代とすると、けっこう暗い鬱の時代ですよね。バブル崩壊、エヴァンゲリオン、終わりなき日常。みたいな。そんで、そういうのももう終わりだってのが05年からだ、と。まま、エヴァンゲリオンは新日本みたいにエバーグリーンになっちゃいましたが（笑）。

菊地氏が5年ぶりに触れた格闘技イベント、世界最高峰のリング『PRIDE男祭り2004』。メインではDSE帝国の繁栄を象徴するかのように、エメリヤーエンコ・ヒョードルとアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラが激突した。

――05年は、ミルコvsヒョードルの年であり、和泉元彌が『ハッスル』に上がった年でもありますね。

菊地　PRIDEとハッスルのピークよね。その二つが両立していること自体、95年からの暗い感じを払拭しているとも言えます。ただ、ワタシは当時の気分は外国から帰ってきた留学生ですよ。「うわ！　日本ってこんなになってんだ！」と。で、ピークを見た感想は「コレ、やりすぎじゃない？　ヤバいよな」っていう。

――繁栄の過程を知らないからこそ、よりトゥーマッチ感が強かったのかも。

菊地　歴史上、マレに見るおもしろい状態なんだけど、「万能感が凄すぎないか？」と。世界の両端から抱え込む大帝国だからね。これはあっという間に崩壊する危険があるぞ、と。これも本に書きましたが、まあ、当時は完全なシカト食らいまして（笑）。

――一方、「05から04」のデイケイド論以外にも、00年代の最中に「90年代ノット・デッド」とおっしゃってましたね。

菊地　デイケイドは「しがみつき」を生むか、生まないかという区分があります。80年代が始まったときは、新時代だ、ポストモダンだ、テクノカットだと騒いでいる人々は、70年代にしがみついてるフォークの格好した人々を嘲笑してた。ところが90年代にはネオヒッピーというかたちで70年代風俗に戻ったじゃない？

――レイブ文化や渋谷系文化みたいなものがバーッと広がりました。

菊地　そしたら80年代の人って簡単に80年代を捨て、すぐ90年代に乗り換えた。私見ですけど、70年代と90年代というヒッピーめいた時代は「しがみつき」を生みやすい。80年代を捨てるのはみんな早かったのに、90年代の人はずーっと残ってる。いまだにジャミロクワイみたいな格好してる人っていますから（笑）。

――全然いますね（笑）。

菊地　ブラーみたいな格好の人もいれば、タワーレコードに行くといまだにサニーデイ・サービスみたいな人がCD売ってる（笑）。これはギャグですけど2000年問題ってあったでしょ？　官公庁のコンピュータが初めてカウントする数でバグって行政がおかしくなるという。

――交通網や銀行の停止、ミサイルの誤発射とか。結局、何も起こりませんでしたけど。

菊地　それが「実際は起こってた」っていうネタで（笑）。2000年問題は静かに進行し、00年のとき、21世紀のカウントが01から10にズレちゃった、と。

――10年分ズレ込みましたか（笑）。

菊地　「1」が一桁分飛んじゃった、と（笑）。となると、去年が20世紀最後の年だ

から、オバマが大統領に就任し、マイケル・ジャクソンが死に、20世紀を代表する偉人がたくさん死んだ。で、今年からやっと21世紀になるってネタで（笑）。

――でも、確かに09年って異常な〝終わり感〟がありましたね。

菊地　偶然ですけど、とうとう森繁久彌が死に、一週間と空けず水の江瀧子が死に、マット界も三沢（光晴）が死んだり、いろんなジャンルの著名人が一気に死んで。

――忌野清志郎も。

菊地　清志郎さんもそう。去年はサブカル周りだけでも相当死んだ。クロード・レヴィ＝ストロース（社会人類学者、思想家）も死に、20世紀の終わりに合わせるように20世紀カルチャーを作った人たちが続々と死に、一時代が終わったイメージがありますよね。

――そのうえ、戦後最大級の不況で、紙媒体はネットにヤラれ、ＣＤは売れずコピー文化全盛という状況で。

菊地　共有ソフトとマクドナルドとユニクロがあれば生きていけるというね。衣食住とはよく言ったもんで（笑）。

――こういう時代に、次の10年代のマット界って、凄く予想しづらいですよね。

菊地　80年代のＵＷＦや90年代のＵＦＣは競技の考え方自体を変えたわけですよね。まず、そういう構造改革めいた予感は見えてこないですね。07年に『マッスル』を観たときに、文字どおり『ハッスル』ですら旧世代に追いやる文科系オタクが作るプロレスって意味で、ひさしぶりにパラダイムがシフトするのを感じたけど。

――ミスター高橋本発売も00年ですから。それから、00年代のプロレスは『ハッスル』経由で『マッスル』まで到達して。

菊地　ただ、『マッスル』は00年代のオタクにありがちな出張って潰れることを恐れ、拡大ではなく保護路線に走った印象がありますが。ワタシはもっと拡大すると思っていたんですけど。まぁ、あの人（マッスル坂井）はヤバいですよね。観て、凄く突き上げてくるものがあったし。『マッスル』はいい意味で狂人の脳内を箱庭化した、大衆的な前衛芸術ですね。

――じゃあ、現時点で10年代のキーになるものは見つからないですか？

菊地　まあ、前号のとおり、青木真也の腕折り事件はちょっと鮮烈だったけど。

――あれが00年代のオーラスを飾ったってのも凄い話ですけど。

「行こうぜ! プロレスの向こう側!!」というテーマを掲げ、文系プロレスとして菊地氏が熱視線を注いでいた『マッスル』。今年5月4日には約1年間の休息を経て、『マッスルハウス9』が開催される。“模倣の天才”マッスル坂井は何を表現するのか?

菊地　いまの総合って一般性はともかく、もう技術体系や強弱を決定する基準は動かなさそうじゃないですか。無差別級でもやれば別だけど。あとはスター選手の入れ替わりの推移を見つめるだけで。

――競技的にはスポーツ化が整備されて、安定化したというか。

菊地　なので、青木の事件は、「まだ折る方向もあったんだ？」という、初期の野蛮な総合に引き戻した。我々はいつの間にか競技者でもないのに全部知った気になって、失神とか脱臼とか眼窩底骨折について、リングドクターのように理解し、競技上の危険度も共有的に掌握していると思っていた。そこに、「こうやってグリップして、コッチに引っぱればバチっと外れますよ」という、裏技的な領域の一端を見せた。ただ、これから次々と壊し技を使う選手が登場したり、それが総合の根底を揺さぶったりすることはないでしょうけど。皮肉にも、いまこそ総合の技術体系を書くべき『格闘技通信』（ベースボールマガジン社）はなくなるわけです。ワタシは、青木と『格通』は実際に仲良かったと思いますが、だからこそ風穴開けるような衝動が溜まってしまったのではないかと思いますが、いずれにせよ、ああいう分解写真で解析していくような方法論はネットじゃできないでしょ？

――まず無理でしょうね。

菊地　需要がなくなったんですかね？　前田（日明）のコラムだけは読んでたんですが（笑）。

――猪木さんばりにぶっ飛んだ発言を連発してますからね、前田日明は（笑）。

菊地　自分は前田コラムしか読まないけれども「分解写真を熱心に読む人たちがたくさんいるんだ」と、信じながらコンビニに立っていたんですが。ともかく今後の総合は、極端なパラダイムシフトがよしんば起こるとしても、団体の経営問題中心でしかないと思います。プロレスに関しては……05年にあの「アルティメット・ロワイヤル」を観てるだけに、いまの新日本プロレスの異常なしぶとさも気になりますけど（笑）。これは本来、言ってはいけない言説だが、ご本人は言われたらむしろ喜ばれるだろうから言いますが、10年代に猪木さんが亡くなるかもしれないですよね。

――猪木体調不良説はさかんに流れていますし。

菊地　そのあとの新日本がどうなるか。とうとう完全に力道山、馬場、猪木というオールドスクーラーがいなくなった世界で、プロレスのニュースクールはどうなるのか。あとは、可能性があるとしたら女子ですかね。

――あ〜、その可能性は凄くあると思います。

菊地　まあこれは、ちゃんと現場に足を運んだうえでの、実直な状況予想でもなんでもなく、単なる詰め将棋みたいな文化状況の推測ですが、女子格闘技って欧米では〝ウェット&メッシー〟の原型になった酒樽のキャットファイトショーから生まれ、日本だと温泉芸者の座敷芸から来てる。その歴史は全日本女子プロレスとストレートにつながって、悪いおじさんがかわいそうな女の子を使い、薄給で

レズビアン認知が先導すれば女子格がフィギュアスケートみたくなる構図はありえる

働かせる。これは男子プロレスと変わらない出自ですよね。いま、何気なく「男子プロレス」と口走って、もの凄く懐かしかったですけど（笑）。ただ、男性の格闘技のように、そこからスポーツとしてシリアスに分離独立する路線が、引けてないままじゃないですか？　頑張ってるみたいだけど。

——女子プロ自体はありますけど、最大手の全日本女子は05年に解散してますね。

菊地　これまたハーフデイケイドですね。で、いま世間的にはジェンダーが転倒し、男並みに強く、男並みにイケてて、男は草食系とか言って、そういう部分だけ見れば、女子格闘技なんて明日にでもブレイクしそうに見えるじゃないですか。でもしない。そういえば女子総合の名物社長がいたじゃない？

——スマックガールの篠泰樹社長。元NEO女子プロレス社長でもありますけど。

菊地　スマックがオーバーしなかった原因は、あの人が基本的に全日本女子の松永兄弟と人間の類型的に変わらない人種で、総合とはいえ人間の在り方が全女だったからではないかと思います。しょうがないんだけどさ。男性があれやるかぎり、違った前例がないから。これはプロレス団体ですが、女子はそういう意味ではGAEA JAPANが一番可能性があったと思いますよね。

——格闘技ファンがついてこれなそうな話題に（笑）。GAEAは長与千種が95年に興した女子プロレス団体ですね。

菊地　あれは非常にレズビアニズムが強かった。社長が女性で、代表の長与も女性で、あたりまえだけど選手も全員女性。早すぎたよね。GAEAがどうして潰れたか知らないんですが。ある日、貧血で倒れたみたいになくなったでしょ？

——黒字経営だったみたいですが、やはり05年に解散してます。経営的判断で撤退みたいな感じで。

菊地　あの奇妙な消滅は、早すぎた団体の属性ですね。まあ、内部に凄まじい愛憎があったと思いますが（笑）。その後はご存知のとおり、「女子目線」の時代が来て、女子だけの総合と言わずプロレスと言わず、女子の客が観るようなソフトを目指し、全女とスマックの屍の上に立つ、女子用の女子団体を作ろうとしてはできないという反復の時代になりますが、そろそろその理想の実現が起こってもおかしくないと思っています。そうしたら10年代のエポックになる可能性はありますよ。

きくち・なるよし■1963年6月14日生まれ。音楽家、文筆家。ジャズミュージシャンとして活動する一方、音楽、映画、料理、ファッションなどの著作多数。『kamipro』の論客としても知られ、谷川貞治FEG代表のキャッチフレーズ"谷川黒魔術"の生みの親でもある。格闘技批評に『サイコロジカル・ボディ・ブルース解凍』(白夜ライブラリー)。

菊地成孔

——現代に適したGAEA的アプローチの女子総合団体ならば。

菊地　でもその前に、さらなるカルチャーの成熟がなされなければならない。日本はいまゲイカルチャーが完全に定着して、オネエキャラがテレビに出ても誰も悪い反応なんかしないでしょ。美輪明宏やカルーセル麻紀の時代はバケモノ扱いだったんだから（笑）。

——ダハハハ！

菊地　なので次はレズくんキャラがテレビで社会に認知され、男にも女にもかわいがられ……まあ、「カッコいい」みたいなことになりそうだけど、よくわかってない田舎のおばさんも目を細めて容認したりして。段階的にはそれこそが〝次〟ですね。ポスト宝塚というか。

——次にレズが来るのは必至ですか（笑）。

菊地　アメリカのテレビドラマ界で、ちょっとそれの波が来て、そこそこ認知があったんだけど、日本はまだ全然遅れている。意外と北東アジアの違う国で先に定着したりして。それきっかけで……。

——一気に認知されると（笑）。じつは去年、谷川（貞治、FEG代表）さんも女子格闘技に色気を示して。

菊地　さすが（笑）。だけどあの人、中軽量男子の技術なんてたいして興味なくて、かわいい男の子かバケモノしか興味ないでしょ？（笑）。

——ダハハハ！

菊地　ビジネス的な目のつけどころはいいけど、女子格は誰かしかるべき人材がやるべきでしょう。結局、経営者は男、客も男。というままでは、女子レスラーは〝かわいそうな人たち〟的なイメージが払拭できない。広田さくらなんて、いつ見ても〝かわいそう〟じゃない？

——広田さくらは〝かわいそう〟!?

菊地　単なるイメージですよ。彼女は堂々とプロレスやってて、なんの問題もない。かわいそがるなんて失礼な話なんだけど。

——とくに男性ファンがそうやって感情移入しがちですよね。

菊地　昔はストリッパーもキャバクラ嬢も〝かわいそう〟で、ホステスなんて全員〝かわいそう〟だった。でも、〝かわいそうじゃない〟時代がついに来て、負性でかわいそうで虐げられるような女性の価値というものが、ほぼ瓦解しました。女子目線で物が売れ、男はいらない、と。男なんて観に来れないような団体を作ればいい。でも、これ、ご存知のとおり、諸刃の刃ですね。経済や文化にかなり直接的に影響が出て、リスクもリターンもでかいのよね。でも、勢い的にいえば、レズタレントによるレズビアン認知が先導して、女子格がフィギュアスケートやバレーボールみたいになる、という構図はありえます。男子の新体操やシンクロみたいなことになる可能性も常にあるけどね。だからたぶん、それ、2015年よね（笑）。

——いや〜、これは予想もしない結論に到達しましたね（笑）。

菊地　まあ、今年は前田日明の出馬という大ネタもありますけど（笑）。

——そっちはそっちでもの凄いネクストレベルですけど（笑）。今回もありがとうございました！

【10年2月5日／都内・菊地氏の事務所にて収録】

熱血プロレスティーチャーが語る

2000年代プロレス重大事件

元『週刊ゴング』編集長

小佐野景浩 age 48

さまざまなジャンルでゼロゼロ年代振り返り企画を目にする昨今ですが、プロレス界でもその構造や価値観が根底から覆るような出来事が数多くございました。ここではこの激動の10年間をオサポン先生に振り返ってもらいたいと思います。起立! 礼! だっふんだ!

聞き手／鈴木佑　試合写真／平工幸雄

——小佐野さん、今回のテーマはゼロゼロ年代なんですよ。

小佐野　そうか、もう2010年だもんね。俺も気づいたら48歳だし、時の移ろいは早いもんだね～(しみじみと)。

——で、熱血プロレスティーチャーにこの10年で起きたプロレス界の重大事件について、ぜひレクチャーしていただきたいな、と!

小佐野　なるほどね。まぁ、まずこの10年で一番衝撃的だったのは、人の生き死にっていうのは重い軽い関係なくみんな平等ではあるけれど、やっぱり05年に〝破壊王〟橋本真也、そして09年にノアの象徴だった三沢光晴が亡くなったことじゃないかな。

——橋本さんが享年40、三沢さんが享年46でした。

小佐野　うん、俺より若い人たちだから凄くショックだったよ。まぁ、武藤敬司や小橋建太たちは頑張ってはいるけれども、90年代の日本マットを牽引した闘魂三銃士や四天王のプロレスが、一つの時代の幕を引いたのかなっていうね。時は確実に流れてるんだって実感したよね。

——ちなみに小佐野さんはお二人との親交は?

小佐野　俺は新日本の担当じゃなかったから、橋本さんとはそんなに接点はなかったんだよね。だから、三沢さんのほうが付き合いは深いね。タイガーマスクのデビューの頃からずっと知ってた人だったから。で、ノアに移って社長として頑張ってたわけだけど、本当に親分肌の人でね。

——三沢さんは若い頃からそういう人だったんですか?

小佐野　いや、タイガー時代にはまったくそういうふうに思わなかった(笑)。当時はどちらかというと「自分は自分」っていうマイペースなイメージが強かったから。

——へ～、そうだったんですね。

小佐野　でも、SWSの引き抜き騒動を経てからはイメージがまるで変わって、「あっ、天龍源一郎だ!」みたいな感じになったの(笑)。若い選手やスタッフを無礼講で飲みに連れていったりする面倒見のよさもそうだし、その一方で先輩レスラーにも気を配る人だったよ。

——すっかり親分肌になってたわけですね。

小佐野　そうそう。まぁ、ああいう事故がニュースになったことで、皮肉にもプロレスが世間に届いた部分はあると思うんだけど、きっと三沢さん本人は天国で「なんであれプロレス界が盛り上がればいい」って思ってるんじゃないかな。

——なるほど。

小佐野　で、この10年は長州力や藤波辰爾の〝俺たちの時代〟の世代すら通り越して、三銃士や四天王世代も終わりに向かってることに気づかされたわけだけど、別の見方をすると〝馬場全日本〟と〝猪木新日本〟が終焉を迎えた年代だったんだよね。

——といいますと?

小佐野　全日本は馬場さんが99年に亡くなられて、00年に分裂してノアができた。そしていまは武藤が全日本を率いているわけだけど、昔と比べると別会社だよね、すべてが。

——すべて、ですか。

小佐野　リング上は全日でも新日で

昔と逆にこの10年はプロレスが他の格闘技の踏み台にされた

もない武藤カラーに染めあげて、気づいたらスタッフだって総入れ替えだしね。あの王道全日本を02年に引き継いでから、わずか8年でここまで完璧な自分の色にしてしまったのは凄いことだと思う。で、それによって〝馬場全日本〟っていうのは過去の遺産になったんだなって。

――その遺産はノアには残ってはいないですか？

小佐野　なくはないけれども、いまやノアは三沢カラーからも脱却して、新しいものに生まれ変わろうとしてるから。で、新日本の場合はユークスになる買収を経て、猪木さんがいなくなったことでずいぶん変わったよね。いまの新日本に昔ながらのストロングスタイルっていうイメージある？

――ないですね～。

小佐野　中邑真輔がストロングスタイルを掲げてはいるけど、いまの新日本はもっと柔軟なプロレスになってきてるよね。だからこそいま、中邑が際立つんだと思うよ。

――そのへんは相次いだ選手の離脱も関係ありそうですね。

小佐野　そうだね。昔からの匂いがする選手が退団して、若い選手が台頭したことでカラーが変わってきた。だから、ストロングスタイルの最後の砦は小鉄さんなんじゃないかな。

――最近だと男色ディーノに激高してましたね（笑）。

小佐野　俺なんかは男色ディーノも大好きなんだけど（笑）、あれに対して頭から「NO！」って言える小鉄さんみたいな人がいてこそ新日本なんだろうなって部分はあるよね。

――確かに。

小佐野　あと、この10年で外せないのは、格闘技ブームによるプロレスの揺らぎ、だね。

――ゼロゼロ年代初めはプロレスと格闘技の境界線も曖昧でしたけど、いまはすっかり別モノというか。

小佐野　そうそう。昔は猪木さんが格闘技世界一というかたちで、他の格闘技を踏み台にしてプロレスの価値を上げてたのに、この10年は逆にプロレスが踏み台にされた。その中で業界がプロレスなりの何かをなかなか打ち出せなかったのが、プロレス人気の凋落に影響を与えたとは思うよね。やっぱり新日本が一番被害が遭ったんだろうけど。

――プロレスは格闘技と交わるべきではなかった？

小佐野　そうだね。プロレスはプロレス的な独自のおもしろさを追及していくべきだったと思う。たとえば、よしんば格闘技のリングに上がって勝ったとしても、それはプロレスのファイトスタイルじゃなく格闘技用のそれであって、要はプロレスの魅力は伝えてないわけ。だから、それで格闘技ファンがプロレスに流れるかっていったらちょっと疑問だしね。

――還元されないというか。

小佐野　昔でいえば従来のプロレスと正反対のものとして、格闘色の強いUWFという運動体が出てきた。そのときは馬場さんが「みんなが格闘技に走るので、私、プロレスを独占させてもらいます」というフレーズのもと、天龍同盟を中心に格闘技にはないプロレス特有の受けの凄みを見せた。で、大仁田厚は「プロレスは見世物小屋なんじゃ！」ということでFMWを作って、また違う価値観で対抗してきたんだけど、この10年はなかなかしんどかったよね。

――その格闘技ブームと同様に、プロレス人気が下がってきた原因の一つとして00年に世に出たミスター高橋本があったと思うんですが、小佐野さんはあれをどうとらえてました？

小佐野　あれを語るときに難しいのが、たとえマスコミがどんなに騒ごうがリングの中にいた人が書いたってところだよね。外からはリングの中で何が起こっていたかわからないし、しょせん人づてに聞いた話では事実かどうか証明できないし。

――なるほど。

小佐野　まぁ、あの本を読んで思ったのは、何を書こうがダメとは言えないけど、「そのうえでプロレスは凄い」っていう部分が欠落してたなって。高橋さんは身近で精神的にも肉体的にも苦しんでるレスラーを見てきてるのに、なんでそこが出てこなかったのか。

――ただの暴露本になってしまった、と。

小佐野　たとえば、映画の『ビヨンド・ザ・マット』にしろ、プロレスの内幕を出しながらも「でも凄いんだよ」って言ってるじゃない？　それがなかったのが凄く疑問だった。

――よく言われるのが、レフェリー引退後の自分の事業をサポートする約束を反故にした、新日本に対する恨みからってことですけど。

小佐野　そういうふうにとられちゃってもしょうがない部分はあるよね。たとえばあれを高橋さんが現役のときに出して、「WWEみたいになるべきだ」ということを言ってたらまた違ったと思うけど。

――それなら説得力もありますよね。

小佐野　ただ、俺なんかは能天気だから、ああいう本が出てもプロレスはすたれないとは思ったよ。何が出ようがプロレスは魅力的なものなんだし、そんなに目くじら立てて騒ぐ必要もオタオタすることもないんじゃないかなって。まぁ、あの当時は売り上げを考えなきゃいけない立場の編集長を辞めてたから、そう思ったのかもしれないけどね（笑）。

――ダハハハハ！

小佐野　まぁ、プロレス人気の衰退でいえば、09年2月で日本テレビがプロレス中継を終了したのも一つの事件だよね。

――1954年の放送開始から続いた55年の歴史に幕を下ろして。

小佐野　スポンサーがつかないっていうテレビ局の都合も大きいけど、開局以来プロレスとともに歩んできた日本テレビがノアの中継を打ち切ったっていうね。やっぱり深夜帯であろうが地上波っていうのは大きいからさ。

――単純にプロレスが人の目に触れる機会が減るわけですもんね。

小佐野　だから最近は『アメトーーク！』みたいな番組って重要なんだなって。プロレスラーがただ普通のバラエティ番組にゲストで出ても、「この人はレスラーなんだ」っていうだけ

00年代前半、新日本プロレスからはアントンの号令のもと多くのレスラーがMMAの舞台に参戦。中でも永田さんは当時最強の呼び声が高かったミルコやヒョードルと対戦するなど、いまでは考えられないようなカードが実現した。

2000年代プロレス重大事件

で終わるけど、『アメトーーク！』はお笑いにしつつも芸人さんたちがプロレス好きで魅力を語ってくれるし、ちゃんと試合映像なんかを流してくれるから、それがきっかけで「観に行こうかな」って思う人もいるだろうし。

——プロレスとテレビの関係性も変化してきているというか。

小佐野 昔、「テレビがないとプロレス団体は存続できない」って言われたのをUWFがブチ破ったけど、いまは地上波以外にCSだったりネットだったりいろいろあるわけでね。映像で伝えるという部分で、これからの10年がどういうふうになっていくのか……。

——興味深いところですね。

小佐野 あとはまぁ、どうしても事件というとマイナスなことばっかりでアレだけど、『週刊ファイト』と『週刊ゴング』が休刊したことは外せないでしょう！

昨年8月に両国国技館大会を成功させ、今年7月に同会場に再進出が決定しているDDT。『マッスル』をはじめとする団体内別ブランドを有したり、飲食店経営にも進出したり、独自色の強い活動で支持を集めている。

——われわれマスコミとしては重大ですね（笑）。『ファイト』が06年9月27日号、『ゴング』は07年3月7日号で休刊になって。

小佐野 もちろん、それぞれ新大阪新聞社、日本スポーツ出版社という母体の問題がかなりあっての休刊なんだけど、それでも雑誌が売れてればもうちょっと状況は違ってただろうしね。

——ちなみに小佐野さんが編集長時代の売り上げはどうだったんですか？

小佐野 日本スポーツは『ゴング』が会社の屋台骨を支えてたのは有名な話なんだけど、たとえば96年の売上高は28億4800万を計上してるんだって。破産手続きを開始したっていうニュースで出ていたから（苦笑）。

——凄いな～、その頃の表紙って誰が多かったんですかね？

小佐野 俺はよく「天龍ばっかり表紙にして売り上げ落としたから編集長降ろされた」みたいなことを2ちゃんとかに書かれてたんだけど（笑）、じつは髙田延彦が一番だったらしいんだよね。

——あぁ、時期的には95年の新日vsUインター、そして97年のヒクソン・グレイシー戦に向けて注目を集めてた時期というか。

小佐野 そうそう。で、売り上げが一番落ちたときは15億くらいまで落ちて、そのあと19億まで盛り返したんだけど、会社の不祥事がいろいろ出てダメになったっていうね。

——いまはプロレスマスコミのあり方も非常に問われる時代ですよね。

小佐野 そうだね。週刊誌が『週刊プロレス』だけで、競合するものがないっていうのはよくないと思うしね。それにこの10年でネットも進歩して、そっちのほうに刺激的なことが書いてあったりすると、見る人の中には専門誌よりもそっちのほうが真実なんじゃないかって思ったりするだろうしね。雑誌もどう魅力的な誌面を打ち出すか、ますます問われる時代であり、団体だけじゃなくマスコミのあり方も変わってきてるというか。

——肝に銘じます（笑）。

小佐野 あと重大なことを挙げるとすれば、この10年でDDTとかドラゴンゲートみたいな、それまでのプロレス業界とは別の世界観を持った団体が、けっこう若い人たちに支持されてきたってことかな。馬場、猪木の遺伝子がなく、従来のプロレスの匂いがまったくしない団体。

——隙間産業的な団体が躍進をはたしたというか。

小佐野 そうだね。最初の頃のドラゲーやDDTは、プロレスマスコミをアテにしないでやってきたのが特徴だと思うんだよね。「我々は我々のやり方でファンを開拓しますよ」というか、従来のファンを引っぱり込むのではなく、新しいファンを作っていって。

——そういった口コミで広がって、気づいたら両国国技館で大会を開催するほどの規模になって。

小佐野 従来のプロレスのイメージとは違う〝スポーツエンターテインメント〟を打ち出すのに成功したよね。ドラゲーにしろ、昔のプロレス団体は何年もやってやっと一人前の選手になれたものが、「メキシコで一年頑張ればこんなになっちゃいますよ」っていう。そういう団体のトップの人は頭が柔軟だよ。まぁ、そういう中の一つが『ハッスル』だったとは思うんだけど。

次の10年は予測がつかないから〝臨機応変〟がキーワードになる

——いまは時代の徒花みたいになってしまいましたが（笑）。

小佐野 でも、『ハッスル』は一つの時代を確実に作ったと思うよ。団体の役目って時代によって変わってくると思うんだけど、結局『ハッスル』はそれに対応しきれなかったんじゃないかな。芸人を使ったりするその次のステップや、リング内のプロレス自体を進化させられなかったというか。

——なるほど。

小佐野 やっぱりファンは虚構の世界を観に来つつ、その中の本物を観に来てるんだよ。なんであれだけインリン様が支持されたかっていうと、そこにインリン様であろうとする真摯な姿勢があったからだと思うよ。だってリングにピンヒールで上がって動くことがどれだけ危険なことか、それを彼女はやってたんだから。

——いつ足首をケガしてもおかしくないですよね。

小佐野 HGだってRGだって覚悟を持ってリングに上がってるのがわかるから、みんな支持してたわけだし。プロレスファンってそういうところを見るじゃない？　どこが本物なのか、本気なのかってさ。『ハッスル』は結局、中途半端に終わったよね。あれはやっぱりダメだ！（キッパリ）。

——機会があれば山口日昇社長にお伝えしておきます（笑）。

小佐野 まぁ、この10年で主立った事件というとこんな感じかな。とにかくゼロゼロ年代は「これだけ時代が変わった」ってことを感じさせる10年だった。その流れに順応していくのが大変で、じゃあその時代の波に飲み込まれずにどうやってプロレスの魅力を打ち出していくのかが、これからの10年なのかな、と。

——そのキーワードはなんでしょうね？

小佐野 臨機応変、じゃないかな。

——臨機応変！

小佐野 だって、もう予測もつかないんだから。俺なんか、あと10年経ったら58歳だよ？　そのときに自分がどうしてるかすらわからないよ（笑）。ただ、プロレスがなくなるとは全然思ってないけどね！

——今回もご教授、ありがとうございました！

【10年2月4日／都内・某所にて収録】

おさの・かげひろ■1961年9月5日、神奈川県出身。フリーのプロレスライターとして『Gスピリッツ』、『東京スポーツ』などで執筆中。またGAORA『全日本プロレス中継』、サムライTV『S-ARENA』などでコメンテーターも務めている。

マット界最重要分岐点はここだった―

2000年代最大の事件

検証『猪木祭り』裁判

ヒョードルはミルコになれたのか？ 興行論と競技論、そして金の行方を追う

2000年代の重大事件を振り返るならば、この『猪木祭り』を避けて通るわけにはいかない。ここでは03年大晦日に開催された『Dynamite!!』、PRIDE、『猪木祭り』の三つ巴戦争、とりわけ『猪木祭り』を検証するべく、『猪木祭り』の興行論や金銭トラブルを審理した裁判の結果をもとに当イベントを振り返る。やっぱり『猪木祭り』開催は異常だった!?

本文／高崎計三　構成／松下ミワ

「一人負け」してトラブルの火種となった『猪木祭り』

格闘技界が歓喜の頂点も絶望のどん底も味わった2000年代。その10年間を振り返ったとき、確実にキーポイントとなった一日がある。2003年12月31日。

当時の格闘技界が抱えていた闇と混沌が一気に表面まで噴き出してしまったのが、この一日に至るまでの騒動だった。のちの「PRIDEショック」の遠因にもなっていると思われるこのドタバタ劇について、あとの裁判資料などを元に振り返ってみよう。後述する判決部分で説明するが、この大トラブルには「ヒョードルはミルコになれたのか?」という一大テーマが隠されているのである。

この年、03年の大晦日はじつに民放3局がそれぞれ格闘技イベントを開催・放送するという異常事態が起こっていた。フジテレビの『PRIDE男祭り2003』、TBSの『K―1 PREMIUM Dynamite!! 2003』、そして日本テレビの『猪木祭り』だ。この狭い島国で同日にスタジアム級の格闘技イベントが3つ開催されるというのはあきらかに正気の沙汰ではない。そこで数々のトラブルが起きてしまったのも当然に思える。

トラブルの火種となったのは、PRIDE、K―1という既存の2大勢力に割って入るかたちとなった『猪木祭り』の強引な開催決定だった。

当日まで全カードが発表されず、決定カードも二転三転するなど開催前からトラブルの連続。イベント当日もなぜかアントニオ猪木が引退問題で揺れていた藤波辰爾と試合を始めたり、猪木の「百八つビンタ」はリングに観客が押し寄せ大混乱となったりとその〝伝説〟は数知れず、〝世紀のズンドコ興行〟といまなお語り継がれているほど。

大晦日ということで視聴率戦争も話題を集めたが、元横綱・曙の格闘技転向という超強力な話題を提供した『Dynamite!!』は、曙vsボブ・サップ戦の瞬間最高視聴率43・0パーセントで民放番組として初めてNHKの『紅白歌合戦』越えを達成。平均視聴率も19・5パーセントを記録した。『PRIDE男祭り』は榊原信行代表も会見で吐露するほど目玉カードの決定に苦しみ、当日の視聴率も苦戦が予想されたが、平均12・7パーセントという結果に。『Dynamite!!』には勝てなかったものの、健闘といえた。

観客がリング上に押し寄せ、大混乱となった伝説の百八つビンタ。猪木さんも「ルールを守れー!」「ハウス! ハウス!」など名言連発!

その中で、なぜか『猪木祭り』だけが平均5・1パーセントと惨敗を喫したのである。そもそも民放3局が競って大晦日に格闘技番組を持ってくるほど、世間での格闘技熱が高かった時期の話である。しかも、最低視聴率はNHK教育をも下回る0・2パーセントをマークするというオマケつき。とても大晦日に自信を持って送り出したコンテンツとは思えない数字だ。

そして終了後もトラブルは絶えず、ファイトマネーの支払いなど金銭的な問題で複数の訴訟にまで発展している。その最も大きなものが、『猪木祭り』の主催者であるケイ・コンフィデンス(以下KC)が共同主催者の日本テレビ(以下NTV)に対して「減額された契約金2億円の支払い、イベント収支計算書類の引き渡し、及び基本契約(3年間)解除通知の無効確認」を求めた民事訴訟だ。

検証『猪木祭り』裁判

ズンドコをきわめた開催経緯。看板・ミルコはどこへ……!?

そもそもこの大会、開催に至る経緯もズンドコの極致だった。正式な開催会見は11月11日に行なわれたが、最終的に全カードが決定したのはなんと大会前日！　大会パンフレットにはミルコ・クロコップや小路晃(PRIDEに出場)、高山善廣ら、結局出場していない選手たちの顔が並び、対戦カードは差し替えが間に合わず別紙で挿入されていた(そこに載っていたカードも実際とは違っていた!)。このことだけでも、充分に混乱ぶりが見て取れるだろう。

二転三転したカード発表の中でも、とくに混乱したのがPRIDEの2枚看板だったミルコ・クロコップ、エメリヤーエンコ・ヒョードルを取り巻く状況だ。

ミルコは最初の会見で出場選手としてアナウンスされ、このイベントでも看板選手となるはずだった。1週間後、クロアチアの地元紙でミルコ自身が「『猪木祭り』には出ない。大晦日はPRIDEに出場する」と語ったと報じられたものの、さらにその3日後には「ミルコvs高山」が発表された。

猪木が参戦を匂わせたアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラや正式に発表されたセーム・シュルトの出場をめぐってPRIDE側が激怒するなど、12月に入って徐々にハプニングの影が差してきたものの、最初に掲げられていたミルコの出場だけは変わらないものと思われていた。

だが、12月15日にミルコの公式HP上で背中のケガの療養を理由に「12月31日のどのイベントにも参加しない」旨が表明される。

主催者『猪木祭り』側から、ミルコ出場について初めて見解が出されたのは大会10日前の21日だった。その見解とは、「不明」。なんと出場を発表したはずの側が、「出られるかどうかわからない」と言いだしたのだ。そして最終的に、26日の会見で欠場が正式発表された。川又氏は「試合はできなくても、会場に来てコメントくらい出すのが礼儀。最悪の場合は法的手段も辞さず」と語っている。ちなみに神戸にいた猪木のコメントは、「正直わからないし、よく知らない」。対戦が予定されていた高山はその後、「ミルコ戦でなければ出場しない」ということで最終的には解説のみの出演となった。

さらに混乱！PRIDE現役王者・ヒョードル参戦のドタバタ

一方のヒョードルはさらに混乱をきわめた。『猪木祭り』への参戦発表は12月5日。当時、ヒョードルは現役のPRIDEヘビー級王者である。この発表は大きな話題となると同時に、新たなトラブルの幕開けとなった。

ヒョードル参戦が可能になった経緯について、一般的に報じられていた事実はこうだ。

「ヒョードルがそれまで所属していたロシアン・トップチーム(RTT)を離脱し、レッドデビルと独占契約を締結。そこでミルコの独占代理人だったミロ・ミヤトビッチ氏がヒョードルと〝どこのリングでも上がれる〟独占代理人契約を結んだ」

このミロ氏はミルコと同じクロアチア出身で、日本を拠点にスポーツ選手のマネジメントなどいくつもの事業を展開していた人物なのだが、とにかく彼が結んだ契約に従い、主催者はヒョードル参戦を発表。8日にはミロ氏自身が会見し、ヒョードルと同席している写真を掲げてこの事実を裏づけている。

NTVは当初KCの意向を飲み「8億円3年契約」を了承した

この発表に当然、PRIDEを主催するDSEは激怒。12月10日付でNTVに書面を送付し、正式発表されたヒョードルとセーム・シュルト、そして参戦のウワサが流れたアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラの3選手について独占契約があるため、出場は認められないと抗議した。

これによりヒョードルの参戦はいったん白紙とされ、一度は「欠場」で話がまとまりNTVとDSEが和解。欠場が正式発表され、一度は目玉となるはずだったミルコ、その代替と目されたヒョードルがどちらも参戦しないという事態に陥った。だが、すったもんだの末にDSEはヒョードルの『猪木祭り』出場を許可。復活参戦とvs永田裕志戦実現が正式発表されたのは大会前日のことだった。

なお、この「すったもんだ」に絡み、2006年2月25日、川又氏を脅して数億円を要求したとして、山口組系暴力団幹部ら3人が神奈川県警に恐喝未遂容疑で逮捕されている。大会翌日の元日に居酒屋などで3時間にわたり、「この件は組織が動いている。誰のおかげでヒョードル参戦がうまくいったと思っているんだ」などと脅迫したという容疑だった。だが横浜地検はその後、「現時点では処分を決しがたい」として処分保留で釈放している。

NTVの状況と、開催決定に至る経緯

2003年当時、NTVは格闘技中継の分野において、民放キー局の中では遅れをとっていた。フジテレビがK―1ワールドシリーズとPRIDEを擁してトップを独走し、次がK―1MAXが人気のTBS。NTVもK―1ジャパンシリーズを放送してはいたが、もう一つ勢いに欠けていた点は否めない。そのNTVがなぜ、『猪木祭り』の開催に踏み切ったのだろうか。開催への経緯はNTVとKCの裁判でも大きく認識が食い違い、裁判の争点となった部分でもある。

まず前段階として、03年1月、川又氏がミルコ・クロコップの日本におけるマネジメント契約を、当時ミルコの独占代理人だったミロ氏を介して締結したことからこの話は始まっている。そして同年3月頃から、KCはK―1と協力して夏に大イベントの開催を計画、中継はフジが最適と考えていた。

だが4月頃、フジから「夏は『PRIDE GP』の中継があるので年末にしてほしい。そしてこれを機にPRIDEと協力してやってほしい」との申し入れがあり、5月頃に川又氏はDSEの榊原信行代表と会ったという。両者は大晦日のイベントにおいて協力すること、PRIDEの6月と8月大会にミルコを出場させることで合意。5月11日に覚書を交わしている。

一方でKCは、8月頃に『猪木祭り』のプロデュース権を獲得することに成功。これにより年末イベントは『INOKIボンバイエ』として行なわれる方向になり、9月頃にはKC、DSE、フジの3社で契約書の検討を開始した。

いまだにマット界では破られていない瞬間最高視聴率43.0パーセントの記録。曙が敗れた瞬間の絵はいまだにインパクトが残るシーンだ。

当初カード編成に苦戦していたPRIDEだが、ふたを開けてみれば平均視聴率12.7パーセントを獲得し、健闘したのだった。

この頃、川又氏は「ある人間を介して」NTVの宮本修二プロデューサーと会っている。NTVによれば川又氏らは「フジとKCとDSEの契約は8億円の3年契約で話が進んでいるが、フジはまだ確定ではない。同じ条件でNTVでやらないか」と持ちかけたという。

(ちなみにこのあいだの経緯について、KC側は裁判では「フジで話が進んでいるときに、NTV側にどうしてもやらせてほしいと懇願された」と主張していた)

さらに川又氏はミルコだけでなく吉田秀彦ら超一流選手が出場予定と説明。NTVは検討の末、放送権のみの一回契約、対価は2億円が上限、それなら可能と回答した。この条件について二転三転があったものの、最終的には出場選手などからイベントの価値が高いと判断、KCの意向を飲むかたちで「8億円3年契約」を了承、10月16日に「1年あたり8億円の3年契約で、KCが大晦日の総合イベントをプロデュースし、NTVが放送権及び興行権を保持、03年はさいたまスーパーアリーナ(SA)で開催」という旨の覚書締結に至ったという。

締結にあたり、KCはNTVに対して「DSEはフジとの関係で公には出られないが、イベントの運営はDSEが行なうし、普段PRIDEに出ている選手はみな出場する」と説明していたという。会場のさいたまSA使用にあたっても、「契約しているのはDSEだが、DSEは我々の下請けのようなものだから」と確約していたという。

10月下旬にPRIDEが年末イベントをフジ放送で開催するというウワサが流れた際も、川又氏は宮本氏に「ミルコや吉田は押さえてあるから」と答えた。

しかし、11月9日にDSEは『男祭り』の開催を発表。NTVが「DSEとKCのあいだに協力関係などない」と悟ったのは、このときだった。だが、もう遅かったのだ。

NTVとKCの契約内容――「最高の格闘技大会」とは?

前述の覚書を元に、12月上旬にNTVとKCは大会に関する「基本契約書」「イベント共同主催契約書」「放送契約書」を交わしている。その主な内容を見てみよう。

【大会について】

※2003年、2004年、2005年12月31日に、総合格闘技大会を共同で開催する。

※この大会は、以下の条件を満たすものでなければならない。

・総合格闘技の大会であること。

・12月31日に開催されること。

・アントニオ猪木のプロデュースで猪木自身が出演し、イベント名の中に「猪木」に関する名称が含まれていること。

・開催時において最高の格闘技大会であるとNTVが認めるものであること。

・首都圏で4万人以上規模のアリーナクラスの会場で開催すること(屋内に限る)。

検証『猪木祭り』裁判

最終的に「猪木祭り」に参戦したヒョードル。永田さんとの対戦はある意味伝説であり、永田さんの名勝負数え歌にこの試合は必ずランクインしている。

【出場選手について】
※9月末日までに出場予定選手20名のリストを共同作成。
※リスト作成時に、最高の選手とNTV側が認める選手（メイン選手）を最低2名含める。
※メイン選手のすべて、予定選手の8割の出場をKCが保証する。

【報酬について】
※NTVはKCに対し、「放送権対価」として4億5千万円、「興行権対価」として3億5千万円を支払う。
※万一、最高の大会と認められなかった場合、選手が出場できなかった場合はNTVの選択により出場選手に応じて減額できる。
※KCの落ち度が理由で本契約が解除された場合、KCはNTVから支払われた報酬を全額即時に返還する。

【ミルコ出場について】
※ミルコ、および総合格闘技界においてこれと同等であるとNTVが判断する選手（同クラス選手）が1名出場すること。KCはこの2名を必ず出場させなければならない。
※2名のカードはNTVと協議の上決定し、KCは12月15日までに両名およびその対戦者と契約を締結しなければならない。
※KCは12月15日までに全対戦カードを確定させなければならない。
※万一ミルコがケガ等で欠場の場合、速やかに診断書を提出すること。NTVが出場不可能と判断した場合、KCは可能な限り同等の選手を出場させなければならない。
※ミルコの欠場がケガ以外の理由とNTVが判断した場合、NTVは一切の契約を解除できる。その際、KCは全額返還の上、損害を賠償しなければならない。
※同クラス選手欠場の場合も、KCは同等の選手を出場させなければならない。
※ミルコが欠場で代替選手が同等でない場合、NTV側は対価を減額できる。

【契約解除について】
以下の時にはNTVは契約を即時解除できる。
※猪木が出演しない。
※猪木の名称が使えない。
※ミルコがケガ以外で出場できない。
※12月31日に開催できない。
※大会を放送できない。

契約というものは具体的でなければならない。人によって解釈が変わるような概念が含まれていると、トラブルの元になりやすい。その点で注目すべきは大会条件の中の「最高の格闘技大会」という表現の解釈だろう。

たとえば友人と何人かで、「いままでに観た最高の格闘技大会は？」という議論をすると考えてみればいい。あなたの考える「最高の大会」と、友人たちの考える「最高の大会」は一致するだろうか。5人いて5人ともが同じ大会を思い浮かべる可能性はかなり低い。これを定義するのは難しいが、ここでのポイントは「NTVが認める」という部分だ。何がどうであろうと、判断権はNTV側にしかないのだ。

「最高」の出場選手というのも同様で、NTV側が決めるものとなっている。おわかりだろうか。共同主催とはいえ、最初からすべての手綱はNTV側が握っているのである。そして、とにかく「ミルコありき」だったことがわかるだろう。同時に注目すべきは、ミルコと同等の選手1名の出場が最初から義務づけられていることだ。今大会の時点で（いまでもだが）ミルコと同等の選手なんて、数えるほどしか存在しない。しかも、ここでもすべての判断を下すのはNTVなのである。

大看板の消失――ミルコ欠場

前述の契約書を見てもわかるとおり、この大会の最大の目玉は、当時大人気だったミルコの存在だった。そのミルコが欠場を発表したことから、歯車は大きく狂っていく。NTV側はミルコ欠場の経緯に関して、裁判資料の中でおおむね以下のように述べている。

15日にミルコがHPで欠場を発表したのは、NTVにとっては「突然」の出来事だった。が、その前の段階から宣伝用にインタビューなどの必要があるとして「ミルコに会わせてほしい」と再三KCに要求していたが、KCはいろいろ理由をつけて会わせようとせず、NTV側は誰もミルコに会えていなかったという前提がある。

KCからNTVに出場の承諾書そのほか一切の確証も提示されていなかったこともあり、NTVはこの欠場の報に触れても、まったく事情をつかめなかったという。

NTVが川又氏に対応を要求しても、川又氏は「なんとしても出場するよう説得する」と言うだけで、確認を取ることもできない。その後、12月21日にKCから提示された対戦カードにはまだ「ミルコvs高山」が入っていた。だが25日までに、KCがミルコのビザすら取得していないことがNTVの調査によって判明。これにより、ミルコの不出場が客観的に確定してしまった。

翌26日にようやく川又氏がミルコ（およびヒョードル）の不出場を正式に認めたため、直後の会見で欠場を発表することになった。

NTVは「当初からミルコ選手を管理しているということがKCの最大にして唯一の存在意義であった」と表現。共同主催のパートナーにこの言いぐさもどうかとは思うが、最大の前提が崩れたのだから仕方あるまい。

これに対しKC側は12月初旬、ミルコがケガのため出場しないという噂があった時点でNTVと協議し、ミロ氏にクロアチアへ行くよう指示するなど把握に努め、その後も「たとえケガで欠場したとしても、当日はミルコも会場には姿を見せるよう交渉せよ」と指示するなど、ミルコ確保に最大限の努力を傾注していた」と主張する。

また、NTVが「ミルコがダメなら、なんとしてでもエメリヤーエンコ・ヒョードル、永田裕志らを確保してほしい」と懇願したのに対し「ミルコだけでなくヒョードルまで引き抜くとPRIDEの背後の関係者が黙っていない。自分の命も危うくなる」と拒否したが、NTVがどうしてもと譲らず「ヒョードルもダメなら減額する」と言いだしたため、やむなく川又氏はヒョードル獲得を約束した。このやりとりは、NTVの宮本修二プロデューサーや編成部長も充分了解していた、つまり早い段階で、「ミルコ欠場」は既定路線だった……としていたが、結果的にこの主張は通らなかった。

裁判中の調査の中でNTV側は「12月15日以前は川又とは欠場の件で協議したことはない」「21日の会議で、川又は『自分がクロアチアに行ってでも連れてくる』と言っていた」としているのに対し、川又氏は「（03年3月、K―1での）サップ戦以後、ミルコの代理人と出場契約は交わしていない」と衝撃の告白。NTV側が「正直、騙されたと思った」

と語るのも無理はない。

大会名、会場使用権……
まさにトラブルまみれ！

この大会には大きなものから小さなものまで、じつに多くのトラブルがつきまとった。

まず第一に、『猪木祭り』というイベントの権利をめぐってのトラブルだ。イベントの準備を進めていたNTVに、03年11月20日付で一通の内容証明が届けられた。差出人は、格闘プロデューサー百瀬博教氏の代理人弁護士。『猪木祭り』の放映中止を求める内容だ。

書面によれば百瀬氏は同年8月7日にアントニオ猪木から「毎年12月31日に行ないますイノキボンバイエは百瀬博教のプロデュース以外では絶対にやりません」という自筆の念書を取りつけており、そのコピーが添えられていた。

「もしNTVが『猪木祭り』を放映すれば、その契約に違反する行為を追認することになるので、放映を中止すべき。万一中止しない場合は法的手続きをとる」

NTVはKCから何も聞かされておらず、まさに寝耳に水の話だ。ただちに両者は協議し、この件についてはKCが処理することで合意。NTVから百瀬氏サイドに対し、KCが対応する旨を11月26日に回答している。

NTVはこのようなトラブルがあったために、しばらくは宣伝等で「イノキボンバイエ」という名称の使用を控えざるをえず、大きな障害になったと主張する。だがその後、フジテレビが『PRIDE男祭り』の開催を発表。NTVはそこに百瀬氏も関わっていたと認識していたために、「イノキボンバイエ」の名称使用も問題ないと判断し使用を再開。結局、KCからはこの件を処理したという報告はないという。

これに対しKC側は、「イノキボンバイエ」の名称使用に問題があることは当初からNTVに伝えてあったと主張する。ただ、この名称の商標権は「株式会社猪木事務所」が所有しており、今回の使用については猪木事務所とKCで合意していたので、猪木の自筆書面も法的には問題なしとしている。

実際の使用にデリケートな部分があったのは確かだが、KCによれば強引に使ったのはNTVのほうだという。そしてこの使用が問題なかった証拠に、百瀬氏サイドからはその後アクションがなかった、と。

事実、この件に関してはこれ以上の進展はなかった。だが話がスタートした時点でKCは『猪木祭り』のプロデュース権を獲得したことをNTV側に伝えているわけだから、大会前にこのようなトラブルが起きること自体、NTVにとっては不安材料以外の何ものでもなかった。

もう一つは、会場使用に関する問題である。10月にNTV、KC間で交わされた覚書には、「03年はさいたまSAで開催」と明記されている。また、前述の契約書でも「首都圏で4万人以上規模のアリーナクラスの会場（屋内に限る）」とある。だが、実際に開催されたのは関西で収容人数3万人台の神戸ウィングスタジアム（現・ホームズスタジアム神戸）だった。格闘イベントにおいて会場設定はかなり重要な要素となるはずだが、なぜさいたまから神戸になってしまったのか。

KCの言い分によれば、SAは当初KCが確保していたが、DSEが『男祭り』を行なうことでDSE、KC間で「多少の軋轢」が生じた。だがKCがSAの使用権をDSEに委譲し、『猪木祭り』は他所で開催するということで「一応の決着」を見たとなっている。

KC側は当初さいたまスーパーアリーナは『猪木祭り』が使用できるのもと思っていたようだが、ここでもハプニングが……。まったく不思議すぎる!

ところが、これもNTVによればまったく違う。NTVにとってはSAでの開催が、GOサインを出した大きな要素だった。覚書時点でSAを予約していたのはDSEだったが、前述のとおりKCは「DSEは我々の下請けのようなものだから」と使用を確約したという（だが直後に、「04年、05年の使用は難しい」との説明）。

その後、川又氏から「SAが使えない恐れがある」との話が出た。「法的にはKCが使えるが、K―1とDSEの争いがあって、それに巻き込まれると会場の確定が遅れ、発表が遅れる。早く発表できるナゴヤドームでどうか」と説明＆提案され、さらに2～3日後、「ナゴヤドームはK―1が押さえていたから、神戸でどうか」と前言を翻す再提案。

NTVにしてみれば、集客の難しい神戸での開催など問題外だった。が、川又は「PRIDEがSAでやっても、主要選手はこちらが押さえているからたいしたイベントにはならない。ウチは選手やカードが充実しているのだから、会場にこだわらず早く決めて、早々に開催発表したほうがいい」とさらに説得。そのうえ、ボブ・サップなどK―1の著名選手も出せるとほのめかした。

これを聞いたNTVは、そこまで選手、カードが充実するならPRIDEがどこで開催しようと内容的に勝負にならないと判断。神戸開催を了承した。だがその後、SAが本当に使えないのかの確認が取れず、しばらくは会場未確定のままイベント準備を進めていたという。

結果として『猪木祭り』は、スタンド席にポツポツとしか観客がいないという厳しい動員に終わった。これに会場設定が影響したことは言うまでもない。そもそも首都圏と地方では、同じ量の宣伝を打ってもその効果には大きな差が出るのだ。出場選手と対戦カードだけでなく、イベント名に会場まで――『猪木祭り』はやはり、あらゆる側面でトラブルまみれだったのである。

そして舞台は法廷へ……
焦点は金の動き！

『猪木祭り』をめぐるモロモロのトラブルが最終的に訴訟という泥沼に発展してしまった最大の理由は、金銭面の問題である。NTVはイベントが「失敗だった」という判断を下し、当初予定されていた対価合計8億円から2億円を減額。さらに3年契約の残り2年分を解除した。それを不服としたKCが残額および慰謝料の支払いと契約解除の撤回、イベント収支計算書の引き渡しを求めて起こしたのが今回、テーマとして扱っている訴訟の概要だ。

近年、格闘技イベントの規模はどんどん拡大していき、それに関連して動く金額も急激に大きくなっている。それだけに、金銭トラブルとなった場合にもその争いは深く大きなものになってしまうわけだ。このイベントの発端から事後までの、NTVからKCに対しての金銭の流れを整理してみよう（注＝ここで

NTVは大会を「失敗」と判断し
対価合計8億円から2億円を減額

述べる金額はすべて税抜額)。

前述したとおり、NTVとKCはこのイベントについて放送権対価3・5億円、興行権対価4・5億円の計8億円で合意している。この金額が初めて書面で明記されたのは10月の覚書の中だった。その後、選手が二転三転するなどの中でKCの運営能力に不安を感じたNTV側が急きょ、12月11日に前述の3契約を締結。もちろんこの中でも、この金額は明記されている。

NTVからKCに最初の支払いが行なわれたのは11月7日のことだった。川又氏から、選手確保のために一部入金の要請があったためだ。この時点ですでに川又氏の準備に不安を感じ始めていたNTVだったが、手付金が格闘技界の慣行と認識していたこと、またこの支払いを遅らせることによって有力選手が確保できなくなるのはより大きな問題になると判断し、「格闘技興行の慣例に従って」KCの要求どおり2億円を入金している。

この後、さまざまな不備やトラブルが露呈していくわけだが、NTVが手を引くことができなかったのはこの2億円がネックとなったからだ。「不安はあるが、すでに2億も払っている以上、あとには引けない」ということである。そのため少しでもリスクを回避するために、契約書を締結したのだ。

『猪木祭り』は「最高の格闘技大会」ではないと結論づけられたのだ

現役PRIDEヘビー級王者だったヒョードルだが、強さが問われる格闘技であってもヒョードルはミルコの代わりになりえないという衝撃の判決となった。

「イベント共同主催契約書」では興行権対価は契約締結時に1億円、12月24日と1月7日に各1・25億円支払うことを定めている。また「放送権契約書」では、放送権対価は11月7日に2億円(締結時すでに支払い済み)、1月7日に2・5億円の支払いとなっている。

現実の動きはどうだったかというと、前述の2億に続き、12月22日に興行権対価1億円が支払われている。これは「契約締結時」にあたるものだろう。そして12月30日には1・25億円が入金。契約では24日のはずだったが、カード発表がここまでずれたことを受けてのことだ。

つまり、イベント開催までにNTV側は、タイミングのズレこそあったものの予定どおり4・25億円をKCに支払っていることになる。そのズレにしても準備の遅れやさまざまなゴタゴタを考えれば、NTVが責められるべきものではない。

残り3・75億円がイベント終了後の1月7日に支払われれば、すべて完了——となるはずだったが、大会の惨状を見ればそうならないことはあきらかだった。NTVは1月3日の会議で川又氏に2億円の減額を通達。川又氏は「5000万円程度なら応じる」として納得しなかったが、その後川又氏が「関係者の圧力で所在を隠さざるをえない状況に」陥り、連絡不能に(これが前述の恐喝未遂と関係している)。そのため、NTVは6日に減額通知とともに、放送権および興行権対価の残額として1・75億円を支払った。以上が、NTVからKCへと動いた金額のすべてである。

ちなみにNTVはこの8億円という金額について、のちの裁判資料で「著しく高額」と述べている。同書面の中でNTVが独自に算出した「イベント制作に必要な費用の合理的金額」は4・21億円、前年8月に開催した東京ドームでの格闘技イベント『レジェンド』が総額4・67億円(興行権対価4・17億円&放送権対価5000万円)だったこと、類似スポーツイベント(野球のペナントレースやプロレスなど、レギュラーで放送されるもの以外)の放送権対価が5000万円から1・7億円であることなどがその根拠だ。

逆にいえばNTVはそれだけの高額を支払っても、この大晦日に格闘技コンテンツがほしかったわけである。それについて同書面では「ミルコ・クロコップ選手、及び吉田秀彦選手又はそれに匹敵する選手という、極めて集客力が高くコンテンツとしての価値が高い超有名選手を大晦日のイベントに確保できるという特殊事情や、それ以前のイノキボンバイエの視聴率、話題性、観客数などから」決断したと説明している。いずれにしても、結局はあらゆる意味で、想像以上に高い買い物になってしまったわけだ。

判決……『猪木祭り』は「最高の格闘技大会」だったのか?

最初に書いておくと、判決では原告であるKCおよび参加人であるアイビズ・キューブ・ジャパンの請求はいずれも棄却された。つまり、原告の全面敗訴である。

原告の請求は被告であるNTVに対し、減額分2億円に慰謝料等を加えた6・1億円の支払い、イベント収支に関する計算書類の引き渡し。参加人の請求は参加人からKCへの債権分(選手ギャランティ、諸経費など)約9000万円の支払いだった。これらすべてが認められなかったわけである。

判決文の中の「当裁判所の判断」を見ると、食い違った部分に関してはほとんどすべて、NTV側の見解が正当と認められている。残るは、争点である「減額の可否」「契約解除の可否」についての判断だ。

減額の可否、すなわちNTVが減額した理由が正当かどうかが焦点となったわけだが、その一つに「最高の格闘技大会であったか否か」がある。前述のとおり、NTVとKCのあいだの契約書では「開催時に最高の格闘技大会であるとNTVが認めるもの」でなければならないという条項があった。

結果、NTVは『猪木祭り』を「最高の格闘技大会ではない」と判断した。その最終的な根拠は、ミルコ・クロコップの欠場、観客動員の不振(3・6万人収容の会場で、チケット実売は1・2万枚程度)、そして番組視聴率の低迷であった。

これに対しKCは、ミルコの欠場は不可抗力であったこと、瞬間最高13・6パーセントという視聴率を獲得したこと、試合・イベント内容が高い評価を受けたこと(この件に関する証人はライターのタダシ☆タナカ)を理由に反論した。さらに、そもそも契約書において「最高の格闘技大会」という抽象的な文言を使用して規定していることから条項自体が無効と主張している。

裁判所の判断はまず、この「条項自体が無効」という主張について、「契約は当事者同士の規範として一定の合意に拘束力を与えるものだから、文言が抽象的だからといって直ちに無効になるものではない」とKCの主張を却下。さらに両者の契約が、KCの準備能力に不安を抱いたNTVから急きょ締結したものであるということを重視。文言のみ

検証『猪木祭り』裁判

ならず、経緯や条項の趣旨からも判断する必要があるとしている。そこで最も重要となるのは、「最高の格闘技大会」の定義である。

03年大晦日の最大の問題は、民放3社の格闘技興行・番組が競合したことだった。なので、「最高の格闘技大会」とは絶対的な概念ではなく、「競合した3イベントのなかで視聴率及び観客動員数が他より相対的に優位である」という趣旨に解するのが相当としている。つまり『猪木祭り』自体がどうだったかではなく、ほかの2大会に比べてどうだったかが重要、というわけだ。

ここで、一つの書類がある。二人の公認会計士と慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所教授の連名で提出された、「鑑定評価書」だ。この書類では、『猪木祭り』のイベントとしての価値がいくらになるかを鑑定している。

ここでその内容を細かく説明することはスペースの関係で断念せざるをえないが、番組の占拠率を元にした計算、チケットの売上枚数を元にした計算などを総合した結論は、「本イベントの価値は、最大でも4億円を上回ることはない」というものだ。

判決はこの鑑定書も踏まえたうえで、こう断じている。

「本件イベントは、観客動員数は会場収容人数の約3分の1程度、視聴率は平均5・1パーセントだった。これは同時間帯の他2局の格闘技中継がそれぞれ12・2パーセント、19・5パーセントを記録したのに比して、著しく低い数字であった。これをもって、『最高の格闘技大会』と認められない場合に該当することは明らかである」。

さらに前述の鑑定書の結果から、2億円の減額は妥当という結論に達している。なにしろイベントの価値は最大でも4億円、当初予定されていた8億円より4億円も少ないのだから。

確かに「最高の格闘技大会」という表現は抽象的だ。だが、この件についてはあきらかな比較対象が二つもあり、「動員」と「視聴率」を要求されるテレビ番組主導のスポーツイベントであることが大きかった。裁判官は格闘技マニアではないから、試合内容がどうだったかなどは一切関係ない。こうしてあくまでも「客観的」に、『猪木祭り』は「最高の格闘技大会」ではないと結論づけられたのだ。

結論的に現役PRIDEヘビー級王者であってもミルコの代わりにはなれないという、まさに興行論が問われることとなった「猪木祭り」裁判。ある意味、競技論と興行論のせめぎ合いが本格的に法廷で審議された事実がまた興味深い。

ヒョードルはミルコになれたのか?

「ミルコ欠場」をイベント失敗の主因とし、減額&契約解除の最大の根拠とする被告・NTVに対し、原告のKCは「現役のPRIDEヘビー級王者であるヒョードルを代替選手として確保し、IWGPヘビー級王者・永田裕志との貴重な一戦を実現させた」ことをもって反論していた。

その中身は、契約書の文面から「『ミルコ欠場』で〝さらに〟『代替選手が同等でない』場合にしか減額できない」という主張。要は確かにミルコは出なかったが、代替のヒョードルがミルコと同等なのだから減額理由にはあたらない」というわけだ。

だが判決では「文言や用語のみにとらわれるのでなく、締結の経過等も踏まえて、当事者の合理的意思に基づいて解釈するのが相当」という前提が述べられている。

そのうえで、契約に至る経緯から「イベント契約上は、ミルコの出場が最も重要事項」ととらえ、また、次の4つの事態を段階的に想定している。

(1)ミルコがケガ等以外の理由で出場しない。

(2)ミルコがケガ等で出場しない。

(3)代替選手が「同クラス選手」(契約上、ミルコと同クラスの選手を最低1人は出場させなければならなかった)と同等と認められる。

(4)代替選手が「同クラス選手」と同等と認められない。

前述のとおり、契約上はミルコの出場が最優先である。(1)の事態なら即時解除できるとされている以上、「次の段階である(2)の場合には減額できるとするのが自然」、さらに「あえて、(2)かつ(3)でなければ減額できないとするのは契約全体の構造に反する」と分析。したがってミルコの欠場により減額事由は充足された、と結論づけている。

驚くべきは判決文のこの部分全体において、ミルコの名前は頻出するものの、ヒョードルの名前はまったく登場しないということだ。「ヒョードル」の名前は事の経緯を概説した部分には当然出てくるが、判決に至る部分では一個所たりとも出てこないのである。

これはいったいどういうことなのか? 結局、裁判所の解釈としては代わりの選手がどのような選手であれ、ミルコが出場していない時点で減額されるのが当然、ということだ。

この事実にはかなり衝撃を覚えるが、さらに見ていくと、最後に「(5)結論」という項目がある。短いので全文引用しよう。

「以上の次第で、その余の部分について判断するまでもなく、原告の本訴各請求及びそれを前提とする参加人の請求は、いずれも理由がないからこれを棄却することとし、主文のとおり判決する」

ヒョードルがミルコの代替選手としての価値を有していたかどうか、「現役PRIDE王者」の肩書きがミルコの代替に足るものだったかどうかは、裁判所にとっては「判断するまでもない」「その余の部分」だったというのか。あくまでも契約上、この訴訟のうえでのものとはいえ、この結論については目まいがするような驚きを感じずにはいられない。

法廷も争いの場ではあるが、リング上とは価値観をまるっきり異にする。裁判官という(文字どおりの)ジャッジの前では、PRIDEヘビー級王座の威光はまったく通用しないことになってしまった、というわけだ。

法廷の場では「PRIDEヘビー級王者であるヒョードルでもミルコにはなれない」という一刀両断の結末になった。

だがよくよく考えてみれば法廷でなくとも、出場をアナウンスされていた看板選手が急きょ出場できなくなるという非常事態の前には、どのような選手であっても代わりにするのは難しい。この『猪木祭り』に関していえば、誰かを最初にイベントの中心選手として発表されたミルコの代わりにしようということ自体が、普通に考えて困難なことなのである。

当時連日のように報道されたため、この大騒動の末に格闘技界と反社会勢力との接点が噂され、クローズアップされた部分もある。そしてこれがのちの『週刊現代』のPRIDEバッシングにつながっていくのだから、やはりこの騒動によって格闘技界が負ったダメージはあまりにも大きい。

年収1800万円から〝ホームレス〟へ――

ここから復活できんのか！
オヤジ特集に〝おじいちゃん〟登場！

ターザン山本！63歳

空白、転落、無の10年

この10年間、マット界で最も凋落した男といえば、このターザン山本！をおいてほかにいないであろう。『週プロ』編集長辞任後、フリーとして一時は年間2000万円近くの収入があったにもかかわらず、その怠惰な生活ぶり、やっつけ仕事、度重なる対人関係の悪化から仕事が激減。いまや、商業誌でほとんど見かけることがなく、2ちゃんねるのスレッドで細々と話題になる程度となってしまったターザン。はたして、かつての名物編集長にとって、この10年間とはなんだったのか？そしてどん底からの復活はあるのか？

聞き手／堀江ガンツ

ダラダラ時間を無駄使いして空手形を切り続けた10年ですよ

――さて、山本さん。今日は「ターザン山本！にとっての2000年代」を語ってもらいたいんですよ。

ターザン　ボクの10年間？　そんなもん聞いてもしょうがないでしょう。

――ええ、聞いてもまったく意味はないんですが、特集のオチとして登場していただきます（笑）。

ターザン　俺はオチか……。なんにもない10年間だよ。

――でも、いまでこそ連載がほぼなくなり、小銭人生まっしぐらですけど、2000年代の初めの頃は凄かったじゃないですか？

ターザン　凄かった？　もう覚えてないよ。みんな忘れたね。

――2001年に発行された山本さんの日記を初めてまとめた本、『豪速球』を読んでみたんですけど、「1年間の支払調書を集めてみたら、1800万円の収入があった」って書いてあるんですよ。

ターザン　1800万!?　ホント、それ？

――もはや自分のこととは思えませんか（笑）。しかも、年収が1800万円もあったのに、350万円のマイナスだったらしいですね。

ターザン　全部競馬でスッて、さらにキャッシングまでして負け続けたからね。だからいくらお金が入ってもマイナスだったんですよ！

――まったくもって無駄使いきわまりない。で、この10年というのは、ターザン山本！にとってどんな意味がありましたか？

ターザン　空虚そのものだね。何があったんだろ？

――10年前は『SRS・DX』『プロレス激本』『格闘伝説』で大量に仕事があって、『ｋａｍｉｐｒｏ』にもよく出てもらってましたから、いろいろありましたよ。

ターザン　『SRS・DX』のときは、谷川（貞治）が毎月50万円くれたんだよ。それ以外にもいろいろあったから、もしかしたら月収が100万円を超えていたかも。あのお金はどこにいったんだろうね……。

――馬券に姿を変えたんでしょうね。だから、山本さんの全盛期は『週プロ』編集長時代って言われますけど、収入的にはそのあとのほうがよかったんですよね？

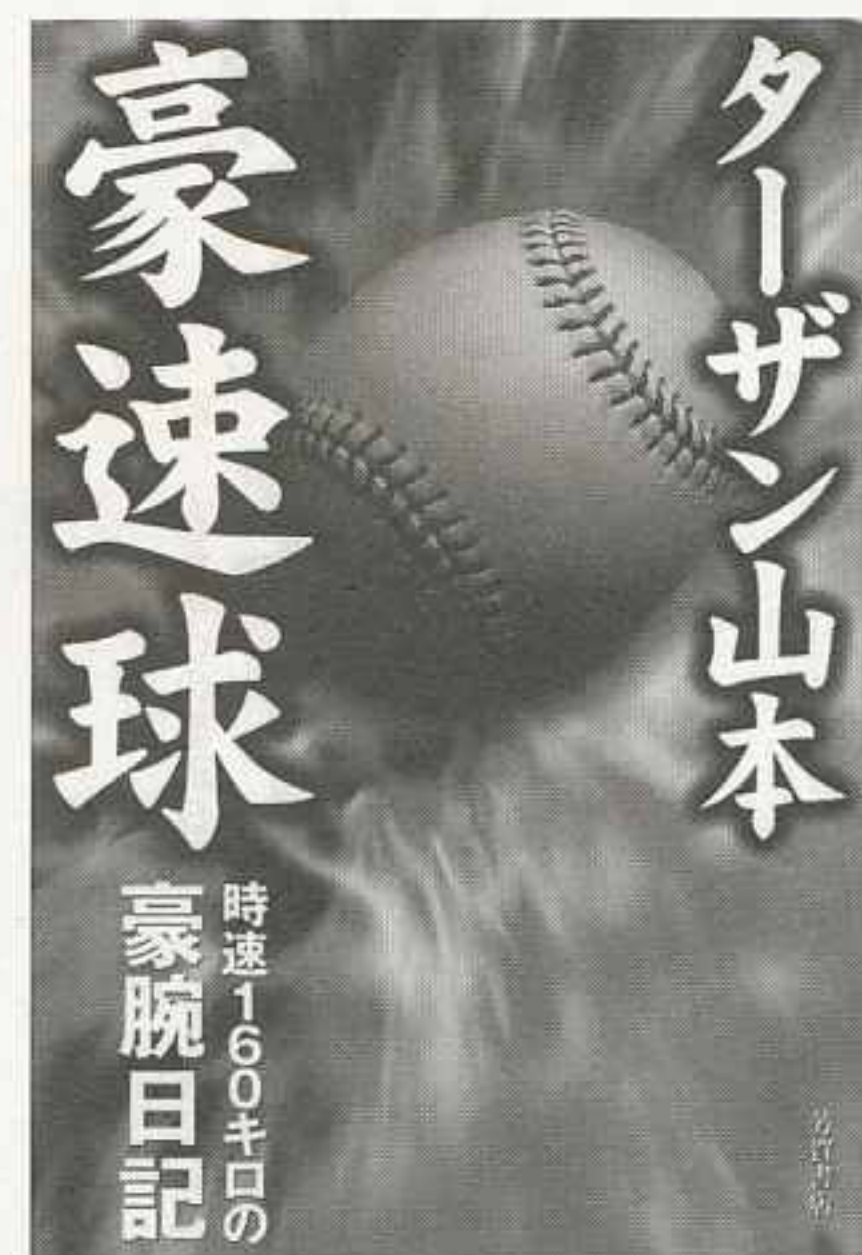
ターザン　そういうことになるね。『週プロ』の頃は、ベースボール・マガジン社の社員で、僕もみんなと同じいちサラリーマンだから、給料は普通の人と大差ないわけですよ。あれが出来高制だったら、大変だよ！

――だから、フリーになって数年はかなり稼げたと思うんですけど、それがここ5年ぐらいで急激に収入減となった原因はなんだと思いますか？

ターザン　ボクが怠けてたから。

――素直なお答えありがとうございます（笑）。

ターザン　ボク自身が、世間的、世俗的な欲望を放棄してたというか。もう一度世に出てやろうというモチベーションがなくて、とにかくダラダラダラダラと、週末になると競馬をしながら無駄に時をすごしてたわけですよ。

――でも、この『豪速球』には「2001年はチャレンジの年だ」と書いてありますよ。

これが2001年に芳賀書店から発行された単行本『豪速球』。この後、新紀元社から『往生際日記』シリーズが乱発されたが、発行元の社長であったターザン高松氏は現在行方不明説もある。

ターザン　そんなもん、すべてハッタリの空手形よ！　空手形の10年ですよ！

――ずいぶんと空手形を切りましたよね。

ターザン　だからさ、僕のことをブレイクさせようと、いろいろ仕掛けてくれた浅草キッドなんかに対しては、誠に申し訳なく思ってるんだよ。懺悔したいというか、土下座したいというか。

――得意の土下座ですか（笑）。

ターザン　あと吉田豪ちゃんもそうだけど、ボクに期待してくれたあらゆる人の思いを裏切って、ぐうたら男に堕落した10年ですよ！

――そのやる気皆無、ダラダラすごしてしまった理由はなんだと思いますか？

ターザン　これはハッキリ言うよ。97年にカミさんが逃げたでしょ？　その心理的ダメージですよ。自分ではないと思ったんだけどな……。

――離婚の痛手がそこまで尾を引きましたか。

ターザン　深層心理的に引いたね～。でも、会社を辞めて、マット界を追放されて、カミさんまで逃げたら、あの時点で普通は廃人よ。もしくは自殺ですよ。あれから13年生きてこれたことが奇跡。まあ、生きながらえたのは、『週プロ』での過去の実績が、貯金としてあったからだよ。

――そして、その貯金もそろそろ底をついた、と（笑）。

ターザン　残高はとっくの昔にゼロですよ！　でも、ああいうかたちで存在そのものを抹殺されて、地位も名誉もカミさんも失なったらそりゃまいるよ。その理不尽さ不条理さに頭にきて、自分の気持ちが整理できないまま引きずっちゃったんですよ。

――それを13年も引きずっちゃったわけですか。

ターザン　だから、どうでもいいやというヤケクソだよ。ただ一つ、『週刊ゴング』の編集長をやりたかったという気持ちはあった。

――一時、『週プロ』に復帰という話もありましたよね？

ターザン　あれはね、5年ぐらい前にボクと一緒に文章講座をやっていた杉山編集長（初代『週刊プロレス』編集長）が二人で仕掛けて、ベースボール・マガジン社の社長室に行ったんです。そこでボクらが『週プロ』に復帰するって話がほとんど決まっていたんですよ。それが正式発表される前に、ボクがそのことを『週刊ファイト』で書いたら、それを見た内部の人間が会社にその『ファイト』を持っていってパーにしたわけよ。やっぱり『週プロ』も『ゴング』もボクが来ることに対する恐怖感があるから、その道が閉ざされるわけよ。

――現場の反対で毎度パァになる、と（笑）。そうやって『週プロ』復帰が閉ざされたり、『ゴング』や『ファイト』がなくなることで順調かつ急激に仕事がなくなる中で、インターネットの『ターザンカフェ』の存在というのは、山本さんにとってかなり大きいんじゃないですか？

ターザン　大きいなんてもんじゃないよ！　ＩＢＪの社長はボクの恩人中の恩人、大恩人ですよ！

――『ターザンカフェ』のおかげで一応、媒体が持てて、定期収入もあるわけですよね。

ターザン　史上空前のパトロンですよぉぉぉ！　もの凄く感謝してますよ！　『ターザンカフェ』のおかげで、ボクはターザン山本！でいられるんですよ。あれがなくなったら、単なる「63歳・無職」みたいなもんだからね。

――63歳・無職（笑）。じゃあ、ＩＢＪは生命線じゃないですか。

ターザン　そうだよ（アッサリ）。だから俺は日記に関しては一生懸命やってるんですよ！

――普通だったら山本さんって原稿発注が来ても、まず締め切りすぎる

まで原稿書きませんよね？

ターザン　そうだよ。半分どうでもいいやってね。でも、このＩＢＪに関してだけは、ちゃんと毎朝必ず書いてるんですよ。かつての『ファイト』の原稿なんて、催促されてから１時間で一気にパァ〜と書くのに、『ターザンカフェ』は律儀に毎日書いてるもんなぁ。

――でも、『ターザンカフェ』の収入があれば、贅沢さえしなければ、ちゃんと暮らしていけるじゃないですか。

ターザン　いや、ボクは借金があるわけですよ。家のローンもあるしね。だから、大きな声じゃ言えないけど、じつはローン破綻なんだよ。

――ローン破綻？

ターザン　家のローン払えなくなったんだよ。それで差し押さえられて、もうすぐあの家出ていかなきゃならないんだよ。

――あんなに長くローン払ってるのにですか？

ターザン　21年払ってる。でも、残り900万円あるんだよ。これが差し押さえられて家を競売にかけられたらパァよ。だから1980年、現金3万円持って大阪から上京して、安アパート住まいになったときと同じ状況に落ちるんだよ。

――でも、なんで一人暮らしなのに、あの家族で住める一軒家に住み続け、ローンを払い続けてたんですか？

ターザン　俺がバカだからですよ！

――俺がバカだから（笑）。

ターザン　だって最初の頃、ボーナス月の3月と9月は50万円ずつ払ってたんだよ。いまでも3月と9月は35万円だもん。そんなの払えないよ！

家のローンが払えなくなって もうすぐ追い出されるんですよ

――離婚したあと、すぐに家を売っちゃえばよかったじゃないですか。高くは売れなくても、残りのローンは何分の1かになってたと思うんですけど。

ターザン　ボクはそういった方面にまったく頭が回らないんだよね。

――当時は稼いでたから、残りのローンなんかすぐに払えちゃって、マンション買ったりもすぐできたと思うんですけど。

ターザン　そうなんだよ。無駄な支払いだったなぁ……（しみじみ）。でも、こうやって10年以上、グダグダ、ダラダラと生きてきて、ある意味よかったと思うんだよ。家族もお金も家もなくなって、気がついたら瀬戸際に立っていて、日銭人生を生きたことによって、やっとその気になったから！

――あ、またまたその気になったんですか（笑）。

ターザン　2000年代をボケーと生きてきてよかったよ。ここから何かがもう一度始まるから。考えてみれば〝溜め〟の時期だったんですよ。

――溜めてるつもりが、ほとんど漏れてるような気もしますけど（笑）。

ターザン　（無視して）ボクは20代の青年時代、大学を中退して、ホントにまともな職には一度も就かずに、世の中をなめきった無頼野郎で生きてたわけだよね。それと同じように、この10年間というのは、第2の無頼だったわけですよ。

――第2のなんにもしなかった10年。

ターザン　でも、あの第一次青春時代の栄光の無頼人生があったから、そのあと30代後半に『週刊プロレス』で大爆発したんだよ！　今回も一緒ですよ！

――いまは爆発前夜みたいなもんですか。

ターザン　そうですよぉ！　死火山が急に大大大爆発するかもしれませんよ！　…………でも、俺は今年64歳なんだよなぁ。もう遅いか？

――知りませんけど（笑）。

ターザン　この年になるとさあ、同世代の人間がどんどん病気になったり、亡くなったりするんだよね。最近もつかこうへいがガンになったし、小澤征爾もガンになったりして、こりゃやべえなって初めて危機感を持ったよ！

――人生の締め切りが近づいてきてますか（笑）。

ターザン　そうなんだよ！　最後に辻褄合わせせなきゃ！　死にきれない、みたいなね。

――締め切り直前まで原稿を書かないのと、山本さんの人生は一緒だったんですね。

ターザン　そう。ギリギリまでたかをくくって、何もやろうとしないというね。目先の人生だけを楽しんできたんだから、逆に言えば俺ぐらい幸せな人間はいないよな！

――プロレスマスコミの中で一番稼いだわけですもんね。じゃあ、2010年代のターザン山本はどうなりますか？

ターザン　完全な最後通告ですよ！　でも10年以上、怨念の時間を生きてきたことで俺は日本という国が見えてきたね。

――へえ、日本を見切りましたか（無表情で）。

ターザン　いろんなものが見えてきた。時代の表と裏が見えてきたし、頭が過激になってきたよ。俺は結局10年間、逃げてたんだよな。

――逃げてましたか（笑）。

ターザン　いろんなことから逃げまくってた。自分に負けて……。でも、逃げるしかなかったんだよ。あのトラウマのせいで……。

――精神の引きこもりというか。

ターザン　お祭り騒ぎの引きこもりというギミックですよ。そして自己弁護の連続というか、言い訳と負け惜しみの人生というか、その言い訳し続ける自分に甘えてしまったというかね。でも、ここまで追い詰められて、ようやく本気になりましたよ！　ここからひと暴れするよぉ！

――……ま、そんなこと言っても、もう狼少年、いや狼老人みたいなもんで、誰からも信用されないだろうけどね（寂しそうに）。

――今回もあいかわらずの空手形だろう、と（笑）。

ターザン　ボクは〝やるやる詐欺〟って言われてるみたいだから。でも、今回は半分マジだから。俺はもうシビアになる！　あらゆることに妥協なく生きていくことにしたから。そっちの編集長にも手紙を書いてきたんで、これを渡しといてくれ！

――えっ!?　なんですか、これ？

ターザン　これを読めば俺の心がホントにセメントになったことがわかりますよぉぉ！

【10年1月28日／都内葛飾区立石、某喫茶店にて収録】

これがシビアになったターザンが、本誌編集長ジャン斉藤に宛てた手紙。あいかわらず汚すぎる字でほとんど読めないが、要は「1万円分のクオカードをください」というだけのもの。「なんだタカリかよ」（byウチパクさん）

たーざん・やまもと！■本名・山本隆。1946年4月26日、山口県出身。『週刊ファイト』編集部を経て、80年にベースボール・マガジン社に入社。87年に『週刊プロレス』編集長に就任し、公称40万部にまで部数を伸ばす。しかし、96年に新日本プロレスからの取材拒否をきっかけに『週プロ』編集長を辞任し、退社。その後はフリーとして順調に仕事を減らし、間もなくホームレス状態。近著には法政大学卒（!?）の女流脚本家（!?）古関夢香との共著『バンザーイだ! 62歳のボクに28歳年下の彼女ができたのだ!』（ロコモーションパブリッシング刊）がある。

第51回

俺テクニックを教えてほしい

花くまゆうさく

豆リングの汁

みんな大好きエディ・ブラボーが、弟子の試合のために来日し、セミナーしたけど大盛況だったみたいですね。生で、エディの俺節を聞き、俺テクニックを教えてもらった人たちがうらやましい。

弟子のシゲキは負けたようだけど、エディのラバーガード理論はかなり理にかなってると思う。彼の理論を完全に会得した選手がMMAで勝つとこ観てみたい。彼自身の試合も見たいけどね、グラップリングで。良質なカードを提供してくれる『DEEP X』に頑張ってほしい。

その『DEEP X』でバレットが一本勝ちはうれしい。バレットvs門脇戦観たいよ！

UFCは、デミアン・マイアが復活したけど、打撃で勝とうとしてるのが観てて不安。信念もって寝技勝負に徹底してほしいけど。

チアゴのセコンドでイズマイウ登場。常にフレーム真ん中で映るイズマイウポジション健在！　試合後のインタビューも活き活きしてたね。日曜の昼に、生放送でイズマイウ観れるなんてファンタジックでした。

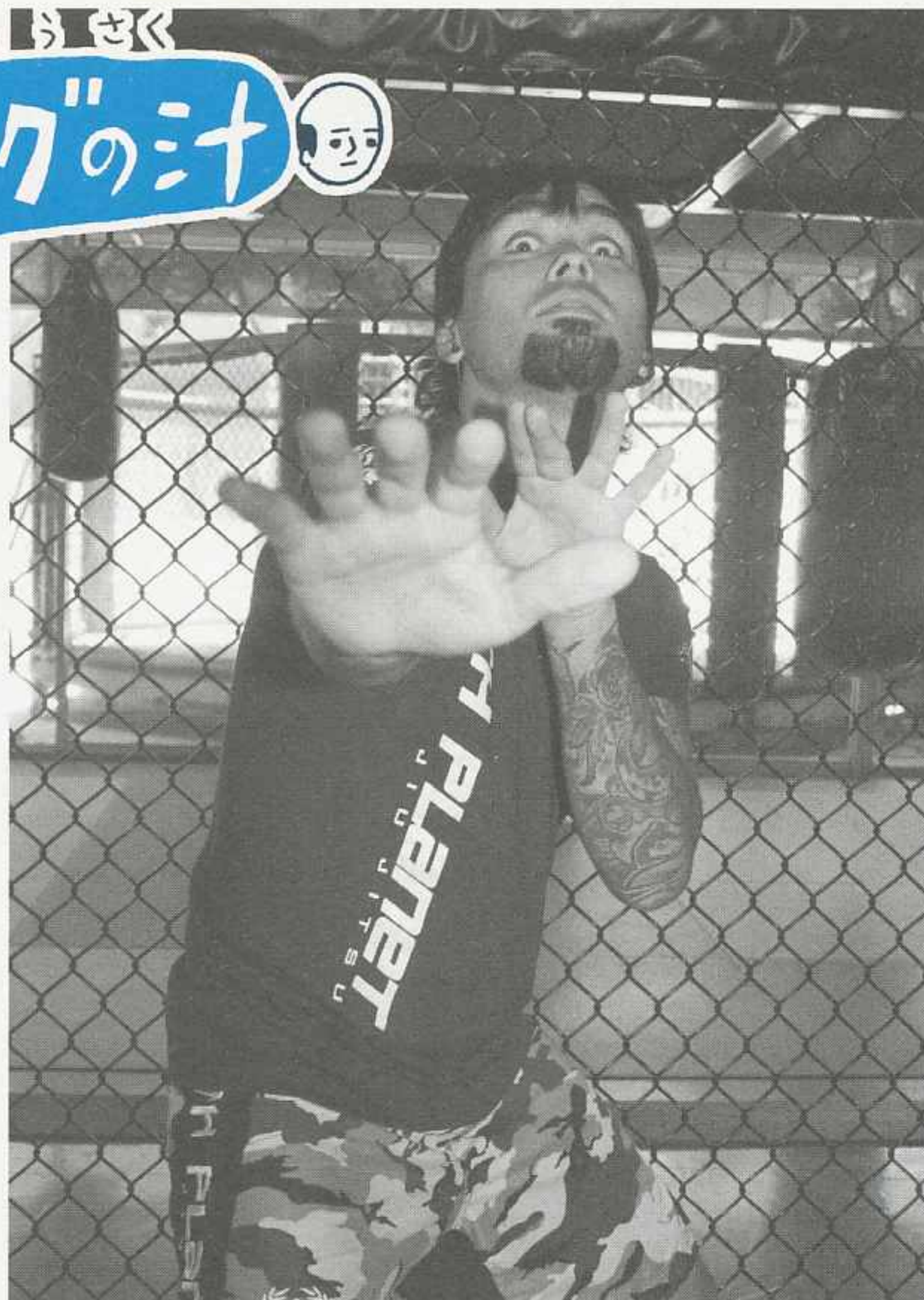
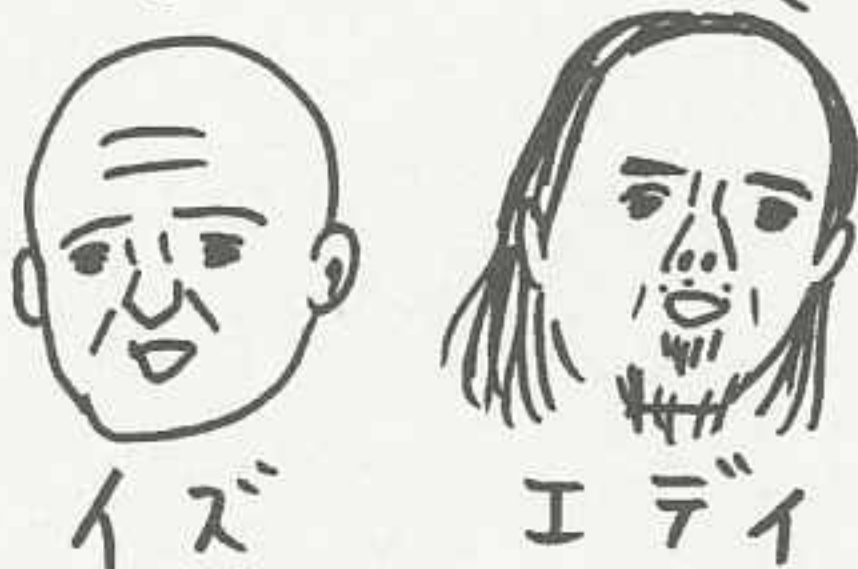
俺様な2人

エディ

イズ

Hanakuma Yusaku
◎ゆうばり映画祭で上映します

金ちゃんのどこまでやるの？

●第43回● オヤジパワーの巻

2010年最初の試合が決まりました。2・28DEEPの後楽園ホール大会で、DEEPミドル級チャンピオンの福田力選手とノンタイトルで闘います。ホントは大晦日になんとかして試合がしたかったんだけど、待ったかいがあったというか、チャンピオンと闘えるということで気合いが入るよね。

俺の目標は、昔から言ってるけど、チャンピオンベルトを巻くことだから。これまで19年現役をやってるけど、俺はまだチャンピオンベルトを巻いたことがないからね。やっぱりプロになった以上、一度はベルトを巻いてみたいから、今年の目標はDEEPのチャンピオンになること。その足がかりとなるチャンスが、今年一発目の試合で組まれたんで、よかったよ。

ただ、今回はノンタイトルなんで、まずは一勝してタイトルマッチに漕ぎ着けたいけどね。39歳の初戴冠に向けて頑張りますよ。

この試合の発表記者会見でさ、DEEP代表の佐伯さんが「福田選手は世界に通用する日本人」ってことを強調してて、チャンピオンを凄く持ち上げてたから、「俺は当て馬かよ！」って思ったりもしたんだけどね（笑）。

でも実際、福田選手は日本のミドル級で3本か5本の指に入る存在だと、俺自身も思うよ。メジャーな舞台に上がった経験がそんなにないから、知名度はあまりないけど、実力的には岡見勇信選手、三崎和雄選手、あと秋山成勲なんかと差はないと思ってるからね。福田くんは強敵だって思ってるよ。彼はDEEPの契約があるから行けないだけで、アメリカのメジャーな舞台からのオファーもあったらしいからね。そういう若くて強い選手とやれるっていうのは、素直にうれしいことだよ。

じつは福田くんとは前から少し面識はあるんだよね。彼はもともとエンセン（井上）の弟子だったからさ。俺もエンセンとは仲がいいから、その頃、彼を見たことがあって、「骨格がゴツいし、背も高いし、強くなるんだろうな」って思ってたんだよね。その彼と、俺が挑戦者のような立場で闘うんだから、不思議な気分だけどね。

だからこの試合が決まったとき、すぐにエンセンに電話して「あなたの弟子と対戦することになったんだけど、エンセンはどっちを応援するの？」って聞いたら、「それは困るよ～」って言ってたけどね（笑）。

ま、とにかくオヤジパワーで意地を見せますよ。去年の大晦日は、俺より1歳上の吉田（秀彦）さんが、石井慧選手相手にオヤジパワーで勝ったし、俺よりずっと年上のランディ・クートゥアーやマーク・コールマンも頑張ってるもんね。

あと1歳年下で昔、リングス闘ったこともあるダンヘンなんか、PRIDE→UFC→ストライクフォースと、どんどんファイトマネーを上げていって、いま凄い稼いでるんでしょ？　リングスで試合したときは、ダンヘンがやった反則のポイントがちゃんと取られてたら俺の勝ちだったのになあ。

あのあと彼はKOKで優勝して、そのままスターダムにのし上がっていったわけでしょ？　ずいぶん違う人生になっちゃったよ。俺なんかジムに練習に行くときも、車で行くと駐車場代がかかるから、節約のために雨の日でもカッパ着て、バイクで練習に行ってるからね（笑）。

でも、プロの世界は結果を出さなきゃいけないから、俺もなんとか栄光をつかみたいので、2月28日は応援よろしくお願いします！

Hiromitsu Kanehara
◎本音炸裂コラムほぼ毎日更新中!
金原弘光オフィシャルHP
http://www.hiromitsu-kanehara.com/

kamiproのポッドキャスト番組

mimiproだけはガチ!!

第67回 これが重大発表……なのか?

本誌No.142の最終ページで「重大発表（あくまでも予定です）」と大きく見出しを打った途端、あちこちで「休刊か!?」と噂が立ったこの問題。編集部のスタッフ3名（ジャン斉藤編集長、堀江ガンツ、坂井ノブ）でお届けします。他誌についてもガッツリ話しました。

第68回 ブログでkamiproを罵倒しておきながら「取材してほしい」と言ってくる団体スタッフと我々はどう向き合うべきか?

昨年12月、自身のブログで「紙プロはやっぱりクソだ!」と罵倒しておきながら、1月中旬に「ヴァルキリーを取り上げてほしい」と編集部スズキィにコンタクトをとってきた“ただのスタッフ”長尾メモ8氏がご登場です。ウェブ上などでは「ガチ」「冷たい試合」「不快」など賛否両論でした。

週刊!? ワオ木真也

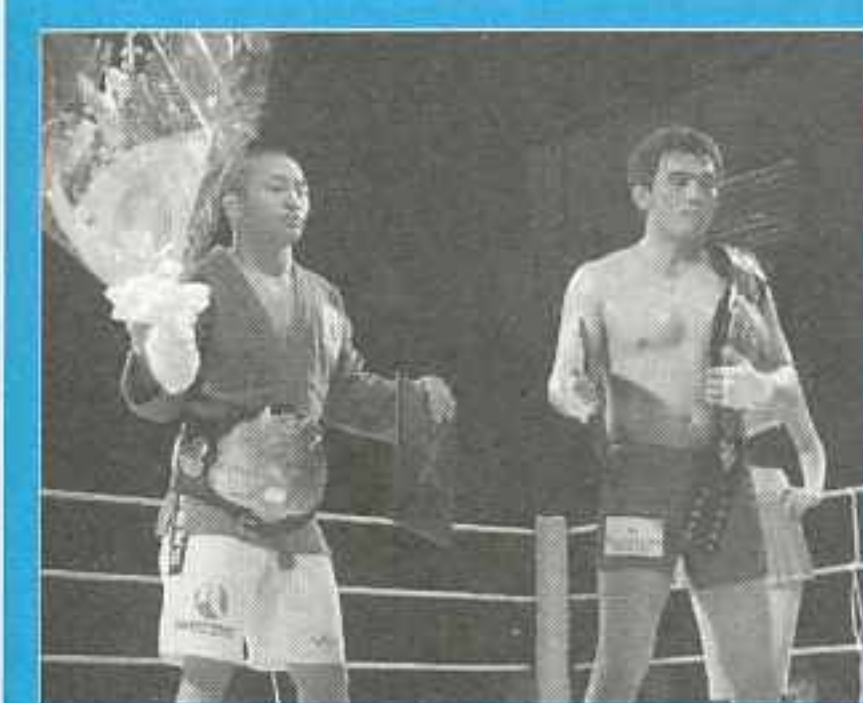
携帯サイト『kami-pro ムーブ』で大好評不定期連載中の青木真也のコラムがこちらで一部のみ読めてしまう!! いま最も注目すべき世界的なファイターの素顔に迫る!!

金沢“GK”克彦 こちらプロレス村役場ドットコム

元『週刊ゴング』編集長・金沢“GK”克彦氏が、プロレス界の最前線で見てきたこと、取材したことを週一回のコラムで激筆!!

韓流MMAニュース

フリーライター・大川義之が韓国直輸入の格闘技情報をお届け!! ボブ・サップやヒョードルのスクープ情報も!?

photo／Josh Hedges（UFC）

試合速報

注目の試合の内容をいち早く速報します。試合の写真はもちろん、試合後のコメントなども細かくレポート!! 生観戦後も必読ですよ。

ニュース

カード発表や重大発表など、規模の大小にかかわらず記者会見の模様を素早くお伝えします。最新情報はここで読もう!!

最新号情報

次号の表紙は？ 内容は？ そんな疑問にいち早くお答えします。雑誌『kamipro』および kamipro booksシリーズの発売情報はこちらで!!

大好評のフォトニュースも見てね♥

プロレス&MMAの総合WEBサイト

kamipro.com

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

カミプロドットコム

無料です!

レッツ毎日アクセス http://www.kamipro.com/

前号の出来事はいったいなんだったんだ……。リュウ・トクリ？　あのファンキーなボーイはどこからやってきたんだい？　正直、いきなりオレのページを乗っ取られたからあんまり気分はよくなかったけど、なかなかグッドルッキンだったじゃないか（小声で）。乗っ取りはもう勘弁だけど、よかったらまた遊びに来てくれよな！　リュウ・トクリ、サイコー！　……え？ ドンキの商品券が目当てじゃないぞ！

FEBRUARY号へのお便り紹介

2009年『Dynamite!!』総括座談会がおもしろかった。青木選手の行為を少年犯罪にたとえていましたが、そのとおりだと思います。

【神奈川県・倉内良介さん・学生・26歳】

D 少年犯罪か……。シンヤ・アオキは確かに突拍子もないところがあるみたいだけど、でも結局みんなそこを楽しんで観てるんじゃないのかい？

恒例！TK技術講座『Dynamite!!』編がおもしろかった。カオスと化したあの大晦日を冷静かつ大胆にぶった切れるのはTKだけ！

【石川県・浅井清治さん・会社員・37歳】

D 『kamipro』を読んでるボーイズ&ガールズはTKのことを優しくてインテリジェントな解説者だと思ってるかもしれないけど、TKもけっこうとんがったところがあるからな。油断は大敵だぜ。クックックック。

「悪役ほどじつは常識人」のセオリーどおり、ターザン後藤のインタビューは真面目さがにじみ出てました。もしUFC参戦が実現していれば、日本の総合格闘技もまた違ったものになっていたと思います。とか書いてたら、FMWの「M」がマーシャルアーツであることを思い出しました。まあ異種格闘技戦もやってるし……。

【福島県・カトー↓さん・私立警官・38歳】

D ターザンといえばオレはもうヤマモトの印象だけだ。雑誌の『TARZAN』も売れてるんだったら、立石に寄付でもしたほうがいいんじゃないのかい？

フランク・シャムロックの「キクタ……？誰だい、それは？」の部分を読んで吹き出してしまった。しかも、歯医者の待合室で……。

【山口県・松江巧さん・自衛官・31歳】

D キクタ周辺はいつだって話題騒然だなあ。しかし、キクタのブレーンは誰だか知ってるかい？　オレはこの前キクタと電話で親密に話している姿を見たが、じつは阿修羅チョロなんだぜい。クックック。

長野美香インタビューがおもしろかった。南野陽子とマドレーヌの話でテンションが上がりまくりの熊久保さんがおもしろかったです。そういえばミスター・デンジャー松永選手はアイドル好きで、佐山さんは甘いもの好きでしたよね。この二人と熊久保さんの対談が読みたいです。

【北海道県・阿部正典さん・フリーター・37歳】

D クマクマンボというヤツは、最近ムダにキュートなガールに接近しているヘンタイ野郎だろ？でもオレはクマクマンボのこと、嫌いじゃないぜ。

“魔裟斗女”は存在するのか？　の記事がおもしろかった。腐女子叩きで終結するかと思いきや、最後に「魔裟斗最高！」とシメちゃうところ。

【千葉県・小池翔太さん・学生・20歳】

D 確かによお、いったい誰が10万円のチケットを買って観に行ったんだかと思ってたが、やっぱりいるところにはいるんだな。取材したミスター・タカサキ、ユーはマット界史の証人だぜ。

職業柄、49歳になったいまでも柔道着に袖をとおすことのある今日この頃ですが、現実に実力行使を行なう場面ではかたちどおりにゆくはずもなく、総合格闘技における各選手の動きには興味深いものがあります。職業柄、とくに固め技に注目していますので、小室宏二氏のDVDも気になってしょうがない……。

【山口県・武田英人さん・刑務官・49歳】

D ユ、ユーは刑務官なのかい？　オレのこと、閉じ込めたりしないでくれよお。

FEBRUARY号 おもしろかった記事 RANKING

NO.1 青木真也

NO.2 ターザン後藤

NO.3 髙阪剛

NO.4 女子格特集

NO.5 青木真也考察座談会

おっと、試合は賛否要論あったみたいんだが、みんな結局シンヤのインタビューには注目してたみたいだな。まあ、あのインタビューはなかなか貫禄があってナイスだったよ。しかし、『格通』のシンヤインタビューはとびきりのスマイルで写ってたそうじゃないか。『kamipro』の表紙に怒ってる人がいるんなら、オレはそっちを注意したほうがいいと思うぜい。

青木真也の懐刀
『公武堂』社長
長谷川臣生
ミスター
エアーバック♡

広島県・梶間浩幸さん／これは敏腕マネージャーのミスター・ハセガワだな。シンヤと一緒に入場して目立とうとしてもダメだぜい！

大阪府・剣洋人さん／これはこれは、ミスター・ホリベのイラストじゃないか。いつもコッポウの生徒さんたちは、お礼の電話をくれるからナイスだぜ！

オレの名前は
リュウ・トクリ。
また夢で会おう！

ファンキーでクレイジーなアイツが
読者のメッセージを
Check it out!!

“読者ペイジ”

ジャクソン

143号へのお便り紹介

今回の「ゴールデンプロレス大特集」は全編おもしろかったです。とくにライガー、ドラゴン対談は「俺もこれやってたわ！」って感じでとても共感しました。勝敗予想もしたし、メインの猪木さんの6人タッグとか「10分すぎに延髄だな」って言ってました。そしてビッグサカの試合にトイレに行ってました。坂口さん、すみませんでした。
【神奈川県・廣木和宣さん・会社員・44歳】

10分すぎたら猪木が延髄？　おいおい、プロレスってそんなもんなのかい？　わかりきってるのにわざわざ観に行くヤツの気が知れないぜ。しかし、『kami-pro』読んでるようなボーイズ&ガールズはみんなそうなんだろうな。

黄金の「プロレスと入場曲」がおもしろかった。いまでも聞く音楽はテーマ曲ばかりです。この企画はレギュラー化してほしい！
【石川県・浅井清治さん・会社員・37歳】

確かにNHKって局はやるときはとことんやるもんな。一日中ラジオでプロレスのテーマ曲が流れっぱなしだったじゃないか。前田日明というジェントルマンがジェレミー・ホーンの入場曲にこだわってたのには笑ったぜい。アッハッハッハ！

玉ちゃんと椎名基樹さんが登場している変態新年会がおもしろかった。これだけ世間の人たちから青木に対する批判が上がっているのに、玉ちゃんも椎名さんも気持ちいいぐらい本音で語ってて最高。変態座談会はこっちバージョンのほうがだんだん好きになってきました。
【神奈川県・矢口ノリオさん・会社員・36歳】

タマちゃんもよかったけど、今回のはミスター・シイナがとんでもないことばっかり言ってたじゃないか。はっきり言ってシイナも魔王ってヤツだぜ。しかし、シイナとはぜひフレンズになりたいと思ってるから、タマちゃんとばっかり飲んでないで、オレのことも誘ってくれよな！

サスケと船木の超常現象対談がおもしろかった。サスケは心の友を見つけたかのようなハジけっぷりだったのもおもしろかったが、船木の「宇宙人に支配されてもいい」とかそういう発言に、

143号 おもしろかった記事 RANKING

- No.1 変態新年会
- No.2 船木誠勝×ザ・グレート・サスケ
- No.3 藤波辰爾×ユリオカ超特Q
- No.4 青鬼論
- No.5 ライガー×ウルティモ・ドラゴン

おっと、この号もシンヤの企画が人気だな。しかし、ちょっと待てよ。そのほかはめずらしくプロレスの企画が席巻しているじゃないか。そうか、これが『アメトーーク!』効果ってヤツか。しかし、オレも観てるぜ。ちなみにオレのお気に入りは「後輩のザキヤマに憧れてる芸人」の回だ。ザキヤマはホントにハートが強いよな！

こっちも興奮してしまった。『kami-pro』はよく船木を取材しているけど、その理由が凄くわかる気がする。
【埼玉県・春日部リョウさん・自営業・42歳】

ミスター・フナキは確かにサイコーだ。どんな話を聞いてもクレイジーに答えてくれるから、こっちだって大興奮だぜ。しかし、超常現象にまで興味があったとは……。フナキは恐るべしだぜ！

世の中に訴えたいことがあればなんでもということなので、ものすごい苦情ばかりを書きました。誌面に載らない限りは伝わらないだろうと甘く考えていました。今度こそ本当に絶対に書きません。もし、何か問題が起きているのであれば、すみませんが196-○○○-○○○○に電話をしていただけないでしょうか？　ものすごく不安です。本当にすみませんでした。
【熊本県・西澤宏二さん】

OH！　いったいユーは何があったんだい？　確かにユーからはたくさんハガキが届いていたようだが、まったくノー・プロブレムだ。だってよお、いつも募集要項のところに苦情もOKだって書いてるからな。なんか心配事があるんだったらいつでもレターを送ってくれよな！

kamipro編集部の住所が変わりました！

おっと、住所が変わったからって、ハガキを
送らないなんてイジメは勘弁してくれよ！『kamiproムーブ』
からの送り方はいつもと変わらないから、いままでどおり、
意見、感想、苦情、抗議、お悩み、ダメだし、
そのほか思いの丈を書いて送ってくれ！　待ってるぜ！

こんな情報も24時間どんと来い！　ってヤツだ。

目撃情報
タレコミ情報
選手に対するコメント、試合の感想
その他、オールOKだ!!

以上、すべてのお便り・イラストのあて先は

〒162-0805
東京都新宿区矢来町41-1 ザフタガミハウスNo.1
kamipro編集部「民族大移動」係まで。

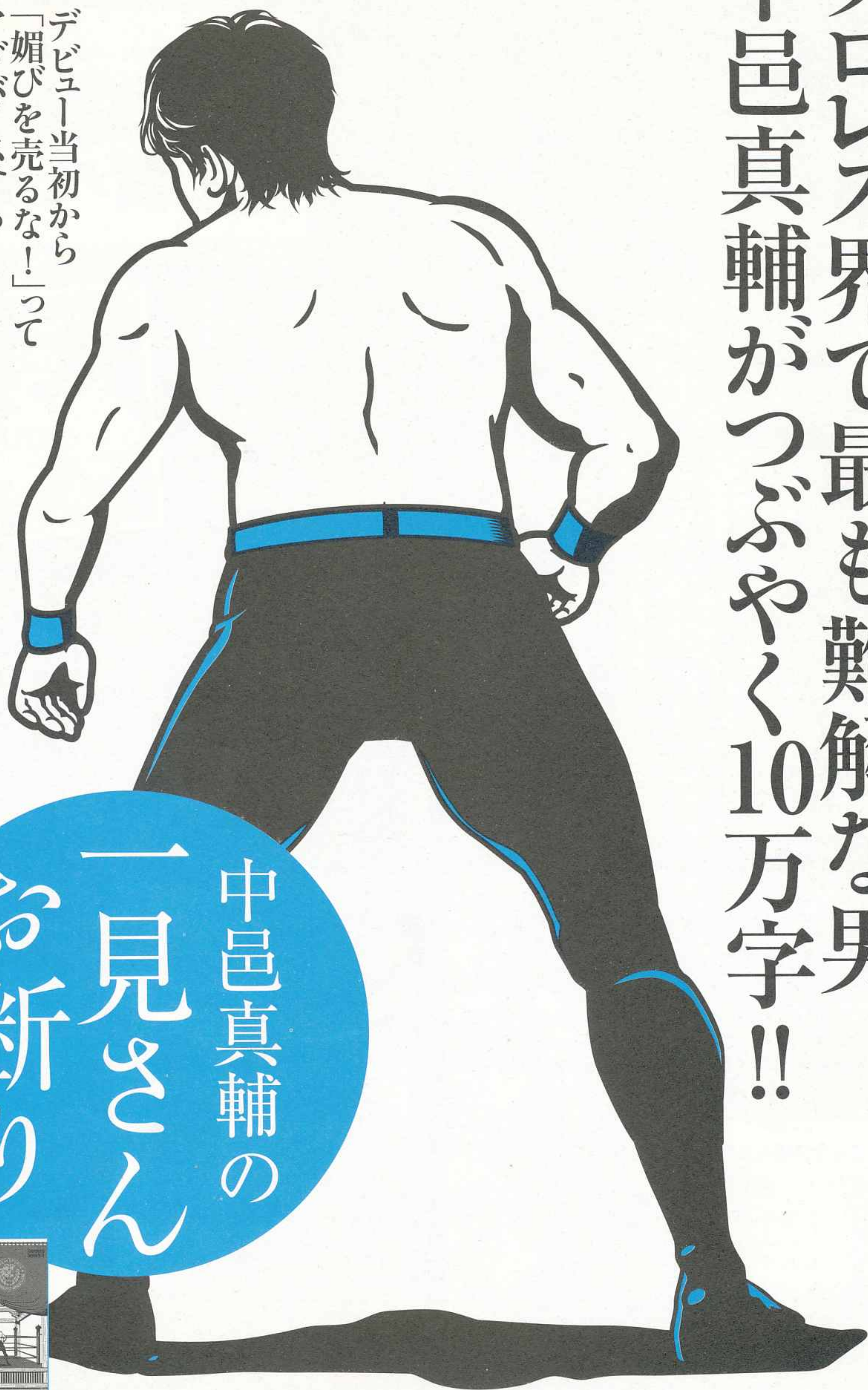
携帯サイト『kamipro Move』からの投稿もできます。

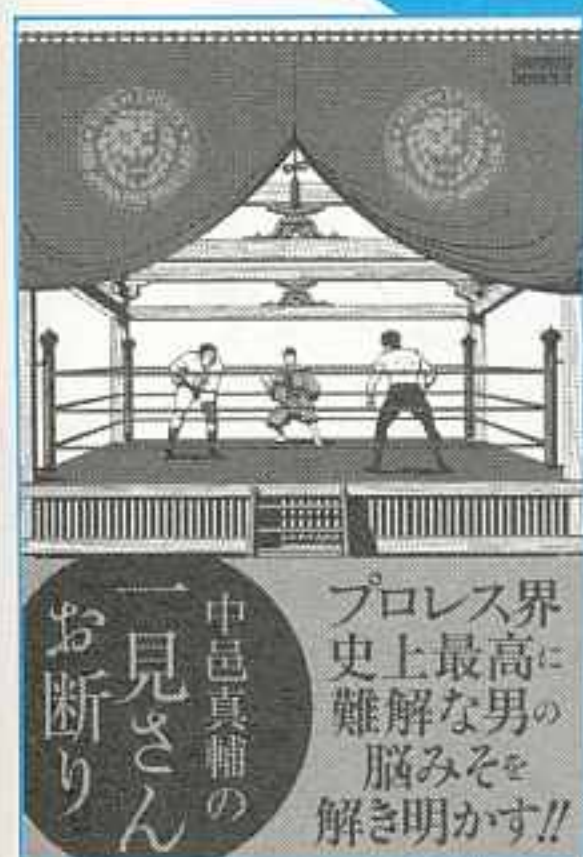
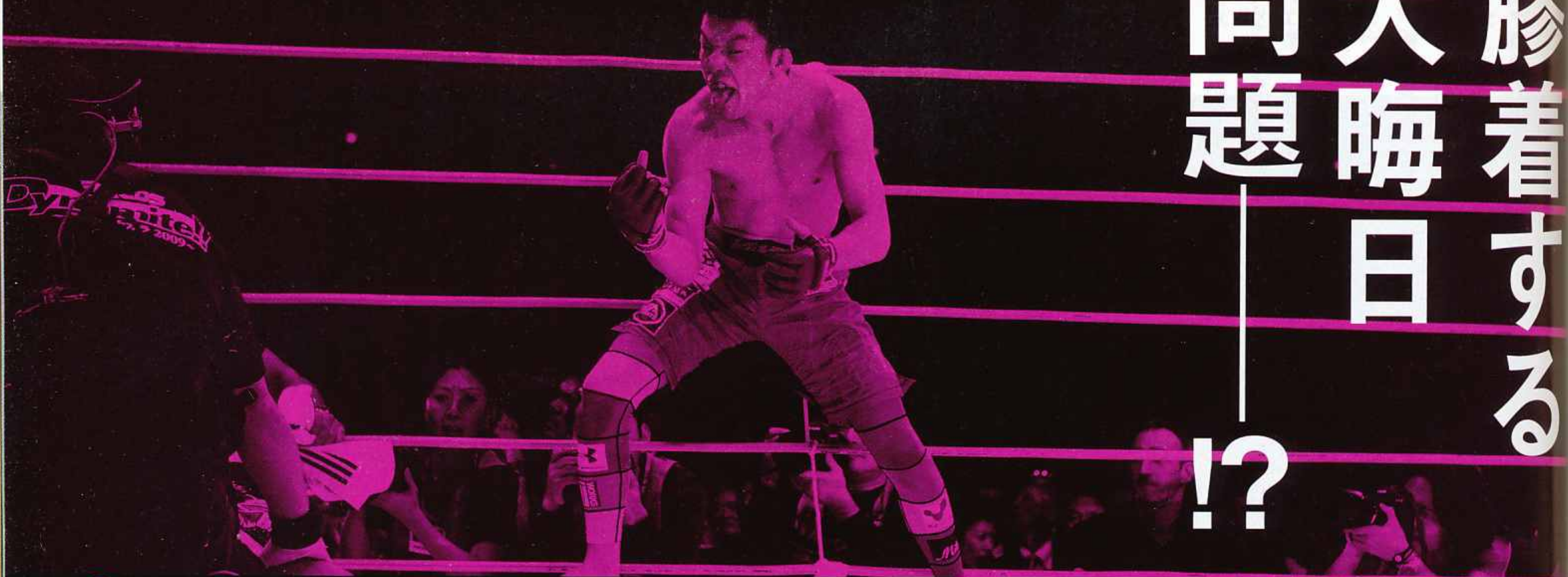
目撃情報が止まらない！

★先日、五反田の駅で深々と帽子をかぶっている岡見勇信選手、吉田善行選手、UFC二人組を目撃しました。なんとなく吉田道場方面に向かっているように見えたのですが、気のせいでしょうか？ とにかく二人とも思ってた以上にデカかったのでビックリしました。
【東京都・戸越銀座さん】

★先日、地下鉄・九段下の駅のホームで元『格闘技通信』編集長の三次さんを目撃しました。チョッキの異名どおり、ちゃんとチョッキを着ていたので笑いました。これからも頑張ってほしいと思います。
【東京都・ベースボールさん】

★『Dynamite!!』の会場に、バナナマンの日村勇紀がいました。ニット帽を深々とかぶって会場内をウロウロしてました。若干変装してるふうでしたが、ほかのお客さんにも相当バレバレっぽかったです。
【埼玉県・しだらさん】

リュウ・トクリ
やっぱりドンキの
商品券くれ！

膠着する大晦日問題——!?

青木真也の次の試合はいったいいつ観られるのか

age 26

——青木さん、ツイッターを始めたみたいですね。

青木　うん。

——誰かに勧められたんですか？

青木　大沢ケンジさん。

——やってみてどうですか？

青木　楽しい。ツイッター、楽しくないですか？

——やってないからわかんないですけど。

青木　やったほうがいいっすよ。

——ファンとコミュニケーションを図れる楽しさもあります？

青木　それもありますね。だったら試しになんか書きますか？　斉藤さんの離婚の危機とか。

——あんまりよけいなことをつぶやかないように。

青木　じゃあ、違うことを書く。「今日、今成さんの誕生日ですね。何かするんですか？」。

——青木さん、元気そうですね。

青木　え？　ボクはいつも元気ですよ。

——いやいや、大晦日の件がいまでも騒ぎになってるじゃないですか。

青木　いや、ボクのなかではそうでもないですよ。直接文句を言ってくる人もあんまりいなかったですし。

——まあ、なかなか面と向かって文句は言えないですよ。

青木　だからそれって結局、陰口じゃないですか。たとえば選手にしろなんにしろ、ブログでは書くけど、誰も直接言ってこないんですよ。

——でも、批評と文句は違うわけですよね。極端なことを言えば、批評は本人に言わなくたっていいわけですし。

青木　そういう意味では、『ｋａｍｉｐｒｏ』の船木（誠勝）さんのインタビューは理解できましたけどね。

——じゃあ、青木さんの中で船木さんは納得できたけど、ほかの記事は納得できてないってことですか？

青木　いや、納得っていうか、結局、後楽園ホールやディファ有明だけで闘っている選手に自分の気持ちは、理解されないだろうなってことです。

——あ〜、それは〝やる側〟の話ですね。

青木　そうです。「どれだけ背負ったり、おまえが耐えられないようなことを自分はしてんだよ」って。

——では、観る側からこれだけ語られることってどう思います？

青木　話題にされるってこと自体は、プロとして素直にありがたいことですけど。

——やる側の選手がブログで書くのと、観る側の人間が語ることを青木さんの中では区別してるということですか。

青木　そう。だから同じ格闘技の業界にいる人たちに対しては「言いたいことがあるんだったら直接言えよ!!」って思いますけど。顔を合わせられる距離でいつも会ってるのに。「おまえ、もうちょっとこうしたほうがいいよ」ってことを北岡（悟）さんとかはボクに言ってくれたわけですから。

——でも、青木さんとあまり関係がない中で、立場上主張しなきゃなんない人もいるわけですよね。たとえば、廣田（瑞人）選手のセコンドについた帯谷（信弘）さんは青木さん本人に言わなくたって、この件についてしゃべらなきゃなんないじゃないですか。

青木　そこはわかりますよ。

——まあ、つまるところ文句を書くにしても書き方の問題ってことですよね。たとえば、ある選手は、青木さんに対して「キ○○イ」っていう言葉を伏せ字なしで書いてましたけど、それって日本では中指を立てること以上にタブーだったりするんですよ。ボクが修斗の偉い人ならプロライセンスの剥奪を検討しますけども。

青木　だから、わかりましたよ、いろいろ。

——何がですか？

青木　社会というものが。

——ちょっと、いい大人が何を言い出してるんですか（笑）。

青木　いやいや、ホントに。やっぱりね、ボクは良い人を演じて生きていけないんですよ。

——いまの青木さんは何をやっても騒がれる立場ですよね。

青木　そうかもしれないですね。

——だからそこは自分を偽れってわけではないですけど、自分を俯瞰して見ることって必要だと思ったりしないですか？「ここはもうちょっと抑えといたほうがいいな」とか。

青木　でも、しょうがないじゃないですか。抑えられないんですから。

——そこは抑えないといけない立場なんじゃないですか？

青木　そう。それはわかります。でも、大晦日のあの状況下では抑えれなかったんです。

——それくらいの極限状態だった、と。

青木　だからこそ素に戻った1月1日に「ごめんなさい」って謝罪したわけです。

——なるほど。

青木　でも、やってしまったことは後悔してないです。もうそこは背負っていくしかないので。そこで後悔するなら、もう格闘技をやめたほうがいいと思うんですよね。そんな甘い覚悟だったら、やめたほうがいいっていうか、後楽園ホールクラスに

戻ったほうがいい。だってボクはプロとして食っているんですから。

――この件について日本格闘競技連盟がいろいろ言ってきてますけど。

青木　どういう組織なのか、ちょっとよくわからないから、なんとも言えませんね。

――業界では"格闘技界のマジェスティック12"と呼ばれるくらいミステリアスな組織ですけども（笑）。あの意見書の直後に、青木さんが所属しているパラエストラ東京から"指導員解雇"という処分が下されましたよね。

青木　中井さんも道場という仕事があるから、そういう意味で処分を出しとかないと示しがつかないですし。今後、「パラエストラ東京という名前を名乗るな」って言われてもそれはしょうがないですし。

――中井さんに迷惑がかかるんだったら処分を受ける、と。

青木　はい。

――DREAMでも処分する、しないっていう問題がありますけど。

青木　どうなるんでしょうね……。ぶっちゃけ、そこは自分の本音は言えないですねぇ。

――それは中井さんと同じで、見え方の問題になるじゃないですか。

青木　う～ん。でも、DREAMに関しては違うと思うんだよなあ。

――まあ、DREAMというプロモーションというか、そこは競技陣の見解になりますけどね。

青木　まぁ、そうですね。

――へんな話、ボクはどっちでもいいと思うんですよ、処分を受けても受けなくても。ただ、一ヵ月以上経ってまだ不透明な状態が続いてるのが一番おかしいことだと思うんですよね。

青木　うん。

――何かしらの決断が下されないことに対して不満はありますか？

青木　全然。自分のなかでは、12月31日に終わっている話ですから。

――でも、何もないままズルズルきちゃってることは青木さんにとってもマイナスですよね。本当は何か区切りが必要というか。パラエストラの件も一応の区切りじゃないですか。

青木　でも、それも含めてすべて過去のことですから。ボクは普通に試合ができて、格闘技ができてればいいんっすよね。結局強くなりたいだけだし。

――次の試合は決まってるんですか？

青木　まったく決まってないけど、早く試合がしたい。3月に試合がしたい。

――でも、3月のDREAM出場はないような雲行きですよね。大晦日の件も決着がついていない状況で、DREAMサイドに青木さんを試合に出しづらいという雰囲気は感じませんか？

青木　う～ん。仮にそうだとしても、それもボクにはよくわからない話ですよね。

――ケガしてるとか、出場停止処分を受けたのならわかるけども。

青木　あと、単純に魅力的なマッチメイクを組みづらいでしょ。

――相手がいないっていうのはあるかもしれないですね。でも、DREAMのクラスの舞台なら、無理矢理出なきゃならないときもあれば、なぜか出れないときもあるわけですよね。

青木　要はイベントありきってことなんですよね。

――それに日本ってメジャーなイベントであるほど、政治的背景が絡むわけじゃないですか。

青木　はいはい。

――アメリカでそういう話はあんまり聞いたことないですよね。「アイツを出すな！」とか口出しするのは。青木さんの今回の件がそうだって言ってるわけじゃないですよ。

青木　難しい話ですけど、ボクはアメリカがいいとか、日本がダメだとかあんまり思わないんですよ。誰かさんみたいに「アメリカ万歳！」する気もないですし。

――それなら、べつに今回の青木さんの件がそうだって言いたいわけじゃないですけど、たとえば政治的事情で試合に出れなくてもしょうがないってことですよね。

青木　しょうがない。いまあるベストをつくすしかない。でも、「俺がどうして出れないんだ」って文句は言いますよ。やっぱり世界レベルで闘ってる自負ありますから。「俺が出なくてどうするだ！」っていう気持ちはありますよ。

――さっき青木さんは「魅力的なマッチメイク」って言いましたけど、それが魅力的なマッチメイクじゃなくても試合に出たいですか？

青木　試合がしたい。それは自分の都合だし、いまボクの気持ちがわかるのは結局自分自身だと思うんですよね。「ほかの人間がこの環境に絶対に耐えられないだろ」っていう。それは自信があります。

――青木さん、サラリーマンできます？

青木　「サラリーマンできます」って、できなかったです。できますじゃなくて、できなかったの！

――だから人それぞれの立ち位置のストレスってあると思うんですけど、いま青木さんは自分が置かれてる環境にストレスはあるんですか？

青木　ストレスはないですよ、正直。スト

DREAMサ
青木真也を試
出しづらいと
雰囲気は感

とにかく試合がしたいんです。格闘技への思いは果てないですから

レスはない。正直、毎日が楽しいんですよ。ストレスはまったくない。

――でも、文句は言う、と。

青木　これはボクのつぶやきみたいなもんですから。

――はたからストレスがあるように見えますけど。

青木　ホントに？

――はい。

青木　う〜ん、どうなんだろ。

――青木さん、27歳でしたっけ？

青木　今年、27歳になります。

――バリバリですね。

青木　まだまだいけるでしょ。メジャーに上がってから、もう4年になるじゃないですか。PRIDEが休止してもう3年になるじゃないですか。

――PRIDEがなくなってから、ず〜っと走り続けてますよね。日本人選手では珍しいケースというか、普通はどこかでバタンと落ちるもんですけど。

青木　そうやって走り続けることはやっぱり楽しいし。試合をやるのが好きだし、やっぱ格闘技が好き。正直、格闘技への思いが果てないんですよ。ホントに果てない。『kamipro』の携帯サイトでやってるコラムを読めばわかると思うんですけど。格闘技に対する愛が伝わるでしょ？

――自分で言いますか（笑）。

青木　ホントに果てないの。とくに強くなることに対して。

――観る側の立場から、勝手なこと言っていいですか？

青木　はい。

――見せ方をいまの3分の2ぐらいにすると、もっと青木真也という個性が伝わるのかなって思うんですよね。

青木　どういうことですか？

――たとえば出番をちょっと減らして、青木真也という個性への飢餓感を煽るということです。

青木　あ〜、なるほどね。

――去年も「大晦日が終わったら7番勝負をやりたい」とか言ってたじゃないですか。7番勝負じゃなくて、4番勝負くらいが観る側にとってはちょうどいいと思うんですよね。

青木　でも、オレは試合がしたいんだよっ！

――そうですか（笑）。

青木　でも、それもわかりますよ。隠して、隠しての小川（直也）さんや、田村（潔司）さんじゃないけど。

――溜めるというかね。

青木　その意見もわかります。でも、ボクは果てないの。単純にこれが好きだし、格闘技が大好きなんですよ。

――たとえば青木さんがプロモーターになって、今年の青木真也をどう売り出すかって考えたら、どうします？

青木　まあ、いろいろな選択があるだろうけどな〜。

――効果的に青木真也の話題を作るとするならば？

青木　単純に青木真也を海外に売り飛ばすのはおもしろいですよね。

――売り飛ばすって（笑）。

青木　青木真也の世界観からしても、メジャーに挑戦したいっていうのはありますよね。いままで日本でトップのまま挑戦する選手っていないでしょ。

――まあ、いまのところ野茂英雄はいないですよね。でも、青木真也個人からすれば、3月に誰でもいいから試合したいということですね。

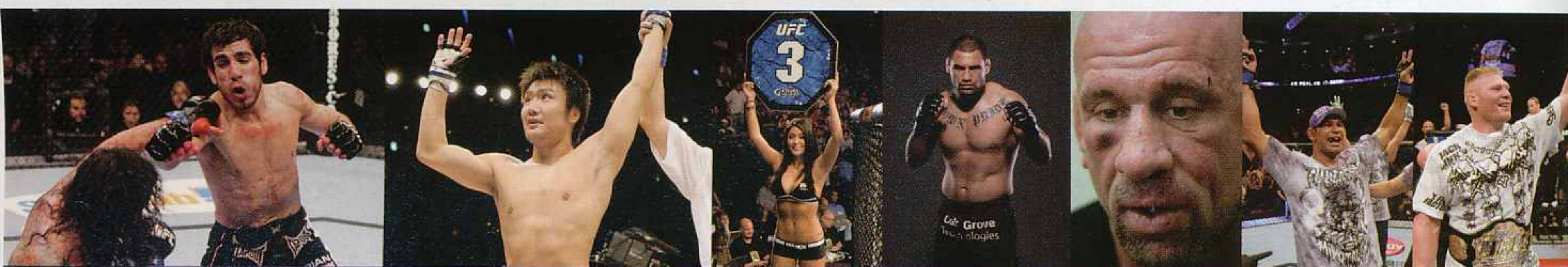
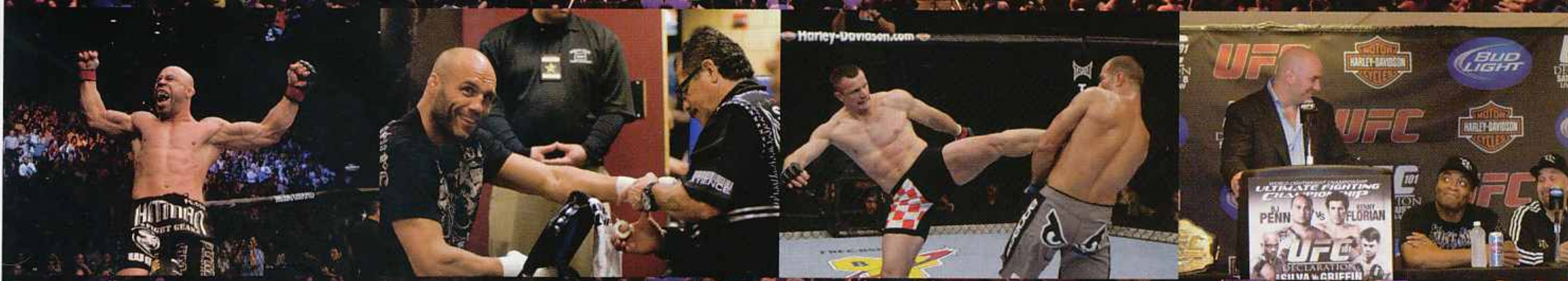
青木　そう。試合したいですね。それが3月の海外挑戦でもいいし。これをビジネスとしてとらえるときに、じゃあローカルのイベントでもいいのかっていう問題とはまた出てきますけど。

――そこらへんは難しいですよね。

青木　難しい、難しい。でも、これは気楽なチャレンジではないし……。

――（さえぎって）そういうこと言うとね、ウチが言わせたとか言われる。

青木　え〜？　ちゃんと載っけてくださいよ！　俺はリスペクトしてますよ！

――（無視して）おつかれさまですっ!!

【10年2月10日／都内某所にて収録】

青木真也問題に潜む政治と解放

DREAMイベントプロデューサー

age 42

笹原圭一

前ページに引き続き、再び青木問題を検証。
青木真也の今年の動きについてはまだ見えない部分が多いが、
DREAMイベントプロデューサー笹原圭一はどう考えているのか？
そのほか大晦日の後遺症や朝青龍問題についても迫った。

聞き手／ジャン斉藤　撮影／菊池茂雄　試合写真／乾真也、DREAM

——もう2月も中旬になりますけど、まだ大晦日の問題が尾を引いてる感じがありますね。
笹原　そうですか？　べつにそんなことないですけどねえ。
——あ、気のせいだと。では、三崎問題も青木騒動も気のせいってことですね。
笹原　気のせいです！（キッパリ）。
——そうですよねぇ。まさか倒れている相手にあんなことをするなんてあるわけがない（笑）。
笹原　……というのは言いすぎですけど、大晦日ってやっぱり大きなイベントなんで、12月31日でピタッと終わるということは絶対にないですよね。
——毎年何かしら事件が起きてますもんね。たとえば佐伯（繁DEEP代表）さんが失恋したり、意見書が届いたり。
笹原　いやいや、佐伯さんは失恋どころか、じつはもてるんですよ！　この前も電話である女性と……って話はどうでもいいですね。その意見書に関しては、正確には我々のところには届いていないですよ。報道で見ましたけど。
——でも真面目な話、三崎問題、青木問題に関しては、ファンからは「どうして主催者側の見解を何も発表しないんだ」という声は上がってますよね。
笹原　三崎問題に関しては、いわゆる選手からの抗議文に対して「こうしました」というのは世間に対してはこれまでも言ってないですよ。たとえばビビアーノvs大塚（隆史）のときにビビアーノからも抗議文がありましたけど、どう対応したかというのは知らないですよね？
——あのイエローカードに対して抗議していた件ですね。
笹原　とはいえ、大晦日って注目を浴びるイベントですし、三崎選手が抗議文を出したというのは会場で発表された話ですから、どのような対応をしたのかを発表しないといけないとは思ってます。
——なるほど。で、もう一つの青木選手の騒動ですけど、これもファンの中では「青木の処分はいつなんだ？」という感じになってます。DREAMとしてはあらためて処分を下すということは？
笹原　ないです。一夜明け会見でもう処分を下しましたもん。プロモーターとして〝厳重注意〟という処分を。
——そのあとに日本格闘競技連盟から意見書が提示されましたが、これを受けてさらに処分を動かすということもない、と。
笹原　「処分に関しては任せます」って書いてあったんですよね。
——ええ。ただ、プロモーターではなく競技陣から何かしらの処分を下すんじゃないかという話は出てますよね？
笹原　それは試合後の行為とはいえリング上で起こったことですから、そこに関して競技的になんらかの処分を下すべきじゃないかというのはありますね。
——それは発表されると思ってよろしいんでしょうか？
笹原　これはべつに逃げるわけではないですけど、競技としてどう捉えるか、ということですから。それこそ、試合後に首をかっ切るポーズもダメなのか、敗者を一切ねぎらわずに喜びを爆発させることもダメなのか、あらためて文章としてルールに盛り込むとなると、簡単じゃないですよ。それこそ単純に「非紳士的行為はまかりならん」っていうことはできますけど、そこまで明確に規定してしまうのは、なんかやりすぎのような気もしますし。まぁ、個人的には、とにかく早くすっきりさせたいとは思ってますけど。
——なんらかの区切りをつける必要はありますよね。
笹原　そういうことです。
——ただ、我々からすると大晦日って一応『SRC』さんと合同でやられたわけじゃないですか。細かい内部状況はわからないですけど、一緒に大会をやったわりには距離のある対応だなという印象なんですよね。
笹原　でも、『SRC』からすれば「あれは日本格闘競技連盟がやったことですから」ってことなんでしょ？
——まあ、ぶっちゃけ『SRC』として意見書を出した印象は強いですよね。
笹原　『SRC』の会見で、『SRC』の方が発表してますから、そう思われますよね。でも、DREAMは日本格闘競技連盟の傘下団体じゃないですから、正直よくわからないですよね。
——確かに、今回の件でもいたずらに問題を複雑化させてる雰囲気がありますもんね。
笹原　……なんか誘導尋問させて、口をすべらせようとしてますけど、ボクは谷川さんじゃないんで、そんな誘いには乗りませんよ（冷たく）。
——まるで谷川さんが毎回、口をすべらせてるかのような言いぐさですねぇ。じゃあ、質問を変えます。笹原さんとしては、このまま『SRC』との交流というのは継

人間関係やテレビ局、そのほか義理人情から解放された青木真也を観たいというのはわかります。

そのストレスが青木のモチベー

続的にやっていこうという意識はあるんですか？

笹原　難しいなあ。個々の選手には魅力を感じますけど、結局誰が『SRC』を背負って闘っているのかというのが見えてこないんですよね。これが吉田道場だったら、中村選手にしろ、瀧本選手にしろ、小見川選手にしろ吉田道場を背負ってる感じはするんで、団体同士で絡むと熱が生まれると思うんですけど。前回は大晦日という大きな舞台だったんで対抗戦が成り立ちましたが、ナンバーシリーズの中ではピンとこないですね。

――とは言っても『SRC』と向き合う中で、青木選手の処分というのは宙ぶらりんじゃないですか。それに伴なって今後のスケジュールもいまいちハッキリしない状況があると思うんですよ。

笹原　確かに次の使いどころは難しいです。まあいろんな事情もありますし、その前にこの1年間青木選手をどうしていくのかというのは考えないといけないですよね。やっぱり青木真也って誰がどう見てもDREAMの顔なわけなんで、単純に試合を組みます、試合をしました、で済まされる選手じゃないんでね。

――いや、もっと政治的な背景があるために出場が難しくなってるところはないんですか？　じつは先ほど青木選手にインタビューしてきたばかりなんですけど、青木さんは3月の大会に出られないことを相当不満に思ってるみたいでした。

笹原　まあ、いろいろと問題がある人ですからねえ。

――んあ～！　それ、おもいきり口をすべらせてますよ！

笹原　本人は「試合をしたい」ってことは、盛んに言ってますから、それはボクも理解してますよ。

――じゃあ、「刺す」……じゃなくて、「干す」ということじゃない、と。

笹原　ほ、干すぅ⁉　そんな言葉使ったことないですよ！

――ただ、やっぱり日本のプロモーションは複雑な局面が凄くあるじゃないですか。

笹原　それは『kamipro』でも盛んに言ってますよね。「青木はもっと自由な立場で闘わせてあげるべきだ」「UFCに行くべきだ」って。一面真理としてはそれもわかります。日本のプロモーションってそれこそUFCと比べると、人間関係やテレビ局、そのほか義理人情に縛られる部分があると思うんで、そういうところから解放された青木真也が観たいというのは意味としてはわかりますよ。

――義理人情に縛られた青木真也も凄くおもしろいですけど。

笹原　それで思い出したのが、桜庭さんが『HERO'S』に移籍したときのことなんですよね。当時榊原（DSE代表）さんが「桜庭和志を見誤った」って盛んに言ってたんですよ。それは何かというと、桜庭和志っていつもPRIDEを背負ってたじゃないですか。いつもメインイベントで楽しくて強い桜庭和志を見せないといけない、それはプロモーターも思っていたし、本人もそう思ってたと思うんですよ。で、ボクらはそれがあたりまえだと思ってたんですけど、桜庭和志にとってはじつはそれが凄く重かった、と。だから、「PRIDEの桜庭和志」ではなく、いちファイターとしてそうした重荷を降ろして闘える『HERO'S』を選んだんじゃないかって。そういう側面が、もしかしたら青木真也にもあるのかもしれないですね。

――ああ、なるほど。

笹原　青木選手と桜庭さんって性格はまったく違うんで比較にならないかもしれないですけど、国内だといろいろ背負わないといけないんだったら、しがらみや背負ってるものがない海外、しかもいま一線級の青木真也が出ていくというのを観てみたいというファンの気持ちもわかりますけどね。

――ただ、海外に出る場合、青木真也は日本のMMAを背負って闘うことになりますね。それはそれで凄い重圧になりますけども……。

笹原　で、斉藤さんも以前言ってましたけど、青木真也って自分の周りが傷ついたり、負けたりしたときにやたら怒るじゃないですか。それこそ修斗で、石田（光洋）選手が廣田選手に負けたときも、メチャクチャ怒ってたじゃないですか。本人の中でナチュラルにスイッチが入ってるのか、あえて自らスイッチを入れてるのかわからないですけど。

――そこで普通だったら「石田選手が負けたのは凄く残念だし、腹が立つけど、その感情を表に出すのはへんだよな」ってなると思うんですけど。でも、青木真也はリングに向かって突進しようとして中井先生に止められる。そこは凄くピュアですし、へんな計算はないですよね。

笹原　青木真也はバッと怒ってしまう。でもバカじゃないんで、どっかで冷静になると思うんですよね。でも、あえて、そういう冷静さに蓋をして、怒りを闘う気持ちにつなげていく。

――だからこそ活字にしてもおもしろいんですよね。いちいちその存在を考えたくなる。

笹原　そこはある種、青木選手のモチベーションの作り方だと思うんですよ。そう思ったほうが練習とか試合に向かっていきやすいっていう。だから、国内がいいとか海外がいいとか、それは一概に言えないと思いますよ。やっぱり、パンツ一丁であのリングに上がるって、どこかで普通じゃない心理状態を作らなくちゃいけないわけですから。

――でも、現実的には海外のほうがしがらみがないですし、日本だとどうしてもマッチメイクが難しいですね。でも、当の本人は3月にでも試合がしたいって言ってますし。

笹原　それはわかります。だっていま26歳でしょ？　そりゃメチャクチャ試合をしたい時期だと思いますよ。もうあと1、2年はそういうモードだと思いますし。これも桜庭さんとの比較になりますけど、桜庭さんが『PRIDE・2』かなんかに出たときに「毎月試合したい」って言ってましたから。たぶん年齢的に同じぐらいで、試合は楽しいし、とにかく身体を動かしたいんでしょうね。

――（唐突に）となると、結論的にはやっぱり国外追放ですかね。

笹原　なんか無理やりまとめてきましたね（笑）。

――ストライクフォースの参戦になりそうですか？

笹原　ストライクフォースもそうですけど、一言に海外と言ってもたくさん格闘技イベントがありますからね。それにいまって世界中から青木真也を観たいという声がありますから。韓国でも韓国ファンが一番観たがってるのも青木真也だっていう話ですし。まあ秋山選手とか国内ファイターは置いといての話だとは思いますけど、やっぱり強い選手を観てみたいということなんでしょうね。だからってベ

そのストレスが青木のモチベーションの作り方だとしたら、一概に海外がいいとも言えない。

つに青木選手が韓国大会に出るというわけじゃないですけど、そういう海外の待望論があるということですよ。

——なるべく早い結論を期待してます！ 話は変わりますが、吉田秀彦引退興行アストラの開催が発表されましたが、DREAMとしてはイベントには協力するんでしょうか？ 桜庭選手にオファーが来てるんじゃないかという話もありますし。

笹原 うーん、会見ではそういう話も上がっていたみたいですけど、実際はないんじゃないですか？ もちろんボクらにやれることがあれば、もちろんやりましょうという感じですし。ただ、吉田道場とボクらってべつに剣呑な空気があるわけじゃないんですけど、でも吉田さんの引退試合をDREAMでやるってなると話が別ですし、イベントをお手伝いするにしても選手を出すにしても先のことを考えてやらないとなとは思ってます。お互いに何か還元されなきゃいけないって意味で。

——ただ一方でFEGさんは『SRC』と向き合ってるじゃないですか。『SRC』とアストラの関係性は非常に微妙。そこは三角関係になっちゃいますよね。

笹原 そうですね。まあその三者の中でたぶんコンセンサスがとれているのは、「闘っている選手はべつに関係ないでしょ」ってことでしょうねぇ。でも、もちろん吉田さんの引退試合は成功してもらいたいと思ってます。だって国立競技場でデビューした選手が寂しく引退するのは、吉田選手にとっても当然よくないし、格闘技界にとってもよくないですよ。だからホントに盛り上がるように手伝えることがあればやりたいと思いますけどね。

——あと気になることといえば朝青龍さんですけど、格闘技界にくる予定はあるんでしょうか？ ……って、非常に素人じみた質問ですけど(笑)。笹原さんはスポーツ紙で、さも興味があるかのようなコメントをしてましたよね。

笹原 いやいや、だってそう答えざるをえないですよ！「いちアスリートとして朝青龍は凄い選手だと思います。でも本人が何も言ってないウチから、こっちがどうこうするわけにはいかないですよね」ってことしか言えないですよ。それは無邪気に「朝青龍取りにいきますよ！」なんて軽々しく言えないですよ。

——そもそもどうして角界を追い出されたのかって話をすれば、迂闊に手は伸ばせないですよねぇ……。

笹原 だから日テレから「テレビに出てコメントしてください」って話が来ましたけど、断りましたよ。

——あ、ボクもテレビ局からきました。時間が合わなかったんで出ませんでしたけど、「朝青龍？ ズバリ言って、まったく通用しねえですから!!」って冷や水ぶっかけてやろうかと思いましたけど(笑)。

笹原 ハハハハ！ 。だから、話題としてはいいかもしれないですけど、現実的じゃないですよねぇ。だって本人が格闘技やめたいからやめますという話じゃないですし、石井（慧）選手みたいに本人が総合をやりたいと言って突き進んでる感じでもないですもんね。

——あのとき石井選手は大学生でしたし、けっこう身軽でしたよね。朝青龍なんて本人にたどり着くまで何人に話を通さないといけないんだって話で(笑)。

笹原 だからいまはこちらも静観してるという感じです。世間の注目を集めることは確かにやらないといけないことだとは思いますけど、それとともにちゃんとしたこともやっておかないとダメじゃないですか。今年はDREAMの中でちゃんとベルトを磨いていきたいという思いもありますし。

——そのDREAMですが、3月のカード発表はその後どういう感じなんでしょうか？ なんか第一弾のビアーノvsヨアキムは珍しく早かったですけど。笹原さんのブログでは「今週中には発表する」とは書いてありましたけど、まったく動く気配がないですね。

笹原 まあねえ、もちろん決まってるカードもあるんですけど、まとめて発表したいというのがあるので、それ以来更新できてないんですよねえ。

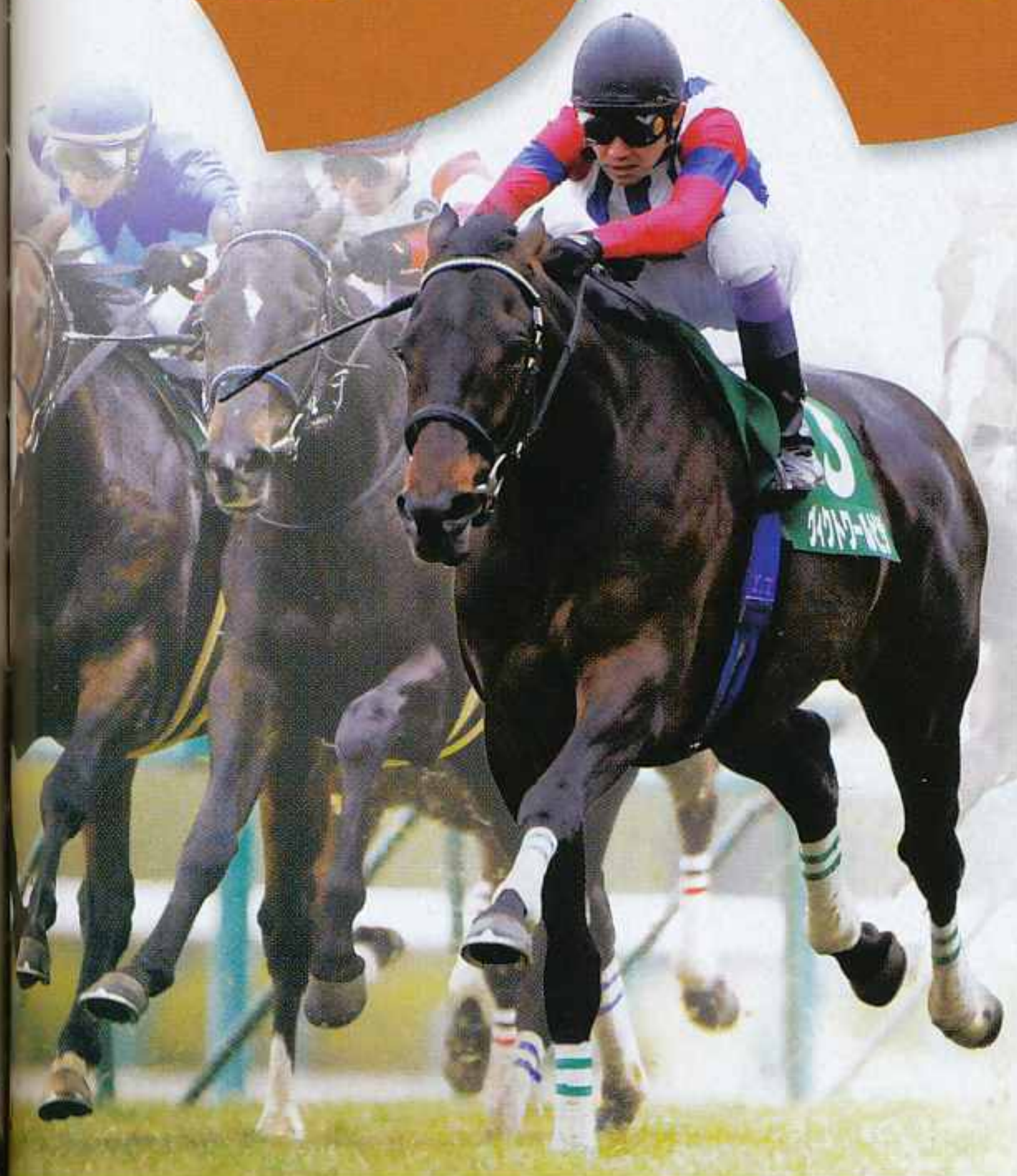
——せっかくのロケットスタートだったのに。

笹原 勢いよくスタートしたと思ったら、おもいっきりコケてしまって、いまようやくヒザの砂を振り払ったぐらいの感じですかねえ～。

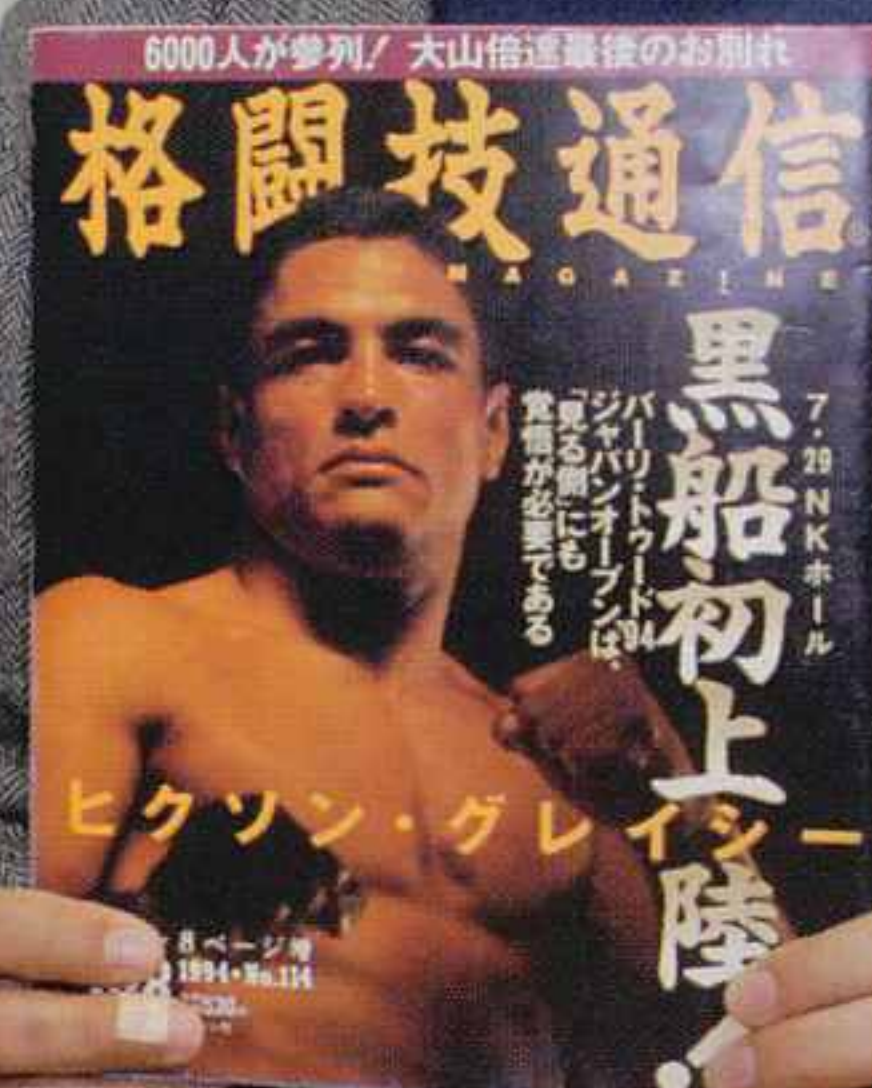
——要するに、いつもどおりのペースってことですか。

笹原 （無視して）長南選手のカードも期待してほしいですし、ヨアキムだけじゃなく、もう一つ階級を越えた挑戦がありますからね！ そのほかバンバン期待のカードを発表していきますから！ 楽しみにしててください!!

——では、来週（＝DREAM時間では来月）中の発表を期待しております。

【10年2月10日／都内・リアルエンターテインメントにて収録】

サダハルンバとクマクマンボが美しき90年代を語る!

「え!? そうなの?」

「谷川さんはライバルでした!」

麗しの『格闘技通信』対談!

谷川貞治×熊久保英幸

age 48 (元『格闘技通信』編集長)

age 42 (元『ゴング格闘技』編集長)

『格闘技通信』休刊のニュースを受けて、元『格通』編集長・サダハルンバと元『ゴン格』編集長・クマクマンボが集合～っ! 『格通』休刊を惜しむとともに、格闘技というジャンルが生まれた90年代の美しき思い出を語ってもらった。サダハルンバとクマクマンボの不思議な関係についても直撃!

聞き手／ジャン斉藤

谷川　うわっ。この石井（和義）館長、若いなあ。これいつの？（『ゴング格闘技』67号を見ながら）。

熊久保　たしか12～13年前の『ゴン格』ですね。ちなみに、谷川さんが着てる鎧の衣装代、3万円もかかったんですからね！

谷川　……じゃ、館長は45歳くらいかあ。

熊久保　あっ、聞いてない！

――え～、初っぱなからまったく噛み合ってないですが、今日はそんなお二人に休刊が噂される『格闘技通信』のよき思い出をいろいろと語っていただきます。

熊久保　元『格通』編集長の谷川さんと、元『ゴン格』編集長のボクで語るというわけですね。

谷川　ふーん。でもさ、『格通』の休刊って結局正式には発表してないじゃん。『ゴン格』が勝手にやってるだけで。

――そうなんですよ。というか、熊久保さんって『ゴン格』の『格通』休刊座談会にちゃっかり出席されてませんでしたっけ？

谷川　そうだよ、ヒドイよ。なんであんな座談会やったの？

熊久保　ボクは『ゴン格』の編集部に呼ばれただけですから（笑）。というか、ちゃんとしたソースがあったので次号の『格通』で発表されるんだろう、と思っていたんですけれどね……。

谷川　あれ、ヘタしたら訴えられちゃうでしょ。

――そういう谷川さんも『ゴン格』で『格通』休刊に関するインタビュー受けてませんでしたっけ？

な、なんとザダハルンバが鎧姿で『ゴング格闘技』の表紙を飾っている67号。「道行く人が緒形拳と間違えてるみたいだよぉ」とサダハルンバもご機嫌の巻頭カラーである。

谷川　ボ、ボクぅ？　ボクはちゃんと「ホントに出してもいいの？」って聞いたもん！　そしたら「いや、もう今号で発表されるはずです」って。

――熊久保さんと同じじゃないですか！　よし、訴えられろ（笑）。

谷川　もしかして、いまだに『格通』からインタビュー依頼がないのは、『ゴン格』でベラベラしゃべったせいかなあ……。

――谷川さんが載ってるかどうか、『格通』最終号が楽しみだ（笑）。

谷川　しかし、いまの『ゴン格』ってさ、そういうミスが多いよね。話を通さずに魔裟斗くんの写真集を出したりさ。

――それも凄い話ですよね（笑）。

谷川　なんか魔裟斗くんのマネージャーが真剣に怒ってたよ。「これって怒ってあたりまえですよね？」って。

――それで今回『ゴン格』がああいうかたちで『格通』休刊を抜いちゃいましたけど、もともと『格通』と『ゴン格』って仲悪かったんですか？

谷川　うん、悪かった！（キッパリ）。

熊久保　うそお!?　そんなに仲悪くなかったでしょ？

――でも、当時の谷川さんは「『ゴン格』なんて眼中にない」って語ってましたよ。

谷川　いや、眼中にないということはないんだけど、ボクはやっぱり『週プロ』コンプレックスのほうがもの凄くあったからね。で、『ゴン格』はクマクマンボの前にコンちゃん（近藤隆夫）が編集長をしてたんだけど、『ゴング格闘技』なのにシークとか大仁田厚とかを載せてたからさ。「何してんだ!?」って思ってた。

熊久保　し、失礼な！　だって、当時はプロレスと格闘技がまだゴチャゴチャしてた時代だったじゃないですか。

――クックック。一方、熊久保さんは当時の『格通』をどうご覧になってたんですか？

熊久保　ボクはもう谷川さんに対するライバル心むき出しでしたよ！　おもいっきり谷川さんにコンプレックス持ってましたから。

谷川　あ、そうなの？　へえ～（興味なさそうに）。

熊久保　そりゃ、そうですよ。やっぱり『格闘技通信』というのは当時、もの凄いブランドで、選手を取材しても「『格通』の記者の方ですか？」とか必ず言われたんですから。だからね、ボクの原動力はもう谷川さんに対する妬み、ひがみ、嫉妬でした！

――イヤな原動力（笑）。

熊久保　で、あるとき女の子が谷川さんにサインを求めに来たことがあったんですけど、そしたら谷川さんが「照れるなあ」なんて言いながら、ちゃっかり「8日と23日は『格通』の日」って書いてたんですよね。もう、サインになんて書くかまで決めてるんですよ！（ドン）。

ボクが『ゴン格』に嫉妬したのは大山倍達総裁と仲がよかったこと

谷川　ウフフフ。でもねボクも『ゴン格』に嫉妬したところもありましたよ。それはね、舟木（昭太郎）さんと大山倍達総裁が凄く仲がよかったことなんだよね。『格通』の初代編集長は杉山頴男さんという方で、杉山さんは世間的なバランスが凄くいい方なんだけど、格闘技が特別に好きな方ではなかったんだよ。

――『週プロ』の初代編集長も杉山さんですけど、プロレスもそんなに好きじゃなかったという話ですもんね。

谷川　だから大山倍達とか極真に対する愛情がないんだよね。そうするとそこは舟木さんが一人で独占してたんで、ボクらには凄く敷居が高かったんですよ。だからボク、大山倍達に会うのには凄く苦労したんですよね。

――『格通』というブランドがありながら、それでも大変だった、と。

谷川　うん。でもボクは個人的に極真とか黒崎健時先生とか大好きだったんで、それを独占してる『ゴン格』にはジェラシーがありました。

熊久保　確かにボクの記憶だと『格通』に大山総裁のインタビューが載ったのって2回ぐらいしかなかったですもんね。

谷川　それに仲良くなったなあと思ったら、また嫌われたりしてたんだよ。杉山さんなんかは東孝塾長とか、石井（和義）館長とか、すぐ新しいものに走りだしちゃったからね。その頃、ちょうどフルコンブーム（フルコンタクト空手＝直接打撃制の空手）だったし。

熊久保　やっぱり大山総裁が極真を辞めた弟子たちを快く思ってなかったというのはあって、最初に『ゴン格』が正道会館の大会レポートを載せたときももの凄い抗議が来たそうです。

――大会レポートだけで!?

谷川　逆に言うと『格通』はそれを表紙にしてたから本気で怒られてたんだよねぇ。個人の趣味嗜好としては大山総裁と話したいなあと思ってたんだけど。

熊久保　そういえば、佐竹雅昭と松井館長を表紙にして「こんな時代を待っていた！」みたいなコピーを打ってたこともありましたよね？

谷川　あった、あった。そのときはね、「誰もこんな時代待ってない！」って殴り込みに来られたんだよ！

――ダハハハ！

谷川　名前を聞いたらみんなわかるぐらいの極真の凄い人たちが5人ぐらいベースボール・マガジン社に殴り込みに来たからね。

熊久保　それは誰が対応したんですか？

谷川　ボク一人で対応しましたよ。「こんな時代は待ってなかったんでしょうか……」とか言いながら。そしたら「冗談じゃない、取材拒否だ！」ってことになったんだよね。まあ一応、

プロレスの扱いに関してはいつも上層部とのせめぎ合いでしたよ

大山総裁宛てに詫び状を書いて送ったんだけど。だけど、智弥子夫人や三女の喜久子さんが、「総裁はあのお詫び状を大事にしてたんですよ」って言って取ってあるらしいんだよ。「ボクはこんなに極真が好きです、でもこんなことしてごめんなさい」という詫び状が。

――谷川さんっていまとやってることが変わらないです（笑）。

熊久保　でも、当時の『ゴン格』は『ゴン格』でほかの団体とトラブルがあったりしましたからね。K－1とか。一時期凄く攻撃してたから。

谷川　ああ。でもあれってなんで攻撃してたんだっけ？

熊久保　すべて対『格通』対策ですよ！　『格通』はK－1を大特集してたじゃないですか。

谷川　そうなんだ。そういえば『ゴン格』はUFCとかもボロクソに批判してたもんね。「あんな殺し合いに文化はない」みたいな感じで。

熊久保　だから『ゴン格』としてはとにかく反『格通』しかなかったんですよね。だって『格通』はいち早く隔週になったじゃないですか。だから『ゴン格』に試合レポートを載せてももう売りにならない。そうなると「『格通』の考えは間違ってる」というふうに煽るしかなかったんですよ。

――なるほどねえ。でも編集者同士、会えば普通に話をするような関係だったんですね？

熊久保　一応。でも、ボクは全然普通に「チックショー」と思ってましたよ！

谷川　そんなに恨まれてたんだなあ。でも、ボクが辞めてから『格通』もずいぶん変わっちゃったよね？

熊久保　そうなんですよねえ。だから、不思議と谷川『格通』のときほどジェラシーはなかったんですよねえ。

――しかも、その時期は熊久保さんもリングスの解説をやったりして凄く活躍されてましたもんね。

谷川　あっ、あれは悔しかったなあ！

熊久保　フフフ。でも谷川さんがリングスの解説辞めたのは、リングスと『格通』の関係が悪くなったからじゃないんですか？

谷川　いやいや、そんなことで前田さんは辞めさせたりしなかったですよ。前田日明に怒られたのは、たしか安西（伸一）さんがリングスのことをへんなふうに書いたからなんだよね。安西さんは前田さんに首つかまれて空中に浮いてたんだけど。

――いまやアンザイ・グレイシーはヒマワリに囲まれてますけど（笑）。

谷川　でも、それ以前に上司だったターザン山本さんに「解説者を辞めろ」って言われたんだよ。だから市瀬（英俊・『週プロ』記者）くんもJWPの解説をやってたんだけど、それも山本さんは辞めさせたもんね。あれ、ホントに突然言われたことだったし、理由もよくわからなかったなあ。

――それってたしか「オレより目立つな」みたいな凄くチンケな理由だったと聞いたことがありますよ。『kamipro』に谷川さんが準レギュラーみたいな感じで出てたときも、「もう谷川は一切出すな！」って凄い怒ってたこともあったみたいですし。

谷川　そうなの？　なんかボクと市瀬くんが一緒に会議室に呼ばれて、「そういうかたちで一つの団体に肩入れするのはよくない！」みたいな感じで言われたんだよなあ。

――「おまえにだけは言われたくない」って感じですね（笑）。ということは、ターザンのおかげで熊久保さんにおはちが回ってきた、と。

熊久保　あのときは「よし！」と思いましたよ。これで雑誌の売り上げも倍増だ！　って（笑）。

谷川　『ゴン格』はやっぱりリングスの取り上げ方もうまかったよね。そこは『格通』はめっちゃ中途半端だったんだよ。

――確かに、90年代ってプロレスと格闘技をどう扱っていくかというのは非常に難しかったですよね。

谷川　編集部内でもどうするのかまとまってなかったからね。でも、ボクはリングスに関しても個人的には「いいじゃんか」って感じだったんだけど。前田さんのやりたいこともわかってるし、リングスに出てた外国人選手なんかは大好きだったからね。

――オランダ幻想を作ってたのは『格通』でしたもんね。その点、『ゴン格』はプロレスの扱い方には困りませんでした？

熊久保　それはいつも上層部とのせめぎ合いでしたよ。とにかく社内の人間は「『ゴング』＝プロレス」というイメージだったから、「『ゴン格』でもプロレスを載せるべきだ」という考えだったんですよね。でも、ボクとしてはすぐにでも排除したかったんですよ。もともと当時の格闘技というのはプロレスに対するコンプレックスが凄くありましたから。で、そういう思いは団体なんかにもあって、たとえば全盛時のロブ・カーマンにプロレスラーとの異種格闘技戦をやらせて、ロブ・カーマンが勝ったら「やっぱりプロレスは弱い」とか、けっこうそういうことってあったじゃないですか。高田延彦になんの話もせずに勝手に高田vsモーリス・スミスを発表して、高田が試合に来ないから不戦勝とかいうのもありましたし。

谷川　ああ、あったねえ。佐竹雅昭vs前田日明みたいなのもあったもんね。

熊久保　だから格闘技側の全員がプロレスにコンプレックス持ってた時代だったんですよ。しかもボクらの会社にはプロレス雑誌があったから、またその関係が凄く微妙だったんですよね。

谷川　そこは『格通』も同じですよ。同じ会社で『週プロ』があったわけだから、あんまりプロレスを否定できなかったんだよね。……でも、いま

大山総裁のインタビューも2回ほどしか載ってなかったという『格通』。しかし、極真がある一方で、『格通』がK-1などの新しい格闘技をダイナミックに取り上げていなければ、いまの格闘技界はなかったのだ。

リングスの解説をはじめ、何かにつけて「谷川、それはダメだ！」と上司風を吹かせていたベーマガ時代のターザン山本さん。『週プロ』時代は業界トップの編集者として鳴らしたが、現在は家を競売にかけられたとかで大変な運命をたどっている。

谷川貞治

ボクは半分ネットの人間ですけど

熊久保英幸 谷川貞治

考えたらプロレスに対する批判は山本さんが一番やってたんだけどなあ。

熊久保 ワハハハハ！ でも90年代の雑誌に熱があったのって、やっぱり「打倒プロレス」を掲げてやってたというのも少なからずあると思いますよ。あと当時の格闘技雑誌の編集長って、なんか大会がある前に出させられたというか、実行委員会に加わらないといけませんでしたよね。

谷川 そうそう、ボクらも記事を作らないといけないから、編集者がおもいっきりイベントに肩入れしてた時代だよね。山田（英司・元『フルコンタクトKARATE』編集長）さんでさえそうだったもん。佐竹vsニール戦も山田さんがやったようなもんだしね。

――じつはヒクソンを日本に呼んだのも山田さんなんですよね。

谷川 そうそう。ヒクソンも山田さんみたいなもんだよ。でも、山田さんは記事に反映させてないよ、まったく。個人的な趣味というかさぁ。

熊久保 あの人はプロレス憎しでしょ、絶対。

――個人の趣味で業界を動かしてましたか（笑）。そこらへん『格通』はちゃんとやってましたよね。

熊久保 だってあげくのはてには谷川さんなんて「格通主催興行」とかいって、自分の地元で興行やってましたからね。

谷川 そうそうそう。立嶋篤史の試合をやったなあ。あとK−1のチケットが『格通』の電話予約だけで5000枚売れた時代だったんだよね。

――5000枚！（笑）。あまりの反響の大きさにベースボール・マガジン社に新部署ができたんですよね？

谷川 そうそう。事業部ができた。でも、『格闘技通信』が創刊したときに会社の人たちは「絶対に失敗する」って言ってたんだけどね。完全に「空手雑誌」とかだったらよかったんだけど、「格闘技なんて世の中にない！」って言われてたんだから。ベースボール・マガジン社って典型的なクラスマガジン出版社だからね。だからごちゃ混ぜな雑誌は絶対に失敗するって言われてたんだよ。でも、みんなが反対している中で杉山さんだけは「プロレスファンの3人に一人は買うよ」って言ってたんだよね。だからその部数だけ刷ってたんですよ。

熊久保 なるほどなあ。その時代の『格通』を購入していたボクは、杉山さんの理論に見事にはまったというわけか（笑）。

谷川 でも、それはK−1やPRIDEが生まれる前だから心配するのもわかるし、でも逆に成功したのは「打倒プロレス」の時代であり、格闘技というジャンルが生まれる一番おもしろい時代だったからだろうね。

熊久保 テレビもないしネットもケータイもない時代だったから、格闘技雑誌しか伝えるものがなかったんですよね。当時の記者ってみんな格闘技が相当好きだったと思いますよ。地方の空手の大会なんかもちゃんと追ってましたし、一大会に何人も来て記者席も常に満員でしたもん。

谷川 試合観たあと、みんなで養老乃瀧かなんかで「おまえの雑誌はダメだ！」みたいなことを朝まで語り合ってたもんね。あと、みんなで一緒に全日本キックの立嶋篤史の試合を観にタイまで行ったりとかで。

熊久保 ああーっ！ それで思い出した！ そのタイに行ったときにみんなで中華料理を食いに行ったんですよ。で、谷川さんは「みんな、今日はボクのおごりだ！」って言ってご機嫌だったんですけど、いざ支払いになったときに谷川さんが「あれ～、お金ないや～」って。

谷川 あれ～、そんなことあったけ～？

熊久保 そのときに、みんな店の外で待ってたんですけど、ボクだけ谷川さんのそばにいたから「熊久保くん、悪いけど立て替えといてくれる？」って言われてボクが支払ったんですよ。で、お店を出ると、当然みんな谷川さんが払ったと思ってるから「谷川さん、ごちそうさまでした！」って頭下げるんですけど、じつはそのお金、いまだに返してもらってないんです！

谷川 あ、ほんとお!?

熊久保 あげくのはてに、みんなでホテルのプールに入って遊んでたんですけど、そのとき立嶋選手がいてね、ボクと歳が近いというのもあったと思うんですけど、ボクに絡んでくるんですよ。口に水を含んでブーっと吹いてきたりして。そしたら、それを谷川さんが写真に撮って「立嶋選手にいじめられる熊久保編集長」って『格通』に載せたんですよ！

谷川 ウフフフフ、おもしろかったねえ。でもいま思うと、山本さんはそういうことに対しても凄く怒ってた気がするなあ。山田さんとか熊久保さんと仲良くしてると「なんで仲良くしてるんだ！」って。で、あとで市瀬くんとかに聞いてみると、やっぱりほかの媒体としゃべっちゃいけなかったって言ってたもん。だから『週プロ』の人だけは記者席にいなかったよね。

熊久保 ああ、みんなバラバラなところにいましたね。

谷川 でも、安西さんはGK（金沢克彦・元『ゴング』編集長）と凄く仲がよかったんだよ。で、ある日、安西さんが大仁田の電流爆破マッチを観に行ったときに、観衆に押されて足を骨折したことがあったんだよね。

――詳しいことはその模様をなぜかレポートした『週プロ』を読んでもらいたいですが、簡単に言うと、足が引っかかって客席から真っ逆さまの宙づり状態になったんですよね（笑）。

谷川 笑えるよねえ。それで入院することになったからってボクはすぐお見舞いに行っただけど、そしたらGKとか小佐野さんはお見舞いに来てたんだけど、ベースボール・マガジン社の人間は誰一人来てないんだよお。

熊久保 ヒドイ会社！

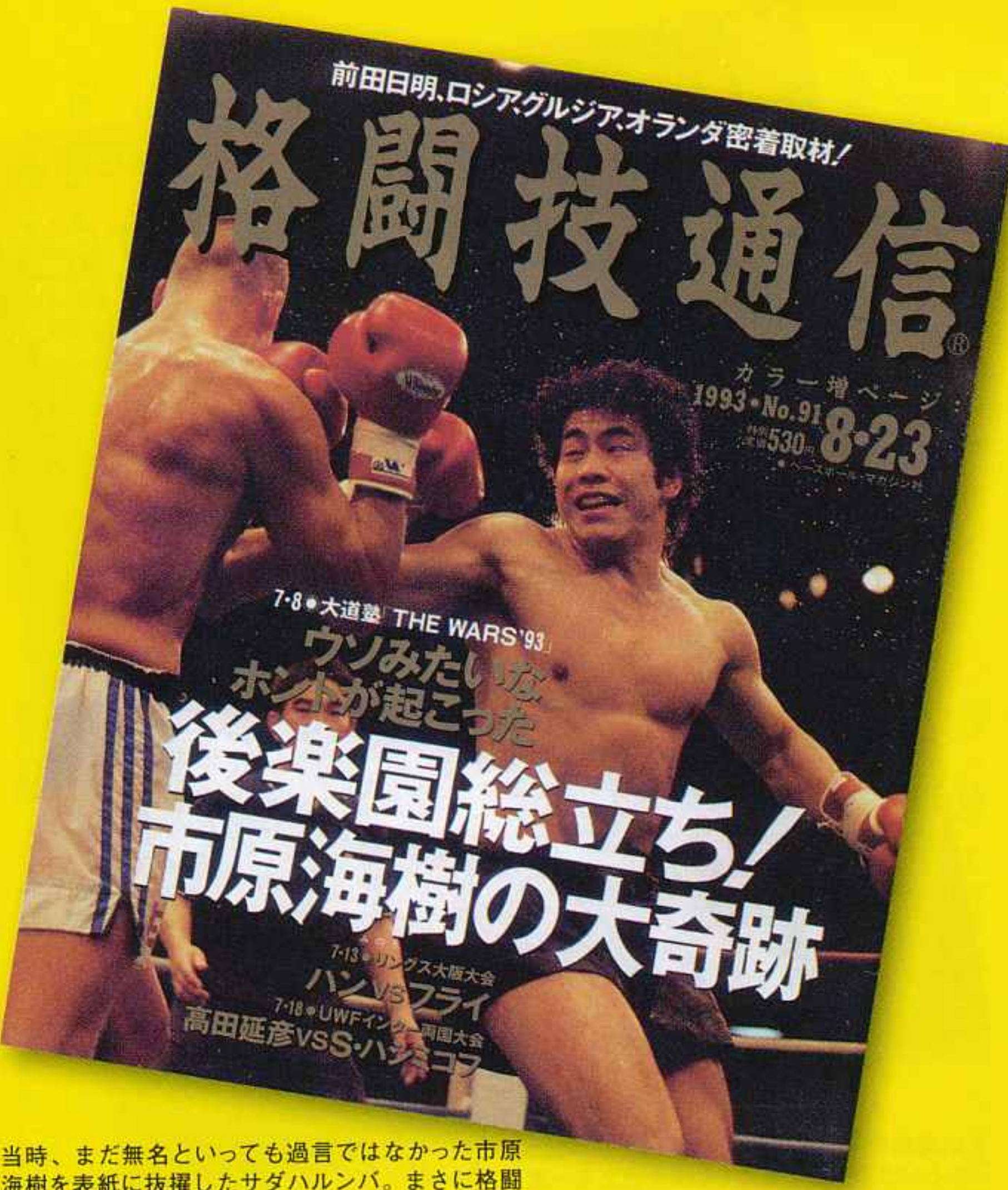
当時、まだ無名といっても過言ではなかった市原海樹を表紙に抜擢したサダハルンバ。まさに格闘技というジャンルが生まれる時代だった当時、市原もそういった格闘家を象徴する一人だったのだ。

『格通』編集長を辞めたあと、『SRS−DX』の編集長を務めたサダハルンバ。クマクマンボいわく、サダハルンバなきあとの『格通』にはライバル心はなかったというが、逆に『格通』が『SRS−DX』を意識していたというからなかなか複雑な業界である。

谷川 で、外科の入院だから隣のベ

グが死んだときが一番売れたし。

――不謹慎ですけど、反響は大きい

なったしたんだけど。

熊久保 まあ、ボクもウェブマガジ

谷川　で、外科の入院だから隣のベッドにはトラック野郎みたいな人たちがいたんだけど、安西さん宛に「藤波辰巳より」とかいう花がくるもんだから、みんな「誰なんだ、この青年は？」って一目置いてたんだよ（笑）。

——そういう記者間のコミュニケーションが希薄になったのは、やっぱりターザンのせいなんですか？

熊久保　それはわからないけど、でもやっぱり谷川さんが辞めてから飲み会もそこまでなくなったし、雑誌自体も変わりましたよね。朝岡さんは「ノー・フェイク」だし、本多さんは修斗押しだし。でもボクが谷川『格通』が凄いと思ったのは、やっぱり市原海樹とかを平気で表紙にしてたことですよね。当時は市原海樹なんてマニアックな存在だった頃ですよ！

——当時、市原海樹は無名でしたけど、どこか当時の格闘技を象徴するような雰囲気がありました。

熊久保　ホントに無名だったんですから。でもちゃんと売れちゃうんですよねえ。あれは一番印象的な表紙ですよ。

——ちなみに、谷川さんの一番印象的な表紙はなんですか？

谷川　自分がやったのは全然覚えてないなあ。コピーで言えば、杉山さんが作った前田日明表紙の「この指止まれ」とか、これも杉山さんだけど姿三四郎を表紙にしたのは斬新だなあと思ったり。まあ自分で作ったヤツだと、言われてみれば市原海樹表紙のあの顔は好きだなあと思うぐらいかなあ。でも、一番売れたのはおそらく大山総裁が亡くなったときの号だね。『SRS−DX』でもアンディ・フグが死んだときが一番売れたし。

ボクは半分ネットの人間ですけどやっぱり雑誌は取っておきたい

団体にとっても雑誌の評価がブランドになると一番いいしね

たにかわ・さだはる■1961年9月27日、愛知県出身。元『格闘技通信』編集長であり、その後『SRS-DX』編集長時にK-1イベントプロデューサーに就任。『格通』編集長時代はほかの記者から嫉妬されるほど読者人気があり、"黒魔術"で株を落とし気味だった最近も、ツイッターという武器を得て人気を取り戻しつつある。

くまくぼ・ひでゆき■1967年6月23日、東京都出身。元『ゴング格闘技』編集長であり、現在は格闘技WEBマガジン『GBR』の編集長を務める。谷川『格通』には嫉妬の嵐だったが、最近は『kamipro』で女子格ファイターとデレデレな対談を展開し、各方面で非難ごうごうだという噂もあったりなかったり。

谷川貞治

——不謹慎ですけど、反響は大きいですよね。そういう時代がありつつ、今回『格闘技通信』が休刊ということになりました。

谷川　残念の一言だよね。というか、『kamipro』は大丈夫なの？

——うーん、いつどうなるかはわからないです（笑）。

谷川　みんなそんな感じだよねえ。でも、さっきの話じゃないけど『ゴン格』なんて反『格通』で作ってた時代があったじゃない。だから雑誌なんてホントにたくさんあったほうがいいんだよね。

——まあ雑誌だけじゃなくて、いまは世の中自体が大変ですもんね。

谷川　K−1もそうだよ。K−1だってテレビの煽りも受けててさ、今年もフジとTBSで放送するんだけど、やっぱり両局で言われたのは「いまの時代であれだけの視聴率が獲れたのは大健闘されてます。だたこんな時代なんで放映権料は安くしてください」ってことだもんね。

熊久保　数字を獲ってもダメになる時代なんですねえ。

——でもFEGさんもそうですけど、団体側がホームページや『YouTube』などで発信してるから、正直雑誌に頼らなくてもいい時代ではありますよね。

谷川　いやいや、やっぱりないとダメですよ。やっぱり客観的な目もさることながら、それがブランドになってると一番いいしね。だからボク、一時期スポーツ誌の一面を取るのもの凄い燃えたもん。HIROYAで一面取ったり、なぜか立川で一面になったしたんだけど。

熊久保　まあ、ボクもウェブマガジン『GBR』なんで半分ネットの人間ですからね。でもネットは見て終わりじゃないですか。その点、雑誌って取っておきたいんですよね。

谷川　そうそう。ボクもいまだに好きな雑誌は残してる。

熊久保　だから、ブログとかツイッターとかに夢中になってる選手や関係者も、雑誌に載るとやっぱり嬉しいと思いますよ。

谷川　だから雑誌もなんか方法論を変えないといけないんだろうね。でもさ、つい最近本屋さんに行ったんだけど、雑誌ってもの凄い種類が出てるよ。とくに女性ものっていま凄くない？

——女性誌って付録が凄いですし、それ目当てで買う人も多いらしいですからね。

谷川　だったら格闘技雑誌もおまけつけようよお！　エコバッグとかも使うだろうし、いまだったらしるこサンドつけてもいいと思うよ。

熊久保　ぜんぜん格闘技に関係ないじゃないですか（笑）。

谷川　（聞かずに）あと、節分の月には太巻きとかね！

——だったらK−1チケットの付録に太巻きつけたらどうですか？

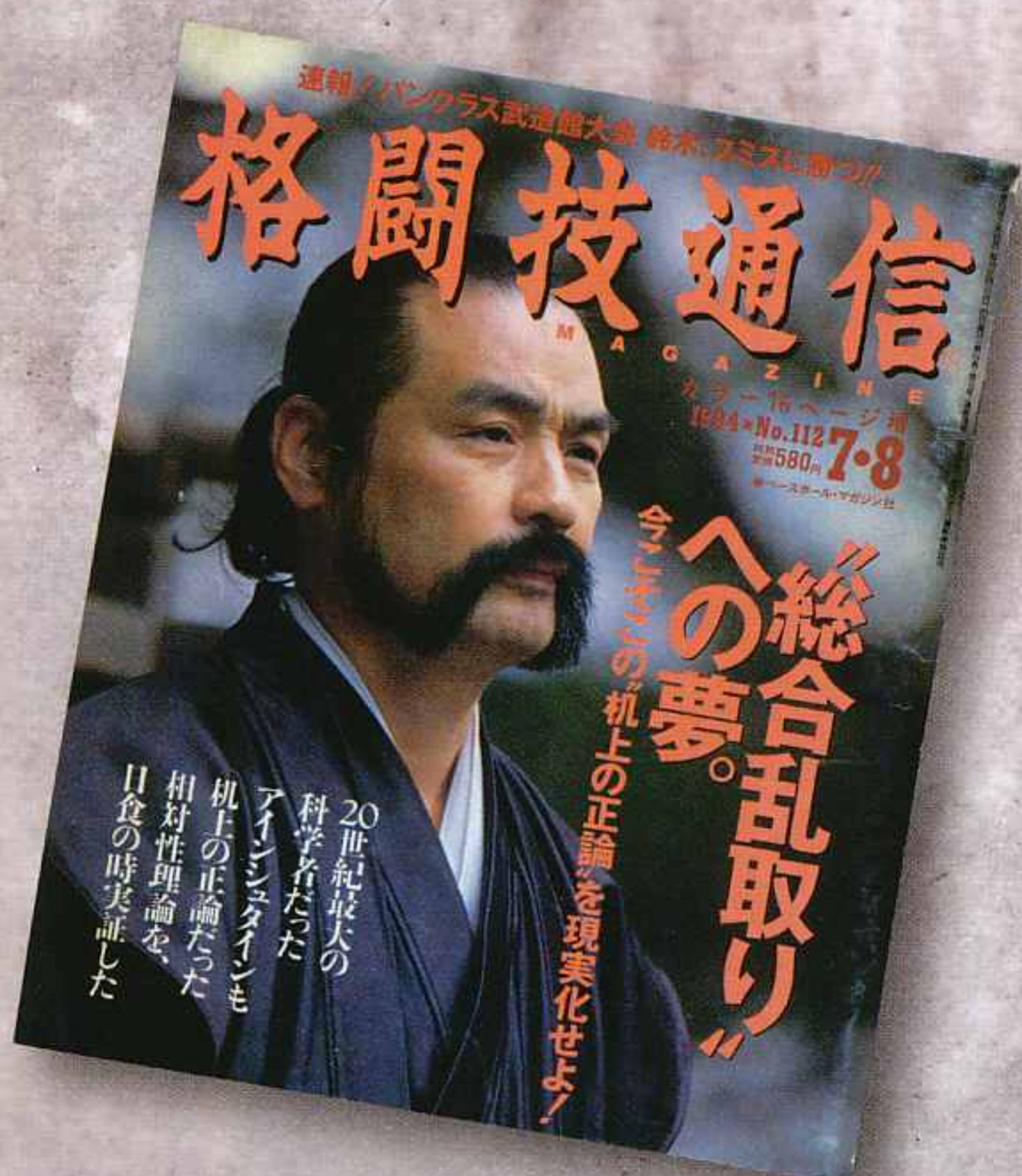
谷川　あっ、それいいねえ！（身を乗り出して）。

——あ、本気なんだ（笑）。

谷川　今度、提案してみよう！

熊久保　……ああ、こんな人をライバルと思ってたなんて。オレの『ゴン格』時代はなんだったんだ。

【10年2月4日／都内・FEG本社にて収録】

いまの格闘技界の基礎は『格闘技通信』とグレイシー柔術によって作られた

日本武道傳骨法創始師範

堀辺正史

『格闘技通信』といえば、93年にグレイシー柔術とUFCが登場したとき、毎号徹底的に大特集を行ない、ファンにバーリ・トゥード（MMA）を啓蒙してきた雑誌。その当時の『格通』で、グレイシーを論理的に解き明かしていたのが、骨法の堀辺師範だ。今回は堀辺師範に当時を振り返ってもらいつつ、『格通』がはたしてきた意義について語ってもらった。

聞き手／堀江ガンツ

——先生！　老舗格闘技雑誌の『格闘技通信』が今月で休刊することになったんですけど、ご存知でしたか？

堀辺　噂で聞いていたんですけど、ホントに休刊するんですか。

——そうなんですよ。じつに残念ですよね。やはり僕らも『格通』というのは、プロレスから格闘技へっていうかたちの先鞭をつけたような雑誌だと思ってますから。

堀辺　そうですね。いま言ったことが、じつは『格闘技通信』の大きな特色の一つなんですよ。もともと『格通』というのは『週刊プロレス』の別冊として誕生したわけですよね？

——そうですね。

堀辺　つまりプロレス、中でもとくに「UWF」というものから生まれたと思うんですね。やはり格闘技としてのプロレスを目指すUWFというものが生まれ、その「UWFとは何か？」ということをやっていくためには、『週プロ』だけでは追求しきれない。「UWFを推すために、いい媒体はないだろうか」という考えから『格通』が生まれたと私は聞いています。

——要はUWFのための雑誌だったということですね。

堀辺　だから『格通』の第一段階というのは、UWFがプロレスというものから決別するために発射されたものだった。そして創刊から数年が経ち、UFCという〝なんでもあり〟が出てきたとき、『格通』は、それを誌面のメインに据えて、徹底的に報道していった。これがその後の格闘技雑誌の方針、さらには格闘技界の流れまでを決定づけたと言えるでしょう。

——そして、堀辺先生はこのUFC

『格通』以外の雑誌は当初UFCを「格闘技じゃない」と言っていた

が誕生したあたりから、『格通』に深く関わるようになったんですよね？

堀辺 そうですね。当時の谷川編集長が私のところに来て「アメリカで〝なんでもあり〟というものが起きた。『格通』でもどうしたらいいのかわからないので、相談させてほしい」という感じでした。そこで私はグレイシーやUFCの登場を「他流試合元年」と名づけて、〝なんでもあり〟というものを解き明かしていったんです。

——あの時期、『格通』で堀辺先生が、〝なんでもあり〟というものを概念として説明してくれたことが、のちの総合格闘技確立の礎になりましたよね。

堀辺 確かに、あの時期にUFCをどう捉えるか、ということは重要な意味を持っていたと思います。

——一方、『ゴング格闘技』は、「アルティメットは野蛮なケンカ」だとか「馬乗りになって、頭突きをやることに技術は必要ない」とか、いま考えるとトンチンカンなことばかり書いていたわけですからね。

堀辺 『ゴング格闘技』はUFCに対して「あれは格闘技じゃない」って言ってたんですよ。空手やキックボクシングといったジャンルに分かれた格闘技をやっている人の意見として、全否定を行なっていた。

——先生ご自身は、最初にUFCが現われたとき、どう感じたんですか？

堀辺 じつは、私は日本のメディアで騒がれる前に、ある人に送ってもらって、UFCのビデオを観ていたんですよ。で、実際に観てみると私もかなりショックを受けて、一日か二日は頭が整理できないような状態でしたね。これはえらいことになっちゃったな、と。

——先生が唱えていた「路上の現実」が、プロ興行の舞台で実際に行なわれたわけですからね。

堀辺 やはり、私自身、アルティメットのようなことを骨法でやりたいと思っていたんですけど、それは無理だろうと思ってたんですね。

——ノールールの闘いなんて不可能だ、と思ってたわけですね。

堀辺 この文明社会でね、かつてのローマのコロッセオで皇帝が剣闘士たちに殺し合いをさせるようなことが起きていいのか。そこに私も疑問を抱いていたんですよ。ただ「このアルティメットを日本の武道というものから考えたときに、どうなるんだ」と考えてみたとき、何も価値観的に間違ってはいない。ああいった〝なんでもあり〟の状況で闘えるものこそ武士道ではないのか。そう考えたときに「これは肯定すべきだ！」と思い、そういう決定に至ったんです。

——だから、〝なんでもあり〟という一見野蛮な闘いを武道の観点から理論的に肯定し、説明できる、先生みたいな変わった人がいたことが、『格通』にとってラッキーでしたよね（笑）。

堀辺 私が言うのもへんですけど、バーリ・トゥードを武道の価値概念で説明していなかったら、おそらく定着しなかったと思うんですよね。だから私は『格通』の誌面を通じて、〝なんでもあり〟の闘いで、あれだけ見事な勝ち方をしたグレイシー柔術の解明から始まって、なぜ、こういう試合形式でなければならないか、ということを延々といろんな角度から説明していくかたちをとったわけです。そうやって読者に考え方や知識を提供していったんですけど、しかしそれによって既存の格闘技団体はえらい迷惑を被ったわけです。

——どういった迷惑ですか？

堀辺 やっぱり、どんな格闘技、どこの道場でも「もし、実際に闘うことになったら、俺たちがやってる格闘技が一番強い」と言ってたし、そう信じてたんですよ。

——その「もし実際にやったら」の「もしやったら」はありえないからこそ、それが言えたわけですよね。

堀辺 そうです。「最強」というのは実証する場がなくて、武勇伝しかなかったわけですよ。ところがUFCという〝ノールールで誰が強いか〟が測定可能な舞台ができてしまったことで、「じゃあ、強いっていうならそこに出ればいいんじゃないですか」って話になってしまって、安易に「自分たちが最強だ」と言えなくなってしまったんです。

——最強の看板を掲げづらくなってしまったわけですね。

堀辺 しかも、やっぱりいろんな格闘技道場の先生たちも、アルティメットを目の当たりにして、正直言ってビビったわけですね。でも「ビビった」とは言えないから、いろいろ理屈をつけたわけですよ。「あんなものは格闘技じゃない」とか「野蛮なケンカだ」とか、それぐらいしか反撃の材料がなかったんです。

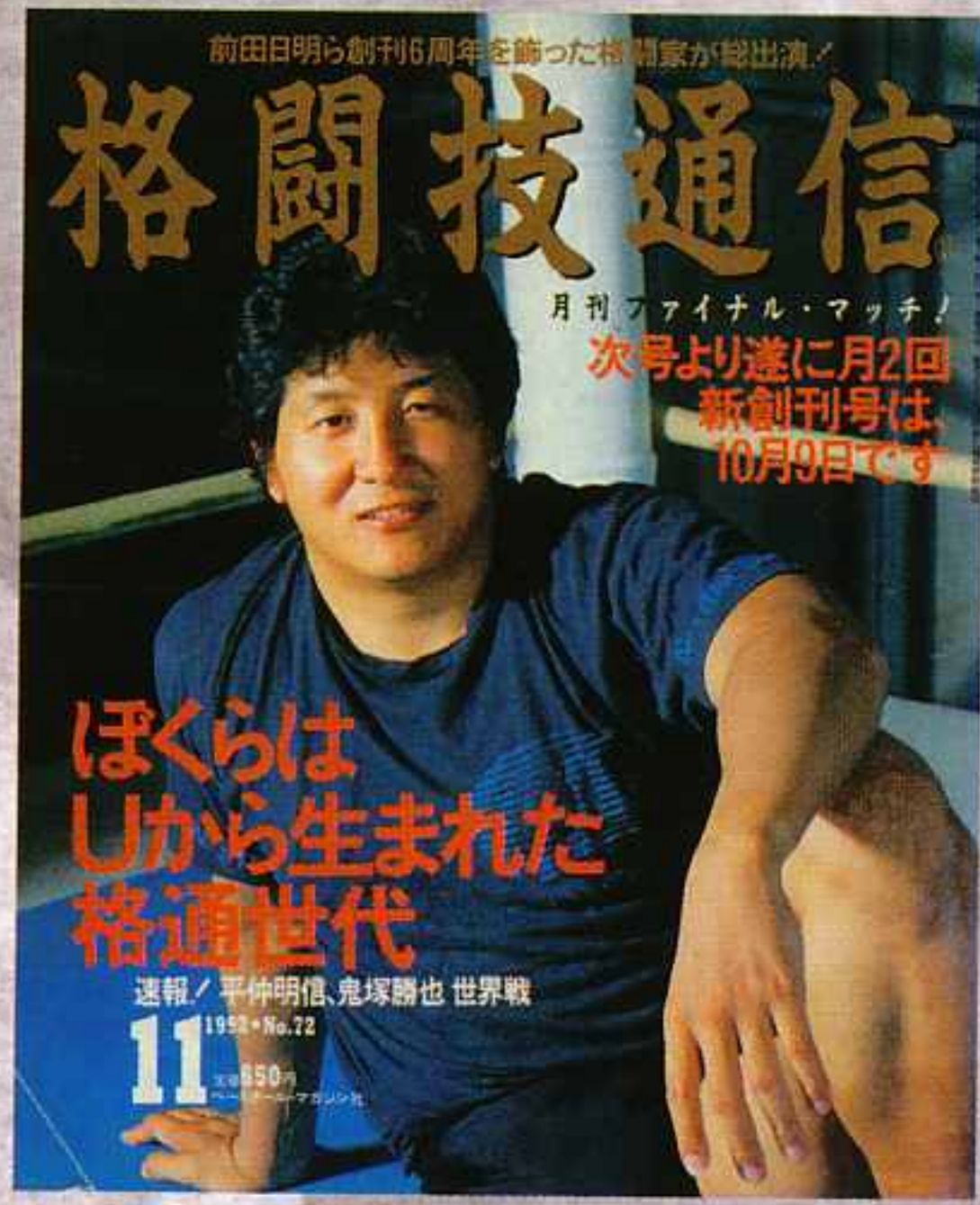
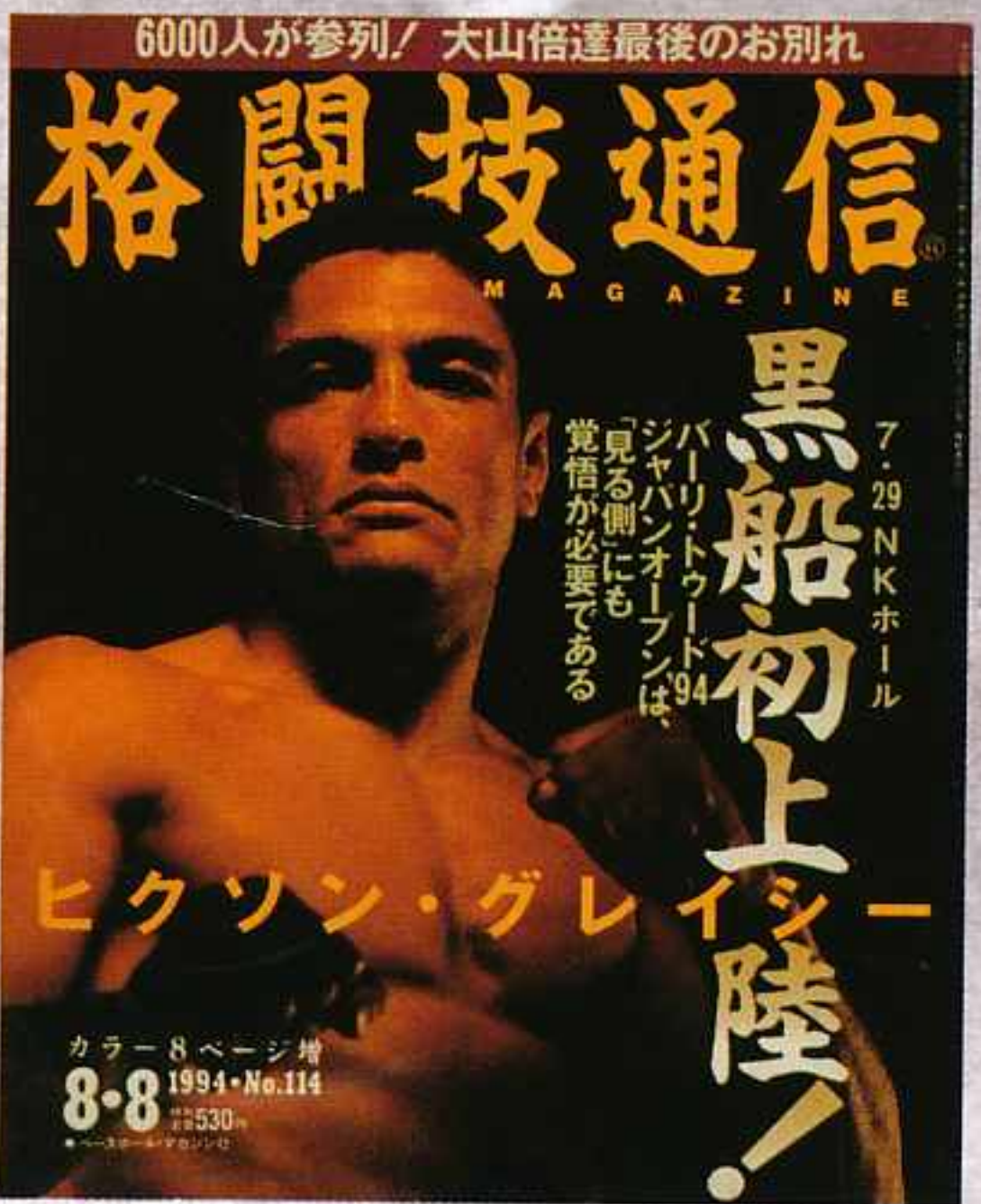
——それはその道場も、その発言をよしとしている格闘技雑誌も求心力を失いますよね。

堀辺 グレイシーやUFCの登場によって、状況が一変しつつあったわけだから、もう古い価値観ではやっていけない。改革が迫られたわけですよ。私も〝なんでもあり〟をよしとした立場をとった以上、私自身もそういうルールの中で骨法が闘えるようにしなければいけないということで、改革に挑んだわけですよね。その過程においてさまざまな道場で、みんなが心配してたとおりのことが起きたんです。

——どういったことですか？

堀辺 たとえば総合格闘技になると、いままでの種目化されてた格闘技の先生は、弟子を完全掌握できなくなるんです。たとえば空手の先生だったら、突く、蹴るってことは教えられるかもしれないけど、組まれたときにどうするかってことに関しては素人ですから、教えるわけにいかない。そうすると、その空手道場の生徒が総合の試合に出場しようと思ったら、柔道やレスリングなど、出稽古に出るわけです。そうすると、その先生は門下生を完全に管理することができない状況というものが誕生したわけですね。これは既存の格闘技界にとっては、えらい迷惑なわけです。

——確かに死活問題になりかねませんね。

堀辺 自分のところだけで満足してた生徒たちが、ほかのところに行っ

初期『格闘技通信』の表紙。当時は前田日明が『格通』の〝顔〟であり、同時に当時の格闘技の象徴が、UWFのエースである前田日明だった。

日本の格闘技界を大きく変えたグレイシー。その登場を「黒船」と名づけ、徹底的に特集していた当時の『格通』は、毎号が新しい発見の連続でじつに刺激的だった。

堀辺正史

て会員になって教育される。しかも総合格闘技という新しいことをやり始めると、「自分がいままで習っていた先生よりも俺のほうが強いんじゃないか？　あの先生は寝技は知らない。打撃も寝技も学んでいるから、先生よりも強いかもしれない」。こういうことがちょっとずつ起き始めたわけですね。

――骨法でもそういうことが起きたわけですか？

堀辺　改革途中であれば、それはあたりまえのように起こりますよね。そういったことが各道場で起こったんです。だから、『格通』で私がグレイシーやUFCを解説したことは、当時のジムや道場を開いていた経営者にあたる指導者には、大変な迷惑だったようですね。しかし、あのグレイシーやUFCを知ってしまったら、やるしかないんですよ。やっぱり格闘技を志す人は、強さを求めてるわけだから。避けては通れなかったんですよね。

――だから、あのグレイシー柔術やUFCが現われたときの状況を最もわかりやすく一言でいったのが、『格通』で堀辺先生がつけた「黒船」というコピーですよね。

堀辺　ああ、そうでしょうね。

――あの当時、〝なんでもあり〟やグレイシー柔術が現われたという状況は、日本に黒船が来て、すべての価値観の転換が迫られたときと同じような状況ですからね。

『kamipro』は〝総合格闘技雑誌〟ではなく〝なんでもあり〟を目指せ！

堀辺　まさに、そういう黒船というかたちで、私自身がグレイシーを受け止めていたんですよ。日本の格闘技界が潰されるんじゃないか、という危機感を覚えました。ただ、その危機感というのは、〝なんでもあり〟に反対した人たちも同じだったんですよ。その対処の仕方が違うだけでね。

――なるほど。

堀辺　私はああいった試合でも闘える骨法に変えなければならない、と考えた。グレイシーを否定することで守ろうとした人たちと、そこが違っただけなんですよ。

――黒船が来たときに、「黒船だ！」って言ったのが先生や『格通』で、「でかい漁船じゃないの？」って、見て見ぬふりをしたのが、ほかの格闘技の先生や『ゴン格』だったというか。

堀辺　ただ、『格通』というのは、現在の総合格闘技というものに先鞭をつけたと同時に、限界もあった。

――限界ですか？

堀辺　はい。私は『格通』でやった谷川編集長との対談をまとめた本（『武道と格闘技～日本人よグレイシーに学べ！』）の中で、「アルティメットの向こう側」ということを書いたんですね。それは、「バーリ・トゥードが総合格闘技として完成されたら、武道にならなければいけない」と解いたんですよ。ところが、グレイシー解明については、熱心に掲載していたのが、PRIDEのようなものが出てきて以降は、その先を考えることがなくなってしまったように思います。

――00年以降はとくに、格闘技の試合を報道するだけになってしまった部分があるのかもしれませんね。

堀辺　価値観を伝えることはないし、「もっとこうするべきだ」っていう意見もなくなってしまったように思います。私としてはPRIDEの闘いを通して、新しい侍文化を世界に向けて発信してほしいと思っていたし、それが実現していたら西洋発ではない、日本オリジナルのものとして世界に定着して、いまのようにアメリカにすべてを持っていかれるような状態にならなかったんじゃないか、と思うんですけどね。

――総合格闘技がプロスポーツになってからも、本当の価値観というものを追求すべきだった、と。

堀辺　それをしなかったから魅力が褪せて、それがまた『格通』の購買者数というものを減らしていったというか、求心力を失なう結果につながったんじゃないか、と私は思っています。やはりものごとというのは、「将来的にこうありたい」という理想を打ち出して、それに向かって進んでいくんだという姿勢を見せたとき、読者や観客というのは、より一層燃えるんですよ。かつてのUWFがいい例です。「我々はプロレスラーだけども、格闘技に向かってるんだ」という、彼らの理念や姿勢をファンは支持し、追っていた。グレイシーが登場したときの『格通』があれだけ支持されたのも、グレイシーに理念があったし、総合格闘技を確立していくという夢を、『格通』が読者とともに追っていたからだと思うんですね。やはり、そういった面を失なったとき、求心力も失なわれていくんだと思います。

――では、こんな時代に『kamipro』は、どういうものを目指したらいいんでしょうかね？（笑）。

堀辺　私は『kamipro』というのは、ハッキリ言ってゲリラだと思うんですよ。ゲリラっていうのは最初から戦略や方針をあえて持たずに、そのときどきの状況によって、一番いい方法を打ち出すことですね。だから、こういう時代になったからこそ『kamipro』は、やり方によっては強いと思いますよ。

――そのときどきによって姿を変えやすいのが強みだ、と（笑）。

堀辺　そうそう。いま「格闘技雑誌」というのは、頭が凝り固まってて、正直言って、おもしろくない。でも、『kamipro』というのは、「総合格闘技雑誌」ではなく、〝なんでもあり〟の雑誌だと思うんですよ。

――MMA雑誌ではなく、バーリ・トゥード雑誌というか（笑）。

堀辺　だから総合格闘技の話題だけじゃなくて、政治でも芸能でもかまわないし、そのときどきの問題を『kamipro』流に料理していけばいいと思うんですよね。小沢一郎を徹底的に特集してもいいし、朝青龍を表紙にするくらいのことがあっても全然いいんじゃないですか？（笑）。

――では、これからも〝なんでもあり〟の雑誌として頑張っていきますので、またお話を聞かせてください！

【10年2月1日／都内・骨法武術館にて収録】

グレイシー登場当時に連載されていた堀辺師範と当時の谷川編集長（サダハルンバ）との対談。こうして毎号、『格通』ではグレイシーを解き明かしていったのだ。

堀辺師範が〝なんでもり〟の解説をすると同時に、骨法でもその闘いを実践。後楽園ホールで行なわれた『骨法の祭典』は『格通』で速報号まで出された。

ほりべ・せいし■1941年、茨城県出身。50年にわたる命懸けの求道の末、喧嘩芸骨法、さらに全局面打撃制koppoを創始。最近はヨルダン国王護衛の近衛団にも武道を指導するなど、多方面で活躍中。格闘技・武道評論の第一人者でもある。

無念の休刊……されど、その功績は絶大なり!!

ありがとう!『格闘技通信』座談会

『格闘技通信』、無念の休刊……。先月、なぜか『ゴング格闘技』でその“一報”を知らされたが、
『格通』がこれまではたしてきた格闘技界での功績は絶大なもの。
というわけで、『kamipro』ではメディア論は一切語らず、『格通』の素晴らしい思い出だけを語りまくる!

構成/松下ミワ

『ゴン格』には日本格闘競技連盟ばりに〝意見書〟を公表したいね

――今日は「俺たちが愛した格闘技通信」というテーマで話を進めたいんですが、どうやら『格闘技通信』が休刊するそうなんですよ。

橋本 ホント残念だねぇ……。そして、寂しいとしか言いようがない。

――ボクが思うに、『格闘技通信』編集部の方々には二重の無念さがあるんじゃないかと思うんですよね。一つは休刊が現場判断じゃなくて会社判断だったってこと。

橋本 まあ、雑誌の休刊というのはえてして会社判断なんだけどね。

――そしてもう一つは、オフィシャルで発表してないのになぜか『ゴング格闘技』がその休刊話を大々的に扱って、しかも座談会でトンチンカンなことを語りまくってるという(笑)。

ガンツ これは恥ずかしいねぇ。

橋本 『ゴン格』によると「ベースボール・マガジン社の広告局からリリースがあった」って書いてあったけど、それって『ゴン格』が『格通』の休刊を取り扱う説明としてはどうなの?

――要するに、あれって『格闘技通信』の広告クライアントに対するお知らせってことじゃないですか。アンタにリリースしたわけじゃない(笑)。

橋本 まあ、スクープとかゴシップ記事ってそういうところから生まれるんだけどさ、これはさすがになあ……。

――だいたい、この『ゴン格』の座談会では編集長自らが「手軽で効果の得やすいゴシップに頼らずに、議論の深まりが出来るような層を雑誌が育ててこなかった弊害もあると思います」と言ってるわけですから(笑)。

橋本 しかも『格通』休刊の理由を取材して分析してるわけじゃないんだよね。それ抜きでメディア論を語ってる。まあ語るのは自由だけどさ、だったら広告局からのお知らせくらいの段階で『格通』休刊を扱わなきゃいいのに。もっと正面から『格通』に向き合う内容ならともかく、これじゃあまさに「手軽で効果の出やすい」ダシにされた感じがするよね。表紙に『がんばれ格闘技』とか打つんだったら、まずそのへんを考えてやってくれって感じだよ。俺はもう日本格闘競技連盟ばりに〝意見書〟を公表したいね。

ガンツ とりあえず、中指でも立てておきますか(笑)。

――でもさ、この座談会を読むかぎり、『ゴン格』って「団体の顔色をうかがわない」とか「硬派」なイメージで自分たちを売りたいわけでしょ。

ガンツ 「顔色をうかがわない」以前の話でしょ。ウチも毎月いろんな団体や選手から苦情や抗議を受けてるから偉そうなことは言わないですけど、それって〝内容〟におけるクレームですよ。でも、『ゴン格』の場合って……。

――いやあ、話を聞くとビックリしますよね。この座談会で出席しているフリーライターや『ゴン格』の版元は、『ゴン格』が現場で何をやってるのかを知ってて〝メディアの姿勢を問う〟とかやってんのかなあ。

ガンツ ブラックジョークだったら凄いけどね(笑)。

――この件は『mimipro』とかイベントでも語るのでここまでにします(笑)。それで今回は『格通』に詳しいお二人に登場していただいてるんですが、まず橋本さんはなんと出生が『格通』なんですよね。

橋本 これは誇りを持って言えますけど、俺の業界入りは『格通』です! でも、ガンツはどんな関係なの?

ガンツ 単なる元愛読者です(アッサリ)。

――ボクも読者でした。

ガンツ ただ、ここ10年くらいまともに読んでませんけど。

――そんな3人でお届けしようかな、と。

橋本 おまえら『ゴン格』以下だろ!(怒)。

――(無視して)橋本さんはそもそもどういう経緯で『格通』に入ったんですか?

橋本 俺はもともとこういう仕事をやりたいと思ってて、大学のときに『格通』の読者コーナーに投稿してたんだよ。

ガンツ それは『週プロ』でタテ帯コーナーに投稿してたぐらい恥ずかしい過去ですね(笑)。

橋本 うるさいよ! 実際、すんごい青臭い原稿を書いて投稿してるからバックナンバーは絶対に調べないでほしいんだけどね(小声で)。

――これは絶対に調べましょう!

橋本 やめろって! で、なんで投稿してたかというと、ゆくゆくバイトとかで『格通』編集部に入れないかなと思ってたんだよ。だから編集者の人に名前を覚えてもらったほうがいいなと思ってやってたんだけど、いざ編集部に入ってバイトとして働いたのは1年、そのあとの1年はフリーライターとして関わっていたんだよね。ほかに仕事もないから、ほとんど専属状態だったんだけど。

ガンツ ということは、バイトからいきなりフリーライターに?

橋本 そう。だから俺が『格通』にいたのは96年から97年の2年間。そのあとは谷川さんに誘われて『SRS−DX』で働いてました。

――ザッと聞いたかぎりだと、あんまり『格通』に縁は感じられないなあ。

橋本 おい! でも当時の『格通』も相当のもんだったよ。だってオレ、バイトで入った初日に安西(伸一)さんにメシに誘われたんだけど……。

ガンツ (さえぎって)いま抜群の年賀状で話題沸騰のアンザイ・グレイシーですね(笑)。

橋本 ひまわり畑で撮った写真に「ヒドい人生になってきました」ってコメントを添えた年賀状が話題の安西さんね(笑)。その安西さんに「これは内緒なんだけど、谷川が来月で辞め

ありがとう!『格闘技通信』

『格通』の猛烈なプッシュにより世に出たグレイシー。当時の『格通』の嗅覚が鈍ければ、いまの総合格闘技はなかったといっても過言ではない。そう考えると『格通』の功績はあまりにもデカいぞ!

座談会出席者

age 34 [司会]ジャン斉藤
本誌・編集長。〝雀鬼〟桜井章一の内弟子を経て『kamipro』編集部へ。『格通』とのつながりは「読者」。

age 36 堀江ガンツ
本誌・編集部員。変態座談会主宰者であり、変態道は海外イベントにまで通じている。『格通』とのつながりは同じく単なる「読者」。

age 36 橋本宗洋
格闘技ライター。『PRIDEはもう忘れろ!』の著者。本座談会で『格通』とのつながりが最も強く、『格通』編集部ではバイト&ライターとして活躍。

『格通』は新しいものもどんどん盛り上げろ！って感じだったね

るんだよ」って言われたんだよ。会社の中では既成事実だったみたいだけどね。

――つまり、『サムライTV』立ち上げのために谷川さんがベースボール・マガジン社を辞める時期だったんですね。

橋本 そこから時を同じくして、ターザン山本！の『週プロ』編集長更迭とかいろいろあったから、いま考えると俺ってグッチャグチャの2年間にいたんだよねぇ。

ガンツ で、ボクと『格通』の出会いを説明すると、そもそも『格闘技通信』というのは『週プロ』の中のワンコーナーだったんだよね。毎週1ページでプロレスとは関係ない武道家とかの紹介ページがあったんだけど、当時、前田日明vsドン・ナカヤ・ニールセンが爆発的に盛り上がったことで、そっち方面の雑誌を作ろうってことで『格闘技通信』を創刊したんですよ。で、俺はその頃からの読者ってことなんだけど。その創刊時にカール・ゴッチなんかも絡めて、UWFを〝格闘技〟としてバンバン煽ってたんだよね。

橋本 それに中国拳法みたいなのも入り混じってたんだから、とんでもない雑誌だったよ。孫悟空のイラストが表紙だったときもあったもんね。

――そのくらい〝格闘技〟自体も雑多だったんですね。その『格通』がぐんぐん上がっていったのはどの時期になるんですか？

橋本 年代でいうと、一番盛り上がったのは90年代前半だね。それはやっぱりUWF、リングス、リングスvs正道会館の流れからK-1とかを盛り上げてた時代だよね。

ガンツ だから本格的な格闘技時代の始まりは正道会館と提携してた頃のリングスですよ。俺がリングス好きなのって、ホントその頃があったからだもん。要はプロレスからUWFから流れたファンを、『格通』とリングスが格闘技に導いてくれたんですよ。

橋本 つまりプロ格闘技勃興期みたいな感じで、猪木さんみたいなプロレス主導の格闘技じゃなくて、もともと格闘技主導のイベントが湧き起こってた時期だよね。そういうガチンコ志向がありながら、プロとしては成熟してなかった頃に行なわれたのが93年の『格闘技オリンピック1』ですよ。

ガンツ 当時はそれこそ急激にボーダレスになってたし、キャラが揃ってたよね。平直行、市原海樹、そして長田賢一。長田なんか動いてるところ見たことないのに、もの凄く幻想があったもん。

――その伝え手が『格通』だったわけですね。

橋本 でも『格通』以外にも、当時は『ゴン格』とか『フルコンタクトKARATE』もあったじゃない。俺、読んでないからわからないけど、『ゴン格』も『ゴング』から始まってUWF雑誌になっていったという感じだったのかな？

ガンツ ま、オレも読んでないからわからないけど、『ゴン格』は舟木昭太郎さんのムエタイ、極真路線からスタートして、『週ゴン』の流れで前田日明やUWFを大きく扱うって感じじゃないの？

――前田日明ファンの堀江さんがなんで前田が表紙の『ゴン格』を読まなかったんですか？

ガンツ ハッキリ言って、雑誌としてちっともおもしろくなかったから（キッパリ）。

――ダハハハハ。

橋本 ただ、俺が鮮明に覚えてるのは『ゴン格』は『格通』を意識して作ってたってことだよ。UFCの取り上げ方なんかも『格通』はUFCを押しまくってたけど、『ゴン格』はとにかく批判しまくってたんだもん。

ガンツ ああ、黒崎（健時）先生がグレイシーを〝わらって〟たりしたんだっけ？

橋本 その「わらう」も「嗤う」の漢字を使ってるんだよ。あざ笑うって意味で。その理由が「ノールールでこんな試合になるはずがない、コレには裏ルールがあるに違いない」ということだったよね。つまり「本当はこういうことしちゃダメだ」という反則に関する規定があるんじゃないかという。

ガンツ だから、勘違いや思い込みのグレイシー批判がやたら多かったんですよ。俺が覚えてるのは、ホイスvsダン・スバーンのとき、ホイスが30キロ以上重いスバーンをガードポジションでしのぎながら三角絞めで見事に勝利したのに、『ゴン格』は「〝マウントポジション〟を終始取られていたホイスが、勝ちを拾った」みたいな感じで書いてたのよ。そんなの単なる『格通』読者のにわか格闘技ファンだった俺でも「おい、それはマウントポジションじゃなくて、ガードポジションだろ！」というあたりまえのツッコミを入れたくなるよね。だから、もうその時点で「読む価値なし！」と思ってたんだと思う。

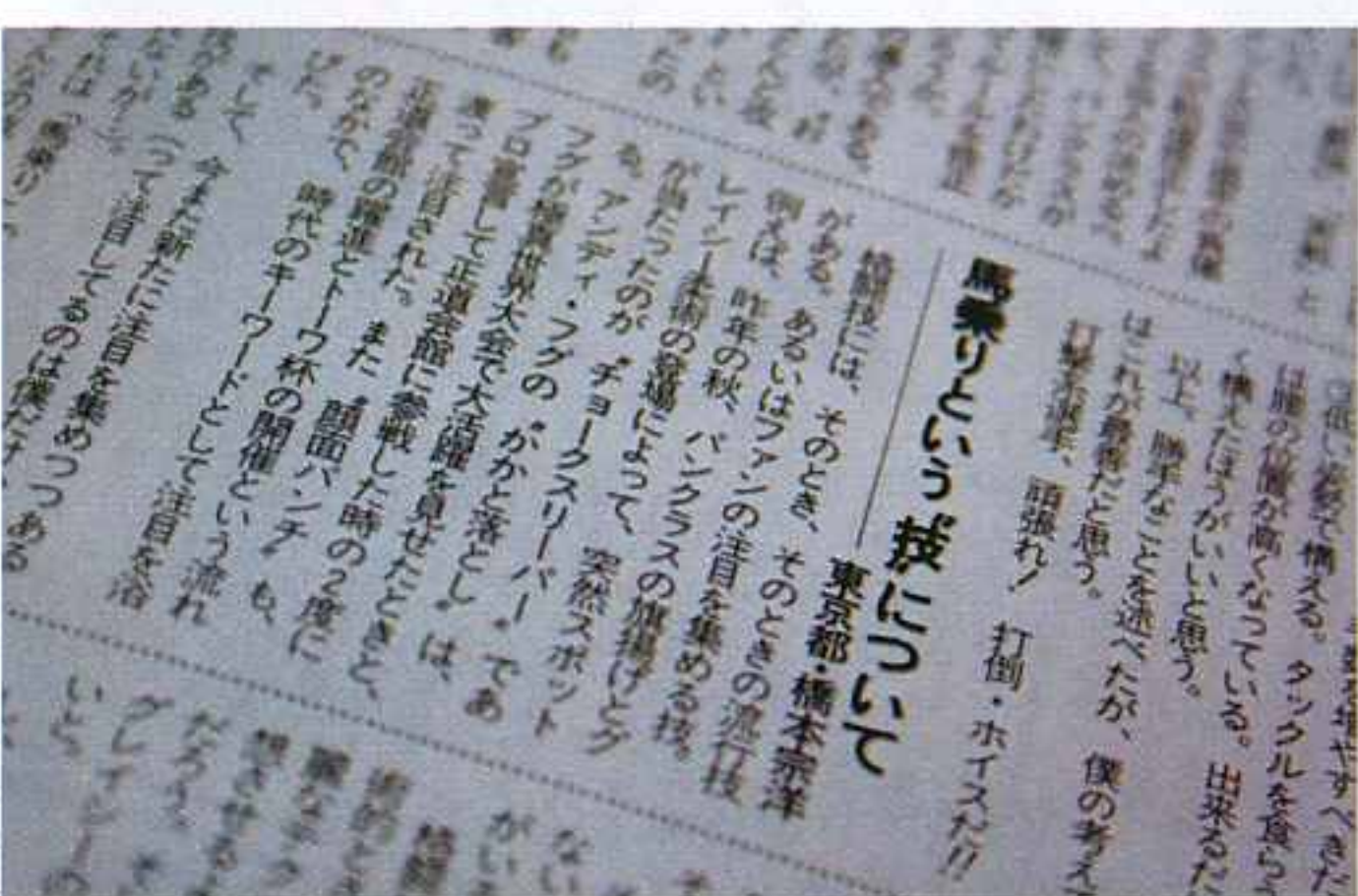
橋本 確かに『ゴン格』はある程度批判的に見ていこうみたいな流れがあったんだよね。それに対して『格通』は「もうとことん盛り上げとけ！」って雰囲気だったんだよ。海のものとも山のものともわからないけど、「俺が感じた興奮は本物だった！」みたいなスタンスで。

――ここに当時の『格通』の表紙がいくつか用意してありますけど、ホントにカッコいいんですよね。毎回事件性があってドキッとするような表紙でした。

橋本 たしか100号がUFC旗揚げ戦のときで、コピーが「アルティメット大会がいま格闘技界で凄い噂」とか、そんな感じだったんだよね（笑）。

ガンツ そして、このキモとジョー・サンの表紙！（『格通』120号）。これを見て即行、K-1名古屋大会のキモvsパトスミに観に行こうと思ったもん。

――それに、堀辺先生とイズマイウとカーウソン・グレイシーが表紙を飾ったこともありましたよね。いま考えると凄いですよね（笑）。

一時期、堀辺正史氏が師範である骨法を大プッシュしていた『格通』。これにより獣神サンダー・ライガーや船木誠勝らプロレスラーも骨法に夢中になったというから凄い。

橋本氏の投稿原稿を発見! 本人の拒絶により写真でお伝えすることにするが、『格通』No.123に載ってるので読みたい人はどうぞ!

『格通』がグレイシーを焚いたおかげでPRIDEも始まった

ガンツ　カーウソンがブラジルから骨法の東中野の道場に来たってところが凄いよ（笑）。

橋本　表紙でいうと、俺が一番好きな表紙は吉鷹弘vs大江慎戦の表紙だなあ（『格通』124号）。UWFからスタートして、K−1も始まって、グレイシーもいた時代に後楽園ホールでやったワンマッチを表紙にしてるんだから。

――それはどういう意図があったんですか？

橋本　とにかく名勝負だったからだよね。で、編集長だった谷川さんのその号の編集後記がまた素晴らしいんだよ！「この試合を表紙にしなかったら私は公平さを欠いていると言われても仕方がないだろう。何を表紙に持ってくるかという理由はそのときの状況によっていろいろあるが、団体やルールによる格の差はない」って。これを谷川さんが書いているというのが凄いよ！

――んあ〜！（笑）。

ガンツ　あと、やっぱりこの頃の『格通』ってデザインがいいんだよね。そこがまた当時の『ゴン格』とは違ったんだよ。これは『週プロ』と『週刊ゴング』もそうだったんだけど。

――あ、それはわかる。『週プロ』は読みやすかったですもんね。『ゴング』はなんか野暮ったいというか……。まあ、格闘技雑誌にあか抜けてるもクソもないんですけど（笑）。

ガンツ　あと、全盛期の『週プロ』と『格通』が似てたのは、『週プロ』がプロレスのいろんなおもしろさを教えてくれたのと一緒で、やっぱり『格通』は、幻想を膨らませつつ自然と格闘技のことを勉強させてくれていることですよ。

――だから『格通』が凄かったのは、格闘技の技術よりも魅力を教えてくれたことですよね。それがうまかったから、プロレスファンでも『格通』の動きは凄く気になりましたもん。

橋本　だからプロレスも観てるしU系も観てる、でも立嶋もいて長田もいるという世界観がスムーズにつながってたんだよね。「格闘技はおもしろいものだ」っていう打ち出しで「ガチンコだから価値がある」とは言ってない感じだった。

――そして『格通』は何が凄いって、スターを作る力、とくにグレイシー一族なんかはもう『格通』の最高傑作ですよ。

ガンツ　しかもその幻想だけで、たいして試合してないのにギャラもどんどん上がっていったんだから。で、『格通』はその発言の見出しのつけ方がまたうまかったんだよ。俺はのちに『kamipro』でリングスロシアの特集を組むときとか、まさしくその手法を使わせてもらってたもん。これはね、発想の仕方を学んだだけで『ゴン格』が『Number』のデザインやコピーをパクってるのとわけが違うから！

――オマージュである、と（笑）。

ガンツ　『格通』で興奮したという記憶が凄くあるから、俺もいまのファンにそのときみたいな興奮を感じてもらいたいなって思ってね。

橋本　いま、たまたまバックナンバー開いてみたらヒクソンのページの見出しが「俺が日本に行ったら、俺のために山小屋を用意してくれ」だったよ（笑）。

――わけがわからないけど、なんだか凄い！

ガンツ　そういえばオレ、去年ホリオンの道場に行ったときに、初期『格通』の表紙がズラーっと飾ってあったのを見たんだよね。ちなみに『ゴン格』の「鬼の黒崎、グレイシーを喰う」の表紙もあったんだけど（笑）。

橋本　そこは教えてあげろよ！　でも、雑誌の表紙になるなんてのはホントに凄いことだもんね。

ガンツ　そして『格通』がグレイシーを焚いたおかげでPRIDEも始まったわけで、もっと言うと『格通』がなかったら総合格闘技なんて成り立ってなかったですよ。だから最終的に総合を商売にできるようにしたのは『格通』だよ。

橋本　やっぱり、当時は得体の知れないものをこれだけ大きなものにしたというのは、当時編集長だった谷川さんの舵取りがうまかったんだろうね。厳密に言うと、修斗を大々的に取り上げてたのは谷川さんが『格通』を辞めたあとだけど。

ガンツ　でも、最近の『格通』には、新しいムーブメントに対する嗅覚が弱まっていた印象はあったよね。

橋本　やっぱり谷川さんがベースボール・マガジン社を辞めたのが響いたのかなあ。谷川さんの次にターザン山本が編集長をやってみたりさあ。

――あれはいったいなんだったんですかね（笑）。

橋本　俺は当時バイトだったからよくわかないけど、ある日突然「これから『格通』はリングスとパンクラスは載せないから」とか、わけのわからないことを言い始めたしね。当時はまだオレも純情だったから、「揉めたの

▲橋本宗洋セレクト表紙

グレイシーやK-1が注目される中、当時編集長だったサダハルンバが表紙にしたのが、この吉鷹vs大江の試合写真。ハッシーはこの試合に涙しただけに、よけいに嬉しかったそうだ。

▲堀江ガンツセレクト表紙

堀江ガンツがセレクトしたのがこの表紙。K-3トーナメントで名勝負が続出した中、角ちゃんのワンマッチが表紙に選ばれた一冊。注目されたし盛り上がったトーナメントそっちのけで角ちゃんが奪取したのだ。

か？」とか思ってたんだけど、要は『週プロ』に読者を誘導するための差別化だったみたいで。

ガンツ　ズバリ卑怯な男です（笑）。

橋本　それで、『格通』は堀辺先生や骨法をガンガン押していくということを言ってたんだけど、でも骨法の大原学や小柳津弘が負けたじゃない。そしたら朝岡さんなんかはプロレスを通ってないタイプの人だったから、骨法のあり方を『格通』としてきっちり総括するような原稿を書いたんだよね。

——要するに「我々は骨法を取り上げすぎてました」っていう有名な批判記事ですよね。

橋本　いや、いざ試合をしてみたらああいう結果だったということだから、朝岡さんの気持ちもわかるんだけどね。ただターザンは案の定、大激怒してた。

——だったら、事前に原稿チェックしておけばいいのに。

橋本　いや、ターザンはチェックとかまったくしてないでしょ。「どうなんだ、そっちは！」かなんか言ってて、現場の舵取りはしてなかったはず。だから、結局ゲラで大問題になって出張校正でいろいろ修正が入ったりしたらしいんだけどね。だから谷川体制の『格通』は谷川さんがバランスを取っていたんだけど、その時期は舵取りがいない危険な状態だったんだよね。

——でも、チェック機関がないというのは、もう『格通』が個人の思想を自由に書いてても許されてたということですか？

橋本　基本的にそう。象徴的だったのが俺がホイスをインタビューしにいったときなんだけど、『PRIDE・2』に出るかもしれないってことで来日してたホイスに、ライター1年目のオレが「インタビューやってこい」って言われたんだよ。もうそれだけでいかに『格通』がPRIDEを相手にしてなかったかというのがわかるんだけど、取材の前に当時編集長だった本多さんに「どういう方向性でいきましょうか？」って聞いたら「聞いちゃダメだよ」って言われたんだよね。つまりどういうことかというと、結局あの当時の『格通』は、編集者とライターがそれぞれ任されたページの中で自分の考えをぶつけて勝負していくだけの場だったんだよね。あとで谷川さんと一緒に『SRS−DX』を作ってたときは、「こっち目線で書け」とか細かく指示が出てたから、やっぱり谷川さんはそのへんは考えてやってたと思うよ。

リングスを扱わなくなったことは読者を育てる部分で意味があった

ありがとう！『格闘技通信』

グレイシーをプッシュしてきた『格通』は、その"自家中毒"というべきか、グレイシー狩りに成功した桜庭和志の登場をなかなか追えず……。ここが「おもしろいものをダイナミックにプッシュする『格通』」の分岐点になったのか？

——なるほどね。事件といえばもう一つ、蜜月だったリングスと『格通』の関係が悪くなったというのもありましたけど。

ガンツ　いや、あれはまだ谷川さんがいたときだけど、割れたのは「リングスは真剣勝負じゃない」ということを『格通』が暗に書き始めたからだったはず。もちろん、リングスと仲違いした正道会館と蜜月だったということもあるんだろうけど。だから徐々にリングスを扱わなくなったんだよ。でもそれは読者を育てるということでは俺は意味があった出来事だと思うけどね。

橋本　すんなりと「ああ、リングスは格闘技とは違うんだ」ってイメージになっていったよね。『ゴン格』はグレイシーは喰うけど、リングスは喰わないという。

——うーん、いったいどういう基準なんだ（笑）。

橋本　どういうことかというと、『ゴン格』は業界とのつながりを大事にする業界雑誌、そして『格通』はおもしろいものをダイナミックに取り上げようという、言わばファン雑誌だったんだよね。

ガンツ　そう。だって、石井館長と組んでK−1を押すということは、当時の最大勢力の極真空手を敵に回すということだからね。で、極真空手からは取材拒否も食らったはずなんだよ。

橋本　うん、大山総裁がまだ生きてた時代に取材拒否食らってた。

ガンツ　でも、『格通』はK−1がおもしろいから取り上げたんだよね。グレイシーを押すというのもまた批判がもの凄くあったと思うし、堀辺先生の骨法にしても旧格闘技の高尚な方々からは「堀辺と谷川がおかしなことをやってる」という感じで総スカンだったと思うよ。でも、それによって格闘技界がデカくなったわけだからね。

橋本　だから『ゴン格』のほうがハードなことをやってるイメージがなんとなくありそうだけど、実際にハードなことをやってそれを誌面に出してたのは『格通』ってことだよね。

ガンツ　だから、自分たちで言うのもなんだけど、90年代の『格通』がやってきた役割を請け負ったのが00年代の『kamipro』なんだよね。でも、なんでそうなったんだろうね。

橋本　そこはやっぱり、谷川さんの影響が大きいと思うよ。歴代編集長は「谷川さんと違うことをやる」「自分の色を出す」というかたちでやってたと思うんだけど、そのことで谷川さん時代のおもしろさも薄れたっていうかさ。朝岡編集長の「ノー・フェイク」にしても、本多編集長の修斗押しにしても、大きく括ると「谷川さんがやってないこと」でしょ。まあ、それはこっちが読者として「谷川さんのいない『格通』」ってことを意識しすぎてたからかもしれないけどね。

ガンツ　しかもその時代って谷川さんが『SRS−DX』を作ってたもんね。

——橋本さんも『格通』を裏切って『SRS−DX』側に移ったんですもんね。

橋本　バカヤロウ！　ホントにそういう雰囲気だったんだよ当時は！（笑）。でも、おもしろいものをダイナミックに追うという姿勢を貫いたとしても、90年代前半の『谷川格通』ほどうまくはできなかっただろうね。

——そのあたりも『格通』に学ぶべきところなのかもしれないですね。

ガンツ　じゃあ、『kamipro』は休刊するときも他誌に抜かれないようにしないとね。

橋本　それは『ゴン格』の問題だろ！

——とにかく、『格闘技通信』ありがとう！　ってことです。

【10年1月21日／kamipro編集部にて収録】

辻結花の妹分はヴァルキリーの“小悪魔系ブッ飛び娘”だった⁉

総合格闘技闇愚羅（あんぐら）

SACHI

age 29

今回の女子格企画は実力路線を標榜するヴァルキリーから、あの青木真也も絶賛するチャーミングなルックスのファイター、SACHIが登場！ かわい子ちゃんを前にいつもの調子で「デヘヘヘ！」と迫るクマクマンボだったのだが……。とにかく驚愕のSACHIワールドをとくとご堪能あれ〜！

聞き手／熊久保英幸　構成／鈴木佑　撮影／金山フヒト

そのド天然トークにクマクマンボもタジタジ！

SACHI　（座るなり）なんかエロそう。
──はぁ⁉ な、なんですか、いきなり？
SACHI　ウフフ。あの、熊久保さんは、テレビの声の人って感じなんです。
──ん？ あぁ、試合中継で僕の解説を聞いて、声だけは知ってたってこと？
SACHI　そうです。（まじまじと見つめて）やっぱりエッチっぽいですね。
──いやいや、全然エッチじゃないですよ〜（スケベボイスで）。
SACHI　だって、インタビューとか読んでると、そんな感じがしますもん。
──ちが！ これは『kamipro』に作られたキャラなんです。
SACHI　さっきも辻（結花）さんと「熊久保さんはAKB48みたいなアイドルが大好き」って話をしてたんですよ。だから、もうそういうイメージでしか見れない。
──ムム。じゃあね、逆にSACHIさんをかわいいと思って、ちょっとエッチな目で見てるファンもいると思うんですよ。そういうのはどうなんですか？
SACHI　う〜ん……。
──女の子ならかわいいと思われてうれしいでしょ？ うれしくないはずがない！（キッパリ）。
SACHI　ウフフ。でもでも、そんなん、もし自分の彼女とか娘がかわいいって言われて、格闘技をしてないとかだったら、どういう気持ちですか？
──は？ どういうことですか⁉
SACHI　だから、かわいいだけじゃなくて「もっと頑張れよ」とか思わないですか？ 「それだけでいいの？」って。
──あぁ、かわいいって言われることだけで満足してるのはどうかってことね？
SACHI　そうです。あぁ、なんか、なんか……（顔をしかめながら）。
──ん？ どうしました？
SACHI　エロく見える。
──まだ言うか！
SACHI　（無視して）あの、私はそばにメッチャ強い辻さんがいるんで、そういうふうに自分も見られたい。
──かわいいと言われるよりも強いと言われたい、と？
SACHI　そうです。
辻　だって、私はかわいくないから強くなるしかないじゃん（ボソっと）。
SACHI　辻さん、かわいいですよね？
──辻さんはかわいかったですよ、昔。あ、いっけね（笑）。
SACHI　あ〜、昔って言った！（うれしそうに）。
辻　……（ジーっとクマクマンボをにらむ）。
SACHI　昨日、（闇愚羅の）西川会長に「長野美香選手の手ブラに対抗して、おまえは乳首に5円玉を貼れ」って言われたんですよ。だから、私が「そんなの辻さんがやればいいんですよ」って言ったら、辻さんは「私は誰も喜ばないようなことはしない」って言ったんです（笑）。
──ウッヒャッヒャ！ それは見たい（笑）。
辻　（大声で）見たいんじゃないでしょ、笑いたいんでしょ⁉
──いやいや、逆な意味で見たい。あ、いっけね（笑）。
辻　……（ジーっとクマクマンボをにらむ）。
──（話題をそらすように）え、え〜と、SACHI選手はかわいいと言われるのに反発心がある、と？
SACHI　ていうか、闇愚羅に出入りするようになった頃も、辻さんとかにさんざんネタっぽく「かわいいね〜」ってイジら

「かわいいだけじゃダメなんです」

れたんですよ。だから、闇愚羅の人たちにそう言われても絶対に喜ばないんです。そんな言葉は信じない！（キッパリ）。
―SACHIさんはイジられキャラなんですね～。
SACHI　……（コクッとうなずく）。「もっと素直に受け止めればいいのに」とか言われるんですけど、私が喜んだらもっとイジってくるので、喜ばないようにしてるんです。被害を最小限にするために。
―被害（笑）。そもそも、SACHIさんはなんで格闘技を始めたんですか？
SACHI　えっと、きっかけはテレビで禅道会の金子真理先輩を観たことです。それで「女が格闘技するのって楽しそうだな」って思って調べたら、禅道会の道場（豊橋支部）がウチの近くにあって。
―それで空手を始めた、と？
SACHI　そうです、23ぐらいのとき。それまでは汗を流したこともなく、歩きもしないぐらいの生活だったんですけど。
―歩きもしないぐらい（笑）。そもそも23歳までは何をやってたの？
SACHI　……いろいろしてました。ウフフ。
―意味深だな～。中学や高校でも部活はやってなかったんですか？
SACHI　全然。だから、それがコンプレックスなんです。「どうせ私はずっと運動してなかったからダメなのかな」って。
―なるほど。ちなみにSACHIさんはどんな女子高生だったんですか？
SACHI　えっと、それはエロいかエロくないかってことですか？
―そんなこと一言も言ってないでしょ！（笑）。たとえばガングロとか？
SACHI　いいえ。いまみたいな感じで10キロぐらい細くして、それが制服着てる感じです。
―ギャルだったんじゃないですか？
SACHI　そんなことないですよ。
―ヤンキー？
SACHI　……ウフフ。
―つかみ合いのケンカとかしたことある？
SACHI　……（コクッとうなずく）。
―ハハハハ！　もともと気は強いんでしょ？
SACHI　そんなことないですよ。
―でも、テレビとかで女子格闘技を観て「私のほうが強そう」って思ったんじゃないですか？

エロいボイス、エロいフェイス、そしてエロいヘアスタイルのクマクマンボにどこか怪訝な表情を浮かべるSACHI。このエロ包囲網ぶりには、SACHIならずとも「なんかエロそう」とつぶやきたくなるってもんなのだ。

SACHI

SACHI　なんか噛みついたり、いろんな手を使えばとは思ったかもしれない（笑）。でも、男の人だって格闘技を観て「俺のほうが強い」とか思ったりしませんか？
―それはよっぽど腕っぷしに自信がある場合ですよ。いままでいろんな選手を取材してきましたけど、格闘技を始めた動機が「自分のほうが強い」っていう人は、だいたいヤンキー出身ですよ。
SACHI　そうなんですか？
―それで叩きのめされて「自分を知る」みたいな。
SACHI　ウフフ、知ったかも（笑）。
―ほら！　SACHIさんはこれから格闘技で有名になりたいって気持ちはあるんですか？
SACHI　格闘技で……よくわかんないです。
―辻さんは近所でも有名なんでしょ？
SACHI　辻さんは格闘技とか関係なしに凄く有名なんです。ちっちゃいときから道場の近所に住んでたから。だから、みんなに「本当はもっと凄い人なんですよ」って教えてあげたいくらい。
―なんでも辻さんがフラッと歩くだけで、そのへんの人が食べ物をくれるとか？
SACHI　そうそう。
―なんかロードワーク中のロッキーに街の人が「頑張れよ」って声かけてるみたいですね（笑）。
SACHI　最近、私もガチッとしてきて辻さんに似てきたんですよ。だから、たぶん近所の八百屋さんのおじさんとかは、私と辻さんの区別がついてないと思う。
―ハハハハ！
SACHI　「あれ、アイツ、さっき通ったな？」って（笑）。あの、私も辻さんみたいにいろんなものがもらえるようになりたいんです。
―なんかSACHIさんはブログでも食べ物のことばっか書いてますよね？
SACHI　食べるのに執着があるんです。食べるのが大好き。
西川会長　見ててびっくりしますよ、ギャル曽根ばりに食べるんで。
SACHI　違うんです！　食べるのが遅いから、いつまでも食べてるように見えちゃうだけなんです。みんなが食べ終わってるのに「もう一人前」とか追加するから、凄い食べるみたいに思われてるけど。
―大食いエピソードで「一番最高に食べた！」っていうのは？
SACHI　……それは言えないです。
西川会長　居酒屋で数人なのに7万円ぐらい飲み食いしたって言ってたよな？
―エェ～!?　なかなか居酒屋で7万はいかないでしょ！
SACHI　違うんです、目の前にあると食べちゃうんです。でも、目の前になくなれば食べないですよ。
―それはあたりまえですよ（笑）。好きな食べ物はなんですか？
SACHI　酢のものとか好きですよ。だからなんにでも酢をかけちゃうんです。ていうか、酢だけじゃなく調味料はなんでも入れちゃうんです。
―なんでも？
SACHI　本当になんでもなんです。これ、内緒ですよ？　たぶん、ごはんに生クリームかけても普通に食べれると思う。
―エェ～!?
SACHI　だから内緒ですよ？　こういうの書かれたらへんな人だと思われるから。
―もう充分へんですよ（笑）。
SACHI　違うんです！　本当においい

しいものがありすぎて困るんです。ちっちゃい頃からこういう人だったわけじゃない。こっちに来て凄く格闘技の練習をして、「食べることしか楽しみがない」みたいな感じなんです。

――SACHIさんは格闘技をやってることを、周りからはどう思われてるんですか？

SACHI　友だちとかには「運動はできないけど気が強いから向いてる」って言われました。あと、「いつも変わったこと始めるよね」みたいに納得されてます。

――変わったことって？

SACHI　なんか自分ではコレっていうのはわからないんだけど、いつも「人と違うことしてる」って言われるんです。でも、私から見たら辻さんのほうが変わってる（笑）。

――SACHIさん、辻さん大好きですよね〜。ブログを見てると辻さんへの愛があふれてますよ。

SACHI　ウフフ。

――なんでそこまで辻さんに心酔したの？　それこそ大阪に引っ越して、所属を闇愚羅に移籍したくらいだし。

SACHI　きっかけは試合でケガをしたときに、「これはもっと真剣に格闘技をやらないと後悔するな」って思ったからなんです。で、一番強い人っていったら辻さんじゃないですか？　「その人のところに行かなきゃ」って思って、闇愚羅の近所に引っ越したんです。

――それは闇愚羅の人たちと話をしてからですよね？

SACHI　……。

西川会長　それが違うんですよ。最初に金子さん経由で、SACHIが「出稽古に来たい」っていうのを聞いたんですね。それでこっちは一週間くらいだと思ったから、「いいですよ」って。そしたらいきなりこのコから、「近くに引っ越してきました」って電話がかかってきたんですよ（笑）。

――ハハハハ！　それは順番を間違えちゃった？（笑）。

SACHI　いや、間違えてないですよ（ケロリと）。ちゃんと計画を立てて行ったんです。

辻　そんなん自分だけの計画やろ？　コッチは知らされてない（笑）。私、どんなコなのかネットで調べたもん。

西川会長　あ、俺も調べた（笑）。いや、みんなで凄い話題になったんですよ。面識だってとくにないのに、「なんで引っ越してくるんやろ？」って。

――行動力があるのかなんというか（笑）。

SACHI　……なんかいま考えたらアレですけど、そのときは「私は行くんだ」って勝手に思って。だから私は〝押しかけ女房〟って言われてるんです。

――押しかけ女房（笑）。

SACHI　私はたぶん自分勝手。でも、みんな優しいんですよ。そんな自分勝手な人を居座らしてくれて。

西川会長　最初、こっちは練習で逃げ出すかなって思ってたんですけどね。

――練習は相当キツかった？

SACHI　けっこう覚悟して行ったんですけど、練習初日の次の日の朝は、「ダメかもしれない」って思いました。なんか凄い覚えてる、あのときの感情。だから練習でシンドそうにしてる人を見ると、「あ、わかる」って思う。

――それで励ましたり？

SACHI　それはないです、ウフフ。

――ないんだ（笑）。でも、その翌日もちゃんと練習に行ったんだよね？

SACHI　はい。最近ようやく慣れてきたし、逃げようみたいなのは全然思わないです。

――辻さんとの練習はどうですか？　相当ドSだって聞きますけど。

SACHI　辻さんは本気を出したらすぐ終わっちゃうから、こっちに合わせてくれるんです。でも、コッチがヘッドギアしてても効かない（笑）。

――ハハハハ！　SACHIさんは辻さんのどんなところに惹かれるんですか？

SACHI　練習とかでもカッコいいんです。で、見てる人がいると、ますます動きが良くなってくる（笑）。でも、私が辻さんの食べ物を取ると怒るんです。

――それはそうでしょ（笑）。

SACHI　このあいだも事件があって、私がカスピ海ヨーグルトを作るのに、辻さんの牛乳をどんどん使っちゃったんです。前に同じようなことで怒られたのに、またやっちゃったから本気で怒られた。「ちょっと、本当にイヤなんだけど！」って（笑）。

――ハハハハ！　人のものは勝手に取っちゃダメですよ。

辻　ほら、みてみ！　もっと普通の人の考えをSACHIに教えてあげてください。

――なんか食べ物の話のあたりからおかしいですね、SACHIさんは不思議ちゃん？　ちょっとブッ飛んでますよね（笑）。

SACHI　全然そんなことないですよ。普通の人です。

西川会長　このコ、道場の中をパンツ一丁で歩くんですよ。

――エェ〜ッ!?

SACHI　歩かないです！

辻　歩いてるやん！　男子がちょっとうしろ向きよるもん。頭、おかしいんや。

SACHI　ちょっと、本当に歩いてる人みたいに聞こえちゃうじゃないですか。

西川会長　いや、歩いてるやん。

SACHI　歩いてないですよ。面倒くさいときは開き直って……。

え、どんな女子高生だったか？　それはエロいかエロくないかってことですか？

ショック！　2月11日のヴァルキリーに出場予定のSACHIだったが、腓骨・脛骨骨折で欠場することに……。ちなみに写真は昨年10月、辻結花仕込みのタックルから腕十字で村浪真穂に一本勝ちを収めたSACHIの勇姿。

これまたショック！　同じ2月11日の大会で、SACHIのよき姉貴分である辻結花が、フェザー級チャンピオンシップでV一（ヴィー・はじめ）に敗北を喫して王座陥落……。女子格にも世代交代の波が押し寄せているのだ。

——じゃあ、歩いてるんだ（笑）。

SACHI　いや、男子だってそこらへんで着替えてるから「私だっていいじゃないか」って思っちゃって。で、あとで怒られる。

——いや〜、このインタビューを読んだら闇愚羅に入門者が殺到するかもしれませんよ？（笑）。

SACHI　それはそれで、闇愚羅のために会員を。

西川会長　そんな会員いらんわ！（笑）。

SACHI　よく「恥じらいがない」って言われるんです。持ったほうがいいですかね？

——恥じらいというか、常識を持ったほうがいいです（笑）。ちょっとまじめな話をしましょうか。初め、SACHI選手はジュエルスに出場してたのに、いまはヴァルキリーを主戦場にしてますけどそれはどうして？

SACHI　う〜ん……。いや、なんか金網とかパウンドとかあると、強く見えそうだしカッコいいかなって。

——ジュエルスのビジュアル的な売り出し方には抵抗があった？

SACHI　そうやって盛り上げようとしてくれてるのに、反発なんかしちゃいけないとも思ったけど、ちょっとそういうのはあります。ちゃんとした強い選手として見られたいから。

——でも、これからヴァルキリーでもかわいさで売り出されるかもしれないですよ？

SACHI　かわいくない……。だってそれだけで喜んでちゃダメなんです。だから信じない。

辻　ウソやん。練習中に鏡ばっかり見てるやん。

——ハハハハ！

SACHI　私がちょっとよそ見しただけで、辻さんは「また自分見てる」とかってすぐ言うんですよ。だからあんまり信じちゃダメです。

辻　いや、本当に鏡のところにいるから。

妄想ではめっちゃお金持ちと結婚して そのお金でずっと格闘技を続けるんです

SACHI

さち■1980年8月18日、愛知県出身。禅道会所属として06年にプロデビュー。その後はG-SHOOTOやスマックガール、DEEPに参戦。同年11月16日、ジュエルス旗揚げ戦に参戦。09年4月からはヴァルキリーを舞台に活躍、同年10月から総合格闘技闇愚羅所属となった。153cm、50kg。

SACHIは自分が大好き。

SACHI　辻さんには言われたくない、本当の自分好きですから。鏡で自分の筋肉ばっか見てる（笑）。

——いやいや、自分好きなのはプロとして大事なことです（笑）。SACHIさんはこれからどういう選手になりたいの？

SACHI　本当の総合格闘技ができる選手。打・倒・極、全部ができる選手。男とか女とか関係なく。

——辻さんみたいになりたい？

SACHI　なりたい。いや……わかんないです、あんまり考えてない。ウフフ。

——どっちなんだ（笑）。SACHIさんは女としての幸せは考えたりする？

SACHI　……これ、内緒ですよ？ 本当は私の妄想だと、めっちゃお金持ちの人と結婚して、その人のお金で私はずっと格闘技を続けるんです。で、その人のお金を使って闇愚羅を発展させて。

西川会長　ありがとうございます（笑）。

——ハハハ！

SACHI　でも、そういう出会いがあっても練習で時間がないから、愛を育む時間がないんですよ。だから「これはもうダメかな」って最近はあきらめてる。ウフフ。

——金持ちと結婚したいだけだったらイヤな感じですけど、それで格闘技を続けたいっていうのは素晴らしいですね。

SACHI　ホントですか？（うれしそうに）。で、その金持ちの人はいい人なんです、だから私は好きに練習しておいしいもの食べて、道場をきれいにして。それに、その人は一生お金持ちなんです。

——どこまで都合いいんだ（笑）。理想はアブダビの王子みたいな感じですかねぇ。

SACHI　そうそう！ 理想は一時期だけのお金持ちじゃなくて、どう転んでもずっとお金持ち。

——どう転んでも（笑）。普段からそういう妄想ばっかしてるんですか？

SACHI　妄想っていうか、これはいつも言ってることなんです。格闘技をいつまでやるのかなって考えたときに、「そういう出会いがあれば一生できるな」って。でもそんな都合のいい人はいないのかもしれない。でも、いたらいいなって思うんです。あ、これはダメですよ、書いちゃ。

——えっ、ここまで言っといて？

SACHI　だって「この人、ガメつい」って思われちゃうじゃないですか。

——もうすでに思ってますよ！

SACHI　ウフフ。

【10年1月20日／都内・東京闇愚羅にて収録】

[10.2.13 シュートボクシング
維新-ISHIN-其の壱]
東京・後楽園ホール／48kg契約
○朱里vs風香×
(3R終了 判定 2-0)
序盤、激しくラッシュをかける風香に対して、動きに硬さの見えた朱里。しかし、2R以降はパンチを主体に応戦。最後はリーチ、手数の差で風香を追い込んで判定勝ちを収めた。

あの驚きの対戦表明から3ヵ月——念願の新旧アイドル対決実現!

朱里が“格上”風香に“ガチ”で引導!!

写真／シュートボクシング協会

「風香さん、引退する前に私と真剣勝負してください!」

元『ハッスル』のKGこと朱里が、かつて田村潔司が髙田延彦に迫ったかのようにアピールしたのは、本誌141号のインタビューでのこと。当時、『ハッスル』は大会前日中止発表をはじめ、暗いニュースだらけで先行き不透明な時期。朱里も「山口(日昇)さんが電話に出てくれないんです……」と、暗い表情を見せていたものだ。

その後、朱里は『スマッシュ』への参加を表明すると、それに先駆けて昨年12月にジュエルスに参戦。SBルールでこの日のベストバウトともいえる内容で勝利を収め、女子格の世界への〝殴り込み〟に成功! この一戦を観戦していた風香は、朱里について「初めて見たけどめっちゃ強かったです」とコメント。それからまもなく、風香の格闘技ラストマッチとして、SBのリングで朱里と対戦することが発表された。

はたして朱里は、女子プロレス界随一の人気を誇る〝格上〟風香に対して、引導を渡すかたちで判定勝利! しかし内容に納得がいかず、試合後には「気負いすぎちゃったのか、バタバタしちゃって……。ちゃんとKOで倒せる選手になりたいです」と、悔しさで目に涙をにじませた。

「私、格闘技とプロレスで頂点に立つのはもちろん、女子スポーツ界を代表する選手になりたいんです。たとえば浅尾美和さんみたいに誰でも知ってるような。今回も私にとっては通過点の一つなんです」

大きな目を見開きながら、自分自身に言い聞かせるようにそう語る朱里。風香への対戦表明からわずか3ヵ月あまり、『ハッスル』崩壊劇を経て、すっかり頼もしさすら感じさせる存在に。しかし、最後に「あの……」と少し躊躇しながらこんな言葉も。

「コスチュームとか髪型、へんじゃなかったですか? 大丈夫でした??」

たくましさとともに、20歳の少女の持つあどけなさも同居。それがアンビバレンスな魅力となっている、プロレスと格闘技の二刀流ファイター。〝大物食い〟をはたした原石は、これからいったいどんな輝きを見せていくのか? 次の舞台となる3月のスマッシュ旗揚げ戦、酒井正和代表のあやしさとともに注目だ! (文／鈴木佑)

朱里はジュエルス参戦時とは一転、コスプレパフォーマンスを見せることなく鬼気迫る表情で入場。髪を切ったのは「風香さんが『負けたほうが髪を切ろう』ってコメントしたっていうのを聞いて、イラっとして当日にバッサリ」だとか。でも、それは試合翌日には誤解だったことが判明! (詳細は両者のブログを各自調査)。

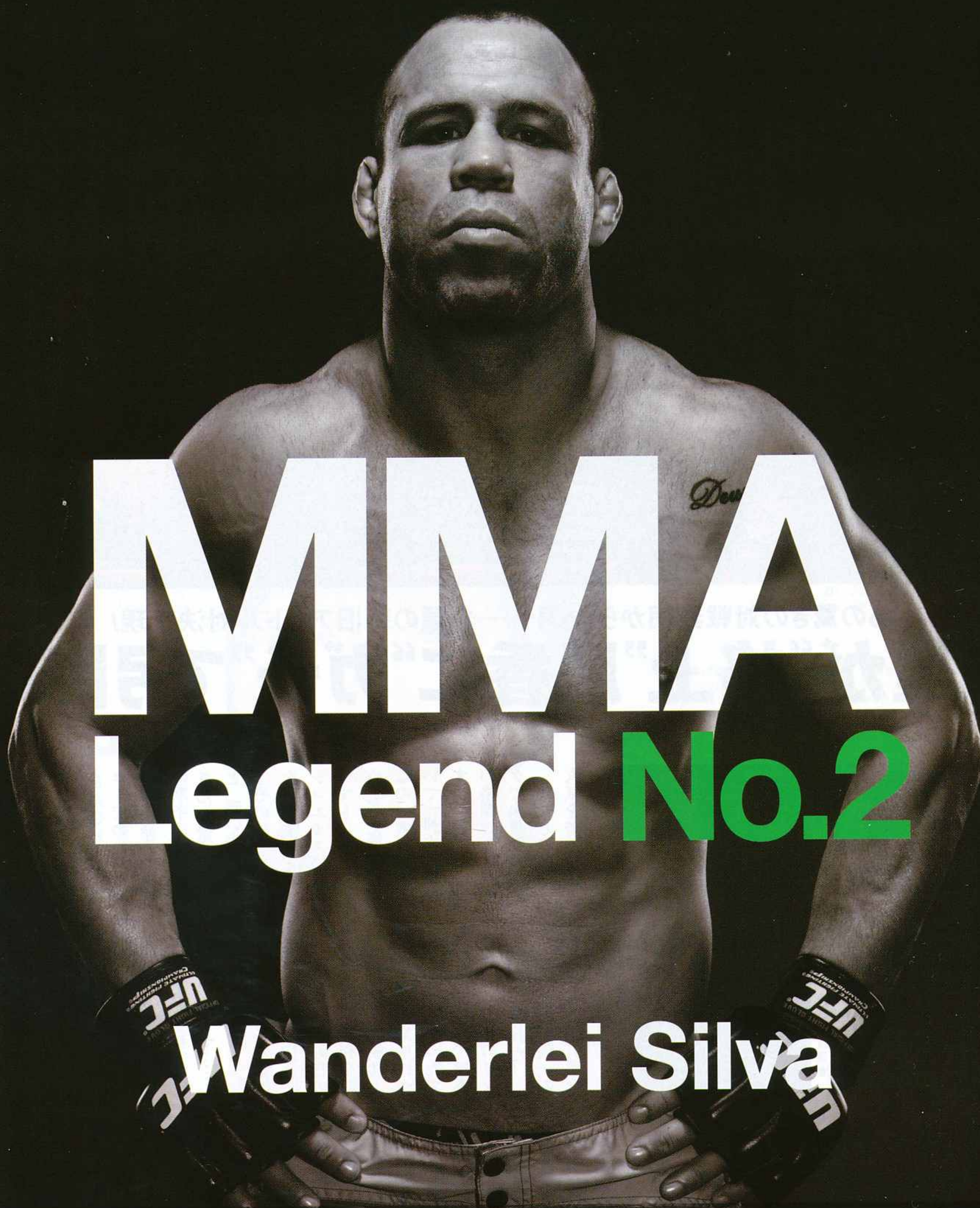
『SMASH.1』

東京・新宿FACE
3月26日(金) 開始19:00

決定対戦カード
TAJIRIvsトミー・ドリーマー
大原はじめ&KUSHIDA vs X(公募チーム)

参戦予定選手
朱里

チケット料金(全席指定・消費税込)
最前列10,000円／エグゼクティブカウンター10,000円
特別リングサイド7,000円／指定席5,000円
立見席5,000円

お問い合わせ
クォンタム・ジャンプ・ジャパン株式会社
TEL.03-5339-9190

首根っこを押さえられなかった読者プレゼント

kamipro PRESENTS

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①〜⑧の質問の答えをご明記のうえ、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(商品は2010年3月25日(木)頃発送予定です)。

【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦あなたにとって理想のオヤジは誰?⑧あなたがkamiproに望むことは?

【宛先】〒162-0805
東京都新宿区矢来町41-1 ザ・フタガミハウスNo.1
(株)ツー・スリー内『kamipro』編集部
「このままじゃ野垂れ死ぬ」係まで

※応募締切は2010年3月10日(水)当日消印有効

PRESENT*01

1名様

イズマイウ サイン入り UFCオープンフィンガーグローブ

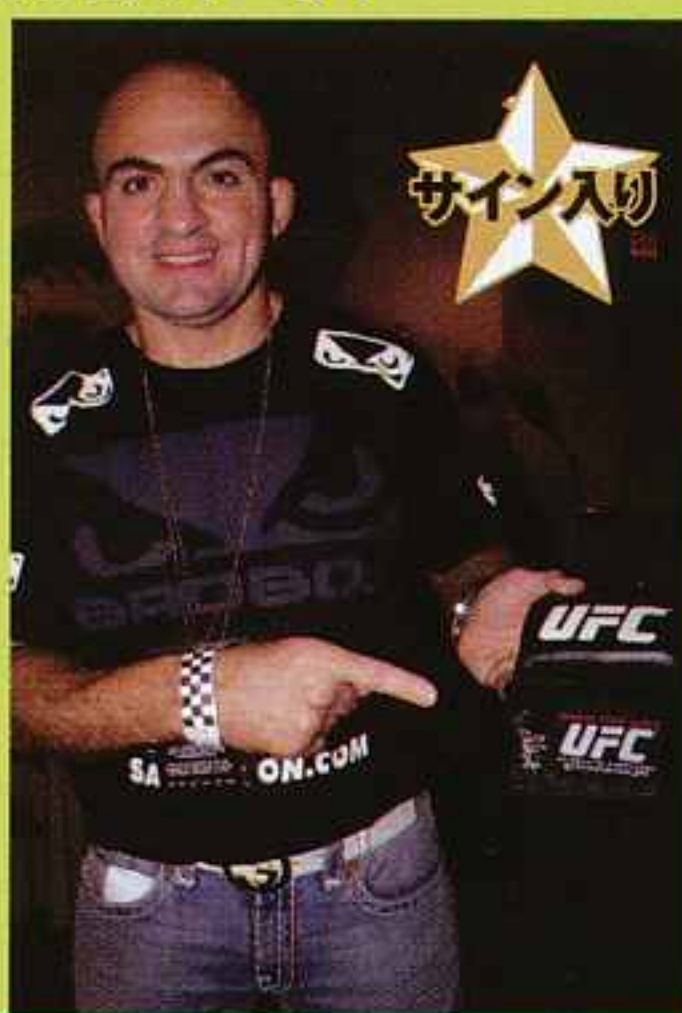
[UFC/非売品]

あのヴァリッジ・イズマイウを『UFC109』で発見。さっそくサインをお願いしたところ、オープンフィンガー・グローブに満面の笑みでサイン! 貴重です。

サイン入り

UFC■http://www.ufc.com/

PRESENT*02

1名様

ジャイアント馬場等身大POP

[闘道館/非売品]

プロレス・格闘技のお宝満載のショップ「闘道館」から、今月は本誌史上最大の読者プレゼントです。ジャイアント馬場の等身大POPです。発送は折りたたんだ状態になります。ご了承ください。

闘道館■http://www.toudoukan.com/

PRESENT*03

1名様

ヴァンダレイ・シウバ サイン入りボトル

[非売品]

ヴァンダレイ・シウバのアパレルブランド「WAND」のボトルにシウバ自身のサインを入れてプレゼントです。デザインがスタイリッシュでかっこいいですね。

サイン入り

ヴァンダレイ・シウバ■http://www.wanderleisilva.com.br/site_ing/

PRESENT*04

1名様

デミアン・マイア サイン入り UFC109 パンフレット

[UFC/非売品]

『UFC109』に出場しダン・ミラーを判定で下したデミアン・マイアのサイン入り大会パンフレットをプレゼント!! こんな機会じゃないと手に入りません!!

サイン入り

UFC■http://www.ufc.com/

PRESENT*05

1名様

FRONT / BACK

BULL TERRIER コンバットショーツ Traditional 銀/黒/赤

[ブルテリア/¥5,800(税込)]

世界的なグラップリング・ファイターが数多く愛用しているブルテリアのコンバットショーツ。練習に、試合に大活躍してくれそう。下記サイトで通販中。

ブルテリア■http://www.b-j-j.com/

PRESENT*06

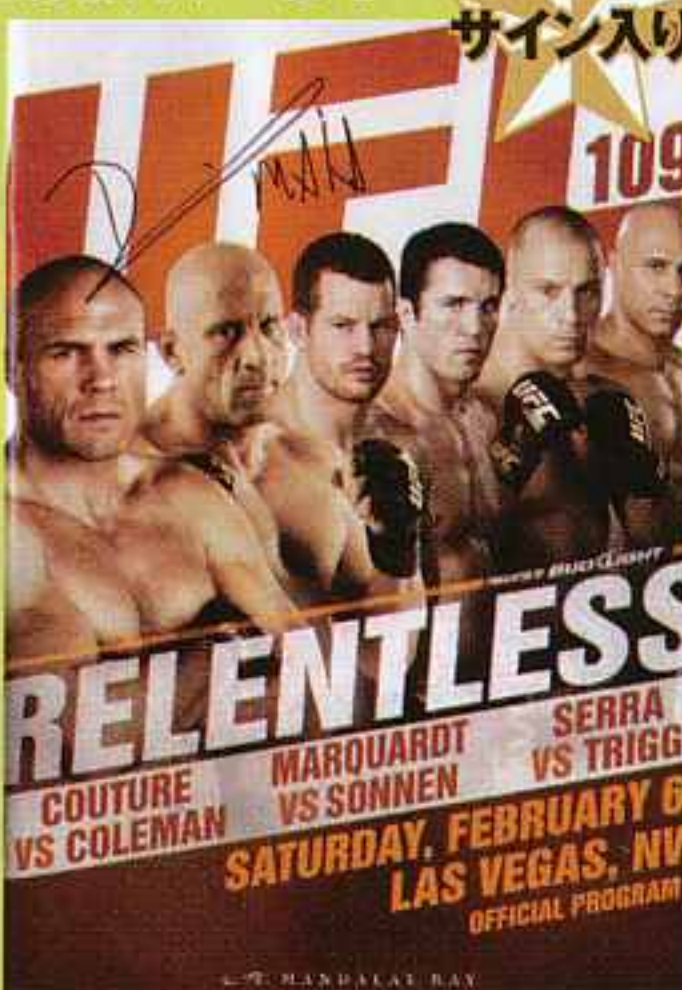
1名様

FRONT / BACK

リバーサル山崎剛Tシャツ

[リバーサル/¥5,040(税込)]

GRABAKAの柔術マスターであり、2月28日DEEPで王者・大塚隆史とノンタイトル戦で激突する山崎のTシャツ。カラーは白、サイズはXLです。

リバーサル■http://www.rvddw.com/

PRESENT*07

1名様

力道山Tシャツ

[リキ・エンタープライズ/¥4,500(税込)]

今号に登場している百田光雄氏から読者プレゼントでいただいた貴重な逸品。白いボディに胸に刺繍で力道山先生のシルエット。パンフもつきます。

リキ・エンタープライズ■TEL.029-872-8105

PRESENT*08

1名様

DVD 不滅の昭和プロレス 第1巻『黄金の若鷲 坂口征二』

[クエスト/¥5,880(税込)]

"世界の荒鷲""ビッグ・サカ"こと新日本プロレス相談役・坂口征二の若手時代の貴重な試合映像を収録!! 当時の秘話を坂口自身が流智美を相手に語りつくす。

クエスト■http://www.queststation.com/

PRESENT*09

1名様

FRONT / BACK

越中詩郎「3136」Tシャツ

[コレクティブストア/¥3,980(税込)]

越中の30年間の国内総試合数「3136」がデザインされた2010年最新モデルをプレゼント!! 今回も街中で着られる一枚だぞ。サイズはMです。

コレクティブストア■http://www.cstr.jp/b/koshinaka/

PRESENT*10

1名様

単行本『石井魂』

[講談社/¥1,470(税込)]

「金メダルを捨てた男」は何を考えているのか——。石井自信が語る柔道時代から総合格闘技デビューまでの心境と経緯。復活を期待しつつ、これを読みながら待つべし!!

講談社■http://www.kodansha.co.jp/

kamipro144 応募券
春先

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

こちらでも毎週プレゼント実施中!! http://kamipro.com/

kamipro 紙のプロレス

No.144
2010年3月9日 発行

発行人
浜村弘一

編集人
斉藤慎一
青柳昌行

編集統括本部長
ジャン斉藤

編集スタッフ
坂井ノブ
堀江ガンツ
阿修羅チョロ
松下ミワ
スズキィ
八木賢太郎（退去手伝いのため非番）

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
ジャイ子

編集次長（超オヤジ）
松林 貴

デザインGM
出田さん（TwoThree）

デザイン班長
金井ヒサくん（TwoThree）

デザイン
松坂マツくん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
鐺田やっちゃん
白木みのる（以上、TwoThree）

カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
吉場正和
山口比佐夫
戸成嘉則
タイコウクニヨシ
梅木麗子
金山フヒト
丸山剛史

お勘定
工藤ちゃん

神楽坂のイベントプロデューサー
サダハルンバ入江（TwoThree）

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

業務部
樽本“ハイピカEF2”義之

編集庶務
原 正典
山内ユリコ

編集チアガール
金川“ナツコ”奈津子
白倉“クララ”明子

オヤジマダム
廣橋久美子

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）

発売元
株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177東京都千代田区富士見2-13-3

印刷
図書印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

■広告掲載のお問い合わせは下記まで
株式会社エンターブレイン
スポーツ企画編集部 ☎03-3265-7166

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

[カスタマーサポート]
☎0570-060-555
（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00～17:00）
メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

つぶやきシローもビックリ!?

あれ、僕の特集じゃないんだね？

さあ、みんなでつぶやこう!
次号特集テーマは……

ツイッター

NEXT ISSUE

2月のUFC2大ビッグマッチを徹底詳報!!

kamipro Special 2010 APRILは3月3日（水）発売予定!

3.7『SRC』詳報&4.25『ASTRA』情報満載!!

No.145は3月23日（火）発売予定!

※地域によっては多少発売が遅れることもあります、なう。

RC、アストラの格闘三角関係!!

大会速報、選手ブログは携帯で!
kamiproMove

古い、渋い、カッコイイ!!
オヤジたちの小言的インタビュー

吉田秀彦

内藤大助×所 英男
桜庭和志×髙阪 剛
田村潔司
村田兆治
百田光雄
保永昇男
マーク・コールマン
風間ルミ

判を追う

泥にまみれて今日も輝く!
オッサン世代の汗を嗅げ!!

ヤジよ!

kamipro 2010 144

オッサン世代の汗を嗅げ!!
特集 オヤジよ!

「可能性はゼロではない」(國保尊弘)

2010年3月9日
発行人／浜村弘一 編集人／斉藤慎一、青柳昌行
発行所／株式会社エンターブレイン 〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)

enterbrain

特別定価: 本体895円 +税

雑誌 61971-46 ⓗ2010.06

Printed in Japan 図書印刷株式会社